

---

# 蒼き神々の行方

指月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

蒼き神々の行方

### 【Zコード】

Z3641D

### 【作者名】

指月

### 【あらすじ】

観測史上最大の台風襲来の夜、かみたりゅういち神田龍一が、神の島、富島で出会つた男は、日本の歴史を変えようとしていた。その謎の男に導かれるように、70年代に広島で青春を送つた若者達は、時空を超えた運命を共にする。舞台は、富島、富士山、バンコク、チエンマイ、ビルマ、台湾、中国、ネパールへと移り、ついに閉ざされた歴史の闇を掘みだす。日本歴史と現代アジア史を背景にした驚愕のピカレスクロマンニアスティリー。

## 序章（前書き）

ここに語られるのは、1970年代に青春を送った青年たちが遭遇した、時代と運命、そして、時空を越えた現実に題材をとった物語です。しかし、登場する人物、組織はすべて架空のものであり、近似する人物、組織が存在しても、それらは偶然であり、この物語とは何の関係もありません。

瀬戸内海に浮かぶ周囲約30kmの小島は、歴史に登場する以前から、神の島として人々の信仰の対象であった。太古より深い森に覆われ、その頂は須弥山に喩えられ、弥山と呼ばれ、静かな内海に浮かぶその小島は、女神の寝姿として、今もなお、島全体が神として崇められている。その、女神の横たわる裾の尾根は博打尾と呼ばれている。

2005年（平成17年）9月 広島県 宮島

その尾根を、霧雨の中、登っている男がいた。神田龍一がこの尾根を登るのは30年ぶりだ。こんな気持ちになつたのは、学生時代の暴力団襲撃事件以来だ。それにしても、あの男の狙いはなんだつたのか。

あれは、観測史上最大の大型台風の襲来に備えて、神社と回廊の見回りをしていた時だつた。すでに、台風は九州に上陸し、九州各地に甚大な被害を与えたながら山口県地方に向かつてることが報道されていた。

「タイミングが悪いな」と、神田は思った。このままだと、台風上陸と大潮の満潮時間が重なつてしまつ。山口県に上陸したら、風向きは宮島にとって最悪となる。さらに、気圧が下がつて、潮位も上がり、過去の大型台風被害どころの騒ぎではなくなる。

神社、市役所、観光推進協会、消防団、島民ら合わせて300人以上が台風襲来に備えていた。すでに、やるべきことはやつた。回廊の床板ははずし、神社の屋根はロープで補強した。要所、要所は

板で補強した。もう、神に祈りつつ、台風が過ぎ去ってくれるのを待つしかなかつた。

風も強くなり始めた午後9時過ぎ、<sup>かみた</sup>神田は合羽を着て回廊に向かつた。これ以上風が強くなつたら、外に出ることは出来ない。最後の見回りにするつもりであつた。もう、外には誰もいなはずであつた。先ほどまで、テレビの実況をしていた放送局のスタッフたちも、引き上げて、旅館、ホテルに待機している。

合羽のフードをつかみ、顔を伏せて進んでいる時、一緒に見回りに出た渡辺が叫んだ。

「神田さん、アレ」渡辺が、<sup>あい</sup>顎で指した先を大柄の男が足早に進んでいた。よこなぐりの雨と、波しぶきで、すぐに見えなくなつた。

「島の人間ではない」と直感した。こんな状態の中を出歩くものなどいるはずがない。それに、「あの格好はなんだ」と、<sup>かみた</sup>神田は思つた。男は素つ裸であつた。

「おーい！」

<sup>かみた</sup>神田は男の姿が消えたほうに向かつて叫んだ。そして、顔を左下に向け、塩気を含んだ雨水を「ペツ！…」と吐き出した。

男に聞こえたかどうかは分からない。しかし、このままにしておくわけにはいかない。<sup>かみた</sup>神田は、渡辺と共に後を追つた。神社の裏を通り抜けた。そのまま行くと宝物館に出る。雨と風がさらに強くなつてきた。男の姿は見えない。

「どこ、行つたんでしょう？」渡辺は叫んだ。そして、

「家に、何か取りに帰つたんじゃないでしょうか？」と続けた。

この通りの住民には避難勧告が出て、公民館に避難している。そのうちの誰かが、何かを取りに帰ったのではないかと言つのだ。

「いや」

「違う」と神田<sup>かみた</sup>は確信していた。あの体つきは日本人ではない。背はゆうに一九〇センチは越えていた。頭の大きさ、肩幅、それに、手足の長さは日本人のものではない。

「何をしているんだろう?」

渡辺に、市役所に待機している警察に連絡をとるように指示をした。そのとき、宝物館<sup>ほうもつかん</sup>の方向で、チラッと明かりが動くのが見えた。渡辺は、携帯電話を取り出しが、雨に濡れて使い物にならない。

「どうしますか?」

渡辺は神田<sup>かみた</sup>に聞いた。

宝物館には国宝、重要文化財が所蔵されている。広島県の国宝の大多数はこの宝物館にあるといつても過言ではない。

「火事場泥棒つてやつでしょ?」

渡辺は、合羽のフードを掴みながら、神田<sup>かみた</sup>に体を押し付けるようにして言つた。

「だとしたら、これは警察にまかせるしかない」

神田<sup>かみた</sup>は、渡辺に、市役所に戻つて警官を呼んでくるよつと言つた。

「神田さんは?」

「俺はこのまま、ここで見張つている」

「分かりました。気をつけてくださいよ」

「ああ、そつちもな。それと、一人、二人の警官じゃダメだぞ」と、神田は付け加えた。

あの体つきだ。抵抗されたら、「相当でござるに違いない」と、  
神田は思った。

渡辺は、来た時とは違つて、風に背中を押されるようにして市役所の方向に向かつて行った。黄色の合羽は、あつという間に見えなくなつた。

神田は宝物館の横が見えるほうへ移動した。

「あそこから入つたのか」

宝物館の側面の上部の明り取り窓が壊されていた。壁には丸太が立掛けられ、それを足場にしたようだ。すでに、警報装置は働いているはずだが、この台風ではそれもあてにできない。  
神田は念のため懐中電灯の明かりを消して、宝物館の向かいの民家の軒先に身を伏せた。

## 激突！－広島

1972年（昭和47年）10月 広島

神田龍一は高校を卒業し、広島市内の修道館大学へ進学した。その頃は、学生運動も下火になりつつあったが、それでも、神田の通う大学は学生運動の急進派の核となっていた。

神田は彼らとは、一線を画し、いわゆる「ノンポリ学生」であったが、ただひとつ、高校時代から熱心に取り組んでいたのが、日本拳法だ。神田は幼い頃から体が大きく、高校生の頃には185センチに達していた。大学に進学すると、教室よりも拳法部の道場にいる時間のほうが長く、大学の2年生になった頃には、その体を活かして繰り出す、頭部への横蹴りに敵う相手は西日本にはもういなかつた。しかし、全国大会に出場する機会はやつてこなかつた。

修道館大学は、日本拳法西日本大会で団体優勝を勝ち取り、神田は個人優勝した。

「よーし、次は、全国制覇だ」

部員の気持ちも高揚し、その打ち上げを終えて、市内の繁華街を部員と歩いていた時、部員の一人の体が駐車していた車のミラーに当たつた。相手が悪かつた。

その車に乗っていたのは、当時、広島市内を牛耳っていた暴力団「大木会」の会長の息子であつた。「若」と呼ばれていた仁一郎は、父親である会長から溺愛され、当時は繩張りのひとつを「えられ、勝手し放題の、いわば、絶頂期であつた。

「おい」後部座席のドアを少し開け仁一郎は言った。

「どうこうつもりじゃ」

仁一郎は、部員を呼び止めた。

「あつ、すみません」

部員全員が、「まずい」と思った。

「もうしわけありません」

部長の山口大河が一步前に出て、頭を下げた。

しかし、それくらいで、引き下がる相手でないことは山口にも分かつていた。

車から降りるなり、仁一郎は左頬に薄ら笑いを浮かべ、

「指イ、詰めーや」と言い放った。

「郷戸、ドスを出せイー！」田は山口に向けたまま、顔を後ろの用心棒たちに向けた。

そして、仁一郎は両手をポケットに突っ込んだまま、ポケットの中の小銭を「チャラチャラ」と揺らした。

仁一郎の後ろには、用心棒が3人立ち、そのうちの一人は、すでに、朱塗りの木刀を右手に垂らしていた。その男の額には赤いタオルが巻かれていた。郷戸と呼ばれたその男は、懐から白鞄のドスを出して仁一郎に渡した。通行人がいっせいに広がり、大きな輪を描いた。

その輪の中で、山口は、再び、

「もうしわけありませんでした」と頭を下げたまま言った。頭を下げ、仁一郎と用心棒の足元から自分との距離を測った。さらに、膝をつき、土下座した。神田を始め、部員全員が山口に倣つて土下座をした。

仁一郎は、山口の頭を右足で押さえつけた。押さえつけながら、

「学生の分際でわしのシマを歩くのは十年早いんじゃい」と、さらに足に力をこめた。

押さえつけられながら、「どうやつてここの場を納めるか」を山口は考えていた。部員は12名、相手は仁一郎を含めて4名。殴り合いになれば山口ひとりでも一瞬にして3人は倒せる。ただ、赤い木刀を持った男には、部員全員でかかっても「手間取るかもしれない」と、感じた。

神田も、山口の半身後で土下座をしながら、木刀を持った男の動きだけに注意を払っていた。

部長の山口は、

「こは逃げるしかないか」と、思った。

押さえつけられたまま、後ろで土下座をしている部員に田配せをした。神田も山口の考えが分かった。

山口は、歩道についていた左手で仁一郎の右足を払い上げ、同時に、

「逃げる！」と叫んだ。

仁一郎は、右足を大きく空に上げ、両手をポケットに突っ込んだまま、仰向けにひっくり返り、背中から水溜りの中に倒れこみ、ポケットの小銭が車道にばらまかれた。

山口と神田は、土下座の姿勢から、倒れた仁一郎の横をすり抜け、姿勢を低くして野次馬たちの脇の下を通り抜けた。山口と神田の場合、土下座の姿勢から立ち上がり、体を反転させて、用心棒たちと逆方向へ走るよりも、彼らの脇を、仁一郎を楯にした形で走り抜けるほうが無難な方法であったのだ。

他の部員たちは、用心棒たちとは距離があつたので、いつせいに、逆方向へ走り、ばらばらに走り去つた。

用心棒の朱塗りの木刀は一瞬にして左手に移され、横へ払われたが、倒れた仁一郎が邪魔をして、山口の肩先をかすめただけであつた。

野次馬の脇を駆け抜けるときに、かみた神田と用心棒の眼が一瞬合つた。

他の二人の用心棒は仁一郎のところへ駆け寄り、「若、若ア」と声をかけるのが最初の行動であつた。

仁一郎は、倒れたとき、頭を車のバンパーにしたたかに打ちつけ微動だにしなかつた。

用心棒は、

「馬鹿たれーつ、見せもんじやないどお！－」と、野次馬を手と足で払い散らし、仁一郎の体を抱え上げたが、仁一郎の顔から、すでに、血の氣は失せよつとしていた。

用心棒は、左手に持つた木刀を、横に払つた形のままで、姿のない、山口と神田の逃げた先を無表情のまま追つていた。

この夜の、学生と暴力団とのトラブルは、翌朝には誰も憶えていないほどの、ささいなことであったが、5日後には、この夜のことが引き金となり、全国的に三面記事のトップを飾るニュースとなつた。

暴力団が大挙して、大学に乗り込んできたのだ。

仁一郎は、用心棒たちによって、大木会の本部に運び込まれた。大木会の本部は、広島市内にある丘の頂上にそびえたち、まるで要

塞のような建物である。

すぐに、お抱えの医者が呼ばれたが、やがて救急車によつて近くにある大学病院へと搬送された。

「郷戸、お前がついていながら、どういってじや」

大木会の会長、大木鷹男は集中治療室の前で、瘦せぎすで長身の男を睨み付けた。

「お前の木刀でもダメだつたか」

太い眉の下の眼を、再び、力なく横たわる息子の顔に落とした。

郷戸と呼ばれた男は、壁に背をもたれさせ、タオルを巻いた頭を壁につけ返事をしなかつたが、二人の用心棒たちは、頭を下げて、小さくなつていた。

3日間こん睡状態は続き、医者は、回復には「時間がかかる」とだけを鷹男に告げた。

鷹男は医者の言葉の意味することをすぐに理解したが、もし、仁一郎にも意識があるなら、これまで、父親の権力と金の力に守られ、育てられた自分の無力さを悟つたことであろう。すでに、学生の身元は分かっていた。

「このままにしてはおけない」

たかが学生に転がされて、大木会の2代目が意識不明のまま、万のことがあつては全国の暴力団の笑い種だ。もうじきこの一件は全国に広まるだろう。

乾いた竹刀の打ち合う音と、甲高い気合の合間から怒号と悲鳴が聞こえてきた。面をかぶつたまま、木野花咲姫は道場の窓から覗くと、工事用の大型ダンプが大学正門から入り、何か月も前から「授業料値上げ阻止」と書かれた立て看板を突き破り、そのまま、看

板の一部を引きずりながら本館の裏へ向かっているのが見えた。同じ型のダンプが2台、後に続いた。荷台には、作業者風の男達がすし詰めに乗っている。最初は、事故だと思ったが、どこか違う。よく見ると男達は、手に手に木刀や、棍棒、鉄パイプ、竹ざお等を持っている。

何が起こっているのか分からなかつた。すぐに裸足のまま駆け出したが、何かを感じ、すぐに引き返して、運動靴を履き、手にした竹刀を木刀に替えて再び飛び出た。途中、何人かの部員も道場へ引き返していた。

「何があつたの！？」

「わからんねー！」男子部員は叫びながら道場へ引き返していった。

一般学生は授業が終わり、バイトか、デートで校内には多くは残っていない。熱心な学生は図書館で学習している時間だ。今いるのは、教授と職員、それに、木野花咲姫のようにクラブ活動に精を出しているものだけだ。

第一グラウンドへ行くと、ダンプは野球部員を蹴散らし、最初の一台が、ピッチャーマウンドに停車したところだつた。最近の日照りで、埃が舞い上がつていた。気象台は、今日は雨になる予報を出していたが、咲姫は、前を走る男子部員達の袴が巻き上げる砂埃を見て「今日もまた外れそうだ」と、思った。

続く一台も距離をおいて、グラウンドの周囲に向かつて扇型に停まった。

グラウンドの周囲にはプレハブで作られた部室が並んでいる。

やがて荷台に乗っていた男達がばらばらと降りてきた。降りたびに埃が舞い上がる。男達の風体は様々であった。アロハシャツに白ズボンにセッタ履きという、典型的なチンピラ風の男もいれば、黒のスーツにサングラスのやくざスタイル、タオルの鉢巻に上半身裸の男もいる。その男達の手にはそれぞれ、何らかの得物が握られていた。あるものは木刀を振り回し、あるものは、竹やりを突き出していた。はだけた腕や肩の刺青が汗で光っている。

「こいつらがヤクザの出入りというもののなかしら」咲姫は、ぽんやりと思いながら、大きく離れた学生達の円の中からそれを眺めていた。

一台目の運転席から一人の男が出てきた。

一人が叫んだ。

「拳法部の野郎共、出てきやがれッ！」

「これで、分かった」咲姫は、何日か前の、日本拳法部と大木会のトラブルを噂で聞いていた。

「出てきやがれー」男は叫んだ。

遠巻きに見ていた学生の間から一人の学生が進み出た。学友会会長の神代陽平だ。神代は、新聞部の部長である。

神代は、アジで鍛えた太い声で、

「あなた方の要求は、校外で聞く」と叫び、そして、

「あなた方は今、学校の自治を犯している・・・」と続けたとき、「ビューッ」と石が飛んできて、避ける間もなく、神代の額に当たつた。

額からは血が流れ出た。

「何をする！！」

神代の後ろから新聞部の一人が叫んだ。

「うるせーっ、警察がくるまでに話をつけよーぜ、拳法部ーー！」

「指一本ですむんだよーーー！」

日本拳法部の山口大河やまとくちかたいがが神代の肩を引いて前に出た。

「おー、お前かー」

「お前の指一本で済むことじや」

山口は覚悟は決めていた。

「この場を收めるには俺の小指を落とすしかないか」「左小指の付け根にバンテージを巻きながら前へ進んだ。

本館から数名の職員が、背広の裾とネクタイを風になびかせながら駆けつけたが、

「いつたい何事ですか？あなた方はなんですか？」と、遠くから叫ぶしかなかつた。

男たちは、それには耳を貸さず、男はドスを出口の前に投げた。

山口は、投げられたドスの前に跪き、左手で鞘さやを握り、右手で柄つかを持ち、手前に引いた。ためらいはなかつた。一瞬、夕陽で刃やいばが光つた。時ときが止まつたようであつた。夕陽が本館の窓に大きく映つていたのを木野花咲姫きのはなさきは今でも覚えている。

風が吹き、砂塵さじんが大きく舞つた。

男達も学生達も、一瞬目を細めたその時、学生達の輪から風と共に走り出で、山口を飛び越した男がいた。「あつ」と、咲姫さきが思つたそのときには、ドスを投げた男は頭を右へ傾げたまま吹つ飛んでいた。神田龍一かみたりゅういちの横蹴りであつた。

吹っ飛んだ男の体が地面に落ちる前に、神田の左裏拳は左側の男の顎を碎き、右上げ蹴りで右の男をくの字にへし曲げた。一瞬の業に、男達は、ぱっと、輪を広げたが、神田が素手だと分かると、次々に、神田にかかりていった。

神田は立ち上がった山口と共に、男達の竹ざおや、棍棒、木刀などをかわしながら、一人、二人と、確実に倒していく。大柄の神田と小短ながらもスピードのある連續技が持ち味の山口の一人は、他の大学の拳法部からは、「牛若と弁慶」と呼ばれている。今、その一人が、150人を超える荒くれ男どもを相手に戦いをはじめたのだ。

後に「暴力団と学生の大乱闘事件」として海外メディアも取り上げた事件の始まりである。

いくら、「牛若と弁慶」でも「限度がある」と、咲姫が思った時、男達は、学生達に向かつて得物を振り上げながら、いつせいに向かって来た。そして、男達の一団が、剣道部員のいる方向にも近付いて来た。

咲姫に向かつて、男の一人が棍棒を振り下ろした。もう迷つている暇はない。咲姫は、木刀で、その棍棒を左へ払い、返して、胴を打ち込んだ。加減をしたつもりであったが、男は、あばらを押されて、右膝から崩れ落ちた。

学生達の一部は、新聞部の部室になだれ込んだ。新聞部の部室の床下には、鉄パイプと、角材が隠されていることは、学生達の間では、公然の秘密であった。さらに、新聞部の部室の裏には、学園祭にかこつけて入手した長尺、3、6m物の角材の束が何束も立てかけてあつた。

「輪を崩すなーツ」

神代は、

額からの血が首筋に流れ込むのを

感じながら叫んだ。3年前の「新宿駅騒乱事件」の記憶が一瞬よみがえった。

今の状況なら、「男達をつぶせる」と思っていた。

男達は、学生達の輪に取り囲まれた形になつていて。これで、バラバラになつては学生達に不利だ。

「輪を崩すなーッ！！」

再び、神代は、顎あごを上にして、首を回しながら、声を張り上げた。

最初に、突っ込んできた男達に、学生達は、棍棒じんぼう、竹竿たけざおで体を打たれながらも、後ろに下がらず、懷ふといに飛び込んで男達と組み合つた。その学生達のほとんどは、柔道部、空手道部、少林寺拳法部、ボクシング部などの部員達である。様々な気合と共に、男達は投げ飛ばされ、打ち据えられていった。

新聞部の部室から運び出された角材や鉄パイプは手渡しで学生達に回されていき、学生達は、その、角材や、鉄パイプを、輪の内側に向け突き出したり、地面を叩いて、男達を威嚇いかくした。

大きな人間の輪の中からもうと砂塵が舞い上がり、まるで、火山の噴火口の様さまとなり、さらに、その輪の中には、小さな輪があり、その人間の輪が、右に左にと動いている。その中にいるのは、日本拳法部の「牛若と弁慶」の山口と神田かみたである。輪から、一人、二人と男がはじき出されている。輪の中のふたりが、男達を倒しているのだ。

「あのふたりを連れ戻さなければならない」神代が思つた時、ビュン、ビュン、と硬球が中の男たちに向かつて飛んで行つた。野球部員が次々と硬球を投げつけ始めたのだ。

山口と、神田を囮んだ輪が一瞬ゆるんだ隙に、二人は全速で、外に向かつて走り、外に向かつていた男達の頭上を飛び越した。

この間にも、木野花咲姫達、剣道部員は、男達と戦っていた。このでは、女子長刀部員の長刀が男達の足を次々と砕き、男達をへたり込ませていた。

咲姫の小手、面の一段打ちも面白いように決まり、男達は棍棒や角材を投げ捨て、苦痛にゆがんだ表情を浮かべて、打たれた箇所に手を当てている。しかし、その男達を押しのけて、次から次へと新手が押し寄せる。

男達の、振り下ろし、振り回す、棍棒や竹ざお、鉄パイプに木刀で対戦するのは不利だが、咲姫は、それらを、ひらり、ひらりと、難無くかわしながら、甲高い気合と共に、目にもとまらぬ早業で、踏み込んで、得意の面を打ちに行つた。

この面で、咲姫は中四国女子学生チャンピオンになつたばかりであつた。

これまでのところは、状況は、学生達が有利であった。この時間には、一般学生は、授業も終わり、すでに校内に姿はない。校内に残っている学生達は、何らかの部に属しているものたちばかりである。そして、今、暴力団と戦っている学生達の大部分は運動部に所属している者達だった。運動部に所属している学生達の連帶意識は高かつた。

そして、その学生達の指揮を執っているのが、新聞部の部長、神代陽平である。神代は、学生達に一日おかれた存在であつた。

1968年（昭和43年）アメリカは50万人の兵隊をベトナムに送り込んでいた。1月には、アメリカ海軍空母エンタープライズが佐世保へ入港し、日本のベトナム戦争前線基地化は拍車をかけ、

アメリカ軍は、3月、南ベトナムのソンニ村で老人、婦女子ばかり500人以上を虐殺した。そうした状況の中、日本政府は、ベトナムに向かうアメリカのジェット戦闘機の燃料を中央線を使って横田基地へ送ることを認めた。

学生達は、ジェット燃料輸送阻止のため、10月21日国際反戦デーのこの日、全国から、新宿駅に集まつた。神代もその中にいた。神代は「革命前夜」になることを願つていた。あちらこちらで、火の手が上がり、催涙ガスと投石は「革命」の前兆に相應しいものだと神代には思えた。

しかし、実態は、程遠いものであつた。神代や学生達の思い込みは一般大衆からの支持を得ることはできず、大衆から非難の声さえ聞こえてきた。また、神代自身も、民衆の支持のない学生運動の限界を、このとき初めて感じた。

催涙ガスでうずくまる神代に機動隊員の警棒による打撃は容赦なく振り下ろされた。気を失いかけた時、背広姿の若い男によつやく助け出されて、その男の差し出した赤いタオルで額を押さえながら新宿駅構内に逃げ込んだ。新宿駅構内では、停車中の電車に火が放たれ、電車は、めらめらと燃え上がり、鼻をつく異臭が充満していった。

神代の眉間にすでに、この時に機動隊から受けた警棒の傷があつた。学生達には、神代の額の傷は輝いて見えた。今また、その傷口が、暴力団の投石によつて広がつたのだ。

ダンプカーの荷台が大きく揺れて、巨大な男が上半身むき出しで降り立つた。飛び下りた足元からは、砂塵が舞い上がり、さらに、

その大男は荷台から、まだ、皮もはいでいない、直径が、30cmほどの丸太を引きずり出し、肩に担いで、学生達の輪の一角に向かっていった。遠目にも、男の巨大さが分かり、学生達は動搖した。男の盛り上がった肩とはちきれんばかりの胸の筋肉には圧倒的な威圧感があつた。

男は、4m近い丸太を振り回し始めた。振り回すたびに、ブン、ブンと音がし、木屑きくずが飛び散つた。大男が向かつている学生の輪が崩れ始めた。陸上部の槍投げ選手が角材を投げ、それに続いて、次々と、他の学生も、角材を大男に向かつて投げ始めたが、大男は、体に当たる角材をものともせずに学生達に向かっていき、ついにその、振り回す丸太は、学生達をなぎ倒し始めた。倒れた学生を足蹴あしげにしながら、大男は前進している。

「戦場で、歩兵に向かう戦車だ」

そう思いながら、神代はその大男の向かう先へと走つた。

学生達の崩れた輪の間から日本拳法部部長、山口と神田かみたが現れ、大男の前に立ちはだかつた。山口と神田かみたは、はだけた胴着を合わせ、帯を締めなおす、お互いの距離を4m開け、大男から5mの距離を空けて大男に対峙した。

大男は、丸太をブンブンと振り回しながら、右と左に分かれて立つ山口と神田かみたをギロリと見やり、小柄な山口の方へと足を踏み出した。神田はそれを待つていた。バツ、と胴着を風に鳴らし、地を蹴り、大男の首筋に横蹴りを見舞つた。大男の首筋から汗が飛び、一瞬ぐらついた。その隙を狙つて、山口は連續直突と横打ちをわき腹に打ち込んだ。そして、横に回転しながら、脇を抜けて、男の後ろ

に逃げ込もうとした。しかし、大男の丸太が、一瞬早く、回転する山口の背中をとらえ、山口を<sup>はじ</sup>弾き飛ばした。神田は大男が丸太を山口に向かつて振り上げた隙を狙つて、わき腹の同じ箇所に左横突き蹴りを放つたが、大男が振り向きざまに振つた丸太が神田の肩を殴打し、神田も地面に向かつて倒れこんだ。

山口と<sup>かみた</sup>神田は、倒れながらも回転し、大男から離れ、態勢を取り直し、再び、大男に向かおうとしたとき、

「神田さん！」と、後ろから声がした。

相撲部主将の<sup>みなみこうじょ</sup>南幸吉である。

胸に修道館大学のマークの刺繡されたジャージを着て、まわし姿で南は立っていた。

南は、角材を、束のまま両方の脇の下に一束ずつ挟み、その角材の一方の端は大砲のように大男に向けられている。

「<sup>かみた</sup>神田さん、ここは俺に任せて、あんた達は他へ・・・」「すまんな」

「この場は南に任せるとしかないだろ」ふたりは、そう思いながら戦いの不利になっているところへと向かつた。

すでにあちらこちらで、学生達の輪は崩れて、個人戦の形になっている。

南は、抱えていた角材の束を下へ落とし、着ていたジャージを「バツ！」と脱ぎ捨てた。大男も、南の意図を察し、抱えていた丸太を軽々と投げ捨てた。そして、やつと<sup>おのれ</sup>己にふさわしい対戦相手を見つけた喜びで、にやりと笑い、額から流れ落ちる汗をペロリとなめ、口の渴きを潤した。

南も190cm、160kgの巨漢であるが、大男は、さらに一回りは大きい。その大男が、闘牛のごとく南めがけて突進してきた。南も、腰を落として、前のめりで大男めがけて突進した。お互いの距離は10m。あつという間に距離は縮まり、「ガツ！！」と、岩と岩がぶつかる音がし、汗と砂塵が舞い上がった。飛び散った汗が夕陽で光った。ぶつかつた反動で、南は上体を起こし、大男の分厚い胸に速射砲のようにツツパリを放つた。「バ、バ、バ、バンッ！」大男の気勢が弱まった隙に、右手で大男のズボンを鷲掴みにし、左に身を回して投げを打とうとした。しかし、大男は、上から南を押しつぶすように被さつてきた。大男の左手は南の右上腕を掴み、ぎりぎりと指を喰いこませ、右手は南の肩越しに後ろまわしを「ガツシ！！」と掴んだ。南の頭は、大男の胸の下に入り込んだ。

夕陽が映る本館の5階の窓から、眼下で繰り広げられている闘いを眺めている男がいた。修道館大学学長、小森喜樂こもりよしむらである。学校職員達は警察に連絡する許可を学長に求めたが、小森は頑がんとして拒否した。

「学問の自由と、学校の自治独立は、憲法の介入で守られるべきものではない」

それが、明治生まれの漢物、小森の信念であった。つい2ヶ月前には、ミコンヘンオリンピック、水泳種目へ出場する多口、本田、両水泳部員の壮行会で、赤ふんどし姿になつて、ふたりに檄文げきぶんを読み上げたばかりである。小森は学生達の圧倒的な支持を得、また、小森自身も、学生達を全面的に応援、信頼していた。

木野花咲姫きのはなさきは、ただ、ひたすら、男たちの振り下ろし、振り回す棍棒や木刀をかわしながら、面を打ち続けていた。その、咲姫の耳

に「ドン、ドン」と大太鼓の音が聞こえてきた。

「あの音は・・・」

紛れもなく、修道館大学応援部の大太鼓の音である。音のする方向を、中段に構えながら、対峙する男の頭越しに見ると、本館屋上で団旗を翻す部員のそばには、いつもの、大太鼓を叩く応援団団員の姿があった。その前には、学生服姿に下駄履きの男が立っていた。修道館大学応援団団長の連山国男だ。

連山は両手に大根を持ち、「闘いの唄」を張り上げていた。壮行会で聴くいつもの歌だ。

日本拳法部の山口も得意の連續突きを入れながら、神田も蹴りを打ちながら、その太鼓の音を聞いていた。学友会会長、そして新聞部部長の神代も夕陽に浮かぶ本館屋上を見上げていた。

相撲部主将の南幸吉は大男の下になつたままだ。すでにこの体勢のまま5分はたつていた。最初の激突から、お互いの体勢は変わっていない。ふたりは、全身の力を出し続けていた。ふたりは、新たな技を出そうとはせず、ただ、力と力を出し切り、雌雄を決しようとしているのだ。相撲部員は、ふたりの闘いに邪魔が入らないように、ふたりを取り囲む輪を作り、固唾を呑んで両者の闘いを見守っている。南の全身の筋肉がぶるぶると震え始め、ついに、南は、「ガクッ」と左膝を落とした。無理もない、あの200kgはあらうかと思われる大男が全身の力を出して、南の上にのしかかっているのだ。

「あ、あーっ！！」相撲部員が悲痛の声を上げたとき、太鼓の音が響いてきた。

応援団長の連山国男は、のども裂けよとばかりに「闘いの唄」を歌い続け、太鼓を叩く部員も、バチよ折れ、皮も裂けよとばかりに、太鼓を叩き続け、団旗は千切れんばかりに振られている。唄も太鼓も、そして応援団旗も、いまや、相撲部主将、南一人のために向かれているのだ。

「むおーつ！！」

巨大な背中から野獣の咆哮ぼうこうとも思える声が上がり、さらに、南を押さえつける。ふたりの闘いを見つめる者たちには、何トンという重さが、南の肩にのしかかっているかのように思えた。

大きな背中に大粒の雨が一粒落ちた。やがて、二粒、三粒と、雨粒が落ち始め、雷鳴と共に、大雨になった。2ヶ月ぶりの雨である。

「ピカッ」と光った稻妻に、大男の背中が光った。

「むおーつ！！」

再び、大男が叫んだ時、大男の背中が、「ぐぐつ」と、わずかに持ち上がった。南が、その巨大な男を持ち上げようとしているのだ。雨は、ますます激しさを増し、海辺に近い修道館大学のグラウンドは、一面水浸しになってきた。

南に覆いがぶさる大男は眼を剥いて全身に力をこめている。しかし、「ドン、ドン」という太鼓の音と共に、南の膝は徐々に伸び、全身の筋肉は、隆起し、血が噴き出さんばかりに赤くなっている。

「ドドーン！！」

雷鳴と共に、南は、ついに、大男を肩で担ぎ上げた。

「おおーつ！！」という声が周囲から起きた。

暴力団の男達も、学生達も、今や、このふたりの闘いを見守っている。

大男は、信じられないという顔で南を見つめながら、それでも、

地面に足をつけようとしてもがいる。

南の体は仁王のように膨れ上がり、足を一步踏み出した。雨は降り続き、グラウンドは田んぼのようになつていて、南の足は、泥沼となつたグラウンドに10cmは埋まり込んだ。

「ビシャツ」一步、「ビシャツ」また一步と、南は、大男を抱いだまま、歩<sup>ほ</sup>を進めた。その後ろには、穴となつた足跡が残り、雨が流れ込み渦を作つた。

再び、「ピカツ」と光つた稻妻の中で、ついに南は、両手で男を持ち上げ、「ドカーン」という雷鳴と共に、大男を、ダンプめがけて投げつけた。大男は肩でダンプの前部を壊し、そのまま泥沼と化したグラウンドに頭から落ち、悶絶<sup>もんぜつ</sup>した。大きく開いた口に泥水が流れ込んだ。これが大男にとつて最初の敗北であつた。

「おおーっ……」といつ驚嘆と歓喜の声が、学生達から沸きあがつた。

学長の小森は、窓を開け、振り込む雨に打たれながらこの様子を満足げに眺めていた。木野花咲姫<sup>きのはなさき</sup>は、木刀を上段に構えたまま、感動で動けなかつた。日本拳法部の山口は部員に肩を預け、右拳を天に突き出し、雨粒を打つた。神田は乱れた胴着を正し、南に礼を尽くした。

「バーン!!」

雷鳴とは違う音が鳴り響いた。大男が投げつけられたダンプから、一人の男が降り立ち、雨の降る空に向かつて拳銃<sup>たがのぶ</sup>を発射したのだ。未だに意識の戻らない大木仁一郎の息子、隆伸である。

「もう、容赦はいらん!!」

「ぶつ殺してやる!!」

銃口は、南に向けられ、引き金に指がかかつた。

「やめろ!!」

ダンプの屋根の上に立つ長身の男が、雨音を切り裂くような太い声で言つた。

「俺たちの負けだ」

頭に赤いタオルを巻きつけ、右手に赤い木刀を持った男の顔が、稻妻の中で白く浮かび上がつた。

「郷戸・・・！？」

剣道部の木野花咲姫、新聞部の神代、そして、日本拳法部の神田、三人は同時に郷戸の名前を口にした。

「なんでじゃア！？」

「ドカーンッ！」「ドロゴロドロ・・・」

隆伸の声は雷鳴に打ち消された。

「引き上げだつ！？」

郷戸の声に、男たちは体を引きずり、仲間を支えながらトラックの荷台に乗り込み始めた。倒れた大男は10人がかりで荷台に引きずり上げられた。

「ま、待てエ」

「お、お前ら！？」と、隆伸は顔を赤らめ男達に叫んだが、所詮、隆伸も一人では何も出来ない男であった。

ダンプは、後輪をスリップさせながらグラウンドを一周し、校門へと向かつた。郷戸を屋根に乗せたダンプが、咲姫、神代、神田の前に来たとき、郷戸は、屋根を木刀で、「ゴンッ」と突き、停まるように合図した。

「勝負はお預けだな」神田に言つた。

「腕を上げたな」木野花咲姫に言つた。

「血を拭け」神代にこう言って、額に巻いた赤いタオルを神代に

投げた。

体力を使い果たして、雨の中に座り込んだ南は山岳部の多良千月に背負われて相撲部部室に運ばれた。多良は、その脚力を買われて、2年前の1970年、日本山岳会のエベレスト登頂隊の一員として、植村直己のエベレスト登頂をサポートした経歴がある。多良にとって、南を背負うことなどわけはなかつた。山岳部部員の間では、当時、騒がれた、中国山地の「ヒバゴン」は、この多良のことではないかと言う噂があつた。多良はエベレスト遠征に備えて、広島県と島根県にまたがる比婆山中で、連日、荷揚訓練をしていたのだ。多良は、毛皮のベストを着て、毛の帽子をかぶり、毛の尻皮を腰にぶら下げて山中を歩いていたので、住民が見間違えたのではないかといつのだ。

郷戸は学生時代から天才剣士として全国に名をはせ、その、殺気を帯びた剣さばきにあこがれる者も多かつた。木野花咲姫もその一人であつた。しかし、その太刀筋たちすじは日本剣道連盟からは邪道の剣として認めてはもらえず、全国大会に出場する権利は与えられなかつた。郷戸の剣は、咲姫の、面を打ちに行く正統派の剣道とは違い、隙あらば、どこでも打ち、突き、反則と判定されることを恐れない「邪剣」であつた。その頃の郷戸は自分が陰の道を歩んでいたことを気付くには若すぎた。

その剣の素質を見抜き声をかけてきたのは、三島由紀夫であつた。三島は、時代が急速に旋回するのを憂い、反革命の起爆剤となるべく「盾の会」を結成し、その会員として郷戸を誘つたのだ。郷戸は、自分を認めてくれた三島のためには眠る時間さえをも削つて動いた。

1968年（昭和43年）「楯の会」結成後間もなく「新宿駅騒

「新宿駅騒乱事件」が起き、三島は、会員と共に、この騒乱の視察をした。

郷戸は、三島の命を受け、銀座から新宿へと回り、新宿駅の近くで、機動隊員に囲まれて、めつた打ちにされている学生を見つけた。機動隊員に「楯の会」の会員であることを告げ、そして、学生を解放させた。学生に名前を聞かれ、「楯の会の郷戸だ」と名乗り、学生の割れた額を赤いタオルで巻いてやった。

「新宿駅騒乱事件」の視察の後、三島は、自衛隊の存在に危機感をつのらせ、2年後の1970年11月25日、「楯の会」会員4人と共に、自衛隊の決起を促すべく、自衛隊東部方面総監部へ乗り込み、割腹して果てた。

郷戸は、事前にこのことを知られず、尊敬する三島と共に死ねなかつたことに落胆した。その後、警察の取調べを何度か受け、翌年には三島の支援者の政治結社のひとつに身を寄せ、やがて、暴力団の用心棒へと身を落とした。

咲姫は木刀を左手に移し、他の部員と共に、濡れたポーティールを揺らしながら道場へと向かった。神代は郷戸が投げてよこした赤いタオルで割れた額を押さえたが、新宿の時と同じ様に血は流れ続けた。神田は、拳法部の部室入り口に積まれたプロックの上に座り込み、天を仰いで、降り続ける雨を口に含んだ。雨はそのまま翌朝まで降り続いた。

2005年（平成17年）9月 広島・宮島

神田龍一は今、雨に打たれながら身をかがめて、この30年以上前の出来事を鮮やかに思い出していた。その後、修道館大学の運動部は、全ての公の活動には1年間参加できなかつた。暴力団の大木会は広島県警の頂上作戦により、壊滅に追いやられ、郷戸は大木会の刺客に追われ姿を消した、と言う噂を聞いた。あの時、一緒に闘つた仲間とは卒業以来一度も会つていらない。そして、10年前からは宮島観光推進協会の仕事も忙しくなり、拳法の練習からは自然と遠のいていた。

雨と風は一層激しさを増し、渡辺は、警察を呼びに行つたまま帰つてこない。神田は、合羽のズボンと上着を脱ぎ、着ていたシャツとズボンも脱ぎ捨て、体を動き易くし、肩を回し、拳を握り、広げ、屈伸運動を始めた。

「今の俺は、あの男に勝てるだろうか？」

宝物館の壊された窓から男が現れた。男は、「スルッ」と、頭から回転しながら飛び降りた。飛び降りたそのままの姿勢で、片膝をついて、あたりを見回し、警戒している。やがて、すつぐ、と立ち上がつた。頭はスキンヘッドで、素つ裸だと思つていた腰の前部分は、黒い小さな革か布の様なもので覆つていて、大胸筋は発達し、手足の長い格闘家の体だ。雨にうたれて体は光り、男の体は一層大きく見える。改めてこうして見ると、2m近い長身だ。男は黒い巻物ののようなものを口にくわえ、こちらを獣のようにはに凝視している。

「気付かれたか！？」

神田は、

「今の俺には、この男は倒せそうもない」 そう思ったが、ゆっくりと立ち上がり、男のほうへ一步進み出した。

「何をしている！？」

返事はない。もう一步、前へ出た。男は動かない。男との距離は6m。さらにもう一步進んだ。男は動かない。

「どういつもりだ・・・」

その時、宝物館の裏に黄色い合羽が見えた。渡辺が警官を連れて戻ってきたのだ。男はそれに気付いて「俺と警官達の距離を測っているのだ」と知った。神田はジリジリと間をつめた。

「何をしている！？」

警官が3人、警棒を伸ばして、後ろから声をかけた。男は、それには何も答えず、神田のほうを見たまま。三人の警官はお互いの距離をあけ、男を、神田と共に囲む体勢を作ろうとしたが、「バッ！」「と、それより速く神田に向かつて駆け出してきた。神田は、身構え、警官は、男を追つて、男の背中へ向かつて走った。

男は、神田の手前2mで体を伏せ、「ビュン」と、体を伸ばしたかと思うと、後方へそのまま回転して、追つて来た警官達の頭上を、背中をして飛び越した。警官達は、獣が頭上を飛び越えたかのように、思わず頭をかがめた。神田は、警官の間をすり抜け、着地した男に組み付いた・・・かのように思つたが、「スルツ」と、神田の腕は空をつかんだ。男は振り向きざまに左裏拳を放つた。神田はかるうじて、左手で払い、体をかがめながら、得意の右横蹴りを

放つたが、男はあつさりとそれをかわし、巻物のようないのをくわえたまま、左頬を、ゆるめ、「ニヤツ」と笑つたように思えた。男は、**大聖院** 方向へ走つた。大聖院は、**真言宗御室派**の大本山であり、**関西屈指の名刹**で、**厳島**の総本坊である。このまま行くと、空海が修行した、**靈火堂**、**弥山本堂**を経由して**弥山山頂**へと続く。

「待てーっ！…」

警官達は叫んだが、男は、あつというまに、強い横殴りの雨と、弥山から吹き下ろす強風の中に入り込んだ。神田は、追わなかつた。男の裏拳は間違いなく手加減されたものだつた。得意の右横蹴りも難なくかわされてしまった。全く歯が立たなかつた。

その時、遠くから「メリ、メリッ！…」「ガガッ！…」という地を揺さぶるような音と共に、あたり一面に土のにおいが漂つってきた。

大聖院と厳島神社をつなぐ通りは、小さな商店や民家が並ぶ、門前町のようになつてあり、その通りは、やがて、V字型の谷になり、谷に沿つて、参道が弥山山頂へとつながつてゐる。その谷の上部から、雨と風の音に乗つて、生木なまきを裂く音が聞こえてきた。地面は搖れ始め、腹に響く地鳴りが聞こえてきた。

「逃げろー！…」  
「山津波じやー！…」

警官達が叫びながら、必至の形相で駆けてきた。

茶色の巨大な生き物が、うねるように迫つてきた。その巨大な生き物の頭には、松の木が何本も生え、背中には大きな石のこぶが何個もある。狭い道を、獣と化した泥が、商店のドアを飲み込み、民家の玄関を押し破り、そのまま、頭は厳島神社へと向かつた。神田達は、間一髪で高台に逃れ、呆然ぼつぜんとその巨大な獣の背中を四つんば

いになつて見つめた。

神の島を襲つた60年振りの山津波であった。

渡辺と警官達は、山津波がうねりながら白糸川に流れ込み、あふれ出した泥と岩が道を埋め尽くすのを眺めるばかりであった。渡辺は、その後自分の間、海の波を見てもめまいを感じるほどその後遺症に悩まされた。

神田<sup>かみた</sup>は山津波のやつてくる暗闇を見つめていた。

「あの男は、何者だつたんだ」

「あいつ、これに飲み込まれたかのう」警官の一人がつぶやいた。

「これに飲み込まれたら、助からんじゃうつ」もう一人の警官が、うねる泥を見ながらつぶやいた。

夜が明けて、被害の全貌が明らかになつた。厳島神社は、前年2004年（平成16年）の台風18号では、重要文化財である厳島神社の回廊や左楽房が倒壊するなどかなりの被害に遭つたが、今回の台風14号では、幸いなことに、神社そのものへの被害は少なかつた。しかし、神田達が直接眼にしたように、雨による、土石流は、町に甚大な被害を与え、雨と風は、女神の肌に大きな傷跡を残した。

その夜、神田<sup>かみた</sup>は自宅へは帰ることが出来ず、警官達に派出所で事情聴取され、そのまま、派出所で仮眠を取つた。夜が明けてからは、宮島観光推進協会の事務所で、マスコミ、旅行会社など、各方面から、台風被害についての問い合わせや、実際の復旧作業の陣頭指揮

に忙殺され、気がついたときには、日も暮れかけていた。事務所でやつと一息つき、「コーヒーを飲んでいるとき、昨夜の警官の一人が、本署の刑事とやつてきた。

「やあ、神田さん、お疲れさんです。」(かみた)  
「本署の高見さんです」

「高見です。よろしくお願ひします」

「や、」と、高見と名乗った刑事は、既に、事務所内に陣取つてフェリーの改札口を見張つている一人の刑事に軽く手を上げて挨拶した。色黒で白髪交じりの短髪で、定年前の、いかにも叩き上げといつた感じだ。富島観光推進協会の事務所はフェリー乗り場の建物の一階にあり、改札口を行き来する人間のチェックに好都合の場所にあるのだ。

「神田です。ま、どうぞ」と、椅子をすすめた。

「昨夜はどうも大変だったようですね。いや、大筋は、彼から聞いているんですが」と、警官のほうを持ち出した手帳で指した。

「高見さん、私はこれで……」警官は高見に敬礼し、神田にも軽く会釈をして去つていった。

「彼も、昨夜から動きどうしだらうが……」と、疲れきった警官の背中を見つめた。

「あ、じくろうさん」刑事は、警官に言つて、再び、神田のほうに向き直つた。

「で、土石流の現場から何か?」神田は、「コーヒーを飲みながら立ち上がり、刑事のためにコーヒーを淹れた。

「じりや、どーも」高見刑事は、カップを受け取りながら「男の遺体つてことですか?」と言つた。

「いや、まー、手がかりになるようなものとかは?」神田は、言葉を濁した。

「今んところは、まだ何も。ただね、さつき、宝物館の館長に聞い

てみたんですが、よく分からん、って言つんですよ」

「よく分からん、とは？」神田は、椅子に腰掛けながら、尋ねた。

「被害がですね。奴が忍び込むのに壊したガラス窓と、展示ケースのひとつが壊されていたということなんですが・・・」

「金庫室は？」言葉をさえぎつて神田は聞いた。

金庫室には、国宝をはじめ、重要文化財が何百点も収納されている。「それが狙いのはずだ」と思つていた。

「異常がないんですよ」高見刑事は背中を椅子の背もたれに預けた。

「異常がない？あの男は、確かに、口に巻物のようなものをくわえていたけど、あれは、平家納経だと思つたんですけど」

展示場には、通常、国宝級のものは、レプリカが展示されており、本物は、年一回の特別展にだけ展示される。「まさか、あの男、レプリカを盗み出したのでは？」だとすると、間抜けな話だ。

「いや、展示されている、レプリカもそのままなんですよ」

「え？ じや、何が？」

「それなんですがね」高見刑事は、腕を組んで、神田を見た。

「何でも、戦後、GHQの命令で紅葉谷で工事が行われたそうじゃないですか」高見は手帳を繰りながら言った。

「ええ、終戦直後の1945年（昭和20年）の9月の枕崎台風のとき、富島も相当な被害をこつむりましてね」神田はコーヒーを一口すすつて続けた。

「あの時も、今回と同じようなコースでしたしね。土石流の被害も相当出してね。今の紅葉谷公園は、その復旧工事でできましたよ。確か、工事は、その3年後から始まつたと・・・」

「そうちじいですね。館長さんもそういつてました。で、その工事の時、鉄の棒が土砂の下から出てきたとか。ちょうど、巻物のような」

「巻物? じゃあ、なくなつたのは、その巻物だと?」「そうちじいんですよ」

「それで、当時の工事関係者が、発見者ですがね、GHOには内緒で、こりや珍しいもんだと思つたんでしょうね。長い間、自宅に保管していく、その後、民族資料館が開館された時、展示品のひとつにと、寄付したといつことらしいです」高見刑事は手帳のページを一枚めくつて続けた。

「それが、昭和49年、つていいますから、1974年のことですね。それから、調査のために、いつたん宝物館に仮展示されたらしいんですよ」

「あの男が口にくわえていたのは、平家納経じゃなく、その鉄の棒だったのか?」神田は首をひねつた。

「おつと、肝心なことを忘れるところだつた。さつき、宝物館で防犯ビデオをチェックしたんですがね。ひとり、大男が写つていたんですよ。それも、その、鉄の棒を展示しているケースの前で。ちょっと、確認していただきたいんですが。このテープですが。ここには、デッキは?」

「あります」そう言つて、高見刑事からテープを受け取り、デッキにセットした。

テープが再生されるまで、高見刑事は質問を続けた。

「大まかには聞きましたが、外人風で、大男で、と。他に何か思い出されたことはありませんか?」高見刑事は、ボールペンを取り

出し、カチャ、と志を出した。

「いや、これと言つては別に。確かに、普通の男じゃありませんね、あれは。武術か何かの相当な使い手ですよ」と、ソリソリと話して、

「そう言えば、一瞬手に触れた時、ヌルツ、とした感触で、スルツ、と手から滑り出ましたね。最初は雨で体が光っているのかと思いましたが、今思つと、あれは、油か何か体に塗っていたのかなア。・・・

「油を?」高見刑事は顔を上げた。

「ほり、よく、寒い時には油を体に塗つて泳ぐって、聞くじゃないですか」

「なるほど。じゃ、奴は、泳いで上陸したと。もちろん、台風前でしううがね」

「その可能性もありますね。何しろ、あの体だ。船だと立つてしまふし」

「神田さん、この男ですか?」高見刑事は、画面を指差した。

確かにあの男だ。何人かの外国人観光客に混じつて、頭二つ飛び出している。男は、背広姿で、顔を隠す様子もなく、展示される鉄の棒を凝視している。「といふことは、目立つ、目立たないは関係ないってことか」

「この男に間違いありません。これは・・・」

「3日前の記録です。つまり台風の前々日です。おかしいでしょ? 最初から顔も隠さず、じつと見つめて。これじゃ、私が犯人ですって言つてるようなもんだ。それとも、最初はそんな気はなく、その現物を見て思いつき、いったん、引き上げて、再度、今度は、台風前日に泳いでやつってきたのか?」高見刑事は自分自身につぶやいた。

「どうも、納得できる話じゃありませんね」神田は左手をテレビ

の上において画面を覗き込んだ。

「で、男の搜索のほうは？」かみた神田は聞いた。

「山狩りとかは・・・？」

「いやー、今のところは、こそ泥一人つてどこですかねえ。被害状況もよく分かつてないし、これが、国宝でも盗られたつていうんなら話は別ですがね。それに、この状況でしょ。人手の問題もありますからね」

「そうでしょうね。まあ、あの大男なら、目立ちますから隠れようもないし、第一、あの土石流に巻き込まれたんじゃあ・・・」

この日の夜明け前、弥山頂上から一羽の巨大な鳥が飛び立った。

## 鳥（からす）

2005年（平成17年）9月 富士山

富島に大きな傷跡を残して台風14号は日本海へ抜けた。しかし、この台風は、そのゆっくりとしたスピードもあって、秋雨前線を刺激し、九州に上陸する以前には、すでに激しい雷と共に記録的な豪雨を関東地方にもたらし、首都東京にも床上、床下浸水など大きな被害を与えていた。

そして、富士山頂では、自然が、神の怒りとなつて、命の存在は微塵みじんも許さないかのように荒れ狂い、雨と風は人工の建物に襲いかつた。すでに登山シーズンも終わり、多くの山小屋は営業を終え無人となつている。そして、期間中は登山者でにぎわう郵便局や富士山本宮浅間大社奥宮の扉も固く閉ざされている。

浅間神社奥宮のすぐそばにある富士山頂館の主は、台風の接近によつて下山時期をいつもより遅らせ、この夜は山小屋の中で過ごした。そして、雨の上がつた翌朝、下山する前に奥宮へ手を合わせるために、鳥居のところへ来て、奥宮の屋根の一部が陥没していることに気付き、携帯電話で富士宮市にある富士山本宮浅間大社に連絡を取つた。

2日後、浅間大社職員が富士山頂へ奥宮の整理と補修のためにやつてきた。

本殿内は一部土砂で埋まつていた。  
「なんでしょう。これは？」一番若い職員が、シャベルですくつた土砂の中に変なものを見つけた。

「なんだ？」もう一人の職員は、腰に手を当て、背伸びしながら、

すくい上げた職員が手にしたものを見つめた。

「なんだろう」他の職員たちも集まってきた。

「巻物かなア？」

「こんなものあつたかなア？」

「いや、記憶にないな」そういうて、職員たちは雲の見える天井を見上げた。

「とりあえず、先にここを片付けよ。とにかくで、写真は撮ったかい？」

年長の職員が言うと、

「いけね、忘れてた」そう言つて、ザックからデジカメを取り出し、作業前の状況を記録した。

富士山頂は、酸素濃度は平地の3分の2で、厳しい自然環境は北極圏なみである。雨は下から降り、夏でも雪が降る。強風が吹けば岩さえも転がる。台風14号はこの時日本海のほぼ真ん中あたりに達していたが、何しろ富士山は日本一の独立峰であるため、風の影響をもろに蒙る。自然の神に許しを請いながらの作業は時間がかかった。1日がかりでようやく作業を終えた神社の職員たちは下山の準備にとりかかつた。

「ちょっと、作業終了の記録を・・・」

そう言つて職員の一人はデジカメで社殿内の写真を撮り、最後に5人全員の写真を撮つた。

「これ、どうしましょ？」最初に鉄の棒を発見した若い職員が、その棒を握つて、年長の職員に聞いた。

「富司の指示を仰げ」そう言つて、携帯で写真を撮り、メールに添付して本宮のパソコンに送つた。

「なんだらうな、この模様は？」職員の一人が鉄の棒を見ながら

つぶやいた。

「文字のよつでもあるし、模様のよつでもあるし。結構古い感じがするよね」

「ほゞ、こんなもん、どうあつたんだろう?」

「土砂に混じってたつて」とは、土砂と一緒に流れ込んだつてことかな?」

「さあ、祭壇の中であったのがも」  
「どうぞどううな

そういつて、その鉄の棒は、「祭壇にお祀りして  
あぐれり」と富岡がう電話があった。

「祭壇に？」年長の職員はいぶかしげに首をひねつたが、指示通り、祭壇に鉄の棒を供え、忘れ物はないか最終チェックをし神社の扉を閉じ、施錠して下山した。

2005年（平成17年） 広島・宮島

神田は今、歯向かう老犬を見るような、あの男の獅子のような眼かみたを思い出していた。そして、あの「暴力団襲撃事件」のときに抱いた闘争心が湧き上がってくるのを感じている。

「老犬になるにはまだ早いだろ？、H-H？」濡れたシャツの下にある贋肉を触り、そう口にして、ゆっくりと走り始めた。この尾根を登りつめると富島の東のピークにたどり着く。そこには富島ロープウェイの終点駅「獅子岩駅」（しじいわえき）があるが、ロープウェイはまだ動いていない。獅子岩から弥山本堂へは緩やかなアップダウン道でつながっており、そこから丘岩が折り重なる弥山頂上へはやや急な上りとなる。

神田には、今日は頂上へ登る体力は残っていないので、紅葉谷を下ることにした。1945年（昭和20年）の枕崎台風で土砂崩れをおこした谷だ。下り始めて10分ほどで、膝がガクガクと笑い始めた。登山道脇の石に腰を下ろしてスポーツドリンクで水分を補給しながら、富島は豊かな原始林に包まれていることを実感した。さつきまで降っていた霧雨で一層深みを増している。その時、下から、弥山頂上のレストハウスの主が登ってきた。

「やあ神田さん。こんなところで何を？」

「いや、ちょっと、状況を見ておこうと思つて……」

「そうですか。ご苦労さまです。私も、上のほうが気になつて。それにしても、大聖院の参道が、あんなことになつて、大変ですね」

「そうですね。復旧までには相当時間がかかるでしょうね」

「それはそうと神田さん」

「エ？」

「何でも、外人の大男を捜してるとか聞いたんですが」

「そうです。こそ泥ですがね」

「私は、見たんですよ。台風の前の日」

「え？ どこで」

「頂上ですよ。大きなザックをかついでね。ツルツル頭でしたよ。頂上の大岩に、こうやって、両手をあてて、ジッとしてたんですね」 そう言って、主は頭を下げて両手をそばの大岩に当て、岩に体を預けるような格好をした。

「ちようどこんな風に、なんか、こう、岩に祈りを込めるというか、岩から靈氣をもらつというか、そんな格好でしたよ」

「で、その後は？」 ペットボトルを手にしたまま神田は聞いた。

「さー、私が下山する時にはまだ展望台の上にいましたからね」 主はタオルで首筋の汗をぬぐいながら答えた。

「警察には？」

「いえ、まだ何も。さつき、下で聞いたもんですからね。後でいいか、と思って」と、悪びれずにタオルを頭に巻きながら言った。

「ビデオに写っていたのが、台風の3日前。と言つことは、翌日、弥山頂上へ登つて……、その日は、夜まで頂上にいた……。といふことになるな」神田は両膝に手をやり、立ち上がりながら思つた。

富島観光推進協会の事務所に出勤する前に一度自宅へ帰つてシャワーを浴びた。着替える時、携帯の着信ランプが点滅しているのに気がつき、神田は事務所に電話を入れた。

「あ、神田さん。先ほど高見刑事さんから電話がありましたよ」

「へー、なんだろ？ ありがと。電話してみる」

「いえ、なんだか、もうこっちへ向かつてると言つ」とでしたから、そろそろお着きになるんぢやないですかね

「あ、そう。じゃ、私も、すぐにそっちへ行くから」

神田の自宅は事務所から歩いて10分のところにある。今までその距離をバイクで通勤していたが、今日からは軽いランニングで通勤することにした。

事務所で朝刊各紙をチェックした。各紙とも台風被害の記事と写真がトップを飾っている。今回の台風14号は典型的な雨台風で、各地に雨による大きな被害を残している。東京でも雷雨で首都機能が麻痺し、再び「危機管理」の重要性を訴える記事が目に付いた。社会面でも、宮島をはじめ各地の被害の状況が細かく伝えられている。

神田は、その中のひとつ写真に眼が釘付けになった。鉄の棒と同じものが写っているのだ。

「神田さん」

「神田さん！」

何度も呼ばれて、顔を上げると、高見刑事が立っていた。今日は背広にネクタイ姿だ。

「え？ あつ、これは失礼しました」 そう言って、新聞をたたみ、椅子の横に置いて立ち上がった。

「どうしました？ ボーツとして」 心配そうに顔を覗き込んで、「少しお疲れじゃないですか？」 と言つた。

高見刑事の後ろにはキチツと背広を着こなした男が4人立つている。

「紹介させていただきます。」 から、警察庁、外事課の鈴木刑事。それと・・・」

「警察庁？ 外事課？」 神田は「はあ？」 という顔で高見を見た。事務所内にいた職員も全員、緊張の面持ちで男達と神田の顔を見た。高見刑事は、それには構わず、紹介を続けた。

「そして、こちらの方々は、中国大使館の・・・」 そう言いながら、内ポケットから名刺を取り出してパラパラとめくつたが、「中国大使館の・・・」 と紹介された男達は順に、

「カクといいます」

「サイといいます」

「ショウといいます」

日本語で、それぞれが、例文通りといった感じで自己紹介した。

「中国？・・・大使館？・・・」

いづれも立派な体格をした40代くらいの男達だ。

「何事だ？？」 神田は名刺を出しながら事態を理解しようとした。

「二の男たちには見覚えがある。ビートたか？」そう考えていたとき、高見は、

「今回の一件は、二ちらの鈴木刑事が引き継がれます」そう言って、<sup>かみた</sup>神田から目をそらした。

「それで、何か？」神田は鈴木刑事を見つめた。

「実は、例の鉄の棒ですがね」鈴木刑事は背広のうちポケットから書類を出しながら言った。

「はい」

「外交ルートを通じて協力要請が来ましてね」そう言って、その書類を神田の方へ向けて渡した。

「協力要請？」そう言いながら、神田は書類に目を通した。

「ええ。ところが、正式に市のほうへ要請しようとした矢先、今回件が起こったというわけです」神田から戻された書類を丁寧にたたんで封筒に入れながら、鈴木刑事は中国大使館の職員だと紹介された男たちのほうに向かつて言った。

「既に、こちらの方々は、その現物を確認されていまして」そう言われて思い出した。あの大男と一緒にビデオに写っていた男たちだ。

「あの棒は、我が国にとつて重要な物なのです。あなたは、あの棒がどこにあると思いますか？」最初に名乗ったカクという男が直接的な言い方で聞いた。冷たい声だった。

神田は、この男の眼が不自然な動きをしているのに気がついた。

「そんなことは分かりません」<sup>かみた</sup>神田は少しムツとしながら答えた。

「あの台風の晩に盗まれたきりですから」事務所の女の子が立ち上がつて、「ヒーメーカーのところに行こうとしたのを目で制した。

「それに、私は観光推進協会の一職員にすぎませんから、捜査にご協力はさせていただきますが、私自身で捜査する権限も、またその気もありませんし」

高見刑事は、白髪頭しらがあたまに手をやり、上田遣うわめがいで神田を見た。鈴木刑事もネクタイの結び目に手をやりながら、天井を見上げている。

「言てる」と理解します。私、日本語、上手でないですから、気分害したら、謝ります」カクと名乗った大使館員はそう言いながら内ポケットに手をやり、ブルブルと震えている携帯電話を取り出し、右目だけ動かしてボタンを押した。左目は義眼であった。

「あなたは、犯人と接触した一番の人です。ちょうど、失礼します」そう言って携帯に出た。

カクは「一言二言電話で話す、

「鈴木さん、急用ができました。私達、これから東京に帰らなくてはいけません」そう言いながら、連れの二人に顎あごをしゃくつて指示を出した。

「それはまた急な。たつた今、着いたばかりですよ。まだ、宝物館の館長にも話を聞いていないし、・・・」

カクは鈴木刑事の言葉を手で制し、

「高見さん、代わりにお願いします。後田、報告は鈴木さん宛てにメールでお願いします」

そう言いながら、もうドアのほうに向かっていた。鈴木刑事もあわてて後に続いた。

「ご協力感謝します。ではまた後日お会いしましょう」カクはドアの手前で振り向き、そう言って出て行つた。

「お騒がせしました。何か進展がありましたら連絡お願いします」鈴木刑事は、やれやれ、といった顔をして、神田と高見にそう言って、頭を下げ、ドアを閉めた。

「いつたいどうなつているんですか？」神田はそう言いつと、ドッカ、とソファーに腰を下ろし、高見にも座るよう促した。

「さあ・・・」と、言いながら、高見も椅子に腰掛けた。

「私も、何も聞いていないので・・・。何だか、ややこしくなつてきたなア」そう言いながら、また、白髪頭に手をやつた。

「あつ！？」神田は椅子から飛び上がった。

「何ですか！…」ジックリした「高見も、ビクッ、として背を伸ばした。

「「」」れですよ」そう言って、新聞をめくつて、台風被害の写真のひとつを指さした。それは「富士山頂にも被害が」という見出しど、富士山本宮浅間大社奥宮の被害状況の写真が載つている所だ。社殿内の被害の様子が写つている。

「へー、今回の台風は大変だつたなー」

「そうじやないですよ。これ、これですよ」そうこいながらルーペを持ち出し、写真をジックリと見た。

「「」」れだ。やつぱりこれだ」

「何なんですか」高見は新聞を覗き込んだ。

「「」」れですよ。宝物館にあつたのは！？」あの鉄の棒が写真の端のほうに写つている。

「ええ！？なんでまたこんなとこひるに？」

「いいですか。富士山頂の被害は宝物館の一件よりも2日、3日前のことですよ

「・・・つてことは、同じものが一つあつたつてことですか？」

「そうなります。今の大使館の連中の慌て方は、大使館もこの記事を目にしたんじやないですか？」

「それで、帰つて来い、つて言う指示が出たつてことか

「いつたん東京に帰つて、どうするつもりだらう?」

「いい」富島と同じように外交ルートの圧力で、その鉄の棒を頂  
いやうんぢやないですか?もつとも、いい富島では誰かに先を越  
されぢやいましたがね」

そう言つてふたりは顔を見合させて黙つた。

その頃、東京新宿のホテルの一室では、大男が新聞を食い入るよ  
うに見つめていた。

その日の午後、**神田龍一**<sup>かみたりゅういち</sup>と高見刑事は新幹線に乗り込んだ。

「しかし、神田さん。神田さんは、捜査する権限も、する気もないと言つたばかりじゃないですか？」駅弁の包みを外しながら高見はチラシと横に座つてゐる神田を見た。

「台風のおかげで、いろいろと業務もあるんですけど、警察と市から観光推進協会へ要請がくれば、私が動かないわけにはいかないですからね」と、言い訳のような返事をした。

「そう言つた高見さんも、この件は警察庁へ移つたと言つてたじゃないですか」神田は弁当を頬張りながら言つた。

「いやー、私は、もうじき定年でね、わりと自由にさせてもうつてるんですよ。それに、民間人一人に危ない橋は渡らせられませんからね。言つてみれば、ボディーガードみたいなものですよ。それに、この一件の担当はもともと私はですから」そう言つて登山ズボンのベルトをゆるめた。

「で、**富士山本宮浅間大社**<sup>ふじさんほんぐうせんげんたいしゃ</sup>さんへは連絡を？」神田は高見刑事に聞いた。

「ええ、本署が連絡をしてくれていると思います。窃盗事件の件で、お話を・・・と。しかし、富士山かあ。体力、大丈夫かなあ。学生時代に一度登りましたがね。もう登ることはないと思つてましたが」高見刑事はお茶を一口飲んだ。

「高見さんは山登りがお好きなんですか？」神田もペットボトルのお茶に手を伸ばしながら聞いた。

「いや、昔の話ですよ。わたしの爺さんが山登りが好きでね。家

には爺さんや曾祖父さんが山で拾つて来た石つゝやひやら木の根つ子  
やら、何やらわけの分からぬ物がたくさんありましたよ」と、懐  
かしそうに答えた。そして、思いついたかのように「定年になつた  
ら日本百名山でも踏破してみるかな」と言うと「ははは」と、愉快  
そうに笑つた。

新大阪を過ぎた頃、

「ちよつと、ここまで話を持ちておきませんか？」そう呟つ  
と神田は、きりつとした眼差しで高見を見た。

「そうですね」高見もそれに静かに応えた。

「まず、あの大男ですが。宝物館に忍び込む2日前にはビデオに  
写つていた。その時、たまたま、例の中国大使館の連中と一緒にな  
つた。ここまではいいですね」

「ええ。そして、いつたん引き上げ、台風がやつて来るのを知り  
ながら、弥山頂上へ登つて、なにやら、怪しげな行動をして、その  
まま、夜までどこかに身を隠していた」高見は箸を持つた手を右、  
左へ動かした。

「展望台の主の話だと、大きなザックを背負つていたらしいんで  
す」

「しかし、神田さんが見た時は裸同然だつたんですよね」神田の  
ほうを見て高見は言った。

「なぜ、台風の危険を冒してまでもその日でなければならなかつ  
たのか？普通の日の夜でもいいじゃないですか」そう言いながら、  
高見を見て同意を待つた。

「台風だと、万が一の時に、警察が駆けつけるのが遅くなるとか、  
逃げやすくなるとか、考えたんですかね？」

「それとも・・・」

「それとも、もう、時間がなかつたのか」神田の言葉を次いで高  
見は言った。

「中国大使館の連中に先を越される。時間がない。そう思つて、

台風の日にやむを得ず侵入した。いつ考えられませんか?」神田は再び高見の同意を待つた。

「なるほど。それも、その男の国の外交ルートは使えない理由がある。」ううううことですね

「たぶん」

「しかし、たまたまにしても、よくも、あの口、宝物館でかち合つたもんですね」

「あの鉄の棒が展示されているという情報を、同時か、ほぼ同時に耳にしたということじゃないですかね」

「うーん・・・どこから?」高見は弁当から顔を上げ聞いた。

「ああ、それはまだ・・・」神田は、箸を置き、蓋をしながら小さな声で言った。

「シユーマイ残すんですか?」神田の弁当を覗き込んで高見は言った。

「え?ええ。最近ちょっとダイエットを・・・」

「じゃ、いただきますよ」高見は箸でつまんで、ポイッ、と口に放り込んだ。

「のぞみ」を名古屋で「こだま」に乗り換え、新富士駅からはタクシーで富士山本宮浅間大社に向かった。

「わすが、立派なものですねー」高見刑事は、ホーッ、といふ感じで言った。

富士山本宮浅間大社は全国1300社以上ある浅間神社の総本宮で、駿河の国の一の富として全国的な崇敬を集め東海最古の名社である。

「残念だなー。本来ならここから富士のお山が見えるんでしょうがねえ」と、高見刑事は本当に残念そうに言った。日も暮れかけ、おまけに上空は雲が流れている。また、雨でも降りそうな気配だ。

境内けいだいに入ると、夕暮れ時にもかかわらず、散歩といった感じの人たちや、観光客の姿もまだ見える。参拝客も多いのであらう、境内の木はおみくじの白い花を咲かせている。砂利の敷き詰められた参道を進み、社務所で案内を請うた。

「はい、聞いています。こちらへどうぞ」巫女みさんに案内されて奥の部屋に入った。しばらくして、富司が現れた。

「お忙しいところ申し訳ござりません」神田と高見は立ち上がりて頭を下げる。

「いえ、いえ、ご苦労様です。で、窃盗事件と当社と、どういう関係が？」富司は少し怪訝けげんな様子で椅子を勧めながら聞いた。高見刑事はこれまでのいきさつをかいづまんで話し、新聞の写真を見せた。

「わようでござりますか。これが、富島さんにも……」富司は、考え込む様子で新聞をテーブルに置き、目を閉じた。

「その、鉄の棒について何かご存知のことがないましたらお教え願えませんでしょうか？」高見刑事は体を前に出しながらたずねた。

「私は、あれが何かは、全く存じていないのですよ。何度も目にした事はございますが。もともとは、あれは、奥富おくみやにあつたものではございませんで」

「え？ すると、どこからか移されたところですか？」

神田の問いかけに、富司は

「はい、わようでござります。もともと、あれは、富士山頂にあつたものでござつてまして……」

「え？ 山頂に？ 奥富は富士山頂じゃないんですか？」

コツコツ、とノックがあつて、職員が入ってきた。富田は、ドアのまづを振り返りながら、

「はつ、はつ。富士山頂は剣が峰で、」やむこますよ」そつ言つた。

入ってきた職員は、

「あの、先ほどのお客様がお帰りになりますが・・・」と言つと、

「あ、そうですか」と、立ち上がりかけると、

「いえ、お見送りは結構です、ということでした」職員はそう言つて出て行つた。その間、高見刑事は、自慢げに、

「そうですよ、神田さん。レーダードームがあつたところが富士山頂、剣が峰。日本一のてつぺんですよ」

「そ、うなんですか。知らなかつたなあ」神田は椅子に座りなさいた。その時、社務所の壁にポスターが貼つてあるのに目がいった。そのポスターには「御鎮座1200年記念事業奉賛会」とあつた。「これは？」神田は立ち上がり、ポスターのところへ行つて聞いた。

「はい、来年2006年（平成18年）が坂上田村麻呂様が浅間大神様を当地に遷宮されまして1200年の節目の年に当たりますので、その記念事業へのご協力をよびかけるポスターでございます」

「へー。実は、富島も、空海さんが富島に渡つて、弥山<sup>みせん</sup>で修行をし、開基したのが806年ですから、来年2006年が、弥山開基1200年の記念の年になるんですよ」

「はい。そういうお話は伺つています。奇遇でござりますね」富司は、ニコニコしながら応えた。

神田は椅子に戻ろうとして、ポスターの横のスケジュールボードにふと目をやつた。その間にスケジュールの中に「厳島神社例祭」と書き込まれているのを目にしたのだ。

「ここにも、巖島神社が？」神田は何か因縁めいたものを感じ始めた。

「それで、その鉄の棒が剣が峰から奥宮へと移つたいきさつは？」

高見刑事が、神田が口を開く前に尋ねた。

「それは存じております」宮司は静かに答えた。

「先ほど刑事さんがおしゃつていらしたレーダードーム。あれが建てられるかなり前のことです。1895年といいますから明治28年のことです」さいますよ」宮司は引き締まつた顔で軽くうなずきながら話を続けた。

「野中至のなかいしたる」という方が、私財をはたいて、その富士山頂、剣が峰に気象観測所をお作りになられましてましてね。それはそれはこ苦労をされ、なにしろ、今でさえ山頂での越冬は大変なことですのに、当時は、まだ、ましな装備もないことでしょうし、日本国のことを中心思つてのことです」さこましょうねえ……」そう言つて、袂たもとからハンカチを取り出し手に当てた。

「それで、その鉄の棒は？」高見刑事は質問を続けた。

「はいはい、それで、その観測所を作るために、剣が峰の大きな石を動かしたところ、鉄の箱が出てきたらしゅうございまして、その中に、なにやら、御文書と一绪に、その、鉄の棒が納められていたらしいのです」お茶を一口飲んで、落ち着きを取り戻し、話を続けた。

「これは、私が直接聞いたことではございませんで、先代の宮司から私は聞いたものですから、確かなことは分かりかねますが、なにやら、そういうことらしゅうございます。そして、野中様は、これは、富士山頂に丁寧ていねいに納められていたところから察するに、富士

山と、よほどのいわく、因縁があるものであるものに違いない、とまあ、こんな風に思われたのでございましょうね。先々代の富司に頼んで、爾來、浅間大社奥宮にお祀りさせて頂いていたのでござります

「誠に恐縮ですが、その、鉄の棒を、捜査協力ということじで、しばらく、拝借できないものでどうか？」高見刑事は、両手をテーブルに置いて富司を見つめた。

「私いたしましたも、あれが高島さんと何かの関係があるといふことが分かりましたし、あの鉄の棒と私どもとの関係が解明できるのであればありがたいことでござります。それに、あれば、もともと、神社庁とはかかわりのあるものではございませんし、後日、返還いただける、ということを条件にお貸しいたしました」「富司はニッコリと微笑んだ。

「ありがとうございます。」協力感謝申し上げます」神田と高見はテーブルに両手を着けて頭を下げた。

「じゃあ、明日にでも、登つてみますか？」神田さん高見刑事は神田を見て言うと、神田は、

「でも、もうシーズンも終わりましたし、鍵が掛けられているのでは？」そう言って富司を見た。

「いえ、ちよつとよろしくございました。明日は職員が、鍵を開けますので」

「と、言いますと？」

「新聞社の取材が急に入りましてね。何でも取材の皆さんは明後日にはお国に帰られるとかで、この台風でスケジュールが大狂いだと嘆いておられましたよ。本来ならば、丁重にお断りするのですが、何しろ、大使館からのたつてのお願いでございました

大使館と聞いて、神田と高見は緊張して尋ねた。

「大使館？ どちらの？」

「中国でござります」

「先ほど、お車で五合田に向かわれました」 富司は、それが何か、  
と言つ様な顔をした。

「じゃあ、先程の、お客様といつのは・・・」 神田と高見は顔を  
見合させて立ち上がつた。

「さようでござります。中国の新聞社の方々でござります」

「何人ですか？」 高見刑事が聞いた。

「3人様でござります」

「私たちの職員が一人ござ内役として一緒に緒をさせていただいてい  
ますから、全部で4人でござります」 富司は、両手を膝に乗せて答  
えた。

「じゃあ、中国人は3人？」 神田の顔がやや紅潮した。

「さようでござります」 富司もゆっくりと椅子から立ち上がつた。

富司は思いついたように、

「そうだ。その職員に電話をして、鉄の棒を持つて帰るように申  
し伝えましょ」

そう言つて、ふといじゅ懷から携帯電話を取り出した。

「あ、ちょっとお待ち下さい。その新聞社の男達は何か言つてい  
ましたか？」

「いえ。ただ、天氣が心配だとか何とか、と、おっしゃつていら  
つしゃいましたが」 携帯電話を懷に納めながら富司は言つた。

「高見さん、どう思います？」 神田は高見刑事の顔を見た。

「今までの流れから行くと、新聞社じゃないでしよう。それにし

ても速攻だな」高見は腕時計をチラシと見た。

「隙を見てその鉄の棒を奪い取る気ですよ、きっと」神田は床に置いたザックに手をかけて言った。

「どうこうことじでござりこましようか?」富司には事態は飲み込めていない。

「予備の鍵をお貸し願えませんでしょうか?」高見刑事は富司の顔を見つめて言った。

「それはよろしくござりますが・・・」

「職員の方には何もおっしゃらないで下さい。私達もこれから富士山に向かいます」高見刑事はザックを抱え、神田と共に、富司に頭を下げた。

「ところで、先ほど、富司さんは、あの鉄の棒は、御文書と一緒に、と、おっしゃいましたが、その御文書は今は?」社務所から出て裏の駐車場へと歩きながら聞いた。日はもう落ちて、外灯の灯りが境内を照らしていた。

「それは、その鉄の棒が入つておりました箱と一緒に、野中様がご自宅にお持ち帰りになりました。私も聞いた話でござりますので、定かではございませんが、なんでも、その御文書は大半が燃えて灰になつていたらしゅうござります」富司はいくぶん顔を傾け神田の顔を見ながら答えた。

「で?」

「はい。じ自分ではどうしようもないでの、ある人に分析、解読を頼まれたとか聞いております」

「そのある人とは?」高見刑事は手帳を取り出しながらたずねた。  
「いや、これは、定かではございませんので・・・」富司は言葉を濁した。

「何か不都合なことでも？」

「これは、私どもとは関わりのないことでござりますが・・・」

「？」神田と高見は同時に富司の顔を見た。

富司は思い切ったように言った。

「富士文献とこののをござり存知でござりますか？」

「富士文献？何だか聞いたことがあるような、ないような」高見  
刑事はボールペンで手帳をポン、ポン、と軽くたたきながらつぶや  
いた。富司は、それでは、といった風な感じで説明を始めた。

「やよいぢでござりますか。富士文献と申しますのは、富下文献、  
とも言われておりますし、日本の太古の歴史が書かれたました厖大  
な書物でございます」

「あーあ、なんでも、古事記よりも古いとか言われている」高見  
は、おぼろげながらに思ひ出した。

「やよいぢでござります。それは、徐福文献とも言られておりまし  
て、そもそもは、古代文字で木片などに書かれていたのでございま  
すが、それを、徐福さんが漢字に書き直されたと言られております  
タクシーのやつて来る車寄せの方向へ手を軽く伸ばし、神田と高見  
は富司に続いてその方向へ曲がった。

「しかし、それは、伝説の類たぐいでは？」神田は聞きにくそうに富司  
に言った。

「ああ、それは、私には分かりかねますが、徐福さんが古代文字  
から漢字に書き直す、まあ、翻訳する、とでも申しましょうか。そ  
れを代々手伝つていた家系がござりますて・・・」

「それはいつ頃の話なんですか？」神田は背負つたザックのベル  
トに手をやり、グイッ、と搖すつて背負いなおした。

「いろいろと説は「ござりますが、今から、少なくとも、2000年以上も前のことだといわれております」

「2000年！？」神田は、「そんなことはありえないな」と、思つた。

「それで、その・・・HーT・・・

富司は高見刑事の言葉を次いで、

「徐福さん。その徐福さんの手伝いをした家系が代々この富士の裾野におられまして、」

「今でも！？」高見刑事は驚いて富司の顔を見た。

「はい」富司は自信ありげに答えた。

「今でもですか！？」神田も幾分念を押すように富司に尋ねた。

「はい。富下家の遠縁に当たられます、今は、富士吉田の小さな神社をお守りになつていらつしるお宅がございまして、そちらなら、その御文書の解読ができるのではと、野中様はお思いになられたのでございましょうね」

「で、結局、その御文書には何が書かれていたのですか？」高見

刑事は車のライトが近づいてくるのに気がついた。

「あ、タクシーがまいりました」

高見刑事は、タクシーから警察庁の外事課の鈴木刑事に連絡を取つた。鈴木刑事によると、東京駅までは確かに一緒だつたということだつた。

「すると、それからすぐに、やつこさんたち、支度を整えてこつちに向かつたということか。よほどあせつてゐるな、これは」

「ですね。だから、今回は警察庁抜きで動き始めたんでしょう」神田はすれ違う車のライトをぼんやりと眺めながら、頭の中で今回の一件をもう一度整理した。

タクシーは市内を抜け、やがて富士山スカイラインに入った。

「どうも、話が見えてきませんね」神田は、腕を組んで前を見たまま言った。

「どうしてこの一件に中国大使館が絡んでくるんだか？」高見刑事も自分自身に問いかけるようにつぶやいた。

「高見さん。これは？」神田はそう言って、右手の人差し指と親指を立てた。

「ここに」高見刑事は胸のふくらみに手をやつた。

「まさかね。まさか、これの出番はないでしょう…？」高見は、そのふくらみを軽く一回叩いた。

「と思いますが。念には念を、ですよ。今回の件は、どこに話が転がつて行くか分かりませんからね」

日が落ちて、あたりはすっかり闇に包まれている。時折り対向車とすれ違うが、タクシーの運転手の話によると、六合田までは、観光客でも登れるらしく、まだ山小屋も営業しているらしい。神田たちは、新五合目の「表富士宮五合目レストハウス」に宿泊予約を入れていたが、休憩だけして今夜中に出発するつもりでいた。富司から、浅間大社の職員は六合田の山小屋に宿泊して、夜中2時頃に出発の予定だと聞いたからだ。

「表富士宮五合目レストハウス」には一階の売店の奥に宿泊者のための部屋がある。<sup>かみた</sup>神田たちは荷物を置いて一階の食堂へ向かった。  
「腹が減つては戦は出来ませんからね。<sup>いくせ</sup>それに、体を高度順応させる必要がありますし。高山病をなめたら、痛い目にあいますからね」高見刑事はそう言って蕎麦をすすつた。

「連中より先にあれを手に入れて、そもそもあれが何なのかを解明しないことには……」神田はそう言って、窓の外を流れるガスに田をやつた。

部屋で2時間ほど横になつて、夜11時過ぎ神田と高見はレストハウスを出発した。合羽を着てガスに包まれている外に出、頂上方向を眺めたが、湿気を含んだガスに阻まれて何も見えない。

「あつちもこつちも見えないものばかりだな」高見刑事はストックのバンドに手を通しながら小さく言つた。懐中電灯で足元を照らしながら、一步を踏み出した。六合田までは歩き易い道が続く。じきに合羽の表面は濡れて水滴がつき始めた。六合田の手前で、懐中電灯の明かりをやや絞り気味にして、六合田山小屋「雲海荘」の前を通り過ぎ、左手に曲がり、本格的な登山道に入った。フードを被つた神田の耳には、足を踏み出すたびに「ハツ、ハツ」という自分の息と「ジャリツ、ジャリツ」という足音だけが聞こえてくる。

六合田を過ぎたあたりからガスが薄くなり、神田と高見刑事は合羽を脱いでザックのバンドにくくりつけた。

「これどうですか?」高見刑事はチョコレートの箱を開けて神田のほうに差し出した。

「あ、頂きます」神田は手刀を切るしぐさをして一粒つまんだ。

「あれ? ダイエットは?」そう言つて高見刑事は神田をからかった。

「ははっ、登つて下りたらカロリーは十分消費してるでしょうから」そう言い、

「あとどれくらいですかね?」とザックを背負いながら高見刑事に聞いた。

「この調子で行くと夜明け前じゃないですかね」高見刑事は帽子

を取つて、上方に見え隠れする赤茶色の砂礫を眺めた。

神田と高見刑事は、最後の鳥居の手前で再び腰を下ろした。ガスは薄くなつたものの、なかなか晴れない。

「高見さん、頭、大丈夫ですか？」神田はスポーツドリンクを一口飲んで聞いた。高見刑事もドリンクのキャップを外しながら、

「私は大丈夫ですよ。神田さんは？」と神田の顔を見た。

「最近の寝不足がたたつて、がんがんします」神田は目を閉じて、頭をゆつくり回しながら言つた。

「もう、ヘッドライトはいいでしょ。頭からベルトを外すとだいぶ楽ですよ」高見刑事は自分もヘッドライトを外しながらそう言った。

「そうですね」そう言つて、ヘッドライトを外してザックに納め、大きく深呼吸を何度もした。しかし、空を見上げると、まだ、クラッと貧血になつたような感じになる。

「さあ、もうじきです。でも、ここからが長いんですけどね」そう言つて頂上の方向を見た。

「あ」高見刑事は一方向を凝視している。

「どうしました？」

「人影が。今一瞬ガスの切れ目に人影が見えました」その方向を見据えたまま答えた。

「ひよつとして、連中ですかね？」神田も、高見刑事の視線の先を見つめたが、再び薄くガスがかかつてしまつた。

「でも、まだ出発してないはずでしょ？」神田は、靴ひもを締めなおし、ザックを背負つた。

「いや、いや、それは当てにできませんよ。ともかく、急ぎましょ

う

ふたりはピッヂを上げて歩き始めた。

頂上の山小屋が見えてきた。幸いなことに、「このガスで気付かれていないはずだ」神田と高見刑事はそう思いながら頂上直下の岩陰に身を隠した。ふたりはここでザックをおろし、身軽になつた。

「高見さん、どうしますか？もし、連中が大使館員なら、身分を偽わつてまであの鉄の棒を盗もうとしてることになりますね？」岩に背を押し当てて小さな声で言った。

「新聞社の人間なら、何も問題はないわけですがね」高見刑事も岩に背をつけて神田に並んで座つている。

「こんにちはー、つて出て行きますか？大使館員なら何か行動を起こすでしょーし、新聞記者なら、こんにちは、ですむでしょーし」神田は、両手の指と指を胸の前で組み合わせて手袋をギュッ、と締めた。

「まず、顔を確認しましょー」高見刑事は岩陰から少し顔を覗かせ奥宮入り口付近に固まっている人影を見た。

「間違いですね。大使館員です。でも、三人だけですね。神社の職員はどうしたんでしょうね？」神田のほうを振り返つて言った。今度は神田が、少し伸び上がって様子をつかがつた。

「あれつ、なんだか、慌てますよ。どうしたんだろー？」

三人は、ますます慌てた様子で、鳥居と奥宮の間に散らばつて周辺のあちらこちらに手をやつしている。

「どうしたんでしょう？」神田と高見刑事は再び岩陰に身を隠した。

男達の声が大きくなつて、一か所に固まつてゐるようだ。**神田**と**高見刑事**はゆつくりと覗いた。男達は奥宮の屋根の上を指差し、口々に何やら叫んでゐる。ガスの流れが早くなつてきた。屋根の上に何か黒いマットのようなものが置いてあるのが見えた。男達は、そのマットに向かつて、必死に何か叫んでゐる。風で、サーッとガスが流れ去つた。黒光りしているマットは、奥宮の屋根の上で、ムクムクと動き始め、風にあおられて大きく広がつた。

「あつ！！」

「どうしました？」

「あいつだ」

「えつ、富島の大男？」

「そうです。奴だ」

マットだと思ったのは黒い男の体であった。その男は、**富士宮浅間大社奥宮**の屋根の上に大きく立ち上がつた。富島の時と同じく裸だ。背中にはザックを背負つてゐる。中国大使館の男達は、男の巨大さに圧倒されたかのように、一、二歩あとずさりした。男は鉄の棒を握り締めた右手をゆつくりと上げ、口にくわえた。かと思つた瞬間、ローン、と郵便局の屋根に飛び移り、そこから下に飛び降りて、剣が峰方向に走つた。

神田と高見の視界からは山小屋の陰になつて大男の姿はあつとう間に見えなくなつた。大使館員たちは、ザックを放り出して、後を追いかけ始めた。

「まるで猿が天狗だな」高見刑事はつぶやいた。

その時、

「パーン！」という乾いた音が鳴り響いた。

「トカレフだ」高見刑事は目を光らせ、小さく言った。

「あの銃声はトカレフのものだ」

男達の足は速かった。とても普通の大使館員とは思えない。しかし、大男はもつと速い。見る見る距離をあけている。神田と高見刑事も必死で後を追いかけた。神田は、ガスの合間から見える富士火山をチラと見やり、「まるで地獄の釜だ」と思いながら前方200mほど先の大使館員達を目で捉えた。そして、さらに先を行く大男が「馬の背」と呼ばれる急勾配の登山道を苦もなく駆け上がっているのを見て、改めてこの男の尋常でない運動能力に驚嘆した。

大使館員たちもようやく「馬の背」の取つ掛かりに着き、登り始めたが、ザラ、ザラと崩れる火山岩の砂礫さざれきに足を滑らせている様子が見える。再び、「パーン」と音がした。

「高見さん、ハア、ハア、大男はどこへ行くつもりでしよう? ハア、ハア……」息を継ぎながら神田は高見に聞いた。高見刑事も「ハア、ハア、あの先は剣ヶ峰ですけど、そこから先は、ハア、ハア、断崖絶壁ですよ。ハア、ハア……」

再びガスがかかってきた。時折り、空全体が、パパツ、と光る。

大男は、「馬の背」を登り切り、階段を駆け上がって、気象観測所の建物の上に上がった。大使館員達もようやく「馬の背」を登り切つて、気象観測所への階段に足を掛けた。大男はまるで大使館員たちを待ち受けていたかのようすに観測所の屋根の上に立っている。宮島で力クと名乗つた男が右目だけを異様に大きく見開いて、右手に握つたトカレフを大男に向けて何か言つた。大男は鉄の巻物をくわえた口の端を上げて嗤わらつた。もう一度力クが何かを言つて左手でトカレフを支え、腕に力が入つた時、空が再び、ピカツ、と光つた。

大男は空に向かつて飛び降りた。

「パーン」「パーン」一発の銃声が響いた。

男達は、中国語特有の甲高い声で何やらわめきながら観測所の屋根に上がり、大男が飛び降りた方向を見た。

大男は雲に向かつて落ちている。

神田たちには剣が峰で何が起こっているのか分からなかつた。男達の喚き声と銃声で、ただ事ではないことが起こつてゐる、それしか分からなかつた。「馬の背」をようやく登り終え、お鉢巡りと呼ばれる火口周遊ルート方向へ少し下つたところに身を隠した。ここならガスで見えないはずだ。男達は、何やら叫びながら階段を駆け下り、ザーッ、ザーッと音を立てて「馬の背」を転がるように下つていつた。

神田と高見刑事は「馬の背」を登りきつたところまで戻つて観測所の建物のある剣が峰頂上へ上がろうとした。その時、観測所の向こう側のガスがサーと晴れて、巨大な鳥が風に乗つて舞い上がって來た。それは、ゆつくりと大きく旋回し、雲に映つたその影はまるで巨大な鳥のようであった。

「カメラ！！」高見刑事は神田に向かつて叫んだ。神田はポケットから携帯電話を取り出し、「パシャツ、パシャツ、パシャツ」レンズを大男に向けて3回シャッターを切つた。

大男は、巧みな操作で風に乗り、駿河湾方向へ飛んでいた。その姿も写真に撮り続けた。神田は、無言で、男の姿が黒い点になるまで見続けていた。高見刑事は警察庁の外事課の鈴木刑事に電話をかけ、状況を報告している。

「外事課はなんて言つてました？」

「中国大使館に、今回の件の報告を求める、それだけです」携帯

をパチッと折畳みながらがらそつ言つた。

「あの大男のことは？」

「山頂から民間人がパラグライダーで飛び降りたぐらいではへりは出せない、とさ」ポケットに携帯を納めチヨコレートの箱を取り出した。

「ま、そうでしょうね」神田は、高見刑事が差し出した箱からチヨコレートを一粒つまんで口に放り込んだ。

「猿から鳥に変身つてわけか・・・」高見刑事は大男の消えた方向を見つめながらつぶやいた。

神田かみたと高見刑事は、3時間かけて5合目まで下りた。山頂では晴れ間も見えていたが、5合目は依然ガスに覆われて、山頂の姿は見えない。観光客を乗せて来ていたタクシーに乗り、富士山本宮浅間大社たいしゃまで戻った。

高見刑事は、拳銃発射の件や大男が剣が峰から飛び立つたことは伏せて、何者かが、中国の新聞社の人間が着く前に、奥宮の扉を壊して鉄の棒を盗み出し逃走したことだけを富司に話し、被害届を出すことを勧めた。

「私どもの職員も五合目で新聞社の方々からそのように聞き、連絡をよこしましたが、本人は、体調が優れないとのことなので先ほど帰宅させました。今、ちょうど、状況確認のために職員を奥宮様に向かわせたところでござります。何とも恐れ多いことでござります。しかし、おふたりともじつは無事で何よりございました」富司は、ふたりにお茶を勧めた。

「職員からの報告によりますと、昨夜、山小屋で、新聞社の方々と食事を済ませ、床に就きましたら、ぐつすり眠つてしまい、途中、新聞社の方々から早めに出発したいと、お申し出があつたそうですが、なんとも体が動かないでの、鍵だけお渡しして、本人は新聞社の方々が下山されるまで山小屋で休んでいた、と、まあ、こういうことで「ございました。いやはや、新聞社の方々には、申し訳ないことをいたしました」そういうながら、恐縮して肩をすぼめた。

「！」神田と高見刑事はお互の目を会わせた。

「それに、神職にあるものが、軽々しく鍵を渡すなどとは・・・。何とも申しようがなく・・・」富司は恥ずかしさと無念で膝の上でハンカチを握った拳を握り締め、

「ただ、ただ、ご本殿に無礼なことが無かつたことをお祈りするばかりでござります」そう言つて頭を下げた。

「新聞社の方々は、帰国の準備があるので、と、五合田でタクシーに乗られて新富士宮駅に向かわれたようではござります」

「そうですか」そう言つて、神田と高見刑事は顔を見合せた。

「ところで、昨夜の話の続きですが」高見刑事はお茶を一口すすり富司に聞いた。

「話の続き、と申しますと？」

「その、御文書には何が書かれていたのか、といつことですが」高見刑事はポケットから手帳を取り出した。

「あー、それは私も直接見たり、聞いたりしたことではございませんで、おどき話のようなことが書かれていた、ということだけしか」富司はハンカチを膝の上に置き、湯飲みを両手で持つた。

「おどき話？」神田は湯飲みをテーブルに戻した。

「内容についてどなたかご存知の方はいらっしゃいませんでしょうか？」高見刑事は続けて尋ねた。

「それはどうでございましたか？野中様はござ長寿で、確か、昭

和の30年（1985年）、89歳で天寿を全うされたとお聞きしていますが、生前、その内容については一言も触れていらっしゃいませんし、また、解読した家系の方々も口外していらっしゃらないところです。それに、その鉄の箱と御文書は既にないと思いますが」と、困ったように二人を交互に見つめた。

「既にない?と言いますと?」かみた神田と高見刑事は、富司の顔を見た。

「はい。その鉄の箱と御文書はその解読をした神社様から野中様のお手元に返され、しばらくは野中様がご自宅で保管され、その後、不幸なことに、戦時の空襲で、写しや、資料は焼けてしまったと聞いております」

「はー、そうですか」高見刑事は、何度もうなづきながら背もたれに背中を倒した。

かみた神田は、いくぶんかの期待を持つて、

「野中さんのご家族の方はその鉄の箱の件は?」と尋ねたが、「内容につきましては、まったくご存じないと思います。何しろ、野中様ご自身、その件に関しましては、その後一切口にされなかつたよついでござりますから」と、富司も申し訳なさそうに答えた。

神田はさりに、元

「失礼ながら、こちらの先代、あるいは先々代の富司さんは、御文書の内容をご存知では?」と、尋ねたが、

「存じてなかつたと思います。仮に存じ上げておりましても、その様なこと、軽々しく口にすべきものではございません」富司は幾分顔を赤らめて言葉を強めた。神田はやや狼狽しながら、再び富司に尋ねた。

「では、その鉄の箱に入っていた御文書の分析解読をされた神社さんにはその御文書の控えとか、書き写したものなどは残つていないでしょつか？」

「どうでござつましょつか、終戦後、進駐軍は多くの神社の招魂碑などの施設や書き物を破壊、没収しましたが、その時に、そちらの神社様もかなり大掛かりな搜索を受けたと聞いていますので、富司は少し腹立たしそうに言つた。

「大掛かりな？」

「はい。その神社様は、こう言つては何でござりますけれども、非常に小さな神社様でして、そこに大勢の進駐軍が押しかけたものですから」近所の方も驚かれたと聞いています

「ほー」高見刑事は興味深げにその話を聞いていた。

「それで、その神社さんはどちらでしょつか？これから伺えればと思いますが」神田は体を前に傾けながら尋ねた。

「はい。それは富士吉田の八頭神社様でござります」富司は両手を膝にそろえて言つた。

「その八頭神社さんの」住所は？」高見刑事は手帳とボールペン持つたまま、体を前に倒し尋ねた。

「しばらくお待ちくださいませ」そう言つと部屋を出て行つた。

「神職といつものいいろいろとしきたりがあつて難しいですね」

高見刑事は顔を伏せたまま小声で言つた。

しばらくして、富司がメモを手に戻つてきた。

「こちらが」住所でございます。少し分かりにくいと思いますので、このお近くでどなたかにお尋ねくださいませ」富司は、メモ用紙を高見刑事に渡しながら言つた。

「ありがとうございます。さっそく、お伺してみます。それと、これから、何かございましたら、ここに連絡をお願いします」高見刑事はそう言って胸のポケットから名刺を出し、富司に手渡した。

神田と高見刑事は新富士宮駅前でレンタカーを借り、東名高速を使って富士吉田の、富司から教えられた住所に向かった。何度も迷つても辿り着けない。

「確かにこの辺りのはずですけどね」

「あ、あの人聞いて見ましょう」高見刑事は助手席の窓を開けた。

「恐れ入りますが、この辺りに八頭神社さんがあると聞いて來たんですけど、ご存知ありませんか？」

「あーあ、八頭社さんならそこを曲がった突き当りですよ。こなもりとした森が見えますから、その中です」年配の買い物帰りといった風の女性が指を指しながら教えてくれた。

「ありがとうございました」

高見刑事は女性に頭を下げ、パワーウィンドウのスイッチをパチッと押すと、神田を見て

「どうやら地元では八頭社さんと呼ばれているみたいですね」と

言った。

「確かに、これでは分からぬですね」神田はハンドルを切りながら前方の背の高い木が集まっている一画を見た。道端に車を停めて石の階段を10段ほど登ると、椎や櫻の木に覆われて薄暗い道の奥に小さな神社が見えた。小さいのは社殿だけではない、鳥居も2m足らずの高さしかないし、狛犬もまるでミニチュアといった感じで、高さは30cm位しかない。一对の狛犬は腰の高さほどの石の台座の上に座っている。しかも、鳥居の外にあるのが普通だが、この狛犬は鳥居の内側にある。

「神社というより祠といった方がいいですね」神田は高見刑事を

振り返つて言った。右隣に小さな民家がある。

「「めんください」

高見刑事は、擦りガラスのはめ込まれた木の引き違戸を叩いたが返事はない。特に表札らしいものも出ていないが、社務所として使われている気配はある。

「留守みたいですね」高見刑事は携帯電話を取り出して、ふじのみや富士宮浅間大社の富司に電話をかけ、連絡先を尋ねた。

「あいにくとそれは分かりかねますが、心当たりにお聞きしてみましよう。分かりましたら、『連絡差し上げます』と『富司の返事』であつた。

「いろいろとご面倒をおかけしまして申し訳ございませんが、よろしくお願ひします」

神田は、高見刑事が電話をしている間に携帯で神社の写真を撮つていた。御祭神はせんげんだいはさつ浅間大菩薩と木花之佐久夜毘売命とあつた。

「今回は引き上げですね」高見刑事は右手で左肩を揉みながらそう言い、車の方へ向かって歩いて行つた。神田も何度も振り返つて神社を見ながら後に続いた。

2005年（平成17年）9月 富島

富士山から帰った翌日の午後高見刑事は富島観光推進協会の事務所に現れた。

「どうですか、神田さん。よくお休みになれましたか？」高見刑事はいくぶん眠そうな顔で椅子に腰掛けた。

「もう、グッスリです。それに、もう、出勤前には山を走つきました」神田はいくぶん右足を引きずりながら「コーヒーサーバーのところへ行つた。

「ほう、それは大したもんです。まだ、若いですね」高見刑事も足をさすりながら神田を眺めている。

「当たり前ですよ」いく分自嘲氣味に言つて顔を引き締め「ところで、何か進展でも」カップにコーヒーを注ぎながら尋ねた。

「たいしたことじやありませんが。例の中国大使館の三人組、今朝、成田から帰国したそうです」白髪頭に手をやつた。

「えつ、そんな簡単に出国できるんですか？」コーヒーをテーブルの上において、高見刑事のほうに押し出した。

「ま、そんなもんですよ」高見刑事は投げやりにそう言つと「今田は、ちょっと、神田さんと推理じつじをしようと思いましてね」と、話を変えた。

「そうですね。ここまでの話をまとめておきましょ」神田もそれを考えていたところだった。

「えーと、まず、ここまで事実から行きましょつか」高見刑事は手帳とボールペンをポケットから取り出し、話し始めた。

「富島の鉄の棒は枕崎台風の時の土砂崩れで山頂から流されてきたという可能性もありますよね。ということは、鉄の棒は富島の山頂、そして、もうひとつは富士山頂にあった、ということになりますね」高見刑事はさらに、

「そして、今は、その二つとも何者か分からぬ大男の手元にある」と、大きく息を吐いた。

「それを何故だか中国も狙っている」神田は付け加えた。

「富島と富士山。この共通項は？」高見刑事はそう言つて神田の顔を見た。

「両方とも信仰の山ですよね」神田は腕組みをして答えた。

「富島にはもともと社殿はなく、島そのものが信仰の対象となつて、対岸から拝まれていましたし、富士山も山そのものが信仰の対象だつたらしいですからね。今の富士山本宮浅間大社に遷座される前の神社は山宮浅間神社として現存していますし」神田はこれまでに調べたことも高見刑事に話した。

「来年がその遷座されて1200年に当たる年だと言われていましたね」高見刑事は、富士山本宮浅間大社の社務所に貼つてあったポスターを思い出した。

「そうですね。そして、単純に言って、富島は海の神、富士山は山の神」

「御祭神は市杵島姫をはじめとする宗像三神の女性の神様、そして富士山も木花咲耶姫という女神。でしょ？」高見刑事は確認するように神田に聞いた。

「それに、木花咲耶姫は富士山の噴火を鎮めるために祀られた水の神でありますよ」神田は付け加えた。

「へー」高見刑事は、感心したように何度もうなづいた。

「昔、富士山が大噴火をしたため、周辺住民の生活が疲弊したのを第11代垂仁天皇が心配して、浅間大神あさまのおおかみを祀つたところ、噴火が静まり、住民は平穏な日々が送れるようになつたといつことです」

「その浅間大神とは？」

「木花咲耶姫ひのはなさくやひめと同一とみられているようですね」

「両方とも水の神様か」高見刑事は両手を頭の後ろで組んだ。

その時、宝物館の館長が入ってきた。

「ああ、刑事さんもご一緒にでしたか。ちょうどよかつた」 そういつて宝物館の館長は空いている事務椅子を引き寄せ、それに腰掛けた。

「ありましたよ」 そう言つて封筒からファイルを取り出した。「何ですか？」 神田は、カップにコーヒーを注ぎながら聞いた。

「例の鉄の棒のエックス線写真です」 ファイルに挟まれたやや古びた写真を取り出した。

「どこにそんなものが？」 高見刑事は館長の手元を覗き込んだ。

「発見者の自宅にですよ。あれはまだ、正式には調査されていませんのですが、当時の発見者が、戦後何年かして、あの棒が何なのか知りたくて、知り合いの医者に検査を頼んだらしいんですよ。そのときの写真です」 そう言つて、テーブルの上のコーヒーカップを端に寄せ、

「鉄の棒には間違いないようですが、中に、ほら、ここに、矢のような影が見えるでしょ？」

「矢？弓矢の矢？ですか？」

「そんな風に見えますね。その矢のようなものを鉄で封じ込めて、さらに表面を鉄の板で巻いてある、こういうことのようですね。た

だの鉄の棒じゃなかつたんですね」

「年代とか、表面の文字だか模様だかの意味は？」

「分かりません。あるのは、この写真だけですから」

「矢を鉄で固めて棒状にした？何のために？」

神田<sup>かみた</sup>、高見刑事<sup>たかみけいじ</sup>、宝物館館長<sup>ほうもつかんかん</sup>、三人とも腕組みをして押し黙つた。

神田は、テーブルの上の写真をもう一度手に取り、

「矢というのはこんなになつてゐるんですか？」館長に尋ねた。

「はい、正確に言つとこれは矢尻ですね。これが矢の柄の部分に入つていて、たとえば身体に突き刺さつた矢を引き抜いても、先のこの部分、矢尻は固定されていないので身体に残る仕組みになつてゐるんですよ」自分の身体に、高見刑事の手から取つたボールペンを当て、身振りを交えて説明を始めた。

「この矢尻の形は、おそらく戦闘用の柳葉<sup>やなぎば</sup>と言われるものでしょう」

「いつごろのものでしょうか？」高見刑事は神田から写真とボールペンを受け取り、写真を見ながら聞いた。

「鉄を分析すれば分かるんでしょうが、これだけだとなんとも。平安以降だとは思いますが」館長はコーヒーカップを手にして答えた。

「平安。源平か」神田は体を起こして高見刑事の方を向いた。

「さつきの続きですが、平氏の富島、源氏の富士山とも言えますね。頼朝は、鎌倉から富士山を見つめていたでしきうから。富士の裾野で狩を楽しんでいたし、当時は今と違つて気温は何度か低かつたでしきうから富士山も雪に覆われてゐる期間も長く、雪の量も多かつたでしきうからね。頼朝の頭の中には白く輝く富士山が印象深

く残っていたと思いますよ。紅葉を白く覆つてゆく雪に血りの思いを重ねたという可能性はあるんじゃないでしょうか？」

「朱の大鳥居と雪を被つた富士山。平氏の赤に対抗して源氏は白を御旗の色にしたのかな？」高見刑事は腕を組みなおした。

「何の話ですか？」ローハーを一口のみ高見刑事の顔を見た。

高見刑事は、捜査に協力を求める必要もあると考えて、富士山での出来事を宝物館館長に話した。

「なるほど、富島と富士山の共通項ねえ。確かに、西、東、赤、白、女神、平清盛、源頼朝、こいまでは話に繋がりがあるようには思えますが、それらと鉄の棒がどうして富島の弥山と富士山頂につたのか、それと、中国との関係は？」館長は大きな手で高見刑事を見つめた。

「そこになると皆田謎ですね。さらに、あの大男が絡んでますし。あつ、ところで、神田さん、写真、プリントアウトしてもらつてますか？」

「ああ、はい」神田は事務服のポケットから写真を数枚取り出し、テーブルの上に一枚ずつ並べていった。

「これです。画素が荒くて、おまけに、ブレてますからはつきりとは写つていませんでした」

「ちょっと拝見。何ですか？このパラグライダーは？真つ黒ではつきり分かりませんが、登山者ですか？」館長はそのうちの一枚を手に取つた。

「いや、あの、どうやらこの男が宝物館の鉄の棒を奪つた奴だと思われますが」高見刑事は館長から写真を受け取り、それを見つめながら言った。

「しかし、真つ黒であるで鳥が飛んでいるようですね」館長は、

その写真を高見刑事に渡しながらつぶやいた。

「でも、神田さんかみたさんが奴と会つた時は黒くなかったんじよ？」高見刑事は神田に尋ねた。

「ええ、たぶん黒く塗つていたのが、あの雨で落ちたんじやないかと……」

「なるほど。でも、体を黒く塗る必要がどこにあるんですか？」

高見刑事は写真から神田へ目を移して聞いた。

「闇夜の鳥つて言つじやないです。目立たなくするためでしょう」神田は写真に目を落としながらコーヒーをすすつた。

「それなら、裸になる必要はないんじやないですか？」高見刑事はさりに疑問を口に出した。

「あの……」館長が口を挟んだ。

「はい？」高見刑事は館長を見た。

「富島の神使かみしは鳥からすですよ」

「神使しんしといつと？」高見刑事は館長の顔を見つめた。

「神様のお使いですよ。春日大社の鹿とか、八幡神社の鳩すずめとか」神田は、そう言いながら、富士山本宮浅間大社の神使は猿だということを思い出した。「鳥男からすおとと鉄の棒、富島、富士山、どういう繋がりがあるのだろうか？」そう思いながら、神田は目を閉じて高見刑事と館長の会話を聞いていた。

「富島は、鹿でしょ？」高見刑事は驚いたように聞いた。

「一般には鹿といつことになつていますが、富島の言い伝えでは、神社の創建には鳥かみすが非常に大きな役割を担つてているんですよ」神田はテーブルの上の写真を整理しながら言った。

「といいますと」高見刑事は説明を求めるように館長を見た。館

長は、大きな目を見開いて説明を始めた。

「富島に神社が最初に創建されたのは推古元年、593年のことですが、そもそも富島に神社を創建するきっかけになつたのは、この地方の豪族、佐伯氏いちはきししまひめのみことが市杵島姫命いちきしまひめのみことから富島に神殿しんてんを作るようご神託じんとくを受けられ、そのことを推古天皇様に奏上ささげされたのがはじまりです」そう言つて、コーヒーを手に取つた。

「天皇様に富島に神殿を創建させてねがひ頂きたい旨むを奏上ささげしている際に、市杵島姫命のご神託じんとくどおりに鳥からすが榦さかきをくわえて富廷さかさに現れ、天皇様も痛く感動され、神殿しんてんを作ることを許可された、ということです」

「へー」高見刑事もコーヒーを手に伸ばした。

「そればかりでなく、神殿を造営する場所も、鳥からすの導きによつて今いまの厳島神社のある場所に決められたのです」館長は、ここまで言つて、コーヒーを一口飲んだ。

「富島では、何百年もの昔から今日まで、その故事に倣かいお鳥からす喰く式じきという行事が行われているんですよ」神田かみたは館長の説明に付け加えた。さらに、

「当とう時じ、神殿の造営場所をどこにするか決める際に島を船で廻つたのですが、この行事は、その時と同じように島を廻るのです。そして、途中で、弥山みせんから飛んでくる鳥からすに団子だんこを食べてもらうのです。今でも鳥は、団子を食べに飛んできます」

「へー」高見刑事には初めて聞くことばかりであった。

「言い伝えでは、佐伯氏が神社の場所を決める際にも、鳥からすが弥山みせん山頂から飛んで来て団子を食べ、そのまま船を今いまの厳島神社の場所へ案内したということです」

「厳島神社の入り口、東回廊の手前の灯籠には、その言い伝えに倣かつて鳥からすがとまっていますよ。このことに気が付かれる方は少な

いのですがね

「弥山から鳥が飛び立つ、・・・」

神田は、あの大男は、富士山の剣が峰から飛び立つたのと同じよう  
に弥山山頂からもパラグライダーで飛び立つことは間違いない  
だろうと思つた。

「山頂のレストハウスの主<sup>あいじ</sup>が見た時は男は大きなザックを背負つ  
ていた。それが、俺が会つたときには何も持つていなかつた。台風  
の日の前日、弥山山頂の市場のどこかにザックを隠して、鉄の棒を  
奪つた日か、その翌日には山頂から脱出したのだろう。しかし、そ  
の後はどうやって富士山まで行つたのか?誰かの協力なくしてはと  
ても出来そうにないが・・・」そんなことを考えていた時、高見刑  
事は立ち上がつた。内ポケットから携帯電話を取り出し、窓際に移  
動して話し始めた。

「はい、高見です。・・・ああ、これはどうも、昨日はお世話に  
なりました。・・・はい、・・・あ、そうですか。それは助かりま  
す。・・・では、近日中に、またそちらへ伺い、・・・え?・・・  
こちらへですか?・・・それはまた、・・・で、お名前は?・・・  
どうやら富士山本富浅間大社の富司からのようであつた。

「じゃあ、私は、これで。写真はお預けしておきますから」 そう  
言つて館長は立ち上がり、ドアの方へ向かつた。

「ありがとうございました。いろいろ助かりました」 神田は椅子  
から立ち上がり、頭を下げた。高見刑事も電話で話しながら、館長  
に頭を下げた。

「富司さんからですか?」

「ええ、あの、八頭神社の富司さんと連絡が取れたようですが、高見刑事は携帯電話を閉じてポケットに納めた。

「ああ、それは良かった。で、どちらに？」

「お住まいは、あの神社の近くのマンションになります。富司さんはそこから神社の社務所に通つておられるとか」

「じゃあ、近々またあちらに・・・」

「いや、それが、こちらに来ていただけのようです。旅行のついでだからということらしいです」

「それは、好都合ですね。いつ？」

「明日日の午後2時頃、この事務所を訪ねられるとかで、もう、あちらは発たれたようです。私も時間に合わせてこちらに伺います

「ところで、神田さん、ダイエット中の神田さんにピッタリの料理屋さんがあるんですねが、今晚どうですか？」そう言いながら、ローハーカップを持った手を軽く上へ上げた。

「いいですね。どこにあるんですか？」

「廿日市<sup>はつかいち</sup>市の駅前通りです。広電の電車で行けばすぐですから。私は時間まで島内を観光しています。ちょっと、調べたいこともありますし。ローハー<sup>ローハー</sup>駄走様でした」高見刑事はそう言って立ち上がつた。

「じゃあ、5時過ぎに、フェリー乗り場<sup>ひりじょう</sup>といつことで、神田も立ち上がり、右手を上げた。

その日の夜7時前、神田と高見は広電廿日市で下車し、商店街をJR廿日市駅方向へ歩いていた。

「学生時代とくらべると、この通りも何だか寂しくなりましたね」神田は、時間もさほど遅くはないのに、すでに人通りの少なくなつ

た商店街をきょりきょりと見ながら歩いた。店の様子も随分変わっている。

「学生時代って言つて、大学？」高見刑事は神田の方を振り向いて聞いた

「いえ、高校時代です」神田は商店の看板を見ながら返事をした。  
「じゃあ、神田さんは生まれも育ちも広島ですか？」高見刑事は歩道脇にある石の階段をいくぶん足を引きずつて下りていった。

「そうです。高校も地元ですし、大学も広島ですから。大学を卒業して今の富島観光推進協会に勤めましたからね」神田も高見刑事の後に続いた。

薄暗い小路の奥に小さな、飲み屋風の入り口が見える。濃い弁柄色に塗られた引き戸は腰から上には障子紙が貼つてあり、縄のれんを通して電球色の灯りがもれている。軒下の赤提灯には、くずした平仮名で「おとみ」と書いてあつた。

「ここにはよく？」

「いや、年に一回くらいですかね」そう言つて、「ドロドロ」と引き戸を開け、高見刑事は入つて行つた。

神田も後ろに続き、後ろ手で戸を閉めた。重そうに見えた戸もそれほどでもなく、「ドロドロ、トンツ、と閉まつた。

店内はやや薄暗く、突き当たりのカウンターは6席くらいで、若い男性客が端で日本酒を飲んでいる。三和土の土間には一畳ほどの大きさの木のテーブルが2枚置かれ、木の丸椅子が、それぞれ5、6脚その周りに置いてある。左奥には畳の小部屋もある。その小部屋にも一畳くらいの大きさのテーブルが置いてあり、サラリーマン風の中年の男性客が三人、何やら小声で話しながら食事をしていた。

カウンターの中の壁には、いつこつ場にはそぐわない神棚が祀つてある。

「かみた神田さん、いわちく」高見刑事は神田を手招きしてカウンター席へ呼んだ。

店主が手ぬぐいの鉢巻を取り、

「いりや、どうも」と、挨拶にやつて来て、深々と頭を下げた。

「やあ、久しぶりだね。その後どうだい?」高見刑事は右手を軽く上げて椅子に腰掛けた。

「まあ、ほちほちでいわんすよ」店主は鉢巻をはげた頭に閉めなおした。やや長めの白髪が後頭部で垂れた独特の髪形をしている。見ようによつては注連縄にぶら下がる紙垂じめなわのよつにも見える。60を少しうたぐらこであらつか。

「しかし、お久しぶりでいわんすね。一年振りくらこでいわんじょうか? 田那もお変わりなく?」男はいくぶん前かがみになり尋ねた。

「いざんす? ・・・」神田はチラシと高見の顔を見たが、高見は、「ああ、ありがとう。何とかね」と、神田の視線は無視した。

「そいつは良いわんした」

「おい、おとみ、高見の田那がお見えになつたぞ」暖簾のれんの奥へ声をかけた。

「まあ、まあ、これは高見さん」暖簾をくぐつて品のよわそつな女が前掛けで手を拭き拭き出でた。

「奥さんもお変わりなく」

「お蔭様で、貧乏暇なしです」手ぬぐいで神田と高見刑事の前のカウンターを拭きながら答えた。

「それが一番だよ」

「ところで、今日は何か?」男は、女将から受け取つたオシボリ

をカウンターに置きながら不安そうに聞いた。

「いや、いや、ちょっと鉄さんの顔が見たくなつてね」

「へへ、じりや、面田ねえ」そつまつと、安心したかのように右手を頭にやり、軽く頭を下げた。

「で、じからともやつぱり」と高見刑事を見たまま聞いた。

「いやいや、じからはちょっとした知り合いで」高見刑事は大きに手を顔の前で振りながら答えた。

「神田といいます」神田はオシボリで手拭きながら頭を下げた。

「へへ、じりや」「丁寧に、山田鉄男と申しやす」男は恐縮したように深々と頭を下げた。

「あっしゃ、また、じからさんも高見さんと」同業かと」高見刑事のほうへ向き直つて言った。

「そんな風に見えますか?」神田は笑いながら言った。

「へい、その拳や肩の張り具合は素人さんには見えやせんぜ」山田と名乗った板前は神田の体をしげしげと見て低い声で言った。

「おい、おい、相変わらず、深読みするねえ」高見刑事も笑いながら言つた。

「へへ、じりや、面田ねえ」山田は右手を頭にやつて再び頭を下げた。

「とりあえず、熱燗を。<sup>あつかん</sup>神田さんいいですか?」高見は神田に聞いた。

「はい。いいですね」そういうながら、改めて店内を見渡した。壁は漆喰で仕上げてあり、腰板はこれも、濃い目の弁柄仕上げだ。店の真ん中には太い柱が建つており、天井には、煤けた梁が1本渡してある。古民家の材料を使った建て方のようだ。

「へい。承知いたしやした。おい、おとみ、高見の旦那に熱燗を」

山田は奥に声をかけた。

「あいよつ」奥から元気のいい声が返ってきた。

「で、今日は何をお出したしゃしょつ?」山田は包丁を拭きながら尋ねた。

「そうだな」やつ詰つて壁に貼られた品書きを眺めて、

「神田さんは?」と神田に声をかけた。

「えーと」と言しながら品書きを見てもそこには判読不明の漢字が並んでいた。

「高見さんのおすすめに従います」

「じゃあ、鉄さん、コースで頼むよ」

「へい、承知いたしやした」やばやく料理にかかつた。

「どうこうお知り合いなんですか?」神田は顔を伏せて小さな声で尋ねた。

「あー、まだ、私が若い頃ね、彼も若くてね。いろいろあって」と、意味の分からぬ返事をした。

「そうですか」と、神田もそれ以上は聞かなかつた。

「お待たせをいたしました」女将さんが徳利と杯を運んできた。やや大ぶりの徳利に、これも大き目の杯だ。白和えが突き出しだ。

「どうづくつどうづくつ」女将さんはそう言つて奥に引つ込んだ。

「ま、一杯」高見刑事は神田に徳利を向けた。

「ありがとうございます」杯を両手で持つて受けた。

「どうづくつ」神田は高見刑事から徳利を受け取り、高見刑事に酌をした。

「い」のお酒は出雲の酒ですよ。まろみがあつておいしいですよ

高見刑事も杯を両手で持つて酌を受けた。

「じゃあ、お疲れ様でした」杯を上に上げ、それから、ふたりともグビッと杯半分くらいを飲んだ。

「うーん、うまい」と、神田は言い、杯を下ろした。

「でしょ、さばけもよくてね」高見刑事は自慢げに神田の顔を覗き込むようにして言った。

神田は突き出しに箸をつけた。やこりに切られた柿に、塩で味付けされた白和えが程よく合った上品な味だ。

「へい、お待ち」山田がカウンターの上に料理を出した。

「茄子のなめこおろしがけで」やんす

「へー、おいしそうですね。大将は、この道長いんですか?」

「へへ、面目ねえ。包丁持ったのは、随分と昔のことです」がね・・・へへへ。もつとも、その時分にや、野菜は切っちゃいましたでね

「鉄さんは、昔は匕首あごくちゅうの鉄と呼ばれて、その筋じやちよつとした有名人だったんですよ」料理に箸をつけながら高見刑事は言った。  
「へへ、面目ねえ。若氣の至りつてやつで」やんすよ」山田は顔を上げずに次の料理にかかっている。

「何だか訳ありますね」そう言って高見刑事に酌をした。

「いやー、たいした訳なんぞありやしやせん。その道から、お救い下されたのが、こけらの旦那で」やんすよ」

「へー」そういう繋がりだったのか、と、ふたりを見た。

「いいのかい、そんなにペラペラしゃべっても」神田に酒を勧めるように徳利を持った。

「へへ、良いぞですよ。もう、40年以上前のことになりますかね。あつしも血氣盛んな頃でしてね。その頃、広島ではちょっと知

られた一家の会長にかわいがられていやしてね。それをおいことにあの頃は無茶したもんで「ざんすよ」そう言しながら、見事な包丁捌きの音を出した。神田は、山田が、時々包丁を拭う左手の小指と薬指の2本は第一間接から先がなにことに先ほどから気がついていた。

「その会長は、お人の出来たお方で」「やんしてね。あつしりのよくな下つ端にも情の厚い、いいお方で」「やんした。ところが、その会長の後継者つて野郎、会長の息子で「ざんすがね、皆から、若、若、つて呼ばれて、調子付いて、」いつが、全くの世間知らずつて言つたですかい」話しながらも包丁の動きには淀みがない。

「若けえもんを虫けらのよつて扱う野郎で」「やんしてね。それに、もう、なんかありやあ、チャカを持ち出し、終めえにやあ、素人衆からもみかじめ料を取つてこいだとか抜かしやがつて。会の者もついていかなくななりやしてね、あつしもついて、堪忍袋の緒が切れて、つてわけで」「ざんすよ」

「へい、野菜の焼きづけ」「ざんすよ」そう小さな声で言つて料理をカウンターの上に出した。

「ちゅうじ、その時分は、県警の取り締まりも厳しくなつて来て、いこいこらが潮時かと・・・時代で」「ざんしたね」やつ言いながら顔を上げ包丁をふきんで拭つた。

「余を抜けるとき」「やあ、そりやあもつ、口では言えねえくれえのお世話になりやした」頭を下げた。

「もうあの頃のいたあ、思い出すのもイヤで」「ざんすよ」山田は軽く頭を振つた。

「いや、悪いことを思つてはつまつましたね」小さな声で神田は言つた。

「こやこや、良いわざですよ。たまにやあ、昔のじとも振りかえら

ねえと、これから行く道も見えなくなるつもんぢやねえさよ

「今となつちやあ、何にも梅やむものせまいぞんせんがね。ひとつだけ、気になつていてることが有りやすんで」山田は、遠くを見つめるような目をした。

「あつしも、こつぱしに「子分を抱える身分になつやしてね。ある若けえ者んを食に引き釣り込んだんぢやんすよ」山田は次の料理にかかった。

「その野郎は純な野郎でござんしてね。腕つ節も立つし、さつぱりしてゐるし。あつしが会を抜けるときにも、その野郎にも、一緒に抜けるよつて言つたんだ」せんすが、そいつも義理堅い野郎でござんして、会長への義理を果たすまでは会に留まると言い張りやしてね。どうせ、おつ母さんの薬代を会長から借りていたよつなんで」再び、小気味良く包丁の音が響いた。

「あー、郷戸のことかい?」高見刑事は思に出したよつて言つた。

「郷戸!」神田は思わず声を出した。

高見刑事は、杯を持ったまま、

「あー、びっくりした」と背筋を伸ばした。

「郷戸のことは鉄さんからも向度か相談されたからね。憶えてるよ

「神田のかみたの田那も郷戸のことをじ存知なんで?」やつぱりして、神田の拳に田をやり、一瞬にして全てを理解したよつだ。

「あつ、そつてじやんしたかい。あつしが会を抜けてすぐ、大木会と学生さんの大立ち回りがありやしたが、ひょっとしてその時拳法部の・・・

「はー。そうです

「おや、これは初耳ですね」高見刑事はこぼれた酒で濡れた手をオシボリで拭きながら神田を見た。

「で、その郷戸つて人はその後？」

「あの後、若の息子がチャカでケリをつけようとしたのを邪魔したとかで、会から、と言つても、半身不随になつた若の野郎ひとりの指図ですがね、命を狙われるようになりやして姿をくらましやした」

「鉄さんは、その郷戸の消息を？」高見刑事は尋ねた。

「それから、しばらくして、ありやあ、いつ頃だつたでござんしようか・・・おい、おとみ、郷戸から葉書が来たのは何年ぐれえ前だつたか、お前え、覚えちゃいねえか？」山田は奥に向かつて声をかけた。

「あれば、鉄太郎が小学校1、2年頃だから、昭和47年（1972年）頃の暮れだつたとります。簡単な文面で、義理を欠いて申し訳ない、とか、この「」恩は一生忘れませんとか、そんな風なことが書いてありましたね。全くあの人らしくて・・・」奥の座敷の客にお酒を運びながら、思い出し、出し、言つた。

「で、その葉書はどこから？」神田は山田の方に向き直つて聞いた。

「消印はタイでござんした」

## 熱風！！バンコク

1972年（昭和47年）11月 タイ 首都バンコク

「もうつ、エエ加減にせんかいなー。ワテも終まいにや、怒るでー、あんたらあツ」

そう日本語で言いながら、中年の額ひたいが禿はげ上がった男が、人混みを搔き分けて小走りでやつて來た。周りのタイ人や、白人のアベックのヒッピーや觀光客達は、何事が起こったのかと振り返つたり、追い越された男の後姿を目で追つた。その中年男の後ろから5、6人の日本人が追いかけて來た。

「エエ加減にせえ言うとるやろ」と、少し大きな声で振り返つて言つた拍子に、男の体が屋台のテーブルに「ドンッ」と当り、テーブルが大きく揺れて、客が食べていたトムヤングンが鍋ごと道へ音をたてて転がり落ち、客の男達の怒声と共に白い湯気が上がつた。落ちたエビはさつそく野良犬の夕食になつた。

じゅうどいっせい 郷戸一星は、安定の悪いテーブルで、ちょっと酸っぱいタイチヤーハンを食べながら生ぬるいシンハービールを飲んでいたが、テーブルが揺れる直前にフォークは口にくわえ、チヤーハンの皿とビール瓶を持ち、立ち上がつていた。

先程からこのテーブルでは、郷戸と一緒に三人の男達が、トムヤングンを食べていた。でつぱりと太つた男は、シャツの前をはだけ、買つたばかりの黒ズボンの裾すそを捲り上げて、汁を飛ばさないように気をつけながら食べていた。髪の毛をきれいに刈り上げた男は黒いシャツの裾すそをよれよれのグレーのズボンの上に出し、へらへらと太つた男に愛想笑いをし、遠慮しながら鍋から具を自分の皿に少しづ

つ移していた。もう一人の男は前歯のない口を開け、1本だけ残っている下の歯をいじりながら、時々、郷戸の方を見ては、何やら二人に言つてはニタニタと笑つていた。三人ともシャツの袖からは刺青がのぞいていた。

テーブルが大きく揺れて、男達の食べていたトムヤングンが鍋ごとひっくり返り、太つた男のズボンにかかった。太つた男は、怒鳴りながら、新しいズボンにくつついた野菜の切れ端を払い落とし、テーブルの上に残つた皿を右手で掴んで、ぶつかつた日本人の顔めがけて投げつけた。皿は男の左頬に当たりはじき飛んだ。

「あー、堪忍かんにんしてーっ」男は両の手のひらを広げ太つた男の方に向け細かく動かした。

髪の毛を刈り上げた男が左手で男の襟首えりくびを掴み、右手で思いつきりその男の左頬を殴つた。男は、たつた今飛び散つたトムヤングンのステップと具の上に、ザツ！と半回転して前のめりに倒れこんだ。その瞬間、野良犬は、さつと横へ1mほど逃げたが、犬はそこで振り向き尻尾を後ろ足の間に巻き込んだまま、再び、目の前にあるエビの魅力に負けて戻つてきた。

前歯のない男がゴムぞうりを履いた足で倒れこんだ男の背中を2、3度踏みつけた。

男の小奇麗な白いシャツにはゴムぞうりの黒い跡が残つた。

追いかけてきた男達は、突然、倒れた男の写真を撮りはじめた。フラッシュが「パツ、パツ」と光ると、辺りの野次馬は余計に増えた。太つた男は、自分の濡れたズボンが足にくつつくのを防ぐ

ように両手で両腿の部分をつまみながら倒れた男のところに近づくと、倒れた男の腹を思いつきり蹴り上げた。追いかけてきた男達は、なおも写真を撮り続けている。

「ググツ・・勘弁してーな・・」倒れた男は、なおも日本語で力なく言つた。

「ゲフツ、あんたら、・・・もう、エエ加減にしてーな・・・」そう言つて立ち上がるうとしたが、前歯のない男が中年男の足を払つた。また、男は地面にひっくり返つた。太つた男は地面に転がつたステンレスの鍋を拾い上げ、倒れた男の側頭部めがけて振り下ろした。

太つた男は振り下ろした手が、スカツ、という感じで、手が急に軽くなり、体のバランスを崩しそうになつた。そして、鍋が「カーン！」という音と共に5m向こうに飛んでいつた事によつやく気がつき、空になつた右手を見た。

郷戸は、フォークを口にくわえ、左手に皿を持ち、右手はビール瓶から木の棒に持ち替えて立つていた。男達には、どうして鍋が吹っ飛んだのか分からなかつた。

太つた男が何やら低い声で郷戸に言つた。郷戸には何を言つているのか理解できなかつた。男はもう一度何かを言つた。それでも郷戸は、口にフォークをくわえ、左手にはチャーハンが半分ほど載つた皿を持ち、右手には1、5m程の丸棒を持って立つていた。男達は1mほどの間隔を置いて郷戸を要にした扇形に三人並んで立つた。太つた男が刈り上げ頭の男へ顎をしゃくつて何やら言つと、刈り上げ男はニヤニヤ笑つて、左手で服の裾をまくり、右手でズボンのベルトに挿していた黒光りのする自動拳銃を引っ張り出した。

取り囲んでいる写真を撮っていた日本人達や、白人ヒッピーや観光客、野次馬のタイ人達に一瞬緊張が走り、それまで囲んでいた輪が一斉に広がった。

倒れている男は、両手を支えにして、尻をついたまま拳銃を見つめていた。その隣では野良犬が、「ペチャ、ペチャ」と音をたてて、こぼれた汁をなめている。真ん中に太った男、その左に歯ナシ男。右に拳銃を持つ刈り上げ男。

刈り上げ男は何やら言いながら銃口を郷戸の方に向けた。太った男は、目は郷戸に向けたまま、緊張した顔で、刈り上げ男に何やら言うと、刈り上げ男は薄つすらと額に汗を浮かべながら、左の手の平で銃把の尻を支える様にして銃口を郷戸の顔に向け、右手の人差し指でゆっくりと引き金をしぶり始めた。

「本気で撃つつもりだろうか？」郷戸は判断に迷ったが、両手を広げてゆっくりと上へ上げた。そして、左手のチャーハンの皿を持つ指を広げて、野良犬の頭の上に落とすと、ビックリした野良犬は「ヤン」と短く鳴いて飛び上がった。辺りの緊張が途切れたその瞬間に、空いた左手で口にくわえたフォークを銃を持った刈り上げ男の右肩へ投げた。フォークは飛ぶ姿も見せずに狙つたところに突き刺さり、刈り上げ男の銃を持った手が、「グッ！！」と言つ声と共に右へ搖れた。フォークが郷戸の左手を離ると同時に右手に握られた棒は振り上げられ、太った男の鼻先をかすめた。

振り上げた棒を、左手に持ち替えてそのまま歯ナシ男の口の中に

差し込み、グイッ、と、一押ししておいて、刈り上げ男のみぞおちを右足で蹴った。刈り上げ男が倒れる寸前に郷戸はその男の右手を掴んでひねり上げ、自動拳銃を奪った。太った男は右手を振りかぶり、前に出ようとしたとき、鼻がスースとした感覺に捉わえた。男は左手で鼻を触るとあるはずの左の小鼻がないことに気が付き、左手で鼻を覆い、右手を振り上げたまま動かなくなつた。

「この技はなんだ！？」男達にとつては初めて見る技だった。

郷戸は、歯ナシ男の口から棒を抜いた。その拍子に1本だけ残つていた下の歯がボトンと地面に抜け落ち、野良犬がパクッと食べた。引き抜いた棒を太った男の鼻先に突きつけ、そのままゆっくりと通りの向こうへ向けた。太った男は、郷戸の意味することを理解し、細かく頷き振り向いて、ゆっくりと歩き始めた。野良犬は、「カツ！」と、歯を吐き出した。男達が背中を見せた時、郷戸は自動拳銃の弾装を引き抜いた。そして、スライドを後ろに引つ張り、薬室内の弾を落とし、

「へイ！」と男達の背中に声をかけた。男達は、ビクッ、と肩を動かし、ゆっくりと振り返つた。

郷戸は、刈り上げ男に向かつて銃を放つた。刈り上げ男は右肩を押されていた手の腕と胸の間で銃を受け止め、太った男と顔を見合わせて、「どうしようか」と、迷った顔をしたが、そのまま去つていつた。

男達が去ると、たちまち、先ほど追つて来た日本人達が近づいて来て、カメラを構えた。郷戸は、男達に、ダツ、と近づき、3台のカメラを棒で叩き落し、リーダー格の男の顔先に棒を向け、「ゴー」と言つた。

男は、

「少しお話を・・・」と言つたが、郷戸は日本語が分からぬ振りをして、再び、

「ゴー」と、強く言った。男達は、カメラを拾い上げながら、「なんだ、日本人じゃねえのかよ。今日のところは引き上げるか。ひでえな、このカメラ、使えるかな・・・」などと言いながら来た方向へ帰つていった。

郷戸は倒れた男の腕を取り、椅子に座らせると、野次馬達は、もう、これ以上騒ぎが起きないことを知り、ゆつくりと散つていった。郷戸はズボンのポケットから100バーツ紙幣を出し、テーブルの上に置いて去るうとしたが、男は、

「ちよ、ちよつと待つてえな、兄ちゃん」 そう言つて郷戸の腕を掴み、

「ほんまに、助かったわー、えらい田におおてしもだがな。おおきに、おおきに」 そう言つて、頭をテーブルの上にぶつける何度も何度もさげた。そして、顔を上げ、上目遣いで郷戸を見、

「あんさん、日本人だっしゃろ？隠さんでもええがな。ワテにはわかりまつせ」

郷戸は返事をしなかつた。

「？」 と言う顔をすると、娘は、タオルを自分の顔の口のところに持つて行き、拭く真似をした。

「あー、そうかいな、おおきに、おおきに」 男はそう言つて娘からタオルを受け取り、口の端の血を拭き、

「ほんまに、やさしいなー、タイの女子は」 そう言つながら腕の泥をそのタオルではたき落とした。

郷戸は、テーブルの下に置いていたナップザックを掴んで、棒に

引っ掛け、その棒を肩に担いだ。

「待つてーなー、兄ちゃん」そう言つて、ポケットから100バーツ紙幣を一枚取り出し、娘の手に握らせようとしたが、娘は受け取らうとしない。

「なんでや、ええから、取つとやーな」やつ言つて無理やり娘の手に握らせた。

「兄ちゃん、どこ行きまんのや? 泊るところありますのか?」男は、早足で歩く郷戸の後ろから声をかけた。

「もうちょっと、ゆっくり歩きいな、ハア、ハア」

「ついて来るなよ。『じた』に巻き込まれるのば」「めんだ」前を見たまま答えた。

「あー、やつと喋つてくれたなー」男は、タタタツ、と、郷戸のすぐ後ろにへつつこった。

「あんた、何をしたんだ? さつきから、さつきの男達とは違う男がついて来てるぜ」早足で歩きながら、男に言つた。

「えつ、ホンマかいなー! ?」男は振り返った。

「あつ、ホンマや。ひつこいなー。タイ警察やがな

「タイ警察? あんた何をしたんだ?」

「兄ちゃん、あんさん、もうワテに関わつてしまつたんや」そう言つて郷戸の横に並んで顔を見上げてニコニコと笑つた。

「ワテ、玉木言いまんのや、よろしくな

「宿はどこでんのや?」

「玉木さんと言いましたかね。もう、俺には構わんしてくれ」郷戸

は、香港からの飛行機の中で若い日本人のバッカバッカーから、安宿街はファランポーン駅の近くの中華街にたくさんあると聞いていた。空港からは汽車に乗つて先程駅に着いたばかりだつた。腹が減つたので、まず腹ごしらえをと思い席についたところでこの騒ぎに巻き込まれてしまつたのだ。

「兄ちゃん、あんさんも訳ありやなあ」玉木は郷戸の言葉には構わず、ゆつくりと言つた。郷戸は、ファランポーン駅の方へ向かつて曲がろうとした。

「あかん、あかん、そつち行つたら、中華街や。日本人だらけや。日本人の追つ手が来ても目立たへんから、追つ手の姿に、氣いつきまへんで」

「隠れんのなら、ワテのとこ来なはれ。ワテは、こいつは部屋持つてまんのや」

「男の言つことにも一理あるな」そつ思い男の手に引かれるまま大通りに出た。玉木と名乗つた男は、

「今晩はほんまに助かつたわー」と言ひながら、人差し指を立てた右手を斜め下に突き出しうクトウクと呼ばれるオート三輪を停めた。そして、

「マレーシア、マレーシア」と言つて座席に郷戸を押し上げ、続いて乗り込んだ。トウクトウクは青白い煙と叫び声を吐き出し、熱風を切り裂いて走り始めた。

トウクトウクの座席に取り付けてある小さなサビの浮いたパイプを握つた左手の甲には汗が滲んでいた。郷戸は手の甲に浮かんだ汗を見ながら、体中の汗腺から汗が出ているのを感じていた。やがて、トウクトウクは中心部へと向かい、オレンジ色の灯りが辺りを包み始めた。

街が叫んでいた。2サイクルエンジンの燃えることないと吐き出す  
れる咆哮<sup>ばいこう</sup>、ディーゼルエンジンの甘い黒煙と唸<sup>うね</sup>り声が街中を覆い、  
絶え間なく響き渡るクラクションは街の悲鳴にも聞こえる。

「え？」

せやから、さつきからあんさんのお名前を聞いてまんのや

「ああ、郷戸」前を見ながら答えた。

「え？」

「う、う、う」ゆっくりと大きい声で言った。

「どうこう字を書きまんのや」玉木は右手でパイプを強く握り締めながら、郷戸の顔を覗き込んだ。

「故郷のゴウに扉のト」

「あーあ、郷戸さん。工名前やないいか」大きくなづいた。

「故郷の戸かあ。工名前や」繰り返しうなづき、それからしばらく黙つた。

ふたりを乗せたトウクトウクは屋台の並ぶ道路を通り過ぎ、やがて左手に大きな公園を見ると、右へ曲がり、細い路地の中へ入つて行つた。

「わ、着きましたで」マイショといつ感じで玉木はトウクトウクから降りて、郷戸に聞いた。

「郷戸はん、あんた、荷物は？それだけかいな？じつう、身軽やな」そう言いながら、ドライバーにお金を渡した。

「この先は行き止まりになつてまんのや。なんやしらん、タイの街中は行き止まりが多いてな。こつちやで」玉木は、禿げ上がつ

た額に垂れた髪をかきあげながら、通りの奥へ向かって歩き始めた。狭い通りの両側には小さな雑貨屋や食堂、ゲストハウスが並んでおり、それぞれの店の看板が無秩序に通りへ向かって突き出している。店先のテーブルでは、アメリカやヨーロッパ系の長髪のヒッピースタイルの若者達がタバコをふかしたり、ビールを飲んでいる。彼らは、バイクや、トウクトウク、タクシーがクラクションを鳴らしながら行き交っている通りを慣れた足取りで歩いている。

「ほら、見てみいな。白人のヒッピーばかりや。こんな中、日本人がうろついつとたら、すぐ目に付くで。この先曲がったところが、マレーシアホテルや」玉木は振り返って郷戸に言った。

「逆に、俺達の方も田に付きやすいだら？」郷戸は辺りを見回しながら聞いた。

「心配要らん。そんなんペラペラしゃべる奴はこの辺りにはおらへん。逆に、変な奴が来たら、すぐ連絡が入るさかいにな」ははつ、と笑いながら答えた。

「ここや。おーい、今帰つたでえ」階段下の鉄格子を握つてガチャ、ガチャ、と、鳴らすと、若いタイ女が「ペタ、ペタ、ペタ」と階段を下りて来て、「ガチャ」と鍵を開けた。女は郷戸を見ると恥ずかしそうにすぐに階段の上に駆け上がって言つた。

「なんや。恥ずかしがつとんのかいな。しゃあないな。ま、上がり」そう言つて先になつて階段を、ヨイショ、ヨイショ、と上がつていき、階段を上がつたところにあるドアを開けた。中に入ると、10mくらいの廊下があり、その左側に3つ木のドアがある。一番目のドアを開け中に入つて、郷戸を招きいれた。

「ま、楽にしてや」そう言つて、ソファーを部屋の真ん中に引き摺つてきて、冷房のスイッチを入れて、部屋を出て行つた。しばらくして、タイの若い女をふたり連れて戻ってきた。さつき、鍵を開

けた女もいる。

「郷戸はん、紹介しとくわ。」しつちがルミ子で、そつちの若いのんが沙織ちゅうんや。」

「・・・」

「サワッシュディカー」女達は顔の前で合掌して軽く頭を下げ、ニッコリと微笑んだ。

「ワテの女房や」

玉木はふたりの女の肩を抱き、ドサツ、ヒソファードで腰掛けた。ルミ子と呼ばれた女が玉木の顔の傷に気付いた。沙織に向やう言つと、沙織が立ち上がりドアの方へ向かつた。玉木は沙織の尻をサツと撫でると、沙織は、「キャキャ」と笑いながら部屋を出て行つた。

「ほんまに、タイの女子はかわいいもんや」そう言つて、ルミ子に向かつてコップで飲むジエスチャーをした。ルミ子もそれを見て部屋を出て行つた。

「郷戸はん、あんたん、ワテが変な男や思つてゐやない

「普通じやないだろ」

「せらせやなあ」そう言つて立ち上がり、窓を開け、胸ポケットからマルボロを取り出して、外に放つて、窓を閉めた。

「なあに、そつちのタイ警察の兄ちゃんや。あの兄ちゃんもいじ苦労なこつちや」

「つけてたのか?」

「いやあ、あいつら、この場所は知つとんのや」

沙織と呼ばれた女がタオルと水の入った洗面器を持つてきた。

「故郷のドア、か」

沙織は玉木の横に座り、タオルを濡らして固く絞り、玉木の顔を

やせしく拭き始めた。

「H工名前やな。郷戸はんばどこの生まれでんのや?」

「奈良」そう言つて立ち上がり、窓の外を見ると、若い私服警官がマルボロの封を切つていていた。

「へー、それにしても、訛りが出来へんな」左手で沙織の肩に手を回しながら聞いた。

「で、あんさん、何でまたこないなとこままで?」

「尋問か?」

「いやいや、気に悪つしたなら、じめんやつしゃ」沙織の肩に回した手をはずし大げわに手を振つた。

ルミ子がトレーにウイスキーの壺とコップを載せて戻つてきて、トレーベッドの上に置いた。玉木はウイスキーの蓋を開け、琥珀色の液体を二つのコップに注いだ。

「ま、お近づきのしるしに」そう言つてグラスを郷戸に渡し、自分もグラスを持つた。

「これは、タイのウイスキーのメコン言いまんのや」そう言ひながら自分のグラスを郷戸のグラスに「コチッ」と当たた。そして、「グイッ」と一口飲んで、

「フーッ」と息を吐いた。

郷戸も一口飲んだ。

「どないだ? サントリー・レッドみたいな味だしちゃん?」そう言つて、顎をドアのほうに向け、ふたりの女に出て行くよう命令をした。

「飲み難いよつやつたら、これ足しなはれ」そう言つて、トレーの上のソーダの壺を持ち上げた。

「あんさんのことばっかり聞いて悪るおましたな。ワテは今、チ

「 ハンマイに住んでませんのや。」

「 チョンマイ？」

「 ここからバスで一〇時間くらい北に行つたといや。もつもつもつと行くとラオス、ビルマの国境や。ええといやで。ここにまたじジメジメしてへんし」

「 そこで、今のふたりの奥さんと？」

「 いや、女房は二十人や」 そう言つて、玉木は、グイッ、ヒメロンを飲み干した。

「 わつきの週刊誌の連中な、あの連中は、それがおもしろおで、タイくんだりまでワテを追いかけてきましたのや」 椅子から上半身だけ前に起こして郷戸に言つた。

「 週刊誌？ ああ、わつきのカメラの連中」

「 ワテのこと、チョンマイのハーレム男、とか言つてな。ははは。お隣さんで、大迷惑や」 そう言つて悲しげな顔をした。

「 ワテの夢はあいつらのおかげでパー や」 再びソファーの背もたれに向け背中を倒し目を閉じた。そして、目を開き、

「 郷戸はん、郷戸はんは、こつちに何か予定でも有りまんのかいな」

「 いや、別に・・・」

「 せやつたら、2、3日ひりで休んでから、ワテと一緒にチョンマイ、行きまへんか？」 わつ言つて玉木は、ジッと郷戸の顔を見た。

「 こんなとこおつたら、金ばっかりかかりまつせ。あんさん、金、持つてまんのかいな」

「 ・・・」

「 考えることなんぞ有りまつかいな」 玉木は背もたれから体を起

こした。

「そうだな」それも良かるべ、と郷戸は思った。

「よつしゃ、そうと決まつたら、ワテも、こいつの用事、早めに片付けまつた」

「この部屋、自由に使うとくなはれ。それと、さつきのチンピラ連中な。あいつらには氣い付けなはれや」玉木は声を低くして言った。

「大丈夫だ」郷戸はメコンウィスキーにソーダを加えた。

「あの銃はな、あれば、スミス&ウェッソンのMK22や。ベトナムでアメ公の特殊部隊がベトコン暗殺用に使つてる銃や」

「アメリカの特殊部隊が？」

「せや。アメ公共がベトナム戦線の休暇にぎょさんこつち来てまんのや。そいつらが小遣い稼ぎに武器を持ち込んで密売しとるんや」玉木は、窓際に立つて外の様子を眺めながら言った。

「ちよづど1年前や、こいつの、なんとか言つ首相がな、クーデター起つしよつたんや。憲法廃止、議会解散、つてな訳や。本人が言つにはな、中国の文革（文化大革命）が怖い、言つとんのや」

「へー」

「何でかいとな、こつちには何百万人かの中国人があるしな、その中国人が、中国の手先になつて、タイが共産主義化される言つねん。その共産主義化を防ぐには軍事政権しかない、ちよづ訳や」

「で」

「そこでや、これは、ワテの推量やがな、休暇で来てるアメ公が、こつちのヤクザに銃を密売しとんのを利用して、今の軍事政権は、タイやぐざを市内監視の手先に使うとるんやないかと。ひょつとしたら、アメリカも絡んだ大掛かりな横流しルートがあるのかも知れ

へん。国絡みのな。」

「なるほど」

「せやないと、せつきのあんな特殊な暗殺用の銃があんなチンピの手には入らへんで」玉木は、ドアのところまで行って振り返り、続けた。

「せやから、郷戸はん、あんたにもしものことがあつても、闇から闇や。殺され損、ちゅうわけや。助けてもひたワテがこないなこと言つのもおかしな話やが、ゴタゴタには、手口、出さんこいつやな。あとで晩飯食い直しまひよ。それまで、ゆつくりしといてな」そう言つと部屋を出て行った。

翌日、郷戸は、昼前まで眠つた。あれから玉木と向かいの屋台で食事をして、また、メロンウイスキーを飲んだ。疲れもあつたのか、ぐっすりと眠つた。

ゆつくりとベッドで上半身を起こし、部屋を出て、廊下の突き当たりにあるシャワー室でシャワーを浴び、部屋に戻るとソファーの上に着替えが置いてあつた。

ペタ、ペタ、ペタと階段を上がる音がしてノックがあつた。ドアを開けると、昨夜の屋台の少年だ。少年はタイ<sup>そば</sup>蕎麦をトレーに載せて立つていた。玉木か玉木の女房が頼んでくれたのだらう。屋台は15の少女と12の少年が切り盛りしている。郷戸は少年を部屋に招きいれ、ベッドを指さすと、少年はそこにトレー<sup>ご</sup>と置いた。

「ありがとう」そう日本語で言つと、少年は、ニヤッ、と、微笑み、出て行つた。

外から姉弟で「キャハハ」と笑いあう声が行き交うバイクと車の音に混じつて聞こえて来た。俺のことでも噂しているのだろう、と、

郷戸は思つて、何か月か振りに微笑が漏れた。

大木会の会長の指示で修道館大学へ乗り込んだが、結局、若の仇は打つことが出来なかつた。チャカ力で始末をつけることは簡単だが、それは道義外れだ。学生達の力に負けたのだ。それで良いではないか。

会としては、組織の県下統一の動きの前に力を誇示し、名前を卖りたかつたところだろうが、逆に面目丸つぶれになつてしまつた。大木会の面目を潰したのは、あの学生連中ではなく、それが出来るチャンスを潰した俺だという事になつてしまつた。

会長なら分かつてくれると思ったが、ベッドで半身不隨の若の腹の虫が治まらなかつたのだろう。俺を始末しないと、一家も束ねる力もない、と全国の暴力団の笑い草になる、若はいつも世間体を氣にして動く奴だつた。

「若では会は束ねられない」郷戸は指を詰めるよりも姿をくらますことを選んだ。香港からバンコク、そして、マニラへ飛びつもりだつた。

「しかし、こいつはタイに長居しそうだな」郷戸は、そば蕎麦を啜りこみながら思つた。

蕎麦の皿とトレーを返そつて廊下に出て、階段のほうへ行くと隣の部屋のドアが開いていて、玉木が荷造りをしているのが見えた。すでに、白地に赤と青の縞模様の大きなバッグが3個パンパンに膨らんで部屋の隅に転がつていて。

「ああ、郷戸はん、昨夜はどうもお疲れさんでしたな」玉木は額に垂れた髪をかき上げながら言つた。

「食器はそこらへんに置いときなはれ」

「まあ、入りなはれ」そう言ってバッグを横にすらした。

「ワテの用事も明日<sup>あした</sup>で終わるさかいに、明後日<sup>あさって</sup>の朝、早うにこつ

ちを発ちまひよか? どないだ?」ポケットからマルボロを取り出し郷戸にも勧めた。郷戸は手を振つて断つた。

「そうだな。俺には特別用もないし、今日は夕方から街をぶらついてくる」

「氣いつけなはれや。ちょうど雨期は終わったさかいにスコールはありまへんけど、その分、チンピラと不良外人は街にあふれてまつさかいにな。くれぐれもこたごたに巻き込まれんようにしてや」

「分かつてゐる」

「どうも、郷戸はん、あんさんには、火薬の臭いがしまつせ。導火線のついてない火薬の臭いや。火花にはすぐ反応しよる」

日も暮れかかつた頃、郷戸は部屋を出た。玉木はどうやらゲストハウスの2階部分を借り切つているようだ。ゲストハウスの1階は雑貨屋になつていて、店の前には、玉木の荷物だろう、段ボール箱や、木箱、ビニールのバッグがトラック一杯分くらい積み上げられている。荷物を搔き分けるように店の中に入つて、サングラスと帽子を買った。

サングラスをかけ、帽子を<sup>まぶか</sup>目深に<sup>かぶ</sup>被り、棒を杖のようにして、いくぶん足を引き摺るような格好で、ぶらぶらと歩き、大通りに向かつた。大通りに近付くに従つて様々な車のエンジン音やクラクションが大きくなる。角を曲がつて、大通りに出た途端、バスやトウク、トウク、バイクの洪水のような流れに視界が<sup>ふき</sup>塞がれた。

昨夜来た方向にしばらく歩くと、通りの向こうにムエタイのスタジアムが見える。

郷戸はそこで2時間ほどムエタイの試合を観戦した。日本ではキックボクシングとして若者の人気を博し、郷戸も堅気の頃は、剣道仲間と一緒に見るのを楽しみにしていたが、こここの場内の熱気はすごかつた。

郷戸は、ボクサーの首を抱え込んでの膝蹴りの連続や、肘打ちなどにも破壊力を感じたが、それ以上に、鞭のようにしなる足技のスピードに驚いた。実際に闘うと木刀では勝てないかもしれないと思った。

スタジアムを出るとすっかり日も暮れていた。外には観客で満てた屋台があちこちに出て、どの店も結構繁盛している。屋台で鶏肉焼きを2本食べ、帽子を耳深に被りなおし、足を引き摺るふりをしながらながらゲストハウスに帰った。出るときにあつた山のような荷物はトラックに積み込んであり、2階の窓から玉木が顔を出してタバコをふかしていた。

「いま、お帰りでつか。どないでした散歩は？いま、鍵、開けまつさかいにな」そう言って顔を引っ込め、「ドン、ドン、ドン」と階段を下りて、「ガチャン」と鉄格子のドアを開けた。

「せや、郷戸はん、あんさんを受け取つてもらいたいもんがあんねん」そう言って玉木の部屋のドアを開き、中に入った。

「ま、おかげえな」そう言って、ソファーの向きを郷戸の方にずらした。扉が開きっぱなしのクローゼットを手前にずらし、クローゼットの背中と壁の間から布に包まれたものを取り出した。

「「これや」布に何重にも巻きつけてある紐の結び目を苦労して解<sup>ほぐ</sup>き、クルクルツ、つと、紐をはずした。包みの中から一本の杖<sup>ぼう</sup>が出てきた。郷戸には、一目でそれが仕込み杖だと分かった。

「仕込みか?」

「せや。分かりまつか」ニヤツと笑い、玉木は右手でその仕込みの中程を握つて郷戸の方へ差し出した。郷戸は左の手のひらを上にしてそれを受け取り、右手でポケットからハンカチを取り出して口にくわえ、左手に持つた仕込を腰の辺りに持つてきて、右手で、クツ、ヒ、少し手前に引き、スー、と右手を引いて鞘<sup>さや</sup>から刃<sup>な</sup>を出した。やや、細身で肉厚の直刀<sup>ちょくじや</sup>であった。

「「これ俺に?」

「はいな。差し上げまつや」

「あんた、どうしてこんなものを」見事な仕込だと思った。

「買<sup>う</sup>たんや」ベッドに腰<sup>さき</sup>掛けで額<sup>ひたい</sup>の汗拭<sup>ぬぐ</sup>いた。

「買<sup>つ</sup>た?」郷戸は目<sup>ま</sup>を切<sup>き</sup>先<sup>さき</sup>にやつた。

「せや、ワテは月に一回、チョンマイからこっちに買<sup>う</sup>出しに来てまんねん。ま、その時に、女房を交替で2、3人ずつ観光につれて来てまんのやけどな」胸<sup>むね</sup>ポケットからマルボロの箱を取り出した。郷戸は、刃<sup>な</sup>が煙<sup>き</sup>るのを恐れ、手で制した。

「たまに、現金が必要になつた時には、ワテの鉄砲を売つたりして、金にしてまんねん」玉木は渋々箱をポケットに納めた。

「あんたの鉄砲?」

玉木はそれには答えず、

「昨日も行つてきたとこや。ほら、郷戸はんと会つたとこの近くのチャイナタウン。あそこにはな、鉄砲横丁があつてな、そこで売つて、金にしてまんのや。いつやつたか、いつも行つてるとこの親<sup>お</sup>やじ

父がな、その親父は残留日本兵や「やついいながら、窓際に行き外を眺めた。

「そんでな、その親父が、そん時は、逆にそれを買つてくれゆつてな。親父も、もう永うない、死ぬ前に一回日本の土が踏みたい、ゆつてな。そのためには金が要る、言によつてな」

「その仕込み杖はな、辻政信の仕込み杖や」窓枠に背を預けて郷戸を見た。

「辻！」郷戸は思わず声を出して玉木の顔を見た。

「せや。辻はマレー作戦からシンガポール陥落までに関わつた帝国陸軍の高級参謀や」玉木は郷戸が刀を鞘に納めるのを見て、ポケットからマルボロを取り出した。

「衆議院の国会議員やつたんやけどな、つこ10年ほど前にこつちで行方不明になつたんや」箱から一本取り出し口にくわえ火をつけた。

「こつち言つても、ラオスやけどな。日本の現職国会議員が勝手に内戦中のラオスを歩いとつた、言つんで大騒ぎになつてな」そう言つて、深く息を吸い、「フーッ」と、長く吐いた。

「せやけど、その後は行方不明になつてしまつてな」玉木はソファーに再び腰をかけた。

「フランスの特殊部隊に暗殺されたとか、CIAに殺されたとか、共産ゲリラに殺されたとか、虎に喰われたとか、そらあ、もう、いろんな噂がたつてな」ベッドの上の灰皿を左手でつまみ膝の上に置いた。

「今でも、どつかの国の軍事顧問におさまつとる、言つ噂まであるんや」灰を、「ポン」と、ひとつ落とした。

「その辺はな、終戦の時には、ここ、バンコクにおつて、しばらくは潜伏するつもりで、形見分け、言つんかな、拳銃やら、軍刀やらを部下に分け与えたんや」

「そのときのひとつがこれが」郷戸は改めて仕込み杖を眺めた。  
「せや。あの店の親父が、どうやってこれを手に入れたんかは、知らん。ひょっとして、直接貰うたんかもしれへん」

郷戸は立ち上がり、窓際に行つてバンコクの暗い空を見上げた。残留日本兵、旧日本軍の参謀、ベトナムから息抜きに来て羽田をはずしている若い兵士、戦争反対を唱えて漂流している若いヒッピーラ、そして、俺のような無頼。

この街の叫び声は、全てを飲み込んで、また、吐き出している悲鳴かもしぬない、と、郷戸は思った。

通りの向こう側から5人の白人が、大声で歌を歌いながら、危ない足取りでやって来た。その中のひとり、赤毛を短く刈り上げた男は、ビールをビンから直接飲みながら仲間の肩に手を回し、今にも倒れそうな足取りだ。ガヤガヤと、姉弟の屋台の椅子に腰をかけ、何やら注文しているようだ。同じテーブルでは、先客の白人の女がお粥かゆを食べながら、足元の野良犬に自分の具を分け与えている。

弟はいつものように二口二口と注文を聞き、姉に伝え、姉の方は手馴れた手つきでお粥かゆを作り始めた。姉弟にしてみれば今夜最後の稼ぎになるのだろう、張り切っている様子が良く分かる。

しばらくして弟は出来上がったお粥をテーブルに運んだ。男達

は、犬のようにくんくんと鼻を近づけ臭いをかぎ、大げさに顔をゆがめた。それを見ていた姉弟は、ちょっといやな顔をしたが、すぐに見ない振りをして食器を洗い始めた。

赤毛男が、お粥かゆをスプーンですくつて口に運んだが、口に含んだまま、すぐに椅子から立ち上がり、道に、「ブアーッ」と、吐き出しだ大声で何かを叫んだ。他の男達は、その様子を見て、腹を抱えて笑い出した。吐き出した男はテーブルまで戻り、お粥を皿さucerごと通りにぶちまけた。それを見たほかの男達も、面白がって次々とお粥を皿さucerごと投げ始めた。姉弟はその様子を悲しそうな顔をしながらただ静かに見る他に手立てはなかつた。周りの屋台の人間達も関わり合ひを恐れて何も出来ない。

男達がそのまま椅子から立ち上がり、去ろうとした時、先ほどから忌々いまいま（いまいま）しそうにこの様子を見ていたカーリー・ヘアの白人の女が、男達に何か言つた。赤毛男が、ギラついた目で女を見返し、女の食べているお粥に、「ペツ」と、唾つばを吐き、再びヘラヘラと下卑げびた笑いを浮かべた。女は立ち上がりつてその唾を吐いた赤毛男の頬を平手打ちした。その様子を見ていた男達は「ヒヤツ、ヒヤツ」と笑い始めたが、殴られた赤毛男は、女の腕を掴つかみ、ねじり上げて道に突き飛ばした。倒れた女を他の男達は卑猥ひわいな笑みを浮かべながら、女の頬を2、3度殴つて抱え上げ、そのまま連れ去ろうとしている。

玉木は、

「ひどい事しよるなあ、あいつら」そう言って郷戸の方を向いた。  
「あきまへんで、関わり合いになつ、・・・あ、郷戸はん・・・」  
そこまで玉木が言つた時には、郷戸は仕込み杖を持つたまま、窓

から飛び出し、トラックの屋根の上に、バーンッ、と、降り立つていた。

「あー、もう、あかんちゅうたやろが・・・ほんまに・・・」玉木の言葉の最後は消えていた。

男達は、女を抱えたまま郷戸を見上げた。郷戸はトラックの屋根から降り立ち、女を指差し、そのまま、指を下に向け、解放するよう示した。男達はお互いの顔を見合わせ、

「ハツ、ハツ、ハツ、ハツー」と大声で体を揺すつて笑い始め、赤毛男は中指を郷戸の方に向けて上へ突きたて、歯茎はぐきを剥むき出しにして、まるでネズミを見るような目つきをして何やら言つた。

赤毛男のランニングシャツからはモジヤモジヤの胸毛がはみ出し、その毛は丸太のような腕にもビッシリと生えている。金髪の坊主頭の男は新しいゲームでも見つけたかのように、女を突き飛ばし、木の椅子を振りかぶった。赤毛男は、ズボンからバタフライナイフを取り出し、カシャカシャ、とナイフを開いたり、閉じたりとバタフライアクションきょうだいを始めた。郷戸は、背中に隠れた女に、離れて見守つている姉弟きょうだいのところへ行くように手で示した。野良犬はテーブルの下でこぼれたお粥を食べている。

男達は、これが勝ち田のない喧嘩だといつことに気が付いていない。今まで、アジア人と喧嘩をして負けたことなどないのだ。

赤毛男は金髪の大男に目配せをして、ニヤニヤと笑いながら郷戸に近付いた時、郷戸は足元で、こぼれたお粥を食べている野良犬の尻尾を踏んだ。

犬が「ギャンッ！」と一聲鳴いて飛び上がると、赤毛男が一

歩足を踏み出してナイフを突き出すのが同時だつた。赤毛男は、一筋の光が一瞬目の前を走つたように感じたが、鼻の先を切られたのにはまだ気が付いていない。金髪男は木の椅子を振り下ろそうとしたが、握っている椅子の足から上が男の頭の上に落ちてきた。その時、赤毛男の鼻の先から、「ボタ、ボタ、ボターッ」と血が垂れてきた。

それでも、男達には何が起つたのか分からぬ。郷戸は、男が足を踏み出そうとした時、仕込み杖から再び刃を一閃させ、赤毛男の履いているゴム草履の鼻緒を切つた。赤毛男は、踏ん張りが利かなくなつて後へ大きく転んだ。

ようやく、何が身に起つたのかを理解した赤毛男と金髪男は驚愕の表情を浮かべたまま、他の男達と走り去つた。

パチパチパチッ、と周りの屋台から拍手がした。姉弟も、何かを男達の背中に言つと周りの屋台からも笑い声が聞こえた。金髪女は、笑みを浮かべて郷戸に、「サンキュー」を連発している。

「無茶したらあかんがな、郷戸はん」玉木はそう言いながらも顔は笑つていた。

「それより、あの警察の兄ちゃんやがな。こないな時にこそ役に立たなかんのに」ブツブツ言いながら部屋から出て、振り返り、

「ほな、郷戸はんはゆつくり休みなはれ。」

「あんたは?」

「ちよつと、あの警察の兄ちゃんに何ばか渡して、あいつらが仕

返しに来ようと頼んで来ます

「タイ語がしゃべれるのか？」

「しゃべれへんけど、こないな」と、ようあることやとかこと、  
あの警察の兄ちゃんも心得てますわ。それと、ワテは今晚、トライ  
クの番をせなあかんさかいに、トライクで寝ます。ところで、ど  
や、その仕込みの切れ味は？」「そう言つて、ニコッ、と笑つた。

翌朝、トライクに郷戸と玉木は乗り込み、玉木の雇つたドライバ  
ーが運転してタイ北部の都市、チエンマイに向かつた。

「あなたの奥さん達は？」

「後ろの荷台の荷物の間に転がつてまんがな

トライクがチエンマイに着いたのは1-2時間後であつた。

## 「のはなをくせひめ」

2005年（平成17年）9月 広島・宮島

高見刑事は宮島観光推進協会の事務所のドアのガラス越しに神田龍一の姿を確認し、「やあ、ようやく涼しくなつてきましたね」そう言いながらドアを開けて入つてきた。

「昨夜はお疲れ様でした。鉄さんの料理もなかなかだつたでしょ」高見刑事は、椅子に腰掛けながら言った。

「そうですね。おいしかつたですよ。それにしても、あんな繋がりがあったとはね。驚きましたよ」神田は自分の事務椅子を、クルツ、と回転させて高見刑事の方を向いた。

「本当ですね。私もビックリしましたよ」そつそつといつものよう白髪頭に手をやつた。

「ところで、八頭神社の宮司さんはまだ?」高見刑事は腕時計を見た。

「まだですね。もうそろそろだと思いますが」

そう言った時、「コツコツ」とノックがあり、一人の女性が入つて來た。

「いらっしゃいませ」部屋にいた渡辺が椅子から立ち上がり女性に聞いた。

「何かご用でしようか?」

女性は、それには答えず、渡辺にお辞儀し、神田のほうを見て、

「久しづりね。神田君」そう言った。

「え?」

「私よ、木野花よ。木野花咲姫よ」と微笑み、ニコツ、と顔を横に傾けた。

「あー、咲姫ちゃん」神田は椅子から立ち上がった。

「憶えててくれた?」木野花咲姫は、再び、ニコツ、と微笑んだ。

「いやー、久しぶりだね」思わず声が大きくなつた。咲姫は学生時代とあまり変わっていない。ヘアースタイルも髪を束ねたポーテールのままだ。

「ほんとね。卒業以来だものね」

「でも、俺がここにいるつて何故分かつたんだ?」

「あら、私にご用でしょ?」咲姫は、いたずらっぽく言った。

「え?じゃあ、八頭神社の宮司さんつていうのは・・・」神田は口を開けたままで言葉を止めた。

「私よ」

「ここれはここれは、わざわざ申し訳ございません。私は、高見と申します」高見刑事は椅子から立ち上がり身分証を出し、開いて木野花に見せた。

「初めまして木野花咲姫と申します」咲姫は、高見刑事に丁寧にお辞儀をした。

「このはなわくひめ?きのはなわき、じゃないの?」

「このはなわくひめ、つて読むのよ。学生時代は、面倒だから、きのはなさき、で通して来たのよ」

「まあ、かけて」神田は木野花が座りやすいように椅子を動かした。

「しかし驚いたなあ。咲姫ちゃんが宮司だなんて」コーヒーを淹れるためにサーバーの方へ向かっていたが、

「あ、失礼、木野花さん……」と振り返って言った。

「咲姫でいいわよ」そう言つて、椅子に座り、ハンドバッグを膝に置いた。

「私の家は代々富士吉田の八頭神社の宮司をしているの」

「へー、しかし、そんなことは全く言わなかつたじやないか」口一ヒーカップを咲姫と高見刑事の前に置きながら言った。

「いやだつたのよ、そんな家が。だから、叔父のいる広島の大学に入ったのよ。いただきます」と、軽く頭を下げながら、口一ヒーカップを手に取つた。

「でも結局は、宮司になつて家を継ぐ格好になつてしまつたわ。神田君とも、あの暴力団の事件がなかつたら、お互い口を利くこともなかつたでしょうね」そう言つと神田の顔を見てニコリと微笑んだ。

「笑顔も昔のままだ」神田は思つた。

「おや、こちらの方も、あの一件に、高見刑事は、咲姫の顔を驚いたように見た。

「そりやあ、大活躍でしたよ」神田は大げさに笑いながら高見刑事に言つた。

「あらいやだ。あのお陰で一年間大会には出場できなかつたのよ」

「今でもこれは？」神田は右手の人差し指を立てて前に振つた。

「ええ、地元の小学校で子供達に教えているわ。大会には審判としても引っ張りだこよ」冗談ぽくそう言つて笑つた。

「失礼ですが、木野花さんは、木花咲耶姫と何か関わりが？」高見刑事は聞きにくそうに尋ねた。

「分かりません。ただ、私の家系は、生まれる子供は何故か女の

子ばかりなんです。そして、代々、生まれた子の名前には咲姫と名付けることになっているんです」

「へー」高見刑事は神田の顔を見た。

神田も「へー」という表情を浮かべ高見刑事の顔を見た。

「私の娘も咲姫です。娘も、それが嫌みたいですね」コーヒーをツプを両手で持つて二口二口しながら続けた。神田は咲姫が結婚していることを知り少しガッカリした。

「木野花咲姫なんて変でしょ。だから、娘も、きのはなさきで通しているんです。でも、そのうち分かってくれると思います」

「不思議な家系もあるもんですね。私のところなんか曾祖父さんの時代から職業軍人でね、親父は警察官。そして、私も、おまわりさん」高見刑事は、ははは、と笑いながら頭に手をやつた。

「ところで、早速で申し訳ありませんが、今回、わざわざお越しいただきましたのは、木野花さんの、えーと、だから、お母様になられるんでしょうか？」

「祖母ですわ。あの鉄の箱の中の巻物を解読したのは」高見刑事のほうをしつかりと見て答えた。学生時代と変わらずはつきりした性格のままだ。

「巻物？」

「はい。巻物の体裁になつていたようです。でも、表面は熱で灰になつていたようですから解読出来ましたのは一部分にしかすぎません」

「巻物の表面といふと前半部分といつ」と、「神田は、頭の中で巻物の姿を想像してみた。

「そう、だから、解読できたのは、後半部分だけとこいつことになるわね」

「その解読したものは？」高見刑事はやや興奮して尋ねた。いよいよ、あの鉄の棒の謎が解明される時が来たと思つた。

「解読したものはないんです」

「え？」高見刑事は、ガツカリした表情を浮かべた。

「富士文献にしても、私達の家系は解読のお手伝いをしただけで、文字としては残していないんです」

「そなんですか」高見刑事は、背もたれに背中を預けた。

「私達の家系で解読した文章の内容は全て、口承口伝なのよ」

「ということは？」神田は体を前に傾けた。

「私の頭の中にしか残つていないので」

「でも、そのことは、何人にも話してはいけないのです。それが、八頭神社に仕えてきた木野花家の家訓ですよ」咲姫はきりつ、とした表情をくすさずに神田と高見刑事を見つめた。

「これは、木野花家に限つたことではございませんわ。神職についている者は誰でも、その仕えている神様に対しては慎みを持つて接しなければいけませんの」姿勢を正したまで続けた。

「それに、私に伝えられているのはほんの数行のことですからお役には立てないと思います」と、申し訳なさそうな顔でふたりを見た。

「頼むよ。なにしろ、何がどうなつてているのか皆自分からないんだ」神田は眉を寄せてテーブルに手を乗せた。

「お願いします」高見刑事もテーブルに両手をつけて頭を下げた。

これまでの出来事を、神田は、咲姫に要領よくまとめて話した。  
事件は咲姫の協力なくしては解決出来そうもないのだ。

鉄の棒が富島の弥山みせんと富士山の山頂にあつたと推測出来ること、  
その2本は、台風と大雨で姿を現し、今は、その2本とも誰かの手  
にあること、その鉄の棒には弓矢の「矢尻」が封印されていたこと、  
そして、その鉄の棒を中国も手に入れようとしていること、など。

「それは今月（2005年9月）の最初の台風（台風14号）の  
時ね」咲姫は目を閉じて鼻から大きく息を吸い、そして、ゆっくり  
と長く口から吐いた。

「ああ、そうだよ」

「それだったのね」

「何が？」神田は、何のことだ、と思いながら咲姫を見つめた。

「見えたのよ」

「だから、何が見えたんだい？」

「一瞬だけ、天狗が口に何かをくわえて飛ぶのが見えたのよ」

「天狗？」何を言っているんだろう、ふたりともそう思った。そ  
して、同時に

「言つてもいよいに、あの大男が鉄の棒をくわえて、富士山頂  
から飛び降りたことが、どうして分かつたんだろう」神田と高見刑  
事はお互いの目を合わせた。

「私の家系はね、代々、感が鋭いのよ。特に雨の日や台風の日には鋭くなるの。今回の台風は、雨台風で、あちらこちらで大雨を降らせたでしょ」

「そうです。日本全国といつても過言ではないでしょ。それほどひどかつたですからね。今でも復旧作業は全国で続いていますからね」高見刑事は何度かうなづきながらそれに応えた。

「わたしは、9月4日には、今年から静岡県で毎年定期開催されることになった全日本女子剣道選手権大会の審判を務める予定だつたんです。でも9月に入つてからの大雨で猛烈な頭痛が襲つてきて、それも出来なかつたんです」

「頭痛が5日くらい続いたかしら。最近、よつやく落ち着いてきたけど」咲姫は再び目を閉じた。

「そんな時には、必ず私に関わりのある夢を見るのよ」薄く目を開け、

「そして、その時に・・・さつきは、天狗、と言つたけど、ハッキリとは分からないわ。若いときならもつとハッキリ見えたと思うけど、だんだんと感も鈍くなってきたんでしょうね」そしてまた目を閉じ、

「それで、頭痛で精神が虚ろになつたときに、どこか神聖な山から、その、天狗のようなものが口に何かをくわえて飛ぶのが見えたのよ」

「あの、それは、木花咲耶姫が水の神様だということに何か関係が・・・」高見刑事は小さな声で聞いた。

「分かりません。そうかもしれませんし、單なる偶然かもしれません」

「うーん」と、神田と高見刑事は同時に目を閉じ、腕を組んだ。事務所内にいた者も微動だにしないで咲姫の話を聞いている。

「実はね、咲姫ちゃん。今、咲姫ちゃんが言った通りなんだよ」  
神田はゆっくりそう言つと、

「大きな男がパラグライダーで富士山の山頂から飛び降りたんだよ。口に鉄の棒をくわえてね。たぶん、ここ、富島の頂上、弥山からもそうだと思う」と、自分に言い聞かせるようにゆっくりと言つた。

咲姫は静かにうなずいた。

「あの鉄の棒の中には、矢尻が封印されていたのは、分かっています」高見刑事はここまで言つて、空になつたコーヒーカップを持つて立ち上がつた。

「それが、何故、富士山と、富島にあつたのか、あつた、と言つて、隠されていた、と言つた方がいいのかも知れませんが」そう言いながら「コーヒーを淹れた。

「木野花さんもいかがですか？」そう言つて咲姫の空になつたカップを指さした。

「ありがとうございます。いただきます」そう言つてカップを高見刑事に渡した。

高見刑事から受け取つたコーヒーカップを両手で包むように持つて、くるくる廻るコーヒーをしばらくの間見つめていたが、

「これは、どうやら大変なことが絡んでいるような気がしてきたわ」咲姫はそう言つと、背筋を伸ばし、コーヒーカップをテーブルに置いた。そして、両手を膝の上のハンドバッグの上で揃えて目を閉じた。

神田と高見刑事も、咲姫の透き通るような顔色を見て、ただならぬ気配を感じ取り、動きを止めた。それと同時に富島観光推進協会の事務所の中は真空状態になつたかのようになつた。

1分くらい過ぎた頃、神田は、  
「咲姫ちゃん……」と、静かに声をかけた。咲姫はゆっくりと目を開け、

「時の流れに逆らうことには出来ないけど、お話しすることが、多くの人の命を救うことになるかも知れません」

「人の命を？」高見刑事は眉間に皺を寄せた。

「今がお話すべき時なのかも知れません」咲姫は小さな声で言つた。

「ありがとうございます。で……」高見刑事はポケットから手帳とボールペンを出し、

「えー、何からお尋ねしていいか……」と、白髪頭をボールペンで搔いた。

「まず、あの巻物を書いたのは誰なんかい？」神田が、じゃあ、

という感じで咲姫に尋ねた。

「それは、わからないわ。でも書かせた人は分かっているわ」咲姫は神田の目をしつかりと見た。

「誰？」

「頼朝よ」

「頼朝つて、あの源頼朝？」神田は聞き返した。思いもかけない

名前が咲姫の口から出た。

「源頼朝つて、源頼朝！？」高見刑事も、まさかと思いつつも、

「で、あの巻物には何と書いてあつたのですか？」先を急いだ。

「私が母から口承されたのは」そう言つと、再び目を閉じ、何百

年も前から封印されていた言葉を囁んじ始めた。

「頼朝様の命を受け封じ込めるは國家安泰の基なりと見備はし坐して今も往先も子孫の八十続五十櫻八桑枝の如く家門高く広く立栄へしめ給へと御願奉る」

咲姫は、母から口伝された言葉の封印をとき解き、ゆっくつと、しかし、よどみなく声にして発した。

「これだけなんです」咲姫は薄く目を開き、体力を使い果たしたかのような弱々しい声で言った。

高見刑事はメモを取ることも出来ず聞いていたが、

「たつた？いや、失礼・・・」そう言つと、うつむき加減で白髪頭に手をやり、

「で、その意味は？」と、咲姫の顔を見た。

「頼朝様の命令で封じ込めるのは国の安泰とお思いになられて、今後とも子孫の繁栄をよろしくお願ひします、つてことでしょうね」

神田は憔悴した咲姫の顔を見た。

「そうですね。頼朝は、国と子孫、つまり、日本の今後のためにと思って、あの鉄の棒を富士山頂に封じ込めた、つまり封印したのだと思いますわ」

「富士山頂とここ富島の弥山山頂にね」神田は付け加えた。

「でも、どうして富島と富士山なんだらうか？確かに富島と富士山は、平氏と源氏を象徴するものではあるし、朱の大鳥居と雪を被つた富士山から、頼朝は白い雪が紅葉を埋めてゆくことを連想しても不思議はないけど」神田は腕を組んで、以前、高見刑事と疑問に

思つた」と口にした。

「大事なことは、1000年近く前の人間の考え方は、今の時代の人間とは大きく違つてことよ」咲姫は薄つすらと額に浮かんだ汗をピンクのハンカチで押さえるようにして拭つた。

「それに、1000年以上前では、人間の種類も違つていたでしょうね」そう言って高見刑事を見た。

「種類だなんて」高見刑事は少し大きさに背を伸ばしてみせた。

「民族が違う、と言つてもいいかもせんわ」

「民族がですか？」高見刑事は再び背を丸め、咲姫の話に聞き入つた。

「そうです。今でも日本の西と東に住んでいた日本人が違う民族だつたという痕跡はたくさん残つていてますでしょ」

「そう？・・・ですね」高見刑事はやや口をとがらせた。

「川の名前の分布を見ると、日本の西と東できれいに分かれるのはご存知でしょ？」咲姫は高見刑事を見た。

「え？、まあ・・・」高見刑事はゆつくりと頷いた。

「それは、川の流れの形状や、水の量などによって名前が決まるのじゃなく、その地域に暮らしていた人たちが違つていたからでしょうね」コーヒーを手に取り、

「西日本では谷がつき、東日本ではそれが沢になつていますよね」両手で包むように持つた。

「たとえば、富島には紅葉谷がありますけど、紅葉沢じゃないでしょ。紅葉谷が東日本あれば、丹沢の悪沢や日本アルプスの涸沢の

「え？」紅葉沢になるでしょうね」「一ヒーを一口飲み、

「味覚もそうですね。カツブリビンやカツブラー・メンもメーカーは出荷地域によって味を変えてるもの」存知でしょ？」「再び高見刑事を見た。

「え？まあ・・・」高見刑事は膝の上の手帳に目を落とした。

「それに、顔つきも、今でこそ、混血が進んでいますし、移動も頻繁になっていますから東西で違うってことはありませんけど、当時は一目見て分かったと思いますわ」

「そ？、そうでしょうね・・・」高見刑事は顔を伏せたまま、ボールペンで白髪頭を搔いた。

「典型的なのは、西郷隆盛タイプ、高杉晋作や吉田松陰タイプ、そして、アイヌタイプの顔を思い浮かべれば分かると思いますわ」

「遺伝子や肝炎ウイルスの分析でもこうしたことは確認されていますでしょ？」

「そ？、そうですよね・・・」そうなのか、という顔で神田を、チラツ、と見た。

「それに、その西と東を分けて日本を統治すると言つ考え方は今でも皇室の行事には伝統として受け継がれていますのよ」

「皇室へ？」高見刑事は、そんなことがあるのだろうかと、言う顔で咲姫を見た。

「そうです。大嘗祭だいじょうさいというのをご存知でしょ？」

「ああ、確かに天皇の即位の時の儀式ですね」高見刑事は、「これは聞いたことはあるな」と思つた。

「はい。天皇様が一世に一度だけ即位された後に行われる国家のお祭りです」そう言って、思い出すようにゆっくりと説明し始めた。

「9000平方メートルという広大な敷地にいろいろな建物を作っていくわけですが、その中心になる建物は東日本を意味する悠基殿と西日本を意味する主基殿なんです」咲姫の透き通るような顔がやや赤

みを帶びてきた。

「そして、一連の儀式をこの悠基殿<sup>ゆきでん</sup>で行ない、全く同じことを主<sup>す</sup>基殿<sup>きでん</sup>でもおこなうのです」富島觀光推進協会の渡辺も真剣に話を聞いている。

「こうした儀式を終えて即位として認められ、正式な天皇様になられるのです」

「ホーム」咲姫のこれまでの話を聞き、神田には、頼朝が富士山と富島に鉄の棒を「祀り、封印した」と言うのも事実だろうと思えてきた。

「専門の立場から見ましても西と東の民族の違い、それははつきりと分かりますわ」咲姫<sup>さき</sup>は高見刑事と神田<sup>かみた</sup>を交互に見つめた。

「専門？」神田<sup>かみた</sup>はコーヒーカップから口を離した。

「私は富司<sup>ふじ</sup>ですけど、実は、歯科医<sup>しかい</sup>であるの」

「へー」予想もしていない言葉だった。

「大学を卒業して、商社に勤めたんだけど、ほら、当時、ロッキード事件なんかで総合商社への風当たりが強くなつて、私もちょっと仕事に疑問を感じ始めていた頃、だつたから大学に入りなおしたの」「ほー、そりゃあ、たいしたもんですね」高見刑事の声がやや大きくなつた。

「そんなことはありませんけど」コーヒーカップをテーブルの上に置き、

「歯科医の私が見ると、人相で歯の形状に違いがあるのがはつきりと分かるのよ」そう言つと目を閉じしばらくの沈黙の後、額に手をやり、

「少し頭痛がしてきたわ。これくらいでよろしいでしょ？」「

と、高見刑事を見た。

「お体の具合でも？」

「ええ、少し疲れたみたいで」

「今日は？」神田は心配そうに咲姫に尋ねた。

「今夜はその聚景荘を予約してあるの。荷物も、もう預けてるのよ」そう言いながら立ち上がった。

「今夜はゆつくり休むといいよ。聚景荘のレストランから見るアイトアップされた鳥居はとっても綺麗だよ」

「木野花さんには敵いませんが・・・」高見刑事は手帳を背広のうちポケットに入れながら言い、白髪頭に手をやつた。

「まあ、ありがとうございます。では、私への用件はこれで？」  
咲姫は、笑いながらそう言って立ち上がった。

「はい。お疲れのこと、大変ありがとうございます。非常に参考になりました」高見刑事も立ち上がり、

「文書の内容はお話ししていただきましたし、警察としましては、もうお引止めする理由はございません。今夜はゆつくりとお休み下さい。また今後も協力をお願いすることもあるかと思いますが、その時にはよろしくお願ひします」そう言って頭を下げた。

「いつでもご連絡下さい。じゃあ神田君」咲姫は神田のほうを向いて、

「私、明日はお昼から西日本の錦帯橋に行つて、広島に帰り、市内で一泊して、明後日、平和公園を散策してそのまま失礼します」と、言いながらドアの方へ向かつた。

「おひとりで？」高見刑事は2、3歩ドアの方へ歩き、咲姫の後

姿に声をかけた。

「いえ。連れがいます」咲姫はドアのところに振り返り言った。

高見刑事は、チラッと、神田を見やり、

「ご主人？」と尋ねた。

「いえ、私がアメリカで歯科医の研修していた時に知り合った友人と一緒です」

「ほー、それはご友人もお喜びになられるでしょう。『ゆっくりとお楽しみ下さい』高見刑事は改めて深く頭を下げた。

翌朝、神田はいつものように博打尾尾根から獅子岩までゆっくりと走っていた。

咲姫さきから聞いた文書の内容は不可思議なものだった。源頼朝みなもとのよしが日本にほんの安泰あんたいを願つてあの鉄の棒を富士山と富島に隠した。それだけなら、いくらそれが不思議でも、それは単に昔の人の宗教的な儀式だ、で終わりだ。

しかし、それを奪い取つたあの大男は何者なんだ？また、なぜ、中国はそれを奪おうとしたのか？咲姫さきの言つた「多くの人の命が救える」とはどういうことなんだ？

獅子岩までの登山道は、途中、ロープウェイの中継地点の樅谷駅かやだにの建物の下をくぐる。トンネルのようになつてゐるが、永年積み重なつた砂で埋まり、今では、うんと背を低くしないと通り抜け出来ない。

「言つてみると、ここも樅谷かやだにで樅沢かやさわじゃないな」と思いながら腰を低くして建物の下に入った。くぐりながら、

「歴史の事実もこうして時が埋めてしまふんだろうな」と、ふと思つた。

ロープウェイの榧谷駅を過ぎると少しの間急登になるが、すぐに見晴らしの良い大岩に着く。ここは神田のお気に入りの場所だ。左手には広島市が見え、江田島をはじめとして、瀬戸内に浮かぶ島々が見渡せる。

ここを過ぎるとすぐにロープウェイの終点駅のある獅子岩に着く。ロープウェイの駅から出ると野生の猿と鹿が出迎えてくれる。ここなどここは畠島以外にはないだろうと思つていい。そして、畠島の最東端のピークからは、先ほどの大岩以上の絶景が迎えてくれるのだ。

「ん！？あれは・・・？」神田は汗を拭く手を止めた。

「咲姫ちゃん？」

「あら、神田君。どうしたの、こんなに朝早く」

「それはこっちの言ひセリフだよ」神田は咲姫のいる岩場へ続く石段を駆け上がった。

「そうね」瀬戸内から吹き上げる風で髪がそよいでいる。

「朝、とっても気持ちがいいから、久しぶりに紅葉谷から登つてきたの」

「へー、元気なもんだな」足元を見るとジヨギングシューズだ。

「当たり前よ。鍛え方が違うわよ」そう言つて、足を「ポン」と叩いた。

「お友達は？」神田は周りを見渡した。

「そこにいるわ。」そう言つて名前を呼んだ。

「え？キヨシ？男？」神田にはキヨシと聞こえた。

「ハロー、こんにちは」そう言いながら一段低くなつていてる展望台からカールした栗色の髪の女性が駆け上がってきた。胸元のネットレスが揺れて光つた。女性だった。神田は、何だかホッとした。

「神田君、紹介するわ。こちら、長谷川キャシーさん」咲姫は、その女性の肩を抱くように左手を大きく広げて、その女性を招いた。そして、

「キャシー、こちらは学生時代の同級生の神田さん」と、右手を神田のほうへ向けた。

「ハロー、始めてキャシー長谷川です」そう言いながら、女性は一步進み出て、右手を差し出した。

「始めて、神田です」キヨシじやなくキャシーって呼んだのか。

「え？ 何か言った？」

「い、いや別に」背は咲姫と同じくらいだろうか。年頃は神田達と同年代だろう。

「キャシーはお父様が日本の方で、お母様がアメリカの方なの」咲姫はふたりを交互に見ながら言った。

「ああ、そうですか。それで日本語がお上手なんですね」

「アリガトウゴザイマス。でも、少しだけ発音、変でしょ？」キャシーは大げさに肩をくめた。

「とんでもありませんよ。私は英語を何年勉強してもダメですよ」首筋の汗を拭いながら言った。

「彼女とはシアトルのテンタルクリニックで研修中に知り合つたの」そう言う咲姫をキャシーは二コ二コと見ていく。

「アメリカ滞在中に日系の子供達に剣道を教えていたのよ。彼女、剣道に关心があつたみたいで、教えて欲しいっていうので、子供達と一緒に教えていたの」

「へー、そうなんですか」

「キャシー、神田さんはね日本拳法のマスターなのよ」咲姫は、  
いくぶん自慢げにキャシーに言った。

「オー、弁護士さんですか?」

「ふふふ、違うわよ。憲法じゃなく拳法、これよ」そう言って右手で拳を作り、「Hイツ」という感じで前へ突き出した。

「オオ、分かりました。空手ですね。私はケンポーにも関心があります」キャシーも咲姫の真似をして拳を作つて前へ突き出した。「今度教えてください」突き出した右手を腰に構えながら言った。「まあ、キャシー、本気なの?」咲姫は、やや、身をのけぞらせてキャシーの顔を見た。

「本気です。わたしは日本の武道には興味あります。特に拳法と剣道には」そう言いながら首から下げるる揺れるロケットペンドントを握つた。

咲姫は、ニコッ、と笑つて、

「じゃあ、今度帰つたら神田さんに教えてもらいたいよ」と、キャシーの右肩を、ポンと小さく叩いた。

「帰つたらつて、どこがお出かけですか?」神田はキャシーと咲姫の顔を見た。

「キャシーは外科医なの。一週間後には海外へ一年の予定でボランティア活動に出かけるのよ。その途中、日本に寄つてくれたの」

「はい。そうです。海外ではまだまだドクター、不足しています。今回、2度目です」そう言いながら手にしたペットボトルのミネラルウォーターを一口飲んだ。

「そうですか。それは素晴らしいことをしていらっしゃいますね」そう言って腕時計を見て、

「おっと、いけない、時間だ。遅刻してしまつ」神田はわざわざながら、タオルを首筋に巻きなおした。

「神田君、今日お昼ごはん一緒にどう？」

「ああ、いいね。じゃ、携帯に電話するから。じゃあ、キャシーさん、後でまた」そう言って、右手を軽く上げ、紅葉谷へ向かつた。

神田は、昼間に、咲姫とキャシーに、「清盛」で落ち合つた。

「『』の『』はね、手打ちで、カルシウムに『』の『』なんだよ。おいしいよ」そう言つと、店主に冷やしつらふを三人分注文した。

「神田君、私達、あれから弥山の頂上まで登つたんだけど、キャシーもつても気に入つて、ビューティフルの連発だつたわ」と、キャシーの方を向いた。

「はい。とってもきれいでした。写真たくさん撮りました」そう言つて、デジカメの映像を神田に見せた。

「私は、あの大岩のそばに立つと、いつも靈氣を感じるのよ」咲姫ならそうだつと神田は思った。

「この富島は昔の修験者にとつては修行の島だつたでしょ、何千年も前の人たちにとつても何か神聖な島という認識はあつたで

しうね。弥山の頂上に立つと、それがよーく理解できるわ」「咲姫みせんは言葉に力を込めて言った。

「そうだね。今は巣島神社が有名になつていてから市杵島姫いちおきしまひに代表される神の島のように思つていて人が多いけど、仏教や、修驗道などの歴史も深いからね」

「市杵島姫は弁財天と同一視されているし、弁財天はもともとヒンズーの神様サラスバティ（サラスワティ）ですものね」

「獅子岩おとこいわにペトログラフ（古代文字）で太陽神を崇拜する文字が刻まれていて、何千年も前の人たちも、この島を神が宿る島として認識していた証拠だと思つわ」キャシーはふたりの会話を興味深そうに聞いている。

「ペトログラフの刻まれている岩がよく分かつたね。あれはちょっと分かりにくいんだけど」神田は驚いて咲姫を見た。

「私には、その岩だけがライトアップされたように見えたの」

「そうかあ」神田にはもう、咲姫の言つ事には何の疑いも抱けなかつた。

「おまたせいしました」氣の弱そうな店主がうづんを運んできた。  
「わおー、おいしそうですね」キャシーはもう割り箸に手をかけている。

「そういう意味で、この富島は学問上でも貴重な島だと思つよ。ペトログラフの古代信仰からヒンズー教、山岳信仰、仏教、神道。神社の配置からも明らかに北斗信仰、妙見信仰も取り入れられていることが分かるしね」神田は、「ありがとう」と言つたふうに店主に手を上げた。

「へー、そうなの」咲姫も割り箸を割つた。

「ああ、弥山頂上<sup>みせん</sup>と巖島神社の大鳥居をつなぐ線は南北方向なんだよ」

「へー。そういえば、弥山本堂には毘沙門天が祀<sup>まつ</sup>られていたわね」

「ああ、毘沙門天は北の守り神だからね」

「それでね、弥山頂上<sup>みせん</sup>と大鳥居の先に巖島を遥拝<sup>ようはい</sup>するため建立されたと思われる地御前神社があるんだよ。」

「へー」

「しかもその線を伸ばしていくと極楽寺山<sup>げきらくじやま</sup>に当るんだ」

「おそらく、極楽寺山も文字に残される以前から信仰の対象になっていたんだろうね」 そう言つと、うどんを「ツルツルツ」 と口に運んだ。

「そうね」 咲姫はそう言つて、

「そもそも、今回の台風でも分かるように、一年に何回かは、大きな台風が来て巖島神社は被害を受けるんですね。何年に一回かは必ず大きな被害があるし、それが分かつていながら、ここにこんな立派な神殿を築く必要があったのかを考えると、これは曼陀羅<sup>まんだら</sup>の思想よね」

「対岸から臨むと、島全体が曼陀羅絵になつてゐるしね」

「案外そんなところに、伊勢神宮が20年に一度建て替えられる式年遷宮や、出雲大社の巨大神殿と通じる考え方があるのかもしれないね」

「私もそう思つわ。出雲大社も高さが48mもあつて、何度も倒壊して、そのたびに建て替えられたらしいものね」 咲姫も、おいしそうにうどんをすすつた。

「以前は、当時の建築技術では高さ48mなんてとても無理だから、単なる言い伝えだと思われてただろ」そう言いながら、キャシーの方を向いて、

「どうですか？」このうぶどんは」と聞いた。

「おいしいです。大好きです」キャシーはもう半分くらい食べている。

「ところが実際に巨大柱が発見されたんだから、世間が、アツと言つたのも無理はないよ」

「たしか平成11年よね」そう言つて、咲姫に、そうそう、と言つ感じで神田は肯いた。

「あつ、そうだ。これ見てくれるかな」神田はそう言つて、紙袋から一枚の写真を取り出した。富士山本宮浅間大社の職員が富士山頂上奥宮で撮つた鉄の棒の写真だ。

咲姫なら何か分かるかもしれないと思つて、今朝、富士山本宮浅間大社の富司に頼んでメールで送つてもらつたものだ。

「あら、これが例の鉄の棒？」そう言つて神田の手にある写真を覗きこんだ。

咲姫の顔が急に近づき、神田は思わず顔を動かした。

「・・・ああ、ちょっと見にくいけど、この表面に刻まれている模様のようなものは・・・何か分かるかい？」写真を咲姫の方へ少し動かした。

「ええ、これは鳥文字よ」神田から写真を受け取り、それを見る

とすぐに言った。キャシーも興味深げに覗いた。

「鳥文字？」

「ええ、それもかなり古いものね。今のはもつと分かり易いわ」  
[写真をキャシーにも見えるように]動かした。

「今は、熊野三山のお札に使われているものだけど、もともとは、大事な誓いの言葉を文字にするときに使われたものよ」顔を上げて神田を見た。

「で、なんて書いてあるか分かるかい？」

「数字みたいね」咲姫はジッと見ていたが、

「これは・・・」咲姫の顔が急に困惑の表情に変わった。

「何? どうしたんだい?」そう言いながら、[写真を咲姫の手から取つて改めて、そこに]写つている鉄の棒を見た。

「なんていう数字なんだい?」顔を咲姫へ向けた。キャシーも咲姫の顔を見つめている。

「三の一」咲姫は顔を上げ、神田のかみたの顔を見つめて、困ったようと言つた。

「え! ?」

「二二の一、つまり、二巻の中の一巻つてことみたいね」木野花咲姫は、写真を見つめたままつぶやくように言った。

「え? だとすると富士山と廻廊と、そして、もう一か所どこかに封印、祀られてるつてことか?」思わず声が大きくなり、店主が調理場から出てきた。神田は、なんでもない、なんでもない、と言つ風に手を振つた。

「の、よつだわね」咲姫は、顔を上げて、面白くなつてきたわね、とこつよつて、「ニコツ」と笑つた。

「あー、またまた問題がややこしくなつてきた」神田は箸を握つたまま天井を見た。

「どうかしましたか? ビッグプロブレムですか?」キャシーは心配そうに小声で咲姫に聞いた。

「もう、とにかく先にうどんを食べてしまおつ」神田は椅子に深く座りなおして、うどんを食べ始めた。

「この件はね、神田君。簡単な問題じゃないわよ。もっと腰を据えて考えなきゃ」そう言つと、「この件はあわせました」と、手を合わせた。

神田も、

「みたいだね」そう言つながら箸を置いた。

確かに、この件は、表面的には窃盗事件として扱われている。しかし、外務省や警察庁は何か隠しているんじゃないだろうか? 鉄の棒は全部で3本あって、そのうち2本はすでに何者かの手にある。

あの大男と中国もそのことを知っているのだろうか？もし、知っているとすれば、再び、何らかの行動を起こす筈だ。3本目はどうあるんだろう？

そう考へていた時、咲姫さきが、

「そう、そう、私、神代じんじさんに会つたわよ」目を大きくして神田を見た。

「神代さん？あの新聞部の部長ぶなだった？」久しぶりに聞く名前だつた。

「そう、一昨年おとせんの3月（2003年、平成15年）よ。学生時代にお世話になつた叔父おじが亡くなつたので葬儀に参列して、その翌日、久しぶりに平和公園に行つたの」

「そしたら、公園の雰囲氣ふんいが違つたよね。朝方は少し雨が降つてしたものだから、観光客は少なかつたの。その割に体格がいい背広を着た男の人が目につくのよ」

「刑事？」

「そう。しばらくすると新聞記者やテレビクルーが慰靈碑いれいひの両サイドで場所取りを始めてね。その、記者の中に神代さんじんじがいたのよ」キャシーは表に出て鳥居の写真を撮つている。

「へー、じゃあ、今はプロの新聞記者なんだ」神田は立ち上がり、三人分の代金を払つた。

「あ、じつそつさま。フリーの記者だそうよ」咲姫さきも立ち上がり、

た。

「で、その日は誰が平和公園に？」

「じゃあ、じちそつさま」そう店主に手を上げて店を出た。

「“いらっしゃいました”」咲姫も店主に頭を下げた。

「キューバのカストロよ」咲姫は神田が持ち上げた暖簾をくぐつて外に出た。

「ああ、キューバ国家評議会議長フィデル・カストロ」

「そう」

「それでね、カストロが慰靈碑の前に花を手<sup>たの</sup>向けるとき、神代さん、とんでもないことをしたのよ」ふたりは、キャシーが石の大鳥居のほうへ歩いて行くのを見て、その方向へゆつくりと歩き始めた。

「どんでもないこと？」神田は並んで歩いている咲姫の横顔を見た。

「神代さん、最初のうちは写真を撮っていたんだけど、カストロが献花する時に、バッグから写真を取り出してカストロに向かって何か言ったのよ」咲姫も、神田の顔を見上げた。

「写真って？」

「ゲバラの写真よ

「ゲバラの？」

「そう。その写真を掲げて、カストロに向かつてスペイン語で何か言ったのよ」

「写真って？」

「で、カストロは？」

「カストロは手を上げて神代さんのほうに向かつて歩き始めようとしたのよ」神田は、ホーッ、と言ひ顔をして、200mほど先の朱の大鳥居を見た。

「でも、キューバの護衛官が、カストロの前に立つて止めたわ」

咲姫は残念そうに言ひと、

「神代さんも日本の警官に引き止められて、離れたところに連れて行かれたの」と続けた。

しかし、先姫はすぐに、

「その後、<sup>あと</sup>神代さんはすぐに解放されたわ。キューバの通信社に知り合いがいたらしくて、それに、カストロ本人が護衛官を通じて解放するように言ってくれたらしいの」と、明るく言った。

「へー、で、咲姫ちゃんは神代さんと何か話したの？」

「ええ、その後すぐに声をかけたわ」

「彼も、久しぶりだなー、て感じだったけど、カストロに密着しなきやいけないとかでその時はアドレスを交換しただけよ」

「額の傷がなんだか大きくなつてたみたいね、って言つたら、そうなんだよ、紛争地帯に行く度にここをやられるんだ、って笑つてたわ」そう言って右の人差し指を眉間にあてた。

「で、<sup>ひいじ</sup>神代さんは、カストロに何を言つたんだい」神田は心配そうに聞いた。

「それがね、ゲバラと一緒に献花してくれつて言つて、ゲバラの写真を渡そとしたらしいの」と、愉快そうに笑つて言つた。

「神代さんらしいなあ。ゲバラも広島に来た時には、自分で花を買って慰靈碑に花を手向けたらしいからな」と、神田もそれを聞いてうれしく思った。

咲姫も楽しそうに、

「カストロも本当はゲバラと一緒に献花したかった、って、あとで側近に漏らしたらしいわ」と言つた。

「だらうな。で、<sup>ひいじ</sup>神代さん、今は？」神田は咲姫の横顔を見た。

「それが、その後アフガニスタンからメールが来たのが最後なのよ」

「そりやあ、心配だなア」

ふたりの声は小さくなつた。

「日本拳法部の山口さんはどうしての？」咲姫は、話題を変えるように明るい声で聞いた。

「先輩は、卒業してすぐに香港へ渡つたよ」神田は再び、海上に立つ大鳥居を見やつた。

先日の台風14号の暴風雨にもびくともせずに、今は、陽の光を浴びて朱塗りが輝いている。

「香港へ？」ビックリしたように神田の右顔を見上げた。

「ああ、山口さんが卒業した頃は、ブルース・リーのお陰でカンフーブームの真っ最中だつただろ」神田はゆつくりとした口調で話した。

「ああ、そうね。あの頃は、あつちでも、こつちでも、オチャー、つてやつてたものね」と、咲姫も遠くを見る眼差しで鳥居のほうを見た。

「それで、単身、飛込みで香港の映画会社へ売り込みをかけたいんだ」

「そうなの」

神田は顔を上に向け、思い出し笑いをしながら、

「それがさ。ハハッ、例の、暴力団との抗争事件は、おもしろがられて海外メディアにもちょっと取り上げられただろ」と、言つた。

「そうだったわね」咲姫もうなづきながら楽しそうに笑つた。

「その話は香港にも伝わってて。お陰で、山口さん、エキストラに採用されてね。ほら、山口さんは、<sup>やまぐちたいが</sup>山口大河<sup>だいが</sup>だろ。だから、タイガー山口といつ芸名で、もっぱら悪役の日本人役だったんだ。でも、その後は腕を見込まれて武術指導の担当になつたんだよ」と言つて、少し顔を引き締めて、

「だけど、山口さんの目標は自分の道場を持つことだつたからね」そう言つた。

「で、今は？」

「その後何年かして、なんでも、台湾の軍から武術教官になつてほしいって依頼が有つて台湾で拳法を教えてたらしくよ」<sup>やまつひ</sup>「そう言つて神田の、声のトーンが低くなつたのを咲姫は感じた。

「そうなの」

「一度、日本に台湾要人の警護で帰つて来た時会つたけど、詳しい仕事内容は言えないらしくてね」<sup>フー</sup>「とため息のようなもののが自然に出た。

「12、3年前に分かれたきりだよ」

「そうなの」と、咲姫は寂しそうに言つた。<sup>さき</sup>

「どこで会つたの？」

「俺も平和公園でだよ」<sup>わが</sup>「ニコッ、と笑つて咲姫を見た。

「そうなの。偶然ね。私達つてどこかで繋がつてゐるのかも知れないわね」<sup>わね</sup>そうかも知れない、と神田も思つた。

「あれは確か19回田の広島平和音楽祭があつた日だよ」

観光客は待ちきれずに遠くに見える大鳥居の写真を撮り始める。

「音楽祭に出演する歌手が慰靈碑に献花していたから良く憶えているよ」

そう言つと、記憶をたどるよつにして、

「平成4年（1992年）頃だつたかなア」と言つた。

「商工会議所に用事があつて、時間調整に平和公園を歩いていたらね、山口さんから、おー、神田、つてね、声かけられて「あの時の驚きを思い出した。

「夏の暑い時だつたよ、木陰じかげでほんの4、5分話しただけで、じや、行かなきや、つて、・・・俺の名刺は渡したんだけど、それつきり連絡がなくて」最後は少し寂しそうな声になつた。

「そうなの」

咲姫は、神代さんも山口さんも元氣でいて欲しいと願つた。

キャシーは石の大鳥居のとこりまで行つて狛犬の写真にまいぬを撮つてい  
る。

咲姫は「キャシー」と呼んで手招きをするとキャシーは小走りで駆けて來た。

「キャシー、じゃあ、そろそろ行きましょうか」

「OK・・・」もう、ふたりの話は終わつたの、という感じで、咲姫さきを見てウインクをした。

咲姫が、

「ばかね」と小声で言つのが聞こえた。

三人はフェリー乗り場の方へ向かつて歩き始めた。

「錦帶橋きんたいきょうまではどうやつて行くんだい？」

「JRで行くわ」神田と咲姫はキャシーから数歩遅れて歩いてい  
る。

「よかつたら車貸すけど

「ありがとう。でも、キャシーが電車に乗りたいつて言つのよ  
と、キャシーに聞こえるように声を大きくした。

キャシーは振り向いて、

「はい。私はたくさん経験がしたいのです」と、笑顔で言った。

桟橋では、この時間でも宮島に上陸する観光客の数が多い。

台風の影響で観光客の減少が懸念されたが、神田たち宮島観光推進協会の各方面への働きかけもあって通常と変わらないほどであった。

キャシーがいる改札口の手前でふたりは立ち止まり、

「咲姫ちゃんも元気で。今回はいろいろと助かったよ」

「神田君も元気でね。私も、あの鉄の棒については考えてみるわ」と言葉を交わし、

「何か分かつたら連絡頼むよ」神田と咲姫は自然に握手した。

「じゃあ、お気をつけて旅を続けてください」そして、キャシーにそう言つて手を出した。

神田は、事務所に戻つて、高見刑事に連絡を取つた。

「えーっ、もう一本あるんですか?」電話口の向こうで高見刑事が白髪頭を抱えるのが見えるようであつた。

「そちらしいんです。あの鉄の棒の表面には、三の一、つて刻んであるらしいんですよ。・・・そうです。三の一です」

「そちらの方で新情報は?」

「そうですか。進展なしですか」

「いえ、こちらも別に、今の、鉄の棒が3本あるらしいところ」とが分かつた以外にはありません」

「はい、木野花さんも何か分かつたら連絡をくれると誓つ」とこなつていますので」

「はい。・・・はい。分かりました。じゃあ、これで」

事務椅子に腰をかけ、今回のことを見直してみた。  
頼朝が日本の安寧<sup>あんねい</sup>を願つて西と東に鉄の棒を封印、祀<sup>まつ</sup>つた。

しかし、鉄の棒は、もう一本あるらしい。と言つことは、その一本もその頼朝の考えに相應<sup>ふさわ</sup>しいどこかに封印、祀<sup>まつ</sup>つてなければならぬ理屈になる。それはどこだろう。それは、まだ日本にあるのだろうか？それとも、すでに、あの大男か、もしくは中国が手に入れているのか？

そもそも、頼朝が、三ヶ所に祀<sup>まつ</sup>ることが日本の安寧<sup>あんねい</sup>に繋<sup>つな</sup>がると考えた鉄の棒とは何なのか？

それを何故あの大男や中国が狙つたのか？

## チョンマイの剣

1972年（昭和47年） タイ チョンマイ

玉木の家は、チョンマイの市街からビルマ方向へさらいに車で30分ほど山の中にあった。もう少し行くと、ビルマとの国境に接する地域だ。

深くえぐれた轍に溜まつた泥水を跳ね上げ、トラックの車体は、さながら荒海を行く小船のように揺れた。トラックが大きく揺れるたびに、ルミ子と沙織が「きやーっ、きやーっ」と声を上げているのが助手席の開け放つた窓から聞こえてくる。

「郷戸はん、ほーら、着きましたで」と、指さす先にヘッドライトの明かりの中の高床式の家の集落が見えてきた。

「この村に住むんは、ぜーんぶワテの親戚や

「親戚？」郷戸は、体が跳ね上がるのを防ぐために窓枠を掴み、前を見たまま聞き返した。

「せや。ワテの女房の親やら、兄弟姉妹やら、その親戚やら、中には他人も混ざつとるかもしねへんがな」玉木は顔を上下に揺らし、楽しそうに言った。

「せやけど、かまへんねん」

「あんた、一体ここで何をしてるんだ？」

「何をて、あんた、・・・結婚生活やがな。ハツハツハツ」

玉木はトラックから飛び降りると、

「おーい、春子ーッ、今帰つたでー」と、大声を上げた。

遠くからやや小太りの女が満面の笑みを浮かべて、足早にやつて  
きた。暗くてよく分からぬが、30歳くらいであろうか、大きな  
口の白い歯が印象的な女であった。

子供達が、

「きやー、きやー」と声を上げてトラックめがけて走つてくる。  
数匹の犬がその子供達を追いかけて子供たちの足にまとわりつ  
ている。

そして、子供達はトラックの周りに集まつて、タイヤに足を掛け  
荷台にあがろうとしているが、大人たちに引きずり下ろされた。  
いつもの光景なのだろう。大人たちは手馴れた様子で荷物を降ろ  
し、近くの高床式の家に運び込み始めた。

「どうや、元気やつたか？」玉木はそう言つて、春子と呼んだ女を  
両手で抱きしめ、右手で尻をなでた。

他の女達も玉木の周りに集まつてきた。

「郷戸はん、こっち来なはれや。紹介しまつや」

玉木は春子と呼んだ女の肩に右手を回したまま、  
「ここれが春子や、最初の女房や」  
そして左手で女達を指差し、  
「こっちが一番田の女房の夏子、二番田の秋子は今ちよつと見え  
へんや。ほんで、あれが四番田の冬子で・・・」  
「玉木さん、ちょっと待つてくれ、そんなに覚えきれん」  
「どうか？覚え易い名前にしたんやけどなあ・・・」と額に垂れ  
た髪をかきあげた。

郷戸は、

「あー、それで一番新しい女房が沙織か」と気がついた。

「ま、いっちで飯でも食おう」そう言つと、ひとり大きいつきわ大きい高床式の家へ向かつた。

ギシギシと鳴る木の階段を上がり、木戸を開けると左手に大きな瓶が2つ置いてあつた。玉木は、そばにあつた柄杓で水をすくい、それを飲み、残つた水で手を洗つた。郷戸もそれに倣つた。思いのほか冷たくて気持ちがいい。

その夜は、メコンウイスキーを飲みながら、玉木の女房達が料理した鶏のカレー煮込みと川エビを煮たもの、それにもち米を炊いたものを食べた。

郷戸と玉木が食べている間、玉木の「親戚」が十数人周りを取り囲んで郷戸の食べる様子を興味深げに眺めていた。子供達は、郷戸が一口食べるごとに声を上げて笑つた。

翌朝は鶏の声に米を炊くにおいで目が覚めた。鶏の声に混じつて「バシッ、バシッ」という音がどこからか聞こえてくる。

郷戸は食事の支度をしている女房達に頭を下げて、階段を降りた。昨夜は暗くて分からなかつたが、かなり大きい集落になつてゐる。あちらこちらで鶏が餌をついばんでいる。遠くに見えるのは水田であろうか。

「バシッ、バシッ」と言つ音は集落の外れから聞こえてくる。なんとはなく、その音のする方へ足が向いた。

そこには、ムエタイのリングが拵えてあつた。少年達がムエタイの稽古をしている。幼いのは10歳くらいから、その子供達を指導

をしているのが、25、6歳といったところだらうか。

練習をしている少年達の中で一際目立つ少年がいた。幼顔ながらも背が高く目つきが鋭い。細い体はまるで革の鞭のようにしなる。

「なんや、」に居つたんかいな」玉木が後ろから声をかけた。  
「ああ」郷戸は振り向かずに腕組みをしたまま返事をした。

「どう、ええ子やる」

「ああ」

「強いで。ワテの息子や」玉木の血鑿げな顔は声を聞けば分かつた。

チヨンマイに来てから2週間ほどが過ぎた。

「こちらに来てからも毎朝1000回の素振りは欠かさなかつた。そして、子供達も、日課になつてゐる山での枯れ枝拾いから帰ると、郷戸のまねをして棒切れを振るよつになつていた。

そのうち自然に、郷戸は子供達に剣道を教えるよつになつた。

そんな様子を見ていた玉木はある日、

「郷戸はん。あんさんに頼みがあるんやけどな」と、こつものよ

うに大きな声で言つた。

「なんだ」汗を拭きながら玉木のいる木陰に入った。

「ワテの子にな、あんたの剣術を教えてやつてもらいたいんや」「剣を?」一瞬汗を拭く腕を止めて玉木を見た。

「せや。ワテの子供はあの子だけなんや」そう言つて、素振りをしている少年達のいる方を、顎でしゃくつた。

中に一際背の高い少年がいる。玉木の息子だ。

「だからといって俺が教える理屈にはならん。それに、俺の剣は人に教えられるような高尚なものではない」汗を拭き終えてシャツを着た。

「まあ、そう言わんど。頼むがな。この通りや」と、手を顔の前で合わせ、

「オーケイ、ナカツチヤン」と、少年を呼んだ。

少年は玉木から呼ばれてうれしそうに走ってきて、郷戸の前で立ち止まり、

「サワッシュ、ディ、クラップ」と手を合わせ、ニコニコと微笑んだ。

玉木は少年の肩を抱き寄せながら、

「ナカツチヤン、この兄ちゃんがな、お前に剣術を教えて下さんや」と、少年にゆづくりと言った。

「ま、待て、俺はまだ教えるとは・・・」郷戸は、シャツのボタンをはめる手を止めた。

「ま、ええがな。ちょっと手ほどきしてくれただけでええんや」玉木は郷戸の言葉を遮り、

「ナカツチヤン、ようお礼言わな」と、少年の顔を覗いた。

「ボク、ナカツチヤン、ジャナイ。和司ダヨ」少年は、玉木の顔を見上げて、唇を尖らせて言った。

「おお、せやつたな。よし、もうH-H、あっち行つて仕事し」と、少年の肩を押して、追いやつた。

「あの子は、日本人に成りとつてな、自分で和司ゆづ名前つけよつたんや」そう言いながら右手を頭の後ろにやつて、

「まあ、ワテの血が入つとるさかいに、日本人や言つても嘘とち

やうがな」指先で首筋を搔いた。

「しかし、無理な話や……」玉木は寂しそうに言った。

「郷戸はん、おそらく、年明けにはワテは国外退去処分になると思つ」と、こつもと違う厳しい表情で郷戸の顔を見た。

「国外退去?」シャツのボタンをはめ終えると、郷戸は玉木の顔を見た。

玉木は、

「ああ、日本じゃ、ワテのことで騒ぎ始めとるひじいからな」「手を木にあてて体を預けた。

「何の事情も知らんアホなマスクのや。ただ、ワテのことをおもしろおかしゆう週刊誌に書きまくつて、ワテはそいつらの金儲けの材料にされてしまつたんや」と吐き捨てるよつた口調で言った。

「ねそらく日本政府がこつちの政府に圧力をかけとこのや。もつじき手続きは終了して捕まえにきよる」そう言つてタバコを足元に捨て、ゴム草履で、憎々しげに何度も踏み、2mほど先へ蹴飛ばした。

「いま、ワテが国外退去になつたら、ここにある200人近くの人間の生活の面倒を見るもんがおらんよつたなる「近くにあつた丸椅子を2つとりに行つた。

「それに、ワテの夢も中途半端なままで終わつてしまつ」椅子のひとつを郷戸の近くに置いた。

「何なんだ、あなたの、その夢とやうは」郷戸は椅子に座らばず、立つたままで聞いた。

「じこじここつらの国を作つてやつたいんや」玉木は、ドジ口

イショ、と、椅子に腰を下ろした。

「国？」何を言い出すんだ、と郷戸は思つて、玉木の顔を見た。  
玉木はまじめな顔で、

「せや。見てみ」そう言つて、東の空を指差した。

「あの空の下はビルマや。せやけど、タイやビルマやゆうても、  
この辺りに住んどるもんにとつては関係あらへん。空に線引きはで  
けんからな」木の幹に体を預け足を投げ出して、遠くの空を見つめ  
ながら続けた。

「いろんな部族がタイやビルマと関係無<sup>かんけい</sup>う、生活しとんのや。中  
には、中国共産党に追われて逃げて来た国民党の連中もいてる。ポ  
ケットからマルボロを取り出し郷戸にも勧めた。郷戸は、手を、イ  
ヤ、といつふうに振つた。

「あの辺り<sup>あた</sup>一体はな、今、みんなが自らの文化と生活を守るた  
めに命をかけとんのや」

「ワテはその手伝<sup>てつ</sup>いをしてやりたいのや」

「手伝<sup>てつ</sup>いを？」郷戸は、この男が分からなくなつてきた。

「これはワテ等の義務や」そう言いながら、マルボロを一本口に  
くわえた。

「この辺りは、インパール作戦で負けた日本人の兵隊さんがビルマからタイへ逃げてきた道や」

「こらのカレン族にとつては日本人は敵やつたんや、その敵やつた日本人が腹へつたり、病気になつたりした時にはな、助けてくれたんや」いったん口を、クツ、と結んだ。そして、

「そのお陰で、今の日本があんのや。ありがたいこいつやがな」

と、続けた。

「つここの間までは、ワテも、そないなことは考えてなかつた」  
マルボロの紫煙は緩やかに風に乗つた。

「それがな、ある時、この子供らがこの先の洞窟うつばくで、日本軍の残して行つた小銃を仰山見つけたんや」 そう言つて郷戸の顔を見た。

「三八式か？」

「せや。どうこう経緯じきさりで鉄砲があんなとこにあつたんかは分からん」 そう言つて大きく胸を膨らませて煙を吸い込み、フー、と吐き出した。

「ここいらの人間に殺されたり、病氣で死んだり、山賊に襲われたりして死んだ兵隊さんのかも分からん」 煙の後の言葉はため息混じりになつた。

「しかし、そんなことはどうでもええんや。ワテはこの銃でカレン族に恩返しがしたいんや」 自分に言い聞かせるように声が大きくなつた。

「そん時から、ワテは、日本軍が残して行つた銃やら、なんやらが見つかつた言つ話しがあつたら、飛んで行つては買つてまんのや」  
ニヤツ、と笑つた。

「どうするつもりだ？」

「ワテはな、その銃を、食料やら他のもんと一緒に、ここのら辺のカレン兵に渡してまんのや」 ペツ、と唾を足元に吐き、

「武器の密売か」という郷戸の言葉に、

「密売とちやう。タダでやつてんのや」と、早口で応えた。

「しかし、これは、トップシークレット、ちゅうつかつや」  
「冗談め

かして、「トップシークレット」と囁つ言葉に力を入れた。

「今、ワテが隠れたりしたら、捜査の手が入つて肝心のトップシークレットがタイ軍やビルマ軍に知れてしまう」「吐き出した唾で湿った砂をゴム草履でザラザラと消した。

「せやから、今は大人しゅう捕まるつもりや」顎あを上あげて、額に垂れた髪を後ろへやつた。

「後のことばワテの女房やら親戚やらに頼むつもりや」そつ言つて頭を木にもたれさせた。

「それと、俺が、あなたの息子に剣を教えることどどいう関係があるんだ」郷戸は玉木の反対側にもたれて、顔を見ずに聞いた。

「あの子にな、ワテの夢を継いでもらいたいんや」クルツ、と振り向いて郷戸の顔を見た。

「あなたの夢を?」郷戸は、正面を向いたまま聞き返した。

「せや、いざと言う時には自分の身を、家族を、村を守らなあかん」玉木は両手を膝に当て丸椅子から立ち上がつた。

「これから先、長い戦いになる。ワテがおらんようになつても、あいつには頑張つてもらいたいんや」パン、パン、と半ズボンの尻を叩いた。

「あなたの勝手な思いだ」郷戸は早口でハツキリと言つた。

「そうかもしけん。けど、それがあの子の運命や」左手を木にあて、郷戸の目を覗き込むように、

「どや、頼まれてくれへんか?」と、言つた。

郷戸は返事をせずにその場を離れた。

年が明けた。

郷戸は、毎朝、子供達には素振りはさせているが、玉木から頼まれたことに返事はしていない。

玉木もあれ以来そのことは口にしなくなつた。

「変わつた男だ」郷戸は思つた。国を作ろうなんて夢のまた夢だ。玉木にもそれは分かつてゐるはずだ。

郷戸は、最近、村の連中の荷物運びの列に加わつてビルマとの国境近くの街まで行くこともある。

「郷戸はん、パスポート出しなはれ」郷戸が山から帰るなりそう言つた。

「パスポート？」

「今から、あの兄ちゃんがマレーシアへ行つてビザの延長をしてくれるさかい」そう言つて、トラックの泥だらけのフロントガラスを洗つている男を指差した。

「大丈夫なのか？」「いつか、トラックを運転してきた男だ。

「大丈夫や。蛇の道はヘビや」

「あの兄ちゃんは、バンコクでワテが世話しとる兄ちゃんや」そう言つて、おどけた格好で男に手を振ると、男もおどけて白い歯をむき出して「ハツ、ハツ、ハツ」と笑つて、敬礼の格好をした。

「一週間に一回は」つちに来よるさかいに、これからワテがおらんようになつても、あの兄ちゃんに頼み事したらええ。信用できるさかいな」そう言つと、男は理解しているのかどうか、顔の前で手を合わせてニコッ、と笑つた。

タイの人間の笑顔は心を和ませるものがある、と近頃、郷戸は思

「つむりになつていた。」

「しかし言葉が・・・」

「言葉なんか分からんでもかまへん」ハツ、ハツ、ハツ、といつものように笑いながら言い、

「言葉が通じて字が読めても何にもならへん」と、手を自分の顔の前で大きく2度振つた。

「見てみいな。言葉が通じて、紙切れに約束事書いても、あつちこつちで殺し合いしとるやないか」口の端を上げて言つた。

「言葉は通じんでも、字は読めんでも、家族になるのが一番や。ハツ、ハツ、ハツ、せやひ、郷戸はん」

「ま、こやと血つ時にま、ワテの息子がちょっとだけ日本語がしやべれるさかいに、少しほ役にたつやろ」

玉木の息子は離れたところで、棒切れを持って素振りをしている。最近では様さまになつてきた。棒を振り下ろすたびに「ニッポンー、ニッポンー」と、気合のつもりなのだろう、叫んでいる。

「おーい、ナカツチャン」玉木はナカツチャンを呼んだ。ナカツチャンは、玉木に呼ばれると、本当にうれしそうに飛んでくる。郷戸の前で裸足の足をそろえて、

「サワツ、ティ、クラツプ」と手を合わせた。

「ええか、ナカツチャン・・・」

「和司ダヨ」

「ええか、和司、一所懸命練習いつしょくめいして、強うなれよ。強うなつて、この村を守るんや。お父ちゃんもそのつち帰つてくるからな」

「帰つてくるとは・・・?」郷戸は汗を拭きながら思った。

「ウン、ボク、ガンバッテ、強クナッテ、オトウサンガ、帰ツテ  
クルマデ、コノ村ヲ守ルヨ」

「よし、よし、ナカツチャン、お前はホンマにええ子や」そう言  
う玉木の目には涙が浮かんでいた。

「和司ダヨ」

「せやつたな。和司」そう言つて、両手で、ナカツチャンの肩を  
抱いた。

玉木は、ナカツチャンの肩に手を置いたまま、郷戸を見上げて、  
「郷戸はん。いよいよ、明日、ワテは連行されることになつたん  
や」

「明日?」

「せや、あの兄ちゃんの情報や」と、トライクのタイヤの泥を落  
としている男のほうを見た。

そういえば最近村の連中の行動がセツセツしていた。

「あの兄ちゃんの情報は確かやからな  
玉木のその言葉には覚悟が滲んでいた。

息子は静かに玉木の話を聞いている。

「郷戸はんはここで氣の済むまでゆつくつしたらええ」玉木は息  
子の肩に手を置いたまま続けた。

「飽きたら、あの兄ちゃんがバンコクから来た時に一緒に帰つた  
らええんや」そして、息子の顔を覗き込んで、

「ええか、ナカツチャン・・・」

「和司ダヨ」

「ええか、和司、この郷戸はんの言つことによお聞いて、強い男  
になるんやで。日本の男はな、強おないとあかんねん」と、一言、  
一言、噛んで含めるように言つた。

息子も黒い顔を引き締めて、

「ワカツタ。ボク、強クナツテ、日本人ニナルヨ」

息子はそう言って、さつきまで素振りをしていたところに、タタタツ、と駆けて行き、再び、

「ニッポンー、ニッポンー」と声を出して、素振りを始めた。

翌朝、鶏が啼くと同時に、タイ警察の人間が玉木の家屋にやつて來た。玉木は明け方近くまで村の者と酒を飲んでいてちょうど寝入つたところであつたが、

「ちよつと支度するさかいに下で待つといでんか」そう言って、小ざつぱりとした服に着替え、昨夜から整えてあつたカバンを一つ持ち、戸口まで歩み、

「ほな・・・」と、振り返つて部屋を見渡した。

部屋の中には20人の女房達とその親や兄弟、姉妹達が暗い顔で立つてゐる。春子は必死で泣くのをこらえ、夏子や秋子に脇を支えられてゐる。

階段をギシ、ギシ、と鳴らして降りると、女房達も後に続いた。

玉木は、前後を制服警官に挟まれ、おとなしく車の停めてある集落の入り口に向かつた。車は既に運転席を集落の外に向けて停めてあつた、

村の人間達は両脇に立ち並び、あるものは子供達の肩を抱き、あるものは顔を伏せて嗚咽おえつを漏らしている。犬達でさえも何事かと列の中に入り込み玉木の様子を眺めている。

ルミ子と沙織がパタパタパタ、とゴム草履を鳴らして、玉木達を追い越して車まで行き、車の中には警官に果物やら飲み物やらを

渡し、何やら頼んでいる。

階段の下に居た春子は耐え切れずに大声で泣き始め、それにつられて、他の女房や親戚達も声を上げて泣き始めた。

「オーケイ、オイ、オイ・・・ オーケイ、オイ、オイ・・・

玉木は車まで2mほどのところまで来て、耐え切れずに振り返り、「達者で暮らせよオー」と、振り絞るような声を上げ、タタツ、と四駆のトラックへ走りより、荷台に乗り込んだ。

四駆のトラックは、マフラーを、ブルルン、と大きく揺らしてエンジンがかかり、一塊の黒煙を吐き出し、ゆっくりと動き始めた。

玉木は車まで2mほどのところまで来て、耐え切れずに振り返り、加速し始めるトラックの荷台から、ふと、いつもの大木の辺りを見ると、朝日の中で、郷戸とナカツチャンがトラックの方を向いて素振りをしているのが見えた。

ナカツチャンの「ニッポン!、ニッポン!」の掛け声は、いつもより大きく、風に乗ってトラックを追いかけてきた。

ナカツチャンの姿は玉木の瞳の中で揺れ、その掛け声は、玉木の心に刺さった。

何日かして、トラックの定期便がチエンマイへ戻ってきた時、郷戸はドライバーから、パスポートと日本の新聞を受け取った。

その新聞には、玉木はバンコクに連行されて間もなく、タイ政府から「公序良俗を乱した」罪で永久国外追放になつたことが大きく載つていた。

ここで暮らす玉木の女房達やナカツチャンはそのことを知つていいのだろうか?彼らは、陽が昇る前から働き始め、普段と変わりない

い生活をしている。

玉木は村のためにトラックを1台購入していた。女達は村の男が運転するトラックに乗って、一週間に何度もチエンマイ市街に出て、自分達が織り上げた布や、野菜を売っている。

男達は何週間も村を留守にすることがある。ビルマとの国境を越えて三八銃さんぱちじゅうを運び込んだり、密貿易をしたりしているのだ。

チエンマイに来てから、半年が過ぎようとしていた。

郷戸は、女達とチエンマイ市街に行ったり、男たちと一緒に密輸ルートを使ってビルマに行ったりしてこの村の滞在を楽しんでいた。

反ビルマ政府の山岳民族同士の結束は固く、自由に国境を往き来できるルートがあり、お互いに協力し合って商品を流通させている。このルートを使えば、インドや、つい3年ほど前にパキスタンから独立したバングラデシュに入国するのも簡単のようだ。逆に村の男たちが帰ってくるときはビルマやインドの男達が一緒の時もあつた。彼らは、ビルマからヒスイ、ルビーなどの宝石から麻薬まで持ち込み、それを売った金でタイ商品やタイ国内に流通している日本製品を大量に買い込みビルマ内に流通させてしているのだ。

たった半年の間に、ナカツチャンは、天性の敏捷さと感のよさでめきめき腕を上げ、いまや、年長の少年でさえもナカツチャンに敵うものはない。最近では、ナカツチャンに「突き」を教えた。

ナカツチャンが、直径50cm程の木に向かって、「ニッポーンツ！」の気合と共に突きを入れる姿には鬼気迫るものがあった。郷戸は、ナカツチャンが剣とムエタイを同時に使いこなすように

なるまでにそう時間はかかるないだろ？と思つた。

ナカツ チヤンが日本人になれる可能性はない。ナカツ チヤンは、いつかそれに気がつくだろう。いや、もう気がついているのかもしない。

郷戸は、ナカツ チヤンが玉木の言いつけを守り、ひたすら練習に励む姿を見るのが辛<sup>つら</sup>くなつてきた。

1995年（平成7年）5月 タイ チェンマイ（郷戸がチエンマイにいた23年後）

山口は任務に失敗した。何年にも渡り警護していた被警護者が死亡したのだ。台湾の世論をリードしている重要人物だつた。ホテルからストレッチャーに載せられて搬送されている姿には生氣<sup>せいき</sup>はなかつた。

山口は任務に失敗した。何年にも渡り警護していた被警護者が死亡したのだ。台湾の世論をリードしている重要人物だつた。ホテルからストレッチャーに載せられて搬送されている姿には生氣<sup>せいき</sup>はなかつた。

「奴らだ」山口は直感した。「奴らが殺<sup>や</sup>つたに違<sup>う</sup>いない」しかし、非警護者が死亡した時点で山口の任務は終了<sup>あた</sup>する。山口の任務は被警護者を中国の拉致から守ることだった。その意味では任務は「失敗」とはいえないかもしれない。

山口は身の危険を感じ、今からチエンマイを去<sup>り</sup>りうと思つた。

メーピンホテルの前を左に歩き、服や民芸品などのみやげ物を売つて<sup>る</sup>いる屋台が何百軒も続くナイトバザールの人混みに紛れた。

山口は自分の体調が悪いことに気がついていた。数ヶ月前から夕方になると時々微熱が出るようになつていて。今年に入つてからは特にその頻度が上がり、ほとんど毎日のように熱と咳が出る。今も、足元がふらつく。熱っぽい頭に左手を当てた時、

「動かないで下さい」背後から硬いものを背中に突きつけられた。

山口はすぐにそれが拳銃であることに気がついた。背後の男は、すばやく山口の腰、脇を探つた。そして、ひとりが後ろからベルトを掴み、もう1人は利き腕の右腕を掴んだ。

「動かないで下さい。山口さん」男は日本語で山口の名前を呼んだ。

「全てはお見通しつて訳か」軽く頭を右に回し顔を確認しようとしが、グイツ、と銃口に力を込められて、後ろは向けなかつた。

「そ、です」冷たい声だ。

「そのまま、ますぐ歩いてください」男達は3人だ。話している男は右後ろにいる。

「山口さん。この先の川に沈んでください。さよならです」

「ゴホッ、ゴホッ」山口は咳をした。

「大丈夫ですか、山口さん。風邪、ひきましたか？」男は笑いを含んだ声で言つた。それを聞いた一人も、

「ふふつ」と笑いを漏らした。

「熱い体には、川の中、ちょうど、いいですね」「教えてくれないか？」山口は、ゆつくりと落ち着いた声で言った。

「なんですか？山口さん」男は山口との会話を楽しむかのようには裕を持った声で応えた。

「お前たちが殺つたのか？」山口の声には幾分力がこもつた。

「違います。私達ではありません」と、男は、すぐさま否定した。

「ん？じゃあ、お前たちは？」山口は立ち止まつた。

「私達の仕事、死んだ、の確認と証拠の隠滅です」拳銃を持った男が、グイ、と背中を押した。

男が、グイ、と背中を押した。

「証拠？」山口は右を見て男の顔を見た。

「あなたです。山口さん。あなた、証拠です」男は髪の毛をきち  
つと七三に分けて整髪料で撫で付けていた。

「俺が？」そう言って再び立ち止まろうとしたが、後ろの男に押  
された。

「死んだ、の確認しました。次の仕事、証拠の隠滅です」  
そして、冷たい声で男は続けた。

「山口さん。あなた、隠滅したら、私達、タイのビールでカンペ  
ー（乾杯）します。ふふつ」

「あんた、日本語つまいな。ビビで留つた？」後ろの男は右手で  
ベルトを握っている。ということは銃は左手にあるということか。  
山口は現状を分析した。

「ありがとうございます。一所懸命勉強しました。国のために」  
「教えてやるつ。いつこう場合は、俺は、証拠、じゃなく、証人、  
というべきだろつな」山口の右腕を握っている男の手は左手だ。

「ありがとうございます。山口さん。あなた日本に帰つたら、病院  
行きますね。熱、ありますから」

さつきからペラペラしゃべっている男は、腕を握っている男の右  
後ろにいる。

「そすると、あなたの体の中から証拠出でくるかもしれない。だ  
から、山口さん。あなた、証拠です」

「？・・・」

「そうかーそうこう訳かー」この時、山口は全てを理解した。

「ビビでやつた？」いつ感染したんだら、山口は記憶を手繕つ  
た。

「分かりません」男は、静かに言った。

「山口さん。あなた。あの人の巻き添えです。巻き添え、この言葉、正しいですか？ふたりが同じ病気だと分かること、都合良くなっています」

ナイトバザールの賑わいから外れて狭いビルの隙間にに入った。この路地を抜けた先がビン川だ。

男達三人が同時に動くことは出来ない狭い路地は山口にとつて有利だ。山口は「今しかない」と思つた。

「ゴホツ、ゴホツ」と咳き込んだふりをして体を前に倒しながら左へ体を回し、左手で男の持つている銃の弾倉を握り、銃口を上へ向けた。銃は消音器付であつた。男はとつさに引き金を引いたが、レンコンが回転せず発射できない。

山口は、そのまま、体を回転させて、右にいた二人の男に銃を持つた男の体を押し付け、レンガ壁に強くぶつけた。男達を壁に押さえつけると同時に、右膝を男のみぞおちにめり込ませ、前かがみになつた男の後ろにいた男の鼻筋に右拳みきげんを放はなつた。

その時、右後ろにいた男の右手刀が山口の左顔面をとらえ、左拳を顔面に向けて突き出してきた。山口はからうじてそれを右腕で払つた。男は右手を左懷に手を差し入れ拳銃を抜こうとした。男の顔面に隙が出来、そこを狙つて山口得意の右正拳を放つた。しかし、男は右手でそれを払い、左拳を突き出した。それは他の男達の体に邪魔され距離が不足していたものの、山口の顔面をとらえ、山口は鼻から生暖かいものが、バツ、と流れ出るのを感じた。

山口は左手で掴んでいた男の手首をひねり、拳銃を奪い、右膝をもう一度拳銃を持っていた男の腹にめり込ませた。すぐに右肘を先

ほど鼻を潰した男の左顔面に見舞つと、一人の男は同時にその場に崩れ落ちた。

山口が拳銃を抜こうとした男の眉間に銃口を突きつけるよりも男は一瞬速く拳銃を抜き出し、山口の腹に向かつて発射した。

「ブシュッ！！」

山口は後ろに倒れながらも右足で男の右腕を蹴り上げた。男の手からは拳銃が回転しながら飛び、2m先に落ちた。

そのまま山口は反対側の壁に背を当てて座り込む格好になつた。右手で腹を押さえ、左手の銃口は男に向かれている。

「山口さん。強いですね。若いときは、もつと、強かつたですね」男は両手を上げ、唇の左端を吊り上げながら言つた。

「ゴホッ、ゴホッ」顔が火照る。

「山口さん。血です。たくさんです」男は心配そうな声色を使つた。

「どうしてすぐ撃たないのですか？さきも、銃口をここに当て……」

「そう言つて、左手を自分の眉間に当て、

「・・・すぐに撃たなかつたのですか。私、すぐ撃ちます」

「ふ、俺は、お前と違つて、人殺しじゃないんだ」

「ありがとうございます。助かります」

「ゴホッ、ゴホッ」胸が苦しい。

「大丈夫ですか？」男はそう言いながら、先に転んでいる銃の位置を目の端で確認した。

大通りからは観光客の賑やかな声が聞こえてくる。英語、フラン

ス語、日本語も聞こえてくる。遠くから密寄せのタイ音楽も風に乗つて聞こえてくる。

「山口さんの右の突き、強いです」男は顎で、腹を押さえている山口の右手を指した。

「山口さん。右利きです。あなた、今、銃を左手で持てます」そう言つと、顔を大きく左右に揺らし、悲しそうな顔をして、

「撃ても、当りません」

「どうかな、ゴホッ・・・」

山口は、背中を壁に押し当てたまま立ち上がりつとした。男は、男の足元で気絶している男を左足で蹴り上げ、蹴られた男が「ウーッ」と声をあげ、山口がほんの一瞬それに気をとられた時、男は右側方に頭から飛び、地面で1回転して落ちた拳銃を拾い上げた。

山口は男に向け拳銃を発射した。「バン」、「チン」と弾は壁に当つて跳ね返つた。

山口は倒れこんでいるふたりの男の体の陰に飛び込んだ。

「フシコ」「フシコ」

男は仲間には構うことなく2発撃つた。一発は倒れた男の腹に当たり、男は「ウッ」と低い声を上げ、苦痛で目を覚ました。

もう一発が山口の左肩を貫通した。

「山口さん。も終わつです」銃口を山口に向けたままゆっくりと立ち上がつた。

「そうだな。終わつにしよう」山口も銃口は男に向け、右腕を腹を撃たれて苦しんでいる男の首に回しこんで一緒に立ち上がつた。

す

「」の男の頭なら飛ばせるぜ」銃口を立ち上がらせた男の頭に、「ゴリッ、と、突きつけ、そのままの体勢で、倒れているもう1人の男顔面を右足で蹴り、悶絶させた。

「ダメです。山口さん。あなた、さき、言つた。人殺しじゃない、と」男は、ふふつ、と笑つた。

「私、撃てます」そう言つと、「プシュッ」と、山口が楯にして抱えている男の腹に弾を撃ち込んだ。男の体重がズシリと山口の右腕にかかりってきた。

山口は銃口を男に向かって、抱えていた男を突き飛ばし、建物の陰の中で前転しながら路地を抜けた。脇を「チンツ」「チンツ」と弾が跳ねる音と共に火花が飛んだ。

山口は振り返つて一発発射した。「バンッ」

男は一発撃ち返した。「プシュッ」その一発が山口の左太腿を貫通した。左手を腹に当てるべつとりとシャワーを浴びたように濡れていた。鼻から口に入った血を「ペツ」と吐き出しがすぐに流れ込んでくる。呼吸が苦しいのは、熱のせいだけではなかつた。

男も壁に身を同化させ陰の中で」ちらを窺つてゐる。

川の流れる大通りから一台のトウクトウクのエンジン音が近づいてきた。トウクトウクのライトが男の顔を照らした瞬間山口は大通りに転がり出て、脚を引き摺りながら走つた。突然、右肩に激痛が走つた。男の撃つた弾が当つたのだ。そして、拳銃を川に落として

しまった。

「しまった」

「タタタッ」男が山口のすぐ後ろにまで迫ってきた。覚悟を決めた。山口は立ち止まり振り返った。山口の足元には夥しい血が滴り落ちている。

男はゆっくりと近づいてきた。右手に持った銃のスライドは開いたままだ。

「山口さん。私、8発も撃ってしまいました」そう言って、拳銃を川に向かつて放つた。闇の中で「ボチャン」と音がした。

「水はジュブンですね。首を絞めて、沈めます」そう言って「ふふつ」と笑つた。

男は上着を脱いで後ろに、スルッ、と、落とし、山口を睨みながら、両肩を回し、膝の屈伸運動を始めた。やがて、トン、トン、と軽く飛び跳ねながら山口に近づいてきた。

山口も上着を脱ぎ、そのポケットからいつも持ち歩いている黒帯を取り出し、その黒帯で上着を胴体に巻きつけた。

山口の両肩、左太腿には激痛が走り、腹からの血は止まらない。足元には血溜まりが出来つつあつた。遠のいて行く意識の中で、「今までで最強の奴だ」と思った。山口は中段の構えを取つた。

男は軽く跳ねながら徐々に距離をつめ、右の回し蹴りを山口の左足に放つた。山口が大きく左に傾いたところで、そのまま回転した

男は左後ろ回し蹴りを山口の左頭部に打ち込んだ。からうじて左手で防ぎ、左肩の激痛に耐えながら男の顔面めがけて右正面打ちを放つた。しかし、男はそれを軽くかわしながら、左足を山口の腹にめり込ませた。「ゴフッ！」山口は堪らず前かがみに倒れこんだ。

男は、ポーン、と、山口を飛び越し、山口の背後から右腕を首に絡ませてきた。

「グッ」しまった、山口は思った。

「山口さん。あなたには、恨みありません」そう言いながら、山口の首に回した腕に力を込めた。

「さ・よ・う・な・ら、山口さん」

山口は息が出来るように両手を首に巻きつけられた男の腕と首の間に差し込んだ。しかし、男の力はさらに強まり、山口の意識は遠くなつた。

山口は、首と腕の間から左手を抜き、ググッ、と拳を握つて、親指を立て、渾身の力を込めて自分の頭の後にある男の顔めがけて裏拳の要領で打ち込んだ。

男は、「ギャッ！」と、悲鳴を上げて山口の首に巻きつけていた腕を外し、左目に手を当て立ち上がった。目に当てた手の指の隙間からポタポタと血が垂れ始めた。

路地から気絶していた男がふらつきながら出てきた。手には拳銃を握っている。山口の後に立ち、目を押さえていた男がなにやら中國語で言つと、その男は、拳銃を構え、通りに出てきた。

その時、荷物を満載したトラックが「ビツ、ビー」、とクラクションを鳴らしながらその男の前で急停車した。運転席からタイ人が

飛び出してきて、なにやら男に怒鳴っている。男はそのタイ人を殴りつけた。殴られたタイ人は地面に倒れこんだが、すぐに起き上がり、なにやら言いながら、ムエタイの構えを取つた。

同時に運転していた男も助手席から降りたが、目を押さえていた男が中国語で何か言つと、拳銃を持っていた男は躊躇なく、ムエタイの構えを取つていた男の腹に拳銃を発射し、そのまま、山口の方へ歩み寄り、銃口を山口の眉間に向け、引き金を引いた。

「プシュッ」サイレンサーで消された発射音が山口の耳に聞こえた。

発射音は山口の足元から聞こえた。

助手席から降りてきた男が持つていた棒で腕を打ちつけたのだ。

山口の意識はすでに朦朧もうりょうとし、瞼まぶたは半分まで閉じている。

その山口の耳にタイ語と中国語が聞こえてきた。その会話はやがて日本語に変わつた。

「邪魔をしないで下さい。その友達を早く病院へ連れて行きなさい」男は左目に手を当て、苦痛でギリギリと歯をかみ締めながら言つた。

「お前は日本人か?」ハ双はうの構えを取つている痩せぎすの長身の男は落ち着いた声で言つた。

「あなたにいう必要はありません」顔を下に向かながらも右目で男を睨み付けた。

「その男は日本人か?」そう言つてトラックから降りた男は顔を山口に向かた。

「あなたには関係のないことです」青白くなつた顔がヘッドライ

トの中に浮かび上がった。

腕を打ちつけられた男が左回し蹴りを放つたが、男がヒラリと身をかわすとその足は空を切つた。空を切つた足の脛は棒で打ち据えられ、体重の乗つた右足が払われると、そのまま倒れ込み、隙だらけになつたみぞおちに棒を持った男の右膝が落ちて来た。男は「グツ」という声と泡を吐いて動かなくなつた。

左田を山口に潰された男は、ころがつている拳銃を拾いに左へ飛んだ。男は棒を持った男は地面を蹴つた。

「ザツ」「バシツ」

山口はついに気を失つた。闇の中で、

「ニッポーン！」と言つ声を聞いた様な気がした。

片田の男は拳銃を掴もつと伸ばした腕を引っ込め、投げ出した体を2回転させ立ち上がつた。そのまま腕を伸ばしたら拳銃を掴んだ腕は、鋭い一撃を受けていただろづ。

男達は3mの間を保つた。

やがて車やトウクトウクが異変に気がつき1台、2台と停まり始めた。

片田の男は左目から血を滴らせながら低く腰をおろして左手を前突き出し、右手は腰に構えてジリジリと足を横に滑らせ間合いを計つていい。棒を手にしている男は、再び八双の構えを取り、左足を半歩前に進めた。その瞬間、片田の男の左足が空気を切り裂く音を発すると同時にその左足をすべった。

それは「ニッポーン！」という気合で片田の男の左肩に棒が振

り下ろされたのと同時に、片田の男はそのまま棒を持った男の腕を抱え込み、体をひねつて腰を潜り込ませ、右腕を男の脇の下に差し込んで一本背負いをかけた。棒を持ったまま男は宙で回転して地面に蹲踞そんきよの姿勢で降り立つた。

野次馬が増えてきた。

「この勝負はまたにしましょう」片田の男は2、3歩下がり、地面に転がっている男を起こし、暗い路地裏へ姿を消した。

黒い泥の中、手足を動かしているような感覚が山口を支配していた。

「このまま闇の中に吸い込まれていくのだろうか？」薄く残つて、意識の中で山口は泥と光の闇でもがいていた。

「山口さん、私は悲しいです」テレサはそう言つた。ここはどこだ？ そうだ、平和公園だ。テレサは慰靈碑の前で祈りをささげる老婦人の腕のケロイドをなでながら涙を流した。そしてテレサは闇の中に消えていった。そうだ。俺も彼女の後を追つていかなきやいけない。足を闇の中に差し入れた。ん？ あれは？ 神田かみたじゃないか？ 「おい、神田」思わず声をかけた。

激痛が右肩を襲つた。

「大丈夫ですか？」

「ん？ ここは？」

「大分うなされてたね。でも大丈夫だよ。あなた頑丈がんじょうだからね」

「気がつきましたか？」白髪の老人が入ってきた。

「あなたは？」そう言いながら起き上がりうつしたが、体中に痛みが走り、力も入らない。

「そのまままで」と手で制し、

「まだ無理をしてはいけません」老人は山口の体を支えながら寝かした。そして、両肩、左太腿、腹、と順番に包帯を取つて、傷口を確認し、塗り薬を塗つた布を交換した。

「さ、これを飲みなさい」そう言いながら、緑色の液体が入つた湯飲みを口元に持つてきた。

「和司君」そう言つと、和司と呼ばれた男は液体を飲みやすいように山口の頭を支えて少し起こした。

「ここは？」山口は液体を飲み干し、体を支えている男に聞いた。

「ここは山の中だよ。あいつらもここまでは追つてこないと思うよ」そう言いながら山口の体をやさしく横にさせた。

「あなたが私を助けてくれたのですか？」横になつたまま、座つている男に聞いた。

細身だが鍛え抜かれた鞭のような体はシャツの上からでも分かつた。

「助けたんじゃないよ。あいつらは、ボクの友達を殺したんだ」和司と呼ばれた男はつらそうに顔を伏せた。

「じゃあ、あの時撃たれた人は・・・」

「死んだよ」

「すまない。私のせいだ」山口は顔を伏せた。

「それは違うよ」男は顔を上げ、山口の目を見つめて言つた。

山口は急に眠くなつてきた。

「ゆっくり眠りなさい」白髪の老人の声が聞こえた。

山口は、1ヵ月ぐらいいしてようやく歩けるようになった。そして、だんだんと様子が分かつってきた。

山口のいる町は、中国人町であった。1949年の中華人民共和国の誕生に伴い、蒋介石率いる国民党は政府を南京から台湾に移した。その際、多くの国民党支持者も台湾に移つたが、同時に、ミャンマー やタイへ移動した者も多く、彼らは国境近辺に町を形成したのだ。

今、山口のいる町はそのいくつもある町のひとつだ。住民達の容貌は他の町の住民とは明らかに違い、会話は中国語だ。

そして、山口の傷の手当をしてくれている男は江下寛一という日本人であった。彼もまた数奇な運命を受け入れて生きていた。

「山口さん。私はもともと移民でね。アメリカのシアトルで育つたんですよ」山口の傷の手当をしながら江下は身の上話を時々するようになった。

「20歳前の頃、東京でオリンピックが開かれると言つのでね、日本へ帰つたら、戦争が始まつてね。アメリカにも帰れなくなつて、兵隊にとられて、朝鮮からビルマに回されたんです」

「インペール作戦で負けて、ビルマ軍やイギリス軍に追つかれで、やつとタイに逃げてきて、そのままここに落ち着いてしまつたんです」

「いまじゃ、こつちに女房も子供もいます」

「実家が漢方屋だったもんで、見よが見まねで覚えた薬草の使い方がこのあたりの中国人に気に入られて重宝がられているんですよ」

江下から途切れ途切れに聞いた話は、激動する歴史の中で過酷な運命を受け入れざるを得なかつた若者の人生だつた。

傷の状態は大分良くなり、咳と微熱も江下の調合してくれる飲み薬で治まりつつあった。

この町並みには記憶があった。以前テレサと来た町だ。彼女がこの中国人町の存在を知り、どうしても訪ねたいと言い出し、いつも食事をしていたレストランのオーナーの案内で訪れたことがある。そして、彼女は、この辺境の地でたくましく生きている同胞を見て感動し、この町の学校にいくらかの寄付をした。

山口は、彼女ほど感情の豊かな女性には会った事がなかった。歌っている時も感情が高ぶると大粒の涙を流した。そして、天安門広場の血の弾圧事件直前の香港でも、広島の平和公園でも。

「起きていて大丈夫ですか？」山口の後から江下の声がした。  
「ノックもせず失礼しました。お休みかと思いまして」ドアの前にトレーに薬を載せた江下が立っていた。

「ありがとうございます。大分良くなりました。江下さんのお陰です。命の恩人です」山口は椅子から立ち上がり深く頭を下げた。

「いいえ、命の恩人は私でなく、和司ですよ」そう言いながら、トレーをそばのテーブルの上に置いた。

「そう言えば、最近見かけませんね」山口は、頭を下げながら、聞いた。

「いま、彼には頼み事をしているんですよ」江下は、窓際に行き、カーテンを少し引いて光を遮った。

「頼み事？」

「はい。調合した薬を届けに行つてもらっています」

「少し遠ですから、まだしばらくは帰つてこないと思います」

「熱はどうですか」そう言つて江下は山口の額に手をやつて、  
「大分いいようですね。でも、もうしばらくは安静にしていく  
ださい」

山口は、

「はい。何から何までありがとうございます」と、深く頭を下げ  
た。

「じゃあ、お邪魔しました」江下はそう言つと、中国語の新聞を  
ベッドの上にさりげなく置いて部屋を出て行つた。

その新聞は、テレサの葬儀は5月28日に政府要人も列席して國  
葬並みの扱いで行われたことを報じていた。山口にはその報道は台  
湾が大陸の中国人に対して呼びかけたもののように思えた。

「彼女の純真な心は最後まで政治の駆け引きに利用されてしまつ  
たのではないだろうか?」「時の流れに身を任せ」が追悼式に流さ  
れたという記事に、山口は、彼女の運命を感じた。

いつもより長めのスコールが止んだある日、江下が慌てた様子で  
部屋に入ってきた。

「山口さん。大変なことが起きました」真つ青な顔をしている。  
「何ですか?どうしました?」山口はちよつと中国茶を飲んでい  
るところだった。

「和司が殺されました」江下はそう言つと、頭を抱えてへナへナ  
と椅子に座り込んだ。

「えつ!」手に持つていた湯飲みのお茶がこぼれた。

「どう言つ事ですか？」山口大河やまぐちたいがは、こぼれたお茶で濡れた湯飲みをテーブルの上に置いた。

「和司と一緒に行つたメオがたつた今ふらふらになつて帰つてきて、和司が殺されたと言うのです」青い顔のまま山口を見上げた。

「和司とメオには、薬を届けるように頼んでいたのです」そう言つて白髪の頭を抱え込んだ。

「その途中で生まれ故郷の村に寄つたところ、誰かに撃ち殺されたと言うのです」

「何故？一体何が起つたのですか？」あの和司は、ちょっとやそつとのことで殺される男ではない。

「メオも取り乱してよく分からぬのですが、中国人に襲われたらしいのです」

「中国人？」

「片目の中中国人です」

「！」山口にはすぐに和司を殺した男の顔が浮かんだ。

## 死闘！！チエンマイ

和司は江下えげから頼まれた薬を届けるためミャンマー国境の手前にある、幼い頃に家族と共に過ごした村に立ち寄った。今回はいつもより少しだけ長い旅になる筈だった。

和司は旅の途中、近くを通りの時は、時々、この廃村へ立ち寄つて一晩を過ごす。からうじて和司達が寝起きしていた家屋だけが何とか夜露をしのげるのだ。今は、家族はチエンマイ郊外に独立した家を持ち、暮らしている。当時一緒に暮らしていた親戚の者もそれぞれが独立した家を持ち、畑たがやを耕したり、商売をしながら幸せな生活を送っている。

一方で、玉木が和司に託した夢の実現のため、山岳民族の独立運動にも力を貸し、今は医薬品と食料の提供が主な仕事になっている。和司には難しいことは分からぬが、日本人の江下に力を貸し、共に働くことだけが自分自身の存在を確認する唯一の方法のように思えた。

今回も仲間のメオと一緒にこの村に立ち寄った。

トラックを村の入り口に停め、そこから、大きく枝を広げた木を見つめた。ここに立つと和司は、その大きく広げた枝の下で、郷戸と共に素振りをしていたことをいつも懐かしく思い出す。郷戸が村を去つてからも和司は「日本人」になるために、来る日も来る日もその木に向かつて「突き」を繰り返した。

その穴はやがて貫通し、穴は和司の成長と共に縦に広がつていった。そしてその木は今もこうして大きく枝を張り、青々とした葉は太陽に輝いている。

和司はここで、今では大木となつた木を見るのが楽しみだつた。

メオは下の川へ水を汲みに行つた。和司はその間に夕食の準備をするつもりで、トラックの荷台から野菜と米の入つた袋と鍋を取り出した。

その時、トラックのエンジン音が道の向こうから聞こえてきた。

空が急速に曇ってきた。

「誰だろう?」米袋と鍋を荷台に戻した。

「こんなところまで来る人間はいないはずだ。道にでも迷つたのだろうか」と和司は思い、エンジン音のする方角を見つめ、郷戸が和司に残していった仕込み杖を、助手席から荷台に移した。

トラックは、車体を大きくバウンドさせ、埃を舞い上げてこちらに向かってきた。そして、和司のトラックの後につけると「ブルン」と大きく車体を揺らして停まった。

舞い上がる薄茶色の埃の中から小太りの男が現れ、タイ語で「今晩ここに停めてもらえないだろうか?」と尋ねた。和司は、「いいよ」と言つた時、助手席から左目に黒革の眼帯をした男が降りてきた。

「「J」れは偶然ですね。あなた方を捜していました」嬉しそうにそう言つて、辺りを見回し、

「山口さんは？」と言ひながら、懐から拳銃を抜き出した。

「山口さんは……死んだよ」和司は田の端で、最初に話しかけてきた男も腰のベルトから拳銃を抜き出すのを見た。荷台からも男が降りてきた。

「死んだ？ いつですか？」男は、怪訝そうに眼帯の上の眉毛を動かした。

「あの2日後だよ」和司はトラックのタイヤにさづげなく片足をかけた。

「もし、そなら、私は幸せですが、証拠はありますか？」片目男は左手を、銃把を握つていて右手を包むようにして、胸元に構えた。

「お墓もあるよ」  
「どこに？」

和司は視線を左に向け、

「この先の中国人村だよ」と言つた。

山の向こうから雲が近づいて来た。

片目男は、和司から視線を逸<sup>そ</sup>らさなかつた。

「ふふつ、私は、そんな国民党の村には行きたくありません」

「あなたは、タイ人ですか、日本人ですか？」片目男は不思議そ  
うな顔をして聞いた。

「……ボクはニッポン人だ」和司は銃を握る男の人差し指をじ  
つと見詰めた。

「残念です。私は日本鬼子<sup>リーベンクイズ</sup>が嫌いですから」そう言つと片目男は銃口を和司に向け躊躇<sup>ためら</sup>いもなく引き金を絞つた。

「バーン！！」

和司は片目男の指が動く直前にトラックの荷台の中に転がり込みそのまま仕込み杖を掴んで反対側に飛び出た。まさに風の動きであ

つた。

突然、凄まじいスコールがやつてきた。

肌をも射抜くほどの勢いで無数の雨槍は景色を縦に切り裂き、一瞬にして1m先も見えなくなつた。村の道は見る間に泥川と化し、つい先ほどまで舞い上がつていた赤い砂埃は粘土の様に足に絡まり始めた。

男達は拳銃を発射し始めたが、天空から泥川に激しく水しぶきを上げて突き刺さる雨槍の中では狙いの定めようがなく、ただ、影に向かつて闇雲に弾丸を発射した。

和司は泥の中を前転しながら、以前は倉庫に使つていた家の裏に廻り込み、家畜の柵の補修用に保管されていた竹を仕込み杖でスパッと斜めに切り、あつという間に数十本になつた竹やりを小脇に抱え屋根の上に登つた。

スコールは長くは続かない。和司は、仕込み杖をベルトの背中側に差込み、竹槍をまとめて屋根の上に突き立てた。そして、雨でベツタリと体に張り付いた薄い木綿のシャツを引き裂き体の自由を確保した。

男達はトラックの陰に身を伏せ、目の上に手をかざして和司の消えた方向を凝視した。雨はますます激しさを増して來た。鋭い刺激が体中に突き刺さる。その時ひとりの男が「ギャーッ」と悲鳴を上げて銃を放り投げその場に立ち尽くした。

他の男には何が起こつたのかわからなかつたが、すぐに、降り注

ぐ雨に混じつて空から竹槍が降っているのに気付き、男たちの顔は恐怖にゆがんだ。最初に悲鳴をあげた男の足は竹槍で地面と縫い合わされていた。

「ザーッ」という雨音の中で男たちの周りには次々と槍が突き刺さつた。激しい雨音で男たちの怒声はかき消され、再び「ギャーッ！…」と言ひ悲鳴と共に、竹槍が肩に刺さつた男が片目男の目の前に雨の幕を破つて突き出てきた。

片目男は、その男を突き飛ばし、トラックの車体の下に潜り込んだ。

車体の下で伏せている男の体は半分ほど泥水に埋まっている。「ババババ」と絶え間なく叩きつける雨音に混じつて、時折、「バシ、バシ」と荷台をも貫くような音が体に伝わって来る。

和司は屋根から飛び降り、泥の川に身を伏せ、そのまま泥の塊になつてゆつくりとトラックに近づいた。「ズル、ビシャ・・・」

片目男は全身で周囲の音を聞いていた。連續して泥に突き刺さる雨音の中から「ビシャ、ビシャ」と生き物が泥の中で進む音が聞こえた。やがてその音はちら先で止まつた。

和司の前を覆う白い滝を通してトラックの影が見える。「ザーッ」全身を泥にしてジッとその影を見つめ、背中の仕込み杖に手をかけた。

トラックのタイヤの陰から一つの目が一つの方向を見つめていた。

その一本の視線の先には、白い雨飛沫あめしぶきで浮き上がった人間の体があつた。

片田男は銃口を白く浮かび上がる輪郭に向けた。

和司は、トラックの荷台の下の片田を確認した。そして、ひだりひざに深く泥の中に沈みこみ、右手で背中の仕込み杖を握り、左肘と両膝ひだりひじ うりうひざで泥をかいだ。「エシャツ」

一年に一度の猛烈なスコールであつた。風もなく、ただ、ただ、一直線に空から地面に突き刺さる雨槍あまやりは地上の全ての音を搔き消し泥と共に流しちぎっている。

しかし、片田男は、田の前の生き物が動く音を全身で捉えていた。「よし、もう少し来い」泥に浸かつた唇の中の、硬く喰いしばった歯の中は渴きをっていた。

和司は仕込みを、「シュラッ」と、抜いた。雨粒が光となつて刃やいばを浮き上がらせた。

片田男には、豪雨の中に浮かび上がつた刃やいばはコブラが跳躍した時に見せる白い腹に見えた。

引き金を絞つた。

「バンッ！」スコールの中に乾いた音は飲み込まれた。

右耳が一瞬にして吹き飛ばされるのと、和司が泥の中から立ち上がり、トランクに向かつて走り始めたのが同時であった。

「バンッ」2発目は和司の右膝を撃ち抜き、和司は体勢を崩した。

「バンッ」3発目は和司の右脇腹を貫通した。

倒れながらも両手で握った仕込みを荷台下へ突っ込んだ。「バシユッ」、タイヤを突き抜け、切先は片目男の頬をかすつた。片目男は泥の塊になつて反対側から転がり出て体勢を整え、4発目を発射した。「バンッ」

「キーン」高い音と共に弾丸は和司が振り上げた刃に当たり跳ね返つた。片目男の一瞬の怯みを捉え、和司はタイヤを蹴つて雨に向かつて飛び上がつた。

「ニッポンッ！」

氣合と共に振り下ろした刃を、「ギンッ！」、片目男はトカレフで受け止めた。雲の切れ間から差し込む夕陽が雨粒に濡れた仕込に映り込んだ。

和司は上からギリギリとトカレフごと押し付け、左肘を眼帯の左目に打ちこんだ。

「グッ！」片目男の力が一瞬抜けた時、片目男の手首をひねつてトカレフを奪い、前蹴りをみぞおちに放ち、男を突き飛ばした。

片目男は、泥の中を「ザザーン」と3m先へ、泥の幕を拡げながら滑つていった。

全身から泥水を滴らせ、片田男はゆっくりと立ち上がり、「ペツ」と、口の中の泥を吐き出し、左手刀を前に、右拳を腰に構えた。

「素手で闘る」ということか」和司は奪い取ったトカレフを投げ捨て、仕込みを鞘に納め、かつて、突きの練習に励んだ大木に立掛けた。

雨は突然止み、薄田が差し始めたが、男達の足は依然として泥流でいりゅうの中にある。泥の流れは大地の切れ目を幾筋もの帯となり、時折り小枝や口の欠けた食器を運んでくる。

「バーンッ」

一発の銃声が夕陽の中に響き渡つた。

和司の放つた竹槍で足を刺された男が両手でトカレフを握り締め、和司の後に立っていた。弾は背後から和司の胸を貫通した。

和司はゆっくりと振り向き、大木に立掛けてあつた仕込に手を伸ばした。再び、

「バーンッ」非情な銃声が鳴り響き、弾はじき出された薬莢やく莢が泥の中に沈んだ。

伸ばした手が仕込みに届く前に和司は大きく体をくねらせ泥の中に大の字に倒れた。バツシャーン。

片田男は和司に近づき、無言のまましばらく見下ろし、跪ひざまずいて首筋に手を当て死を確認した。足を刺された男が、竹槍で体を支え、泥の中で足を引き摺りながら和司に近づき、「ペツ」と、和司の顔に唾を吐きかけた。「パンツ！」片田男は男の顔を平手で殴り、和司の見開いた目を閉じさせた。

薄茶けた無数の泡を浮かべた泥流は、どこかどこかで淀みながら赤い大地の表面を洗い流し終えると、いつものように消え去り、男達もトラックを大きく揺らせ去つて行つた。トラックが跳ね上げた泥水が斜面の下に身を隠していたメオにかかった。

メオは恐怖で身動きが出来なかつたが、ようやく和司のもとに駆け寄つた。

風が東から吹き、立て掛けた仕込杖が和司の体の上に倒れ、夕陽は、大木の裂け目から倒れている和司の体に射し込んだ。

その赤い一筋の光は和司の眉間から胸を通り、まるで和司の体をふたつに分けているかのようであつた。

町は悲しみで覆われていた。

和司の盛大な葬儀から一ヶ月が過ぎた頃、江下寛一は旅支度を始めた。江下は和司が届ける予定だつた薬品を自らが届けようとしていた。

「江下さん、その仕事、私にやらせて下さい」山口大河は江下に言った。

「え、しかし・・・」机で薬品のリストをチェックしていた江下は顔を上げ、困惑の表情を浮かべた。

「このままでは私の気持ちが治まりません。ぜひやらせて下さい。それに、江下さんが不在になると何かと不都合が起きるんじゃないですか？」

山口にとつて和司は命の恩人である。しかも、その命の恩人を殺したのが、何ヶ月か前に山口の命を奪おうとしていた男である。和司がいなければ間違いなく今の山口はいない。それに、テレサの死にも関わっている男だ。このままにしてはおけない。

「・・・」江下は、椅子に座つたまま、目を閉じて腕組みをした。

しばらくの後、江下は山口の田を見つめながら立ち上がり、

「分かりました。お願いします。ありがとうございます」山口の手を右手を取り、両手で覆うように握り締め、頭を下げた。

山口もうれしそうに頭を下げ、左手を江下の手の上から握り締め力をこめた。

江下は、山口に、そばにあつた椅子に座るよつに促し、自らも椅子に腰掛けた。そして、

「ここで少し、私がやつてることをお話しなければなりません」と、改まった声で言った。

「辻政信という男をご存知ですか？」

「はい、確か旧陸軍の参謀でノモンハン事件やインパール作戦の立案者のひとりだと……」

そして、さらに

「戦後は国會議員になり、その後、ラオスで行方不明になつたといふ噂ですが、・・・その辺のことですか？」と続けた。山口には江下が話そうとしていることとどういう関係があるのでどうかと思いつながらも、部屋の隅にあつたパイプ椅子を持ち、江下の近くに戻つた。

「そうです。実は、私が彼をラオスへ入国させる手筈を整えたのです」江下は丸いすの上で背筋を伸ばしたまま言った。

「えつ！？」山口はパイプ椅子に座りかけたまま江下の顔を見た。

「彼が、国會議員の身分でありながら、その身分を隠し再びタイからラオスへ訪問した目的は、ベトナムに隠した金塊を手に入れることだつたのですよ」江下は淡々と話し始めた。

「それは・・・」山口の質問を遮り<sup>さえぎ</sup>て江下はさらに続けた。

「しかし、スパイ容疑で捕らえられ、その際には、ホーチミンと取引でもしようとしたようですが・・・」そう言つと腕組みをして天井を見上げ、

「その後は行方不明・・・といつことになつていてます」そう言つて再び山口の目を見つめた。

「そのことと今回の私の仕事が何か関わりが・・・

「あります」

「え？」

「その金塊は私が持っています」江下は顔を山口に近づけ、押し殺した声で言つた。

「えつ！？何ですつて！？」思わず山口は身を仰け反らせた。

「全部かどうかは分かりません、しかし、それでも相当な金額になります」江下は両肘を両膝に乗せ、体をかがめて重い声で言つた。

「まさか金塊を運ぶのが仕事というわけじゃあ・・・」山口のつろたえは声に出た。

「ははは、今回、山口さんにお願ひするのは、私が調合した薬や医薬品です」やつぱり、山口の膝を「ポン、ポン」と軽く叩いた。

「私はこの金塊で山岳民族を救いたいのです。アジアには虐げられた山岳民族がたくさんいます。大国の陰で少数民族はいつも犠牲になつていています」いつものように穏やかな口調に戻つて話を続けた。  
「シッキムは独立に失敗しインドに併合されましたが、中国はチベットに侵攻し、何百万人ものチベット人を殺戮しています。その後もシッキムに手を出そうとしましたが、これには失敗しました」江下は眉間に皺を寄せ、再び強い口調で言つた。

「しかし、彼らは狙つていますよ。様々の方法で」

「山口さんが私のやつていることに手を貸してくださるのは大変ありがたいことです。和同も喜ぶと思います。でも、私のやつていることは、アジアのある国々にとつては都合の悪いことです。ひとつすると山口さん・・・」江下はここで言葉を切り、

「あなたの命に関わることになるかもしれません」再び、江下は山口の目をジッと見つめて言つた。

山口江下は、江下の言ひ意味が分かるような気がした。国家にとって都合の悪い動きをする人間や組織は、たとえ自国民であろうとも、国家内の組織であるうとも潰<sup>つぶ</sup>されるのが歴史だ。歴史の光には常に陰が付きまとつ。そして、いつも犠牲になるのは無垢<sup>むく</sup>の民衆だ。

山口自身も、これまで陰の中を歩いてきた。いまさら、陰を怖がるよりも、陰の中に一撃でも拳<sup>こぶし</sup>を打ち込むことが出来れば良いではないか。そう思い右の拳をギリギリと握り締めた。

山口大河<sup>やまぐちたいが</sup>は覚悟を決めた。

「で、その薬品をどこへ届ければ？」

「私のシアトル時代の幼馴染のお嬢さんに届けてもらいたいのです」

「幼馴染の娘さんに？」

「はい、長谷川喜代治<sup>はせがわきよじ</sup>という男の娘さんに、これら医薬品と、そして、薬草の種類やその調合方法、処方箋などを書き留めた……」

「そう言つて、鍵のかかった引き出しの鍵穴に鍵を挿し込み、回すと、「ガチャッ」とロックが外れる音がした。引き出しをゆっくりと手前に引き、中から黒い革の表紙のノートを取り出した。

「この冊子を届けてもらいたいのです」江下<sup>えだ</sup>は両手で大事そうにそのノートを持った。

「これがあれば、どんな植物が薬草として役に立つか、どんな時にどんな風に処方すればいいかが分かります。」やつとて山口に手渡した。

山口は、そのノートのページをめくった。

「これは……」そのノートには植物の絵が細かく描かれ、その処方も絵入りで丁寧<sup>ていねい</sup>に書かれていた。そして、

「インドのアーゴルベーダ、チベット医学、漢方。これらを私な

りに融合したもののです」江下は自信のある声で言った。

「「」の説明は英語と平安文ですね」山口はページを繰りながら呟いた。

「はい。娘さんにも分かるように書き換えたのです」

「と言つと?」顔を上げ江下を見た。

「娘さんは2世で、漢字がまだ苦手なようなのです」

「ああ、それで」山口はノートを閉じ、両手で膝の上に置いた。

「で、その娘さんはどこに?」

「ネパールです」江下は窓の外に広がる青い空の向こうを見ると

うに手を細めた。

2005年（平成17年）9月 広島・宮島

この台風14号は多くの被害を残した。美しい弥山の山肌には無残な傷を残し、今日も、県や国の調査団が現地調査に入っている。麓にある宮島最古の寺院である大聖院も大きな被害を受けた。

しかし、その自然の猛威は歴史の皮を剥ぎ取りつつあるのではないだろうか？

錦帯橋も今回の台風14号で橋脚を流されてしまい、渡ることは出来ないが、

「せつかく、宮島まで来たのだから、一部でもその美しいブリッジが見たい」というキャシーの希望で、先姫とキャシーはJRで若国へ向かった。

「しかし、どうだろうか、橋脚のない錦帯橋を見てかえって、ガッカリするんじゃないだろうか」と思いながら事務机に向かった。

宮島で発見された鉄の棒は何者かに奪われ、そしてまた、同じものが富士山頂でも、神田達の田の前で、ここ、宮島に現れた同じ男に奪われた。一体、何が起こっているのだろうか？ それに、その鉄の棒を中国が欲しがっているのは何故なんだろう。

しかも、咲姫によると、同じものがもう一つどこにあるというではないか。あるとすればどこにあるんだろう？

テレビや新聞などのマスコミの取材は落ち着いてきたが、依然

として旅行会社や観光客からの問い合わせは多い。

午後からは電話の応対や、報告書の作成に追われ、気がつくと6時をまわっていた。

「ふーっ」と大きく背伸びをして椅子から立ち上がり、「コーヒーを飲もうと」「コーヒーサーバーに向かつたとき、机の上においていた携帯が「カタカタカタ」と机を鳴らした。携帯を開くと、咲姫からであつた。

「やあ、錦帯橋はどうだつた?」

「ええ、見るのが辛くなつたわ。それよりも神田君、キャシーが変なことを言ひうのよ」

「変なこと?」

「そう、電車が県境に流れる小瀬川おぜがわをわたる時、さあ、これから山口よ、と言つたら、キャシーが不思議そうな顔をするのよ」咲姫は押し殺したような声で言つた。

「不思議そうな顔? どういふことだい」携帯に応えながら「コーヒーサーバーへ向かつた。

「錦帯橋は岩国シティーにあるんぢやないの? つて聞くのよ」

「あー、俺たちは、岩国の錦帯橋、つて言つからね。山口の錦帯橋とは言わないよね」コーヒーをカップに注いだ。

「そう。それで、岩国は山口県の1つのシティーなのよ、って言うと、山口というシティーは他にもあるのかつて」咲姫の声は、ますます低くなつた。

「へー、それで?」来客用の椅子に腰掛け背中を背もたれに預けた。

「だから、私は、あるかも知れないけど、あまり聞かないわね、つて言つたら、じゃあ、人の名前の山口も珍しいか、つて聞くのよ」

「山口ー？」神田はカツプから口を離した。

「そう。だから、山口という名前の人たくさんいるわ、って言つたんだけど、そしたら、山口という日本人を知つてゐる、って言うのよ。それが、・・・」

「・・・それが？」

「それが、神田さんと同じように拳法のマスターだ、って言つたよ」

「ええー？・・・そ、それで？」神田は椅子から立ち上がつた。

「それが、それつきり、ふざけりん何も言わなくなつて

「まさか、山口さんのことじや？」声が震えた。

「私、嫌な予感がして、それ以上聞くのが怖くて・・・」

「嫌な予感つて・・・」神田は咲姫の感の鋭さが怖かつた。

「で、今どこなんだい？」一体どうことなんだりつへ、神田は心臓の鼓動が早まるのを感じた。

「今、広島駅のホテルでチエックインを済ませたといふが

「キャシーの様子は？」神田は恐る恐る聞いた。

「今は普段のよう陽気よ。だけど、今度は私のほうが、山口つて人のことが気になつて・・・」咲姫の声は沈んでいた。

「そうだね。俺も気になるな

「ねえ、どこか落ち着いた日本料理屋さんで今夜、食事一緒に出来ないかしら？」

「じゃあ、JRの廿田市駅で待ち合せしよう。広島駅からだと神田の頭に廿田市「おとみ」が浮かんだ。料理もおいしそう、あそこなら落ち着いて話しが出来る。

「じゃあ、JRの廿田市駅で待ち合せしよう。広島駅からだと

20分くらいだから

「分かつたわ。廿日市なら知ってるし」

廿日市の駅前商店街を海のほうへ向かつて少し歩き、左の暗い小路にはいると、薄明かりが縄のれんを通して漏れていた。

「へー、ちょっと雰囲気があるわね」と言いながら、咲姫は、

「そこ、階段があるから気をつけてね」とキャシーの手をとった。

神田は、縄のれんを上げ、「ドロドロッ」、と引き戸を開けて咲姫とキャシーを先に店内に入れ、神田もふたりに続いて入った。

「いらっしゃいませ、神田さん。どうぞ、奥の座敷がとつてありますから」女将おかみが先にたつて案内してくれた。

咲姫とキャシーは珍しそうに店内を眺めている。咲姫はカウンターの中の神棚をチラッと見た。

「こりゃー、神田のだんな。引き続きありがとうございます」

「「」ざんす？」咲姫は「？」という顔をして神田を見たが、神田は、それには気付かない振りをして、

「急にお願いしてすみませんでした」と、左手を軽く上げて挨拶した。

「とんでもねえ。ありがと「」ざんす」カウンターの中で、鉄は深く頭を下した。

「キャシーさんは椅子の方がよかつたかな？」神田は座敷に上がりかけて、キャシーを見た。

「大丈夫です。問題ありません。私は、『ういうジャパンーズスタイル大好きです』そう言いながら、さつ、と座敷に上がり、座布団の上に胡坐をかいだ。

「そうですか。それは良かつた」神田も座布団に座り、咲姫のほうを向いて、

「咲姫ちゃん、ビール？お酒？」

「そうね。キャシー、お酒飲む？」「咲姫はキャシーに聞いた。

キャシーはうれしそうに、

「はい。お酒、ロックでいただきます」と、ニコッと笑つて咲姫の顔を見た。

「じゃあ、俺も久しぶりにロックでいただこう」

「出雲のお酒があるんじやない？」咲姫は、壁に貼られた品書きを見ながら言つた。

「え？どうして出雲の酒があるつて？」「神田は驚いて咲姫の顔を見た。

「ふふふ。忘れたの？私は富司なのよ。神棚を見れば分かるわよ」「そうかあ、そうだつたね」神田はそう言つと、座つたまま振り返つて神棚のほうを見た。

「こここの、主人は出雲の出身じやないかしら」咲姫はそう言いながらカウンターの中にいる鉄を見た。

「女将さん、お酒、ロックでお願いします」神田はオシボリを持ってきた女将に注文した。

「はい。承知いたしました」

「何を食べる？」

「そうねえ・・・」そう言いながら、壁に貼られた読めない漢字で書かれた品書きを眺めていたが、

「キャシーと私は、・・・青菜の煮浸し、湯葉の納豆包み揚げ、と、海老いもの煮物、それに、しめじと長いもの和え物もおいしそうね。あとで、なすとみょうがのすまし汁と炊き込みご飯も頂こうかしら」そう言つと、神田を見て、

「神田君は？」と、咲姫から聞かれ、「え？ 読めるのか」と少し慌てて、

「あ、お、俺？・・・俺は・・・俺はここではいつもコースで頂くんだ」

「あら、そうなの。じゃあ、私たちもそうするわ」そう言つて、キャシーに「それでいいわね」という風に小首を傾げて見せた。キャシーは両手を広げ、首をすくめ、

「もちろん、OKです」と笑いながら言つた。

「キャシーさん、錦帯橋はどうでしたか？」神田はオシボリで手を拭きながらキャシーに聞いた。

「オー、ベリービューティフルでした。でも、少し壊れていたのは残念です」キャシーはとても残念そうに表情を曇らせた。

「そうね。ちょっと悲惨だったわね。でも、激流の中で必死に耐えている姿は、ある意味見る者的心に訴えるものがあつたわ。ね、キャシー？」そう言いながら、キャシーの手を軽く握つた。

「はい。見る人に勇気与えていくと思います」

「そうですか。そういう見方もありますね。ところで、キャシーさん・・・」そう言つて、咲姫をチラツ、と見た。咲姫はその言葉を継いで、

「キャシー、キャシーは神田さんのような拳法のマスターを知つてこつて言つたわね」やさしくキャシーの右手の上に手を重ねて

尋ねた。

「・・・はい」キャシーは少しつつも加減になった。

「その山口さんってどんな人だったの？実は、その人は、私たちの学生時代のフレンドかもしないのよ」咲姫がやさしく、ゆつくりと言つと、キャシーは顔を上げた。その青い瞳には既に涙が浮かんでいた。

「お友達？」キャシーは首に下げた口ケットを握り締め、咲姫と神田の顔を交互に見た。

「そう。だから、辛いかもしないけど、話してくれないかしら？」

しばらくの沈黙の後、キャシーは握り締めていた口ケットのフタを開け、中から白い小石のようなものを取り出し、右手のひらに載せ、再び強く握り締め、嗚咽おえつを漏らし始めた。

「ほめんなさいね、キャシー。辛いことを思い出させて」咲姫はキャシーの肩に手を回し、神田と咲姫は顔を見合せた。

しばらくして、落ち着きを取り戻したキャシーは、その握り締めた手のひらを開き、

「これは、山口さんの小指の骨です」そう言つてその白い小石のよつなものをテーブルの上に置いた。

「小指の骨？」神田は、それをそつとつまんで持ち、

「どうこうとなんでしょう？」と、キャシーに恐るおそれる尋ねた。

キャシーはそれには答えず、バッグの中から黒いものを取り出した。

「……」神田はすぐにそれが山口の黒帯だと気がついた。帯の端には「広島修道館大学 山口」と刺繡されていた。

「！」これは？」神田は震える手でその黒帯を受け取った。

「山口さんの黒帯です」キャシーの瞳から大粒の涙がひと粒、ぽたり、とテーブルに落ちた。

「どうしてこれを？」黒帯には血の跡が大きく残っていた。

「山口さんが大切にしていた持ち物です」

「これは咲姫のお友達のものですか？」キャシーは顔を咲姫に向けた。咲姫は目を閉じ、静かにつなづいた。

そして、神田も、

「間違いない」両手で黒帯を握り締めながらキャシーを見た。

「山口さんのものだ」そう言つと再び黒帯を見つめた。

「じゃあ、さつきの骨は？」咲姫は神田を見た。

「山口さんの……？」

神田の顔は動搖で紅潮していた。

「山口さんはどうしたの？」咲姫はキャシーの肩に手をかけたまま聞いた。

「山口さんは亡くなりました」

「え？、どこで？」神田にはとても信じられなかつた。悪夢ではないのだろうか。

神田の間にキャシーは答えた。

「ネパールです」キャシーの瞳には、ネパールの青い空が映つているようだつた。

「“どうして…どうしてネパールなんかで…？”

「あの、何か…？」女将おかみが酒と突き出しの和え物をテーブルの上に置きながら神田かみたに聞いた。

「いや、昔の友人のことでちょっと。すみません。大きな声を出して」神田はおしほりで額の汗を拭ぬぐいながら言った。

「いいえ。それはよろしくんですけど。お料理はお運びしてもよろしいのでしょうか？」

「もちろんです。お願ひします」神田は頭を下げた。

咲姫はキャシーの手を握り、

「いつ頃のお話なの？」とやさしく尋ねた。

「前回のボランティアの医療活動のときです。ちょうど10年前です」

「ああ、今回は2度田だと言つてたわね」咲姫はキャシーの言つていたことを思い出した。

「はい、そうです。山口さんさんが亡くなつて10年です

「ごめんなさい。今田はこれ以上話すこと出来ません」キャシーはそう言つと、うな垂れて、両手でグラスを包むように持ち、コートン、とテーブルの上に置いた。

咲姫は再びキャシーの肩に手を回し軽く抱きしめた。

「いいのよ。ありがとう。あなたの知つている山口さんが私たちの友達だつてことが分かつただけでもよかつたわ」そう言しながら神田のほうを向いて小さく一度うなずいた。

「そうだね。今日はこの話はやめておこう」神田は小さな声で咲姫に言った。しかし、一体何が山口さんの身に起こつたのだろう。山口さんは一体どうしてネパールで亡くなつたんだろ。神田はそ

の真相を今にでも聞きだしたかったが、それも、今のキャシーには到底耐えられないことだろう。たとえその真実が聞けたとしても、今の神田にはどうしようもない。自分の思いだけでキャシーを苦しめるわけにもいかない。

「お待ちどうさまでした」女将が料理を運んできた。

「蕪<sup>かぶ</sup>のクリーム煮と水菜と椎茸のみぞれ豆腐で『じぞこます』と、やや遠慮がちにテーブルの上に並べた。

「ワオー、おいしそうですね」キャシーは無理に陽気そうな声を上げたが、それが逆に神田と咲姫には辛かつた。

「咲姫、あれは何ですか?」キャシーは、カウンターの中にある神棚を指差した。

「ああ、あれはね、神棚と言つて、言つてみれば、そうねえ宮島でたくさんの神社を見たでしょ。そうした神社の支店のよつなものよ」

「ははは、支店とはつまいこと言つね。ま、御札が入つているんだから、確かにファミリーのための支店とか出張所みたいなものだね」神田もつとめて明るく振舞つた。

「ああ、分かりました」キャシーも「なるほど」と言つ感じで大きく頷いた。

「へへっ、なるほどねえ。そういうことも言えますあね」鉄も力ウンターの中から雰囲気を察したのか話に入つてきた。

「『』主人は出雲の『』出身なんですか?」咲姫は鉄に声をかけた。話題をどこかに持つていかなければこの場の雰囲気は変わりそうもないし、鉄の人柄にはこの場を和ませてくれる何かがあると思ったのだ。

「いいえー、あつしは信州長野で『』ざんすよ」

「あら、じゃあ、あの神棚は？」

「あつしの遠い」先祖さんが出雲の出身で「ござんしてね、あつしの一族は信州に移り住んだんでござんすよ。今となつちやあ、どうこう訳だか分かりやしやせんがね」そう言つながらも俎板で小気味の良い音を立てている。

「しかし、あつしが極道……へつ、こりや面白ねえ」

「あつしが人様の道を踏み外してからは信州には帰つちやいやせん」

ん

「こここの店の材料だけは出雲や大山の麓の農家から取り寄せているんですよ」女将おかみが土間にあるテーブルを拭きながら言つた。

「そりや、おとみ、ご先祖さんと繫がりを持ちてえつてのが人情じゃござんせんか。ね、神田の旦那」そう言つて、照れながら、神田に同意を求めた。

神田は、ニコリと笑い、

「そうだね。今でも、出雲へは？」と振り返つて鉄の顔を見た。

「へい、暇がありや、行つておりやす」鉄は大きな声で答えた。

「何だか、古事記のお話みたいね」咲姫は興味深げに言つた。

「古事記？」神田は突然の言葉に少し驚いて、先のほうを向いた。

「そう、もともとは大国主命おおくにぬしのみことが治めていた出雲の国が奪われたのは、天照大御神あまたへらすおおみがみから命令された建御雷之男神たけみかづちのおがみが、力較べで健御名方たけみなかたのかみ神かみを打ち負かしたからでしょ」

「そうだつたね。それで、健御名方神は信州まで逃げて、もう一生ここから出ません、と誓つたんだよね」

キャシーはグラスを傾けながら、神田と咲姫の話を聞いていたが、「咲姫、日本は侵略されたことがあるのですか？」と怪訝けげんそうな顔をして聞いた。

「そうねえ。難しい質問ね。もとから住んでいた民族のところへ違つ民族が流れ込んできて、その結果として今の日本人がいるのだから・・・」にこまで言つてしばらく考えて、

「その民族同士が初めて接する最前線、フロントでは、元から住んでいた人達にとつては侵略に思えたかもしねないわね」咲姫は考えながら言つた。

そして、神田も、

「そうだなあ。キャシーさん、このお話は、紀元、A.D.8世紀頃に作られた本に書かれていることですからね。当時の支配者にとつての権威付けや、国を奪い取つた言い訳の要素が多く入つているんです。だから、国を奪い取つた、とは言えないから、国譲り、と言つているんですよ」と、説明を加えた。

「その国を奪われた人の大宮殿おおみやでんがある神棚の本家、本店、ヘッドクオーター、出雲大社いずもおおやしろなのよ」咲姫はカウンターの中の神棚にグラスを向けた。

キャシーは、神棚のほうを見ていたが、不思議そうな顔をして、「じゃあ、国を奪つた人が、奪われた人のために、宮殿を建てたのですか?」と、咲姫の顔を見た。

咲姫は、

「そう。言つてみれば、豪華な牢屋らうやみたいなものね」と、やや顔を上に向け空くうを見るようにして言つた。そして、キャシーの方を見て、

「だから、今でも、出雲大社をお参りするときは、他の神社と違つて、拍手は4回するのよ。それは、日本人は、言葉の発音を重要視するから、4回の、シ、は、死、とか、古代では、ヨン、は黄泉よみのイメージがあるからなのよ」と続けた。「黄泉よみって言つるのは、つまり、そのオ、亡くなつた人が埋葬されている地面の下つてことね」咲姫の説明に、キャシーは興味深おきみそうに頷いた。

「だから、拍手を4回して、あなたはもう死んでいるんですよ。

出てこないでね、つてことを伝えているのよ

神田もそれに付け加えて、

「そう。だから、注連縄も他の神社とは逆方向になつているんですよ。それは、亡くなつた人の着物の襟の重ねを、生きている人の重ねとは逆にする、左前、と同じ意味で、死んだ人に対する作法そのものなんです」

キャシーは興味深そうに神田と咲姫の話を聞いている。

咲姫は、

「そもそも、本殿はそっぽを向いている構造になつているものね」

神田の顔を見てそう言った。

「え、そうなのかい？」神田はそのことは初めて聞いた。

「そうよ。拝殿で一所懸命に、結婚できますように、とか、家内安全とかのお願いをして、肝心の神様は横を向いているのよ。それは、本殿の配置を見れば一目瞭然よ」そう言って、テーブルの上に指で簡単な配置を描きはじめた。

神田は咲姫の剣道をやつしているにしては細い指先の動きに見とれてしまつた。

「ね。こいつふうになつているのよ」そう言って顔を上げた。

「あ、・・・ああ、なるほど・・・」咲姫の顔が思いのほか近づいたので、神田は、思わず体を起こした。

「神社の起源にはいろいろな説があるけど、私は、お墓と同じ考え方があるんじゃないかと思っているのよ」咲姫は、そう言いながら神田を見た。

「と、言つと？」神田は、よく冷えた出雲のお酒を、グッ、と一口飲んだ。

「今でも古い神社は本殿を持たない神社があるでしょ。奈良の大神社や、石上神宮のような」咲姫もグラスをカラカラと回し、一

口飲み、

「それとか、村の鎮守様とか、こんもりした山に小さな神社があるでしょ。そのこんもりした山は古墳、つまりお墓だと思つのよ」

「なるほど」

「私の仕事でいるハ<sup>つか</sup>頭神社様もそうよ」

神田は、高見と訪れたハ<sup>つか</sup>頭神社のこんもりとした杜を思い出した。

「だから神社を参拝してお願いをすることと、お墓参りをして、ご先祖様に、おじいちゃん、おばあちゃん、私たち家族を見守つてくださいね、って言つのは同じことなのよね」

「お墓から出てこないで下さい。そこから私たちを見守つてください、と言つのと同じことだと思つよ。ほら、最近、テレビで話題の細木數子さんなんかも、相談者に、『先祖様のお墓参りをしなさいって、しきりに言つのは、そういう意味もあると思つわ』

神田はキャシーのグラスが空になつたのを見て、女将にお酒の追加を頼んだ。

「だから、あの件も、頼朝は日本を支配すると同時に、何かを恐れて封じ込めようとしたのかもしれないわ。日本の東の象徴、源氏の白を表す富士山、そして、西の象徴、平氏の赤を表す面島」咲姫は自分に言い聞かせるように呟つくりと話した。

「と、同時に、山と海」神田は咲姫の言葉を受けて言つた。

「頼朝は、あの鉄の棒に関わりのある何かを非常に恐れていたつてことだね」

「そう。あの鉄の棒に埋め込まれている矢尻に関わりのあるものが何かが分かれば、この話は意外と早く解決するんじゃない?」

「三本の鉄の棒、三本の矢尻かあ・・・」神田は、カラソ、と氷の音をさせて、酒を飲み干した。

「折湯葉の煮物あがりやした」鉄の声がカウンターの中から聞こえた。そして、

「神田の旦那、毛利様のお話ですかい?」と、鉄は聞いた。

「え?」神田は鉄のほうを向いた。

「へへ、こりや面田ねえ。わつりもとなりつい、余計なことを。へへつ。いえね、三本の矢つて、いやあ、毛利元就様のことだと思いやしてね」

「お前さんも、学のないくせに余計なことを」と女将が[冗談っぽく鉄に言つた。

神田と咲姫は顔を見合させてしばらへ沈黙した。

## 三本の矢

「ああ、そうだわね。広島で三本の矢、サンフレッチェ、つてい  
えば、毛利元就よね。ご主人のおっしゃる通りだわ。ご主人、あり  
がとうございます」咲姫はカウンターの中の鉄に向かって、にこり  
と微笑みお辞儀をした。

「へへ、こりや、面白ねえ。おい、おとみ、聞いたか。ちつたー、  
亭主を敬えつてこつた」鉄は冗談ぽく腕組みをして胸をそらした。

「まあ、あんたもすぐ調子に乗つてホホホ」と、女将は咲姫に向  
かつて笑つた。

キャシーもその様子を見て笑顔を浮かべてた。

「毛利元就、三本の矢、源頼朝、・・・」咲姫にはこれらを繋ぐ  
細い線が見えてきた。

「お待たせをいたしました」女将が料理と酒を運んできた。

「ワオー、これもおいしそうですね」キャシーは目を丸くしてさ  
つそく料理に箸をつけようとしている。

「神田君、分かってきたわ。頼朝が何を怖がっていたのか」咲姫  
は、ずっと遠くを見つめるような目をして考えをまとめようとして  
いる。

毛利元就がどう関係してくるのだろう?神田には絡んだ糸  
にもう1本の新しい糸が絡まり始めたとしか思えなかつた。

「神田君、頼朝の敵は誰だつた?」

「そりやあ、平清盛だつう」神田は料理に箸をつけながら言つた。

「そうね。それと、頼朝が恐れた人物がもう一人いるわ」

「え、誰?」

「義経よ」

神田の頭の中で、糸はますます絡まり始めていた。

「義経?しかし・・・」神田の言葉を遮<sup>さえ</sup>つて咲姫は続けた。

「そう。義経よ。それと、もうひとつ聞いてもいい?東の富士山と西の宮島に三本の矢のうち一本が隠されていたわね」咲姫は膝を少しきずし、神田の顔を見た。

「ああ、東と西、山と海の支配を目的としたと言つのが俺たちの今までの推理だつたけど」そこから先がわからないんだ、と神田は思つた。

「じゃあ、もう簡単じゃない? 残りの一本の隠し場所はどこか」咲姫は、にこり、と笑つた。

「何言つてるんだよ。簡単じゃないから悩んでるんだよ」神田は口をいくぶん尖<sup>とが</sup>らせて言つた。

「山、海、そして肝心なものが抜けていたわ」

「肝心なもの?なんだい、それは?」

キャシーが山や海という言葉を聞いて話に入つてきた。

「日本の海はきれいですね。<sup>瀬戸内海</sup>のインランドシーは、小さな島がたくさんあつて、本当に綺麗です。それに飛行機から見えた富士山は本当に美しかつたです。緑に覆<sup>あお</sup>われた陸地に、スツ、と立つ・・・」神田は、キャシーの言つた「陸」と言つ言葉を聞くと、

「陸!.. そうか、里だ。山、海、里。この3つを支配してこそ日本の完全な支配になる」神田は目を見開いた。一拳に、目の前のベールが開かれた感じがした。

咲姫は、「当たり」、といつよつに右手の人差し指をたてて竹刀を振る格好をした。

「そ、うよ。山、海、里、これらを支配する」とが日本を支配することになるのよ」

神田は咲姫の推理は真実に近付いていたことを感じた。そして、「山の民を支配する象徴が富士山、海の民を支配する象徴が宮島、じゃあ、里の民を支配するには……」うーん、と神田は唸つた。

「どこを押さえればいいだろ？……」そこまで言つた時、

「あ、京都御所だ。天皇の住まいを押さえれば、これは間違いなく日本を支配することになる」神田はさらに田を見開いて咲姫を見た。

「そうね。でもちょっと待つて。源氏も平氏もルーツをたどれば天皇家へつながるでしょ」咲姫は頬杖をついて横目で神田を見た。そして、

「頼朝にとつて、京都御所は天皇家の住まい、単なる殻にしか思えなかつたのじゃないかしら。中身はもつと違うところにあると考えたと思うわ。」咲姫は箸を取つて、折湯葉の煮物をつまんだ。

それを聞いていたキャシーが、「源氏も平氏もサムライではないのですか？」と、不思議そうな顔をして、咲姫に尋ねた。

「そう、サムライよ。でもね、もともとは皇族の一員だったのよ。天皇は、その家系を未来永劫存続させるために、妻をたくさん持つていたの。そのほうが、家系の断絶を防ぐことが出来るでしょ」咲姫はキャシーの顔を覗き込むようにして言つた。

「おー、それは良くないです」キャシーは眉をひそめて、首を

何度も振った。

「そうね。でも、そうしなければ天皇家は続かなかつたでしょうね。で、そうするうちに、皇族の人数がどんどん増えて、逆に、財政を圧迫し始めたの。それで、皇族のうちから、臣籍降下、といって、皇族の身分から離れた一族が発生したのよ」

「それが源氏と平氏なのですね」キャシーは大きく頷いた。

「だから、頼朝自身、自分のルーツは天皇にあると思っていたでしょから、御所はそれほど重要な場所としては思つてなかつたのじやないかしら」

「なるほど」神田は咲姫の次の言葉を待つた。

「だから、頼朝は、京都御所は天皇家の住まい、単なる殻にすぎず、本当に大切なものは、もっと違うところにあると考えたんじやないかしら」咲姫は折湯葉の煮物を一つ口に入れ、「まあ、おいしい」と、小さく言った。

「と、いうと?」神田は咲姫の口元を見つめた。

「だつて、富士山は木花咲耶姫、宮島は、市杵島姫 この二柱の神が関わっているのよ。残るもう一か所も、もっと天皇家のルーツに関わるところだと思うわ」咲姫のこの言葉に、

「ルーツ? 天皇の祖先と云ふこと?」神田は手にグラスを持ったまま動きを止めた。

神田は、ルーツと言つ言葉で新聞記事を思い出した。

「そう言えば、この前の日韓共催のワールドカップを控えて、天皇ご自身が、朝鮮半島出身だつてことを、ついに、言つてしまつたね」

「そう、あれは、かなり大きな發言だと思つわ。ご自身の先祖

「朝鮮半島にあることをはつきりおっしゃったんですものね」咲姫が大きく頷いた。

「そのことにも後で関係していくと思つけど、とりあえずはもう一か所はどこか、の問題よ。それは、天皇家は万世<sup>ばんせい</sup>一系<sup>いっけい</sup>として連綿として続いてることを國中に知らしめることが出来る、その大元、ルーツに関わりがあるところよ」

「國中の人達が、ここは天皇の祖先と深い関わりがあるところだ、と、知つていろいろところ、ということになるな」そうすると、いか所しかないな、と神田は思い、女将のほうに向かつて、グラスを持ち上げて指を3本立てた。

「はい、おかわりですね」女将<sup>おがみ</sup>は頷いた。

「天皇様の祖先に深く関わっているところね。鉄の棒の、残された一本はそこにあると思うわ」咲姫も、グイッ、とグラスを空けた。「そうなると、意外と簡単だね。もつひとつしかないよ」神田の声は自然と大きくなつた。

「どこだと思っているの？」

「伊勢神宮だ」神田はそう言つと、蕪<sup>かぶ</sup>のクリーミー煮を口に放り込んだ。そして、

「何しろ、天皇の祖先の天照大御神<sup>あまてるおおみのかみ</sup>を祀つて古<sup>いにしへ</sup>からの神社だし、天皇の祖先と深く関わつていてる神社と言えば神宮、一般には、伊勢神宮<sup>いせじんぐう</sup>と呼ばれているけど、そこしかないだろ」と、自信をこめて言つた。

「それに、富士山の木花咲耶姫、富島の、市杵嶋姫、そして、同じく女性の神様の天照大御神<sup>あまてるおおみのかみ</sup>、この三柱の神様は、古代史の中でも女神トップ3といつてもいいんじゃないかな。だとすると、例の鉄の棒はここに隠されているとしか考えられないだろう」と一緒に考えを述べた。

「お待たせいたしました」女将が新しいグラスを運んできた。女将はグラスを置きながら、

「あの、神田さん。私たち、次に<sup>いすも</sup>出雲へ行つたときは<sup>いすも</sup>八重垣神社をお参りしたいと思つてゐるんですけどね、八重垣神社には、壁画があるらしいですよ」と、言つた。

「壁画?」神田は聞き返した。

「ええ。八重垣神社には、天照大御神と市杵嶋姫、が一緒に描かれてゐる壁画があるらしいですよ」女将は空になつたグラスを片付けながらそう言つた。

「ああ、そうだつたわ。確か国の重要文化財に指定されているわ咲姫も思い出したように言つた。

「市杵嶋姫は天照大御神の姪つ子だし、木花咲耶姫は天照大御神の孫のお嫁さんだよね」神田も、自分で、そうだ、そうだ、というよつにうなづきながらグラスを持ち上げ一口飲んだ。

「そう、この三柱の女神は非常に近い間柄になるわ

「そうすると、富島、富士山、伊勢神宮。これらの間にはなんらかの関係があつて、これらの神々に頼朝は日本支配の願<sup>がん</sup>をかけたといふことだね」神田は膝を組みなおした。

「女将さん、ありがとうございます。問題が解決しそうですよ

神田は両手を膝頭に置き、頭を下げた。

「あら、そうですか。お力になれてよかつたです」女将もうれしそうに笑つた。しかし、咲姫は、

「ありがとうございました。でも、神田君、私の考えは違つのよ」と、神田を見た。

「え？ 違つ？」

そこへキャシーが、

「あの・・・」と、遠慮がちに話しに入ってきた。

「日本人は、天皇の祖先が神様だと本当に思っているのですか？」

「それは微妙な質問ね」と、咲姫はちょっと困った顔をした。

「日本人にとつては神」（いくおーる）GODではないのよ」と、

神田を、同意を求めるように見た。

「そうだね。日本人にとつて、神様はどこにでもいるからね。木に宿つたり、山だつたり。火を使う台所には「荒神様」、田や畑には「水分神」<sup>みくまりのかみ</sup>、トイレにも神様はいるんですよ。GODという観念とは違うと思いますね。神様をGODと訳すのはやめた方がいいよね」と、今度は神田が咲姫を見た。咲姫も、そう、そう、という感じでうなづいた。

キャシーは、ますます混乱した、という顔になつた。

「そして、日本人の宗教觀では、神様は神であると同時に人間なんですよ」

「神で人間？」キャシーは不思議そうな顔をした。

「分かりにくいと思うけど、日本人にとつては亡くなつた人は神様になるという考え方があるんですよ」神田は、なるべく分かり易いように話さなければ、と思つた。

「日本には、実在の人物をお祀りした神社がたくさんあつてね、吉田松陰<sup>よしだじょういん</sup>をお祀りした松陰<sup>しょういん</sup>神社とか、菅原道真<sup>すがはらのちか</sup>をお祀りした防府天満宮とかね」

「はい。富島の清盛神社。私もお参りしました」キャシーは、なるほど、という顔をした。

「でも、その神と人間の境が曖昧なところがよその国の人にとっては極めて理解しにくいんだと思いますね。同じ顔や肌の色をし、一部では文化を共有しているアジアの国々の人でさえ理解するのは難しいんですから」と、いくぶん声を落として言った。

神田のその言葉を説明するように、咲姫は、

「そのために、いまだに問題が起きているでしょ。神社に参拝するのはけしからんとか。これはある意味、今までの日本は経済中心の輸出に偏りすぎていたからだと思うわ。これからは、日本の伝統や文化、芸術の広報がいかに大事かって事ね。もちろん日本人の宗教観の広報も含めてね」と、キヤシーの顔を見て言った。

「咲姫、ありがとう。日本の文化は難しいですね。ごめんなさい。お話の途中で」キヤシーは咲姫の肩に手を置いた。

「いいのよ。ひとりでも多くの人に日本のことを理解してもらわなきや、これから世界で日本は孤立してしまうわ。それに、キヤシーの今の質問は、私の考えの基本なのよ」やつぱりと、改めて神田を見た。

咲姫は一体何を言おうとしているのだろうか、と神田は思った。

「神宮（伊勢神宮）には確かに、天照大御神あまてるおおみのかみがお祭りしてあるし、天皇様のご先祖をお祀まつりしてあるということで、昔から多くの人達の崇拜をあつめているわね」神田は、残った蕪かぶのクリーム煮を口に入れた。

「でもね、私の考えは、前にも言つたように、神社信仰の基本は、お墓参りにあるといふことなの」

「ああ、咲姫ちゃんの考え方を聞いて、なるほどと思つたよ。確かに、普段は仏壇や神棚に手を合わせていても、肝心な時、お盆とか、お正月とかにはお墓参りをするものなあ」グラスの酒を一口飲んで、椎茸のみぞれ豆腐に箸をつけた。

「でしょ？伊勢神宮はお墓じやなくて天皇様にとつては神棚なのよ」咲姫はグラスを手にしたまま話を続けた。

「キャシーの言つように、天照大御神あまてらおおみのかみを神としてお祀りしてあるのが伊勢神宮じやないかと思うの」そして、

「天皇様の人間としてのご先祖様が祀られてはいないのじやないかしら？」と、神田がビックリするようなことを口にした。

「じゃあ、咲姫ちゃんは、伊勢神宮は、その・・・単なる神棚で、本当のお墓は他にあるつて言いたいのかい？」

「そう」咲姫は瞳を輝かせた。

「ほら、最近の研究では、エジプトのピラミッドはお墓じやないつてことが分かつてきたでしょ」

神田は、そういう説が主流になりつつあることは聞いていたが、すでに定説になつていることをこの時初めて知つた。

「それと同じことよ。ピラミッドもお墓じやなく神棚だと思つわ」咲姫は瞳を輝かせ確信に満ちた口調で、

「王のお墓は別のところにあるはずよ。その発見はそんなに遠くのことじやないと思つわ」と言つた。

神田はそんな突拍子もないことは、これまで考えたこともなかつた。それに、伊勢神宮とピラミッドを結びつけることなどは思いも寄らなかつた。

伊勢神宮には、毎年、何十万人もの人たちが初詣はつもうでに訪れる。咲姫の説だと、彼らは、単なる神棚にお参りしていることになる。しかし、咲姫の口調からは確信に満ちたものが感じられた。

「うーん・・・で、それは、その、天皇のお墓はどこに？」神田には思い浮かばなかつた。

「宇佐神宮よ」咲姫は少し口元に笑みを浮かべて言つた。

「大分県の宇佐神宮？」

「そう。今も、皇太子様の跡を継ぐ皇位継承問題で、国会でも、もめているけど、八世紀にも、時の天皇、称徳女帝が皇位を弓削道鏡に譲りうとした時、それが正しいかどうか神のお言葉を聞くために、わざわざ、大分県の宇佐八幡神宮に和氣清麻呂が出向いたつていう話、知ってる？」咲姫はやや首を傾げて神田を見た。

「ああ、宇佐八幡神託事件(うさはちまんしんたくじけん)、とか、道鏡事件(どうきょうじけん)、とか言われているやつだね」歴史上有名な事件だ。

「おかしいと思わない？伊勢神宮に行かずに、わざわざ遠くの宇佐神宮に行つたのよ」

「そういえば、確かに変だな。当時の天皇は奈良に居たんだから、それこそ目と鼻の先の伊勢神宮にお伺(うが)いを立てるのが普通だなあ」と、神田は首をひねつた。

「そうでしょ。それなのに何故、宇佐神宮へ和氣清麻呂を向かわせたか。それは、宇佐神宮が天皇家にとつてのお墓だからだと思つわ」

「宇佐神宮のご祭神は、一之御殿(いちのいじん)に八幡大神(はちまんおおかみ)、応神天皇(おうじんてんのう)、二之御殿に比売大神(ひめおおかみ)、三之御殿に神功皇后(じんぐうじょう)がお祀(まつ)りしてあるのよ」

神田は、さすがに咲姫は神社に関して詳しいな、と思つた。

「そして、ここで問題なのは、参拝の方法なの」咲姫はここでグラスの酒を一口飲んだ。

「宇佐神宮の参拝方法は、出雲大社と同じなのよ」

「え？ じゃあ、例の四拍手、つてことかい？」神田は咲姫の言った四拍手は「死」を知らしめるためのものだと言つた言葉を思い

出した。

「そうなの。全国でも、出雲大社と宇佐神宮だけなのよ」

「では、誰を閉じ込めているのですか？」ふたりの話を聞いていたキャシーは興味深そうに尋ねた。

「おそらく、比売大神だと思うわ。だって、二之御殿と言つて順位は一番目のようを見せかけているけど、実質は真ん中で、中心になつているものね」咲姫は左手の指を三本たて、右手の人差し指で、三本の指の真ん中を指した。

「つまり、比売大神の靈を閉じ込めてることかい？」神田の眉間に自然と皺が寄つた。

「そうとしか考えられないわね。宇佐神宮と出雲大社に共通して言えることは、比売大神と大国主命は一人とも殺されて祀られた、ということだから」咲姫はサラリと言つてのけた。

「殺された？」神田は持ち上げたグラスを途中で止めテーブルにおろした。

「そう。大国主命も比売大神も、新しく日本にやつてきた天照大御神の系列の民族に殺されたと思うの」咲姫はグラスに軽く唇をあてた。

「いや、しかし、比売大神は卑弥呼、すなわち天照大御神と同じだというのが現在、一般的な説だろ？ そうするとおかしくないかい？ 卑弥呼を神に仕える神聖な巫女として尊敬こそすれ、殺すなんてことは……」

「天照大御神の岩戸隠れの伝説は比売大神つまり卑弥呼の靈力の衰えによって、暗闇のごとくに国が乱れた、ということを暗示しているのだと思うわ。実際に天文学者の計算では、同時期に皆既日食が起こつてていると言う事実もあるし」ここまで言つて、神田の顔を

見て、さらに続けた。

「何人かの学者や小説家も、同じようなことを発表しているわ。

私の考え方と少し違うけど」

「つまり、国が乱れ、そこへもってきて、日蝕という、今まで経験したこともない天変地異が起こり、当時の人たちは、これは卑弥呼の力の衰えが原因だ、と考えたということかい？」神田も軽く一口酒を飲んだ。

「そう。当時の人たちにとつて、日蝕なんていうのは、それこそ、この世の終わりほどに感じたのじゃないかしら」咲姫はキャシーの方を向いて、でしょ？という顔をした。

「そして、卑弥呼に代わる、あらたな靈力を備えた人物を求めた、ということか」そういう解釈もできるな、と、神田は思った。

「だから、当時の人たちは、卑弥呼に再び復活してもらいたくなかったのだから」と、今度は神田の顔を覗き込んだ。

「だから、もう出てこないでください、と、四拍手をするという訳か」そう言って神田はグツ、と酒を空けた。

「卑弥呼の後継者ることは、中国の歴史書、魏志倭人伝にも書かれているでしょ」

「ああ、確かに、卑弥呼の後継は台<sup>じゆ</sup>とだつたね」神田も何度もかの邪馬台国ブームの学生時代に呼んだ記憶がある。

「それよ」咲姫は、グラスを持った右手の人差し指を立て、神田に向けた。

「ん？ それって？」

「台<sup>ヒ</sup>与<sup>ヒ</sup>よ。伊勢神宮の内宮の<sup>ヒ</sup>」<sup>あまたるあおみのかみ</sup>祭神は天照大御神、外宮の<sup>ヒ</sup>」<sup>ヒ</sup>祭神<sup>ヒ</sup>は豊受神<sup>ヒ</sup>なの」<sup>ヒ</sup>

「ト<sup>ヒ</sup>ニ<sup>ヒ</sup>…」

「つまり、伊勢神宮には卑弥呼と、その後継者である台<sup>ヒ</sup>与<sup>ヒ</sup>が、記念碑的にお祀りしてあるだけじゃないかと思つたよ。だつてお墓だつたら、いわばライバル関係にある二人を一緒にお祀りはしないと思うのよ」

神田は、

「あー、だから、皇室の<sup>ヒ</sup>」<sup>ヒ</sup>先祖のお墓は伊勢神宮じゃなく、宇佐神宮、と、こういうわけか」と、ここまで言つて、

「じゃあ、あの鉄の棒の最後の一本は宇佐神宮に隠されていると

いうことか」と、自分自身、納得したように言つた。

「待つて。違うのよ」咲姫は、神田のその言葉をすぐに否定した。

「え？違つのかい？」神田の肩が、がっくりと揺れた。

「私は、三本目の鉄の棒の隠し場所としては、御所<sup>ヒ</sup>や伊勢神宮よりも宇佐神宮の方が可能性がある、と言いたいだけなの」

「で・・・」<sup>ヒ</sup>」<sup>ヒ</sup>で、咲姫は、一口酒を口飲み、

「問題は頼朝がどうしてわざわざ鉄の棒に封印された矢尻を三本に分けたかつて言つところなの」グラスを置いて、左手の指を三本立てた。

「確かに、宇佐神宮に隠されている可能性はあるわ。でも、宇佐神宮よりも、もつと可能性の高いところがあるのよ。それに、頼朝の時代に、せつき言つた口<sup>ヒ</sup>蝕<sup>ヒ</sup>や魏志倭人伝の分析が出来ていたとは思えないわ。どっちにしても、宇佐神宮が皇室の<sup>ヒ</sup>」<sup>ヒ</sup>先祖様のお墓であるってことが定説になるよりもエジプトの王家の墓の発見のほう<sup>ためいき</sup>が先でしょ<sup>う</sup>うね」咲姫はそつ<sup>ヒ</sup>と、口をすぼめて長い溜息<sup>ためいき</sup>を吐いた。

海の琵、山の琵、これらを支配して治めるために、畠島、富士山、そして、里の神を治めるために、皇室の、いわば本家の墓である宇佐神宮以上に重要な場所が他にあるのだらうか？

頼朝は海の畠島、山の富士山、そして、里のビニが重要な場所だと考えたのだらうか？

## 三種の神器

「天皇様が天皇様であるための証<sup>あかし</sup>で最も大事なものは……」咲姫<sup>さき</sup>がここまで言つと、神田<sup>かみた</sup>は、

「三種の神器<sup>さんしゅ</sup>だろ」と、先に口にした。

「そう。天孫降臨<sup>てんそんこうりん</sup>、つまり、ご皇室のご祖先様<sup>ごじさんじょう</sup>が朝鮮半島から日本へ来るときに、天照大御神<sup>あまてるおおみののかみ</sup>が孫の邇邇芸命<sup>にじにぎのみこと</sup>に与えた身分証明書<sup>しんぶう</sup>みたいなものね」

「八咫鏡<sup>やたのかがみ</sup>、草薙の剣<sup>くさなぎ</sup>、八坂瓊曲玉<sup>つるぎ</sup>だ……ね」神田は膝を組みなおした。

「この鏡、剣、玉、つて聞いて、何か思いつかない?」咲姫<sup>さき</sup>が再び神田に問いかけた。

「ん?・・・」咲姫<sup>さき</sup>の問いかけに右肘<sup>みぎひじ</sup>をテーブルの上に置き、体を咲姫<sup>さき</sup>のほうへ向けた。

咲姫<sup>さき</sup>は続けて、

「天皇様のご先祖様<sup>ごじさんじょう</sup>が朝鮮半島からこの日本へやつて来る最初の難関<sup>がんかん</sup>はなんだと思う?」と神田に微笑みながら尋ねた。

「最初の難関?・・・それは、玄界灘<sup>げんかいなだ</sup>だろうな。俺も何年か前に韓国へフェリーで渡つたことがあるけど、それは、穏やかな瀬戸内海とは大きな違いがあるよ」と、地理的なことしか思い浮かばず、それを口にした。

「でしょ。おそらく、彼らが初めて瀬戸内海を見たときには、鏡のようだ、と思つたでしょ?」

咲姫<sup>さき</sup>の考えもまた、意外にも、神田と同じ考え方であつた。

咲姫は間合いをおかず、「

「そして、山から取れる石を材料にした勾玉」と、続けた。

「！」

「草薙の剣は日本武尊<sup>くわなぎゆあさけるのみこと</sup>が焼津の草原で敵に火を放たれ危機に陥つた時に、草を薙ぎ払つてその危機を脱したお話があるでしょ。その時の剣が草薙の剣」

「薙ぎ払つ、つまり、平定つていう」とか

「三種の神器の、鏡は海、勾玉は山、剣は里、と、ぴったり重なり合ひ合つのよ」

咲姫は、

「三種の神器は、日本の支配者の証明書であると同時にそこに記載された海、山、里を支配下に治めようとする強い思いが込められていると思つ」と、もはや、推測ではなく、事実であるかのようにはつきりとした口調で言つた。

「うーん、すると、鏡の富島、勾玉の富士山、そして剣は……」

と、神田が口にした疑問に咲姫は、

「草薙の剣は熱田神宮にご神体として祀<sup>まつ</sup>られているわ」と、幾分緊張した顔で言つた。

「あつ！！」思わず声が出た。そうだった、神田は、その剣は、終戦後、占領軍による没収を恐れて、一時、密かに別の場所に移されていった時期があった、という噂を聞いたことがある。

咲姫は、テーブルの上のグラスに手をかけ、

「そして、これらの神社に共通することは、厳島神社<sup>いつくしまじんじゃ</sup>、富士山本宮浅間大社<sup>うせんげんたいじや</sup>、そして、熱田神宮の富司<sup>くうじ</sup>は、日本の神社の三大富司<sup>さん</sup>の」と、そのグラスを持ち上げた。

「なんだつて！」

「しかも、頼朝の母親は熱田神宮の富司の娘なのよ」と、神田の

ほうに向け、乾杯の仕草をした。

「あつ、そういえば、熱田神宮の大宮司は藤原季範ふじわらのすくねだつたね」そ  
うだった、神田は組んだ膝頭を、ポン、と叩いた。

確かに、頼朝は父、源義朝みなもとのよしちちと、藤原季範ふじわらのすくねの娘の由良御前ゆらごぜんに生まれ  
た子だ。しかも、義経とは違い、母親は頼朝の正室、いわば、正真  
正銘の源氏の直系になる。

「日本の、いわばトップ3のひとりの富司の娘が頼朝の母親かあ。  
しかも、海と山に加えて里を平定する意味のある草薙の剣が祀まつられ  
ている、となると、なるほど、咲姫ちゃんの言つ通り、三本目の鉄  
の棒は、熱田神宮に隠されている可能性が高いね」神田は、咲姫の  
推理の鋭さに驚いた。

「それと、今思い出したわ」咲姫は背中をそらせ、  
「頼朝が源氏の再興さいこうを願つて足しげく通つた三嶋大社の中には、  
頼朝の妻の北条政子が深く信仰していた厳島神社があるのよ」と、  
以前、剣道大会が開かれた時に立ち寄つた大社の姿を思い浮かべな  
がら言つた。

「これはもう決まりだな」神田は、富士山本宮浅間大社にも厳島  
神社があつたことを思い出した。

神田かみたが、グラスを持ち、咲姫さきとキャシーの方にささげ、乾杯の仕草  
を取ると、咲姫も再びグラスを持ちグラスを上げた。

キャシーも、よくは分からぬまま、にこりと微笑み、グラスを  
上げ、三人は、コチ、コチ、と、グラスを鳴らした。

三人はカラソ、と、氷を鳴らし、それぞれのグラスを空にした。

女将が、

「問題解決ですか？」と声をかけた。

神田は、苦笑いをしながら、

「そう願いたいところですが、次の問題が……と言つと、咲姫のほうを向いて、

「咲姫ちゃん、最初に言つた、頼朝が恐れていたのが義経だつて件を聞かせてくれよ」そう言つと、女将に向かつて、

「あ、女将さん、茄子と茗荷のすまし汁と炊き込みご飯を」と、最初に咲姫が注文しようとしたメニューを頼んだ。

「はい、承知いたしました」女将は、空になつた器を盆に載せ下がつた。

神田は、「次々と疑問が浮かび上がつてくるが、咲姫は、神田の考えのはるか先が見えているのだろう」と思った。そして、次の疑問を口にした。

「頼朝、義経兄弟の確執は確かにあつたと思う。頼朝は義経の人気に嫉妬し、義経の天才的な知略を恐れたのは確かだらう。頼朝にしてみれば、自分は正室の長男、義経は妾の子。その妾の子が自分よりも人気が出てきたのは面白くないだらう、とは想像できる。でもそれが今回の三本の鉄の棒にどう関わつてくるんだい？」

「さあ、ここからがこの問題の核心ね」咲姫は正座をしたままテーブルの方へ少しにじり寄つた。

「さつき、ご主人が、三本の矢、と言えば、毛利元就様だ、と言われたでしょ。それを聞いて、ぱつ、と、ひらめいたの」そう、やや大きな声で首を伸ばし、カウンターの中の鉄に聞こえるよつて言った。

「へへ、そりや、面白ねえ」鉄は背筋を伸ばし、座敷のほうを向

いて、笑顔で頭を下げた。

「神田君が言つたように、義経は、次々と平家軍を打ち負かし、民衆の人気もうなぎのぼりになり、後白河法皇も義経びいきになつてしまつたでしょ」

確かに、法皇は義経に次々と官職を与えていた。

「法皇の、義経と頼朝の仲を裂く作戦だつたようだけどね」

「そうね。頼朝の義経に対するライバル心をうまく利用した法皇の作戦勝ちつてとこね」

「法皇は頼朝を牽制するためには、義経をうまく利用したのだろうな」

「それはともかく、義経が最終的に壇ノ浦の戦いで平氏一門を滅ぼすと、頼朝は考へたのよね。このまま義経が力を蓄えたまま、法皇の後ろ盾を元に奥州の藤原一門と手を組んだら、自分自身が危ない、と」

「そして、義経が壇ノ浦の戦いで捕虜にした平宗盛たいらのむねもりを連れて鎌倉に入ろうとした時には、頼朝は義経に鎌倉入りを許さなかつたのよね」咲姫はほんの一瞬まぶたを閉じた。

「ああ、義経にしてみれば、兄の頼朝からどうして嫌われるのか分からず悩んだだろうね」神田はそう言つと、唇を一文字に結んだ。

「そこで、義経は、頼朝に対する忠誠心や、弟として兄に対する心情を文書にして、頼朝の參謀に、頼朝との仲のとりなしを頼んだわけね」咲姫は右手でペンを持つ格好をした。

「それが有名な腰越状じこじょうじょうだね。今も下書きが残つてて、それを読むと、義経の純真な心が伝わつてくるよ。もし、頼朝がそれを読んで

いたら、歴史は変わっていたかもしれないね」神田は咲姫の同意を求めるように咲姫の顔を見た。

咲姫は神田の視線を頬で受けながら軽くうなづいた。

「ところが、その文書は、握りつぶされ、頼朝に義経の気持ちは伝わらなかつたんだからね。かわいそうなもんだよ」神田は首を振つた。

「その文書を握りつぶしたのが大江広元、毛利元就のおおえひろもとご先祖様よ  
咲姫は、やや強い口調でそう言つと神田の顔を見た。

「そうか！ そうだつたね」

神田は、この店の主人、鉄が言つた、三本の矢といえば毛利元就様だ、という言葉から、一挙にここまで推理の枠を広げ、絡んだ糸をほどいていく咲姫の推理に驚いた。

そして、咲姫が、三本の鉄の棒をめぐつて、謎の大男と中国との関わり等、複雑に絡み合つた糸を、一本一本ほどいていることを感じていた。

神田は、今回の事件により、今まで見過ごされてきた、日本の陰の歴史の一部に光をあてることが出来るのではないか。また、その一方で、このまま行くと、現在の国際政治の闇うらぎの中で蠢いている得体の知れない何かに、自分達が巻き込まれるのではないかという漠然とした不安が湧き起つてきただ。

「もう、このあたりで手を引いた方が無難かもしね」神田はそう思い始めていた。

しかし、歴史の糸はすでに神田や咲姫、キャシーまでにも絡まり始めていた。

「大江広元は頼朝の懐刀、頭脳でもあったといわれているでしょ。彼がいなかつたら頼朝の存在はなかつたと思つわ」咲姫は、キャシーのほうを向いて、

「ごめんね。ちょっと退屈でしょ」と言つと、キャシーは、

「大丈夫です。日本の歴史は興味あります」と、膝を組みなおした。

「確かに、頼朝の重要な政策には広元の意見がかなりの部分で取り入れられているよね。守護地頭の設置とかさ」歴史の授業で、何度も繰り返し聞いた言葉だ。

「おそらく、この三本の鉄の棒の件も広元の意向だと思つわ」咲姫は少し首を傾げて、

「今の腰越状の件以降、義経は結局逃亡生活に入り、最後には自刃してしまうわけだけど、頼朝は、義経の死を最後まで確信できなかつたのじやないかしら」と、続けると、神田の顔を見た。

「確かに。頼朝は疑り深い性格だつたらしいからね。だから、最後まで義経を信用できなかつただろうね」

神田は、昔、本で読んだ記憶を呼び起こし、

「岩手県の高館から頼朝のいる鎌倉まで義経の首を運んだけど、43日もかかつたらしいからね。しかも夏場の暑い盛りだから、義経の首実験をするどころではなくて、海辺に捨てられ、頼朝自身は、実際には義経の首は見ていないと言う説が主流らしいね」昔聞いた義経にまつわる諸説を思い出した。

「そういう話から義経は蒙古に渡つてジンギスカンになつた、などという説をとねる人まで出て來たんだろうな」神田はつぶやくように言い、確認するかのように、

「ともかくも、頼朝自身は義経本人の首を確認出していないんだ」と繰り返した。

「そうなると、どうなると思う？ 疑り深い頼朝は、不安で仕方なかつたと思うわ」咲姫は顔を神田のほうに向けた。

「いつ、義経が現れて、頼朝に反旗を翻すか。そればかり気になつたのじゃないかしら？」

神田は腕組みをし、

「大江広元は、その様子を見て、んーん、……」と、しばらく考えて、

「そうだな……このままではいけない。このままだと奥州を攻めるどころか、後白河法皇が再び策を巡らし頼朝の権勢を削ぎにかかるかもしれない、……と、考えただろうな」と、やや、自信無げに言った。

「そこで、どうやって、頼朝を安心させるか」咲姫は、神田の推理の次を推測した。

「義経の首は、本物であるうと偽物にせものであるうと、頼朝自身が疑いを持っているのだからどうしようもない。でしょ？」と、神田に同意を求めた。

「そうすると、頼朝に安心させるには、どうしたか……だな」

神田は膝を組み、腕を組んで小首をかしげた。

「義経は自害して果てました、もうこの世にはいません。頼朝様の前に現れることは一度とありませんから、安心下さい」と、安心させるためには「と、ここまで言って、神田の頭の中で、ぼんやりとではあるが、何かと何かが繋がってきたような気がした。

鎌倉の鶴岡八幡宮も保元、平治の乱以来頼朝によつて滅ぼされた怨靈おんりょうを鎮しずめる役割を担つてゐる。

「そして、頼朝自身も義経の影に怯えることなく政に専念するためには、おそらく、頼朝が深く信仰していた修験道の助けを借りたののじやないかしら？そもそも、頼朝の母も役の行者の信者で、靈れい鬼を胎たいして、生まれた子が頼朝で、鬼武者と名付けたくらいですもの。」

「咲姫は、さすがに、宗教関係のことについては詳しいな」と神田は改めて思った。

「お待たせをいたしました」女将が、茄子と茗荷のすまし汁と炊き込みご飯を運んできた。

キャシーは、  
「んーん。いい香りですね」と背筋を伸ばして、盆の上にある料理を覗き込んだ。

「野菜と米は、大山の麓の契約農家の有機でござる」カウンターの中から、主人の鉄が声をかけた。

女将が、

「お待たせいたしました」と湯気の立つてゐる、茄子と茗荷のすまし汁と炊き込みご飯を運んできた。

キャシーは、

「私、炊き込みご飯、大好きです」と声を上げ、テーブルの上の空からになつた器を脇によせた。

女将は、

「お口に合いますかどうか」と言いながら、テーブルの上に並べた。

「日本の料理は健康的でいいですね。私は、咲姫がスマートな理由が日本に来て分かりました」と、笑いながら言つた。

「それと、剣道ね」咲姫は言つた。

「あら、こちらさんは剣道をやつてらつしやるんですか？」女将

は、驚いた顔をして咲姫を見た。

「ああ、女将さん、この人は学生時代から剣の達人で、面を打たせたら、ちょっと敵う者はいないよ」<sup>かたう</sup>神田は少し自慢げに言った。  
そして、

「あつ、そうだ。あの時の郷戸は、この親父さんがしばらく面倒を見ていたんだよ」と、カウンターの中にいる鉄を見た。

いた。

「あの郷戸さんか……」咲姫の脳裏に郷戸の刃のように鋲し印象の顔が浮かんだ。

「うーん、いいにおいですね」と瞳を閉じて、満足そうな顔をした。神田は、そのキャシーの様子に少し違和感を感じたが、「あこつも、今頃どうしてこんな感じになってしまったかね」と言つて、手で、茄子と茗荷のすまし汁の椀を包むようにもつて香りをかぎ、キャシーは、一瞬、郷戸と言つて葉に反応して顔を上げたが、両手で、茄子と茗荷のすまし汁の椀を包むようにもつて香りをかぎ、

「不思議なものね。いろいろな目に見えない繫がりが私たちにはあるのね」と言つ咲姫の言葉に神田は黙つて軽くうなずいた。

「 そうで」「ざんすね。あいつにも、こうして噂をしてくださる  
御仁いじんがいらっしゃるってえのに・・・全く、生きているのか死んで  
いるのか、人様に迷惑でもかけていやがるんじやねえかと、あつし  
らは心配で」「ざんしてね。なあ、おとみ」と女将の顔を見た。

「おっと、いけねエ。湿っぽい話はナシにしやしちう」鉄はそういつと、ぐるりと背を向けて、鉄瓶の湯を急須に入れた。

神田はカウンターの中の鉄から咲姫に目を移して、

「咲姫ちゃん、さつきの続きだけど……」と、話の続きを促した。

「ええ、それでね、私は、おおえのひづもと大江広元のことだから、義経の首を鎌倉に運ばせたのと同時に、別のものも運ばせたのじゃないかと思うの」そう言いながら、咲姫も、すまし汁の椀から立ち上がる湯気には少し顔を倒して鼻をよせた。

「別のもの？」神田も箸を取り、すまし汁の椀を左手で持つた。  
「そう、夏の盛りに首実検をするのは難しいことを見越して、いわば、予備の証拠品を別ルートで運ばせたんじゃないかと思うの」ここまで言つて、すまし汁を一口すすつた。

そして、椀を置き、

「あるいは、最初から、義経の首とセットで頼朝宛てに届ける予定になつていたとも考えられるわ」右手で箸を取り上げて、左手と共に、それを揃え直した。

そして、

「これは、かなりの部分で、私の推測が入るけど、状況から見ると、そういうふうに考えるのが理にかなつていてると思うの」そう言うと、

「つまり、義経の首と、もうひとつ、これさえあれば、義経の死は確実に証明できる、そんなものよ」と続けた。

「何だい？ その別のものつていうのは？」神田はすまし汁から立ち上がる湯気を通して咲姫を見つめた。

咲姫は、すまし汁を一口すすり、椀をテーブルに置くと、

「義経と頼朝、そして修験道と矢、どう？ 何か思いつかない？」

「矢、義経の死……」神田は、しばらく考えて、

「あ！それはひよつとして・・・」神田が次の言葉を言つ前に、  
「弁慶の立ち往生」咲姫は言い切つた。

「あーッ！ ジャあ、あの、鉄の棒に封印されている矢は・・・

「おそらく、弁慶の命を奪つた矢よ」

鉄の棒に閉じ込められた三本の矢は、富島、富士山、熱田神宮、  
それらは海の民、山の民、里の民の支配、すなわち、日本の國土を  
支配することを意味していた。

しかも、その三本の矢は、日本國の支配者であることの証明書と  
でも言つべき、三種の神器、すなわち、八咫鏡、八坂瓊曲玉、草薙  
の剣と関連がある。

そしてそれは、源頼朝と義経の確執にも繋がり、さらには、大江  
広元へ、そして、毛利元就の三本の矢の説話もここから生まれたの  
ではないかとも考えられるのだ。

そして今、咲姫は、その三本の矢は弁慶の命を奪つた矢ではない  
かと言うのだ。

「弁慶は、義経が持仏堂の中で自らの命を絶つのを邪魔させまい  
として、持仏堂の前で無数の矢を体に受けながらも薙刀を地に突き  
立て、仁王立ちのまま絶命したといわれているわね」咲姫は姿勢を  
正して話を続けた。

「五条の橋の一件以来、常に義経の身を守り、支えてきた弁慶の  
最期に相応しい立ち往生だつたろくな」神田も感慨深げに言った。  
そして、

「弁慶は修驗道のネットワークを駆使して、義経の逃避行の先導

役を務め、義経を支えてきたのは事実だらう」そう言つと、神田は、炊き込みご飯を瞬きもせずに顔を前に向けたまま、一口食べた。

「でも、逆にそのネットワークを伝わる情報が逆流して頼朝サイドへも流れてしまったといふことも十分に考えられると思わない?」

「そもそも、弁慶自身は修験道グループのアウトローだったじゃないの?」

「あー、たしかに、比叡山を追に出され、各地を転々とした後に、修行中の書写山の圓教寺の堂塔に火を放つて大騒動を巻き起こしたりした、まさに、暴れん坊だよね」そう言つて、神田はＮＨＫの「義経」で弁慶を演じている松平健の顔を思い出し、笑みがこぼれた。

「牛若丸と出合つたのも、その償いのために、千本の刀を得て、お寺再建の釘代を工面しようとしたためだつたんだからね」と、弁慶が京の五条の橋の上で牛若丸と鬪うシーンを思い浮かべた。

「反弁慶派の存在があつてもおかしくはないわ。修験道の反弁慶派のグループが、来るべき頼朝の天下で優位な位置を得ようとする目論見と、頼朝と大江広元の目論見が一致したのじやないかしら」と言つと、

「つまり、義経と弁慶の排除、といつ点で一致したつて言つことか」と、神田が繰り返した。

咲姫がさらに、

「そして、義経の首と、弁慶の命を絶つた三本の矢が頼朝の元へ届けられる予定だつたけど・・・」と言つと、

「頼朝の首は腐敗してしまい、首実検に耐えられる状態ではなくなり、三本の矢だけが頼朝の元へ届けられた」神田はその後を続け、「なるほど」十分に考えられるな、と思つた。

「頼朝は自分自身で義経の死を確認できなかつたために不安で懼のおり、政に支障を来たすことを危惧した大江広元は、弁慶と義経の怨恨を封じ込めるために三本の矢を鉄の棒に閉じ込めて、海、山、里

の象徴である宮島、富士山、熱田神宮のそれぞれに閉じ込めた「神田は一気にここまでしゃべり、息を吸い込み、

「これでご安心召されよ、天孫降臨の古よりの要の地に三本の矢をお祀りすれば、頼朝様の天下掌握は磐石のものとなります、と、」

「ひこう」訳か「うーん、と神田は口を閉じ腕を組んだ。

咲姫は炊き込みご飯を一口に運び、じっくりと味わうと、

「その実際の作業は、修験道の役小角の末裔達が手を貸したのだと思つわ」と、続けた。

神田は、腕組みをして息を吸い込み、

「ふーっ」と、息を長く吐き出した。

咲姫も炊き込みご飯の椀を左手に持ち、右手には箸を持ったまま、ぽんやりと壁を見つめていた。

そんな様子を見て、キヤシーが、

「ふたりとも疲れましたか?」と顔に笑みを浮かべて、下から咲姫の顔を覗き、そして、神田の方に向かつて、片目を閉じてウインクした。

「い、いや、・・・これから先のことを思うと、体に鉄のよろいを着けているよつですよ」と言いながら、右手で左肩を揉んだ。そして、

「鉄の棒が宮島、富士山、熱田神宮に隠され、いや、祀られていた、と言つべきかな。その理由は咲姫ちゃんの推理通り、頼朝にとつて邪魔になつた義経と弁慶の怨霊を封じ込めるため、そして、そうすることが頼朝の日本支配を磐石にするためだとしても、・・・そもそも、どうして、その三本の矢を必要とする人間がいるんだ?」

天井を見上げて、首をコキ、コキ、と鳴らした。

咲姫さきも、口の中なかで、

「何なんのために・・・」とつぶやいた。

神田かんだも

「どうして、中国はそれを狙ねらつたんだ」と自分に問たずいかけた。

「神田のだんな」鉄が遠慮がちに言ひながら、手を拭き拭き、力  
ウンターから出てきた。

「何ですか？」<sup>かみた</sup>神田は、鉄がカウンターから出てくるのを初めて  
見た。

「やつきから、弁慶さんのお話をされていらっしゃるよひですが」  
そう言つて、木の丸椅子をテーブルの下から出して座つた。

「ああ、どうやら、鉄さんがさつとき言つた、毛利元就の三本の矢  
の教えの、その三本の矢は、どうやら弁慶の命を奪つた矢じやない  
かつてことになつたんですよ」と今度は左手で右肩を揉んだ。

「へー、弁慶さんのねー。いやね、弁慶さんと言やー、出雲の出  
身で「じざんすからね、あつしもちよいと<sup>かか</sup>関わりが「じざんしてね」と、  
頭に巻いた手拭<sup>てぬぐい</sup>を外した。

「あんた、もひ、止めときなさいよ」笑いながら、奥から女将が  
出てきた。

「いえ、女将さん、面白<sup>いぢや</sup>ないですか。関わりがあるだなん  
て。聞かせて欲しいな」咲姫も<sup>さきよ</sup>興味津津の顔をして振り返つた。

女将はテーブルを拭きながら、

「関わりなんて<sup>あおげさ</sup>大袈裟なんもんじやないですよ。ただ名前が山田  
鉄男だというだけなんですよ」と、軽く言つた。

「山田鉄男という名前が関わりがあるんですか？」神田は、鉄の  
話に興味がわいてきた。

「いえね、<sup>やまだてつしん</sup>あつしの親父は実は、<sup>やまだじつひ</sup>山田一鉄つていいやして、爺さ  
んは山田鉄心つていいやすんで」

「眞さん鉄の字が入るんですね」

それを聞いていた咲姫の顔が、ぱつ、と赤みを帯びた。

「でも鉄さん、弁慶は紀州の出身じゃあ・・・」と神田が言いかけると、

「とんでもねえ。まあ、そこつあー、よく言われるひつひーじさんすがね、弁慶さんは、正真正銘、出雲のじ出身でじやんすよ」鉄は、両手を膝につこて、肩を張り上げて、言つた。

「弁慶さんのお生まれになつた場所もハシキコシでやすし、母上のお墓もじせえやす」顔色もやや赤くなつて、

「もひ、神田さん、すいませんね。弁慶さんの話になるとこの人つたら、こつもこつなんです」女将は苦笑いしながら言つた。

「いやね、あつしの遠いじ先祖さんは出雲の出身でしてね、出雲つて言やー、<sup>はがね</sup>鐔、鉄でじやんすからね。それで、山田家の男共の名前には、みーんな、鉄、の字が入つていてるんでじやんすよ」

「弁慶と鉄と関係があるんですか？」

「そいつあー、むおありでじやんすよ、神田の田那」鉄は体を前に倒し始めた。

キャシーは、笑みを浮かべて鉄の話を聞いていた。

しかし、咲姫の顔は赤みを帯び、真剣な表情のままだ。

「弁慶さんのお袋さんは弁吉さんと言こやしてね、このお袋さんが紀州のじ出身でじやんすよ。で、弁慶さんを身じもつた時に、あんまりつわりがひどくてね、それで、鉄の鍬<sup>くわ</sup>を食べて、十本田の鍬<sup>くわ</sup>を半分食べたときに弁慶さんをお生みになられたんでじやんすよ」鉄の目は真剣そのもので、神田も笑いをせしはせむ余地などなかつた。

「鉄さん、その話は聞いたことがあるよ」と、神田が応えると、  
「そうで『ござんすかい』と、鉄は喜びを顔に表し、  
「おい、おとみ、さすがに、神田のだんなは『存知だぜ。』」  
あ一間違えねえーぜ」と大声を上げた。

「何しろ、弁慶さんは、お袋さんが身『』もつてから十三ヶ月の  
仁平元年三月三日にお生まれになり、そのお姿は髪も長く、歯が二  
重に生えて、すでに一、二歳児のようだつたつてんですから驚くじ  
やありやせんか」と、腕組みをして、しきりにうなずいた。

鉄は、右手で左肩をさわり、

「さらに左肩には、摩利支天、右肩には、大天狗、の文字があつ  
たんで『ござんすからねえ。立派なもんで『』ぜえやすよ』とますます  
声が大きくなつた。

「鉄さんは弁慶のこと詳しいんですね」神田は笑いながらも、  
鉄の意外な面を見て驚いた。

「へへ、こりや、面田ねえ。あつしは、小せえ時分に、爺さんか  
ら、弁慶さんについちゃあ、さんざん聞かされていやしたからね。  
それで、あつしも弁慶さんのように雑刀なぎなたを背負つて歩きたかつたん  
で『』ぞんすよ」

それを聞いた女将が、

「ふつ」と吹きだしたが、鉄はそれには構わずに、  
「それが、へつ、どこでどう間違つちまつたか、匕首あいくちを持つて、  
・・へつ、こりや、面田ねえ」と、話を続け、右手を頭にやつた。

神田は、鉄の話を聞いて、

「うーん、確かに、弁慶の周りには、鉄にまつわる言い伝えが多  
いですね。さつきの、お袋さんが十丁の鍬くわを食べて弁慶を生んだと

が、全身は鉄で覆われていたけど、のびぶえの四寸四方だけはむき出しだったとか

「弁慶さんの泣き所つてやつでござるですね」

「今では、七つ道具つて言えば選挙の七つ道具なんかによく使われる言葉だけど、もともとは、弁慶が背負つていた・・・」神田は弁慶の姿を頭に描きながら指を折つて道具を数えた。

「薙刀や鉄熊手、鉄大槌、のこぎり、なんかを言つたんでしょ？ それらは全部、鉄を使って作られた道具ですからね。あと、さすまた、と・・・何だつたかな・・・」と考えていた時、

「源平の合戦の後、弁慶さんが義経さんと一緒に、出雲へいらした時にやあ、大山寺の釣鐘を、昔、弁慶さんが修行をなすつた鰐淵寺まで担いで帰られたんですからね。立派なもんでござんしょ！」

？」と、鉄が自慢げに言つた。

「へい。ええ、まあ。それに、出雲は砂鉄発祥の地ですし、鉄につわる話は古事記の昔からありますからね」確かに、鉄の話になると弁慶の周りにはたくさんある。

「へい。八岐大蛇のお話も、やつでござんしょ？」と、鉄は神田に聞いた。

キヤシーが、

「オロチ、つて何ですか？」と鉄の顔を見た。

「大きな蛇でござんすよ。ドラゴンつて言つんですかい？ 英語では？」

女将が、テーブルを拭きながら、またもや「ふつ」と吹いたが、鉄は、それには構わず、

「そいつは、こう、頭が八つ、尻尾も八本ござんしてね」と身振り手振りで話し始めた。

「目はホウズキのように赤く、体には苔や桧、杉なんぞが生えて

いやしてね、腹はただれでいつも真っ赤な血が流れていやして・・・

「ここまで言うと鉄は立ち上がり、

「その体は、ハつの谷とハつの峰にまたがるほど大きかったと言われているんで」「やんすよ」と、両手をこっぱいに広げた。

その話を聞きながら、神田は先口の高島の山津波を思い出した。

そして、昭和20年の枕崎台風で発生した山津波は、先日、神田達が経験した山津波の数倍の規模であったことを思うと、まさに、大きな岩を「ゴロゴロと転がし、流れてくる途中でなぎ倒した大木を泥流に突き立て、大きく波打つて谷を流れる様子は、八岐大蛇が獲物を追いかけている様そのものであつたことだ」と思つた。

そして、その時発生した、山津波は、何百トンもの土砂で紅葉谷を埋め尽し、その土砂の中から、鉄の棒が発見されたのだ。

「そのドラゴンの尻尾から鉄の剣が発見されたんで」「やんすよ」

鉄は、剣を抜くまねをした。

「とてもおもしろい御伽噺ですね」とキャシーが言ひのを聞いて、

鉄は、  
「御伽噺なんかじゃ」「やんせんぜ」現に、その時の剣が三種の神器のうちのひとつ草薙の剣として名古屋の熱田神宮さんにお祀りして、「ぜえやすから」と、眉を寄せていった。

神田は、「待てよ、ひょっとして、斐伊川の氾濫か、山津波で、上流から鉄剣が流されて来て、その発見がこの古事記の話の元になつてているのかもしれないな」と思つた。

現実に1984年（昭和59）には、谷間の急斜面から358本とこう大量の銅剣が発見され、日本中を驚かせたではないか。

神田はキャシーのほうを向いて、「その、八岐大蛇の赤い腹は、砂鉄で赤く染まつた川を表し、さらに、大蛇の尻尾から鉄剣が発見されたところ、このお話は、出雲の地方が古代から製鉄が盛んだつたことを伝えていると言われているんですよ」と、鉄の話を捕捉するように言った。

「今でも安来市の田立金属は世界最高の鋼、ヤスキハガネを製造していますからね」と、神田が言うと、キャシーは、「そうですか。以前、咲姫に日本刀を見せてもらったことがあります、とてもきれいでした。西洋の刀とはまるでちがいますね」「でしょ？中国山地の砂鉄を使ってタタラという日本独特の製鉄法で作られたものですからね」と言いながら、キャシーの日本に対する関心の高さを改めて感じた。

鉄は、

「あつしの匕首も……」

「あんた！！」

「おつと、こりや、面白ねえ」と頭に手をやり頭を下げた。

「鉄を制するものは国を制するつて言いますけど、昔の出雲も力を持つっていたでしょうね」キャシーは、神田の意見を求めるように顔を見て、

「日本だけでなく、世界の歴史を見てもそうですから」と、付け加えた。

神田は、

「そうですね。出雲の勢力圏は今的新潟や信州、紀伊半島、さらには北部九州にまで及んでいたと言つ説もありますからね」と、言つて、

「女将さん、お茶を」と湯飲みを持つ格好をした。

「新潟には出雲崎と云つところがありますし、鉄さんの田舎の信州は、さつきの国譲り神話の話に出てきたように、天照大御神から命令された建御雷之男神に力較べで負けた健御名方神の亡命先についているし・・・」ここまで云つと、キヤシーは、

「そうでした。それで、逃げて来たその出雲の神様を閉じ込めているのが諏訪大社でしたね」言つた。

神田は

「キヤシーさん、よく覚えてますね」と驚いた。

「頼朝の居た伊豆も出雲と関係がありそうですしね」と言い、鉄には聞こえないように、

「それに、一般には弁慶の出身は和歌山だと言われていますから」と、付け加えた。

鉄は、

「え? 何ですかい?」と、耳を神田のほうに向かへた。

「咲姫、どうかしましたか?」キヤシーは、咲姫が先程から黙つているのが気になつて尋ねた。

咲姫は、

「いえ、なんでもないのよ。ただ・・・」と、言葉を濁した。

「ただ・・・、何ですか? 少しお酒飲み過ぎましたか?」キヤシーはそう云つて、咲姫の前にある空になつたグラスを見た。

咲姫は、

「キヤシー、私は、キヤシーも知つてゐるよつてウワバミなのよ」と言つて笑つた。

「ウワバミ?」キヤシーは眉を寄せて、首をかしげた。

「ふふ、大酒飲み、お酒には強いことよ。これくらいでは・・・

・

神田も笑つて、

「ははは、学生時代からハ岐大蛇やまたのあらおなみだつたからな、咲姫ちゃんは

「あら、そんな風に思つていたの？」と、咲姫は、怒つたふりをした。

「いや、いや」神田は目の前で手を振り、

「で、どうしたんだい？」神田も、咲姫が急に黙つたのが気になつていたのだ。

「さつき、ご主人が、出雲の鉄から、そして、弁慶と鉄の関わりについてお話されたでしょ」そう言って主人の鉄の顔を見た。

「それで、頭の中が急に熱くなつてきて、いろんな考えがクルクル廻つてね・・・」と、右手の人差し指をクルクル回した。

神田は咲姫が何を言い出すのだろうかと怖くなつた。

女将おかみがお茶を運んできた。鉄が居る土間のテーブルの上に盆を置き、湯飲みを一つずつ座敷のテーブルに置いた。

「神田君は、弁慶、と聞いて、何を思い浮かべる?」と、再び、咲姫の謎かけが始まった。

「そうだなー。まず、体が大きいことかなあ」と腕組みをした。

咲姫はさらに、

「顔つきとか、たとえば、色のイメージでいうと何色?」とたずねた。

「顔は、色黒で、髭ひげが濃くて、どちらかと言つと日本人離れした彫りの深い顔かな。色のイメージだと、やはり黒、だろうな。衣の黒のイメージがあるしね」と腕組みをほどいてお茶を一口飲んだ。

「そうね。げんべいせいすいき源平盛衰記にも、弁慶の姿は黒の鎧よろこに黒の胄かぶと、黒漆くろうりの刀に黒羽の矢を背負つていたといふに書かれているのよ」と、お茶の入った湯飲みを両手で包んだ。

「へー、そうなんだ」神田は、湯のみに手を副えたまま咲姫の話を聞き入った。

「私は、弁慶とカラスのイメージが重なってしまうのよ。どう?」

「んーん」神田は、湯飲みから手を離し、腕組みをして、

「確かに、そうだな」と言った。

「常に義経の先鋒として道案内やたがらす、ナビゲーターの役割を担つてるのは、神武天皇の東征の時のハ咫鳥じんびつねのうと同じじゃない?」咲姫はさらに説明を加えた。

「なるほど。ハ咫鳥やたがらすのハ咫つて大きいって言つ意味だから、弁慶とピッタリ重なるな」そう言って、神田は突然、あの大男が富士山

の山頂から飛び立つた姿を思い出し、愕然とした。

「まさか……そんなことは……」

富島の弥山みせんからも同じようにして飛び立つたの大男が、ハ咫鳥やたがじゆのイメージと、そして、弁慶のイメージと重なつたのだ。

キャシーは座敷を下りて、カウンターへ行き、鉄となにやら楽しげに話している。

「どうしたの？」咲姫は神田のやや血の氣の失せた顔を覗き込んで、「う」と笑つた。

「当ててみましょか。神田君は今、富士山頂やたがらすから、中国人に追われて飛び立つたあの大男のことを思い出しているんでしょ」ズバリであった。

考えてみると、今回の件は、あの謎の大男の出現から始まつたのだ。全身を黒く塗つたあの大男は、ハ咫鳥やたがじゆを表わそうとしていたのだろうか？まさかそんなことはないだろう。単なる偶然の一一致だろう。

しかし、厳島神社の神殿を造営する場所も、鳥の導きによつて今この場所に決められたといつ言い伝えは何を伝えようとしているのだろうか。今に残るお鳥喰式おとくいじきの行事は俺たちに何を伝えようとしているのか？

厳島神社の神使が鳥であるのには深い理由があるのでないだろうか。

お鳥喰式の鳥は紀州の熊野へ帰つて行くという言い伝えは、弁慶と富島の関わりを暗に示しているとも考えられるではないか。

「それに、弁慶にはもうひとつ、天狗のイメージもつきましたっているのよね」咲姫はさらに話を続けた。

確かに、弁慶の大柄な体に纏つた修驗道の衣装や、日本人離れした顔は、鼻の高い天狗のイメージがある。

神田は小学生のころには廿日市の秋祭りを楽しみにしていた。祭りになると、同級生と連れ立つて廿日市の商店街に出かけたものだ。その祭りの神輿の先頭には必ず天狗の面をかぶつた若者が歩いていた。そして、その天狗は、時折走り回つて、周囲の見物客を金剛棒で蹴散らしていたのを覚えている。子供達は、その天狗をからかうのを楽しみにしていたものだ。

義経の案内役として先導者の役割を担つていた弁慶はまさに天狗の役割を演じていたことになる。

富島には、その天狗てんぐにまつわる言い伝えが多く残つている。神田は何年か前、「富島町史」に載せるために、富島の伝説の調査をしたことがある。50人を越える島の古老達から昔の行事や、わらべ歌とともに、言い伝えられてきた伝説の聞き取り調査をした。

そして、天狗にまつわる多くの言い伝えがあることに驚いた。雪の日には、厳島神社の本殿の屋根には天狗の足跡が現れるとか、天狗は、年末になると、弥山の頂みせん上たまつに松明ともを点し、頂上からカーン、カーン、と、拍子木ひょうしきを打つといつのだ。

古老達は、幼い頃には、実際に何度もその音を聞いたことがあるという。また、ある古老は、天狗が打ち鳴らす太鼓に誘われて山に入り込んだ人を助けたことがある、と、自慢げに語ってくれた。

今年（平成17年）の5月5日に消失した靈火堂の裏の岩に、天狗の顔が影になつて現れているのはよく知られている。

咲姫は、神田の考えていることを見通したかのように、

「キャシーと一緒に弥山に登つたときに、三鬼堂の中にお邪魔したけど、お堂には天狗のお面がたくさん飾つてあるでしょ。あれつて、富島の象徴じやないの？」と言つた。

「なぜ？」神田は、咲姫に自分の考えていることを覗かれているよつた気がした。

「だって、さつきの弁慶と鳥の話。そして、神田君も思つたでしょ？ その、神田君が見たつていう大男のこと」と、強い口調で言い、さらに、

「キャシーとJRで富島口に着いて、桟橋に向かつて歩いて、最初に気がついたのは桟橋前にある像よ」と言つた。

「像？ ああ、あの桟橋前に建てられている、舞樂を舞つている形の像のこと？」神田は、富島口のロータリーにある像を思い浮かべた。

「ええ、あの面はまるで天狗の顔じやないの」

「確かに、舞樂の面は昔の日本人が出会つたシルクロードの西の人間の顔を模したものだうね」神田も常々そう思つていた。

「そして、大聖院の参道入り口で参拝者を迎えるように立つてゐるあの像」

「え？」

富島の大聖院の入り口では鳥天狗の石像が参拝者を迎えている。

「大聖院の入り口に立つ鳥天狗の像と富島の入り口に立つ舞楽の像。同じじゃない?」咲姫は言った。

弁慶、鳥、天狗これらのイメージが見事にひとつに収束していった。

「神田君、もうひとつあるのよ」と咲姫はいたずらっぽく言った。  
「天狗はね、猿田彦だつてことよ」咲姫がそう言つと、神田も大きくなづいて、

「そうだね。俺もそれは感じていたよ。猿田彦は天照大御神が孫の邇邇芸命を日本へ派遣した時に邇邇芸命の案内役を務めた神様だけいいものだろうかと思い始めた。

「身長すこぶる高く、顔赤くして鼻高く、目は大きく、その輝くさまは鬼灯の如くであつた、というんだからね」と昔読んだ古事記の一節を思い出し、言つた。そう言いながら、富士山本宮浅間神社の神使は猿だつたことを思い出し、これらは本当に偶然として片付けていいものだろうかと思い始めていた。

「どうしたの?」咲姫は、おどろいて神田を見た。

「いや、少し前に富島の神社の由来や祭神をまとめるために島内の神社を調べたんだけど」と、神田は5年前のことを思い出した。

「あら、そうなの」咲姫は湯飲みを両手で包んだまま顔を上げた。

「でね、天照大御神の子供や、宗像三女神の市杵嶋姫や、田心姫、湍津姫がお祀りしてある神社が多いのは分かるんだけど、猿田彦命が祀られている神社がやたら多いのには驚いたんだよ」

咲姫はじつと神田の話を聞いている。

「それにね、宮島七浦の神社に祀られている神はどの神も予言や道案内に関する神だつたんだ」

咲姫は、

「ああ、それはそりでしようね。鳥が厳島神社の創建場所を捜すために皆の先頭で案内をしたわけでしようからね」と、当然のようつり顔をして言った。

「綿津見三神や住吉三神の神様でしょ？」

「よく分かるね」と、言いながらも、咲姫がこいつしたこと詳しいのにはもう驚かなくなつていた。

「どの神様も航海の安全や無事を祈るための神様、つまり海の水先案内人、パイロット、でしょ。猿田彦命と同一の神と考えてもいいんじゃないの」と言い、

「塩土老翁がお祀りされている神社もあるのじゃない？」と、神田に聞いた。

神田は、咲姫の知識の豊富さに呆れながら、

「確かに、塩土老翁も包みが浦神社にお祀りされてるよ」と言った。

「でしううね。塩土老翁は、シオツチ、つまり塩の道を知つていい神様ということだし、船の先頭を飛ぶ鷗もあるのよ」

「その鷗の白と、塩の色、海、といつイメージから塩土老翁が生まれたのだと思うわ」と言つて、

「つまり、白い鳥なら鷗でもいいのよ」と付け加えた。

「知つてゐる？熱田神宮の神使は鷺さきだつてこと？」と、神田の反応を見るように小首をかしげて神田の顔を見た。

「えつ！？」神田はやはり驚かざるを得なかつた。

「鳥からすだといふ説もあるけど、どちらにしても同じ事ね。おとくこじき御鳥喰式の行事も行われてゐるようだし、鳥と関係があるのは間違ひないわ」と神田を見つめた。

「どう？巣島神社の神使が鳥からす、富士山本宮浅間神社の神使が猿さる。熱田神宮の神使が鷺さき。どの神使も、道を案内する先導者だつてことに気がついた？」と、咲姫はゆつくりと、しかし、はつきりとした口調で言つた。

「「」これは……やはり偶然とは思えないな」神田はその咲姫の問いかけには直接答えず、自分自身に言い聞かせるかのようにつぶやき、

「毛利元就もりいもとなりの祖先、大江広元おおえひろもとつて男は相当な知恵者だね」と咲姫の同意を求めた。

しかし、咲姫は、

「広元だけの策じやないかもしれないわよ。それに、これだけの仕掛けを実行するには闇の勢力も絡んでいるかも」と、含みを持たせた言い方で返した。

「闇の勢力？」神田は聞き返した。

「そう、修験者しゅげんじやもそうだけど、忍者集団の風魔ふうまとか、非人の頭領の弾左衛門だんざえもんとかね。どつちも北条氏と関わりが深いものね」と二口ツと笑つて付け加えた。

「おい、おい、そこまで行くと話しがややこしくなるよ」神田は苦笑いをしながらて口元をゆがめた。

「そうね。まずは猿田彦さるたひこのみこと命ね」と、咲姫も肩をすくめた。

神田は、

「猿田彦命ほどその容貌について詳しく書かれている神様も少ないよね」と言い、頭の中でいろいろな神様についての記述を思い出した。

そして、

「たぶん、最初の印象が強烈だつたんだろうな」と言つと、

「朝鮮半島から渡つてきた弥生人やよいじんがそれまで会つたことのない、つまり、彼らとは違つ容姿ようしだつたんでしょうね」と、咲姫はうなづいた。

神田は、その咲姫の言葉に、

「でもそのこと自体は、邇邇芸命ににぎのみことが、つまり、朝鮮半島から今の天皇の祖先が渡つてきた時には、彼らとはかけ離れた容貌をしている人間が、既に日本に居たつてことになるよね」と言つと、

咲姫は、すぐに、

「そう、弁慶の祖先がね」と応えた。

「弁慶の祖先？」

「これからが大事なところよ。神田君」

「咲姫ちゃん、この話、どう繋がっていいんだ? もう、これ以上の詮索は高見刑事に任せたほうが良くはないか?」神田は田に見えない何かに絡みつかれている様な気がしてきた。

咲姫は、両手で包んでいた湯飲みを口元にもつて行き一呼吸おいて、一口飲んだ。そして、「私も少し怖くなってきたわ。でも、もう、ダメね」と、きつぱりと言つて、唇を横一文字に結んだ。

「ダメ? どうして?」

「山口さんよ」

「山口さん? どうして?」とだい」日本拳法部の山口さんが何の関係があるというのだらう。一体、咲姫は、何を言い出すんだらうと思つた。

「山口さんが私たちを呼んでいるのかもしれないわ」と、目を細めて、小さくつぶやくように言つた。

「何を言つているんだい、咲姫ちゃん。山口さんが俺たちをどうへ呼んでるっていうんだい?」神田は困惑した。

「ネパールよ」そつ言つて、キャシーをチラッと見、そして、神田のほうを向いた。

「私たちは、ネパールへ行かなきゃ行けないのよ」咲姫が、言葉に力を込めたのが分かつた。

咲姫は、カウンターで鉄と話し込んでいるキャシーのほうを見て、

「キャシーは来週には医療ボランティアの一員としてネパールに向かう予定になっているの」と、やや小さめの声で言った。

神田もカウンターで話し込んでいるキャシーのほうを見た。

「ああ、そう言ってたね」

「キャシーは、まだ山口さんの身に何が起ったのか言ってくれていなーいわ。けど、10年前に何が山口さんの身に起つたのよ。そして今も山口さんの亡骸<sup>なきがら</sup>はネパールの地にあるのよ」咲姫は声を落として言った。

「待つてくれよ、咲姫ちゃん。その・・・、今まで話していた弁慶や義経、毛利元就<sup>もうりもとなり</sup>の三本の矢の教え、それに八岐大蛇<sup>やまたのおおの</sup>の話・・・」

神田はここまで言って、大きく息を吸い込み、

「それに、もともとの三本の鉄の棒の窃盗事件<sup>とうとうじ</sup>がどうして山口さんやネパールと関係があるんだい?」と、言つと、

「それと、さつき言いかけた弁慶の祖先<sup>そしゆ</sup>って、咲姫ちゃんは何を見つけたんだい?」神田は不安に駆られながらも、これまでのモヤモヤとした霧を晴らしたいという好奇心と苛立<sup>いらだ</sup>立ちでだんだんと、咲姫を問い合わせる口調になるのが自分でも分かつた。

咲姫<sup>さき</sup>は、神田<sup>かみた</sup>の問いかけに静かに答えた。

「それは私の頭の中で整理して、追々説明できると思つけど・・・

」

神田は、咲姫<sup>さき</sup>の頭の中で、何かと何かを繋げようとしているのを感じた。いや、もう繋ぎ終わっているのかもしない。

「今回の件はね、神田君。私のお仕え<sup>つか</sup>しているハ頭神社<sup>はつとうじんじゃ</sup>様が私に

「与えられた使命だと思うのよ。私の運命だとつくづく感じるのよ」

咲姫は、ジッと正面の壁を見つめた。そして、神田のほうを向いて、

「八頭神社様は、八つの頭って書くでしょ？私は昔から思つてい

たの。どうして八頭神社って名前なのか。ひょっとして八岐大蛇と

関係があるのじゃないかと、ずーっと思つていたの」咲姫はこうい

うと、思い切つたように、

「八頭神社ではなく、八頭蛇じやないかってね」

神田は、咲姫のやや青白くなつた顔を静かに見つめた。

咲姫は腕時計に目をやり、

「あら、大変、もうこんな時間。すっかり話し込んでしまって、この続きはまたね」

「また、つて、いつだい？」神田の口調は自然に不服げになつた。

「連絡するわ。ちょっと熱田神宮の鉄の棒の件を調べて、その報告もしなきやいけないでしょ？」と、にこにこと白い歯を見せて言った。

「え！？やつてくれるかい？助かるよ。咲姫ちゃんが調べてくれるなら万々歳だよ」

「あら、神田君はさつき、もう手をひいたほうがいい、とか言わなかつた？」

「しかし、まあ、いいめできたら……」神田は苦笑いをした。

長く深い夜であった。廿日市駅前の精進料理屋「おとみ」で、主人の山田鉄男の祖先が出雲の出身だと分かつてから三本の矢にまつわる秘密が歴史の闇の中から浮かび上がってきた。

いや、歴史の闇の中からその秘密をすくい上げたのは、八頭神社の女性富司の木野花咲姫であった。

咲姫は、鉄の棒の封印は、源頼朝と、その懐刀であつた大江広元が日本を支配するための策略であることを見抜いた。そのことが、後の毛利元就の三本の矢の教えの元になつてゐることまでもが明らかになつた。

さらに、咲姫は、富島の赤、富士山の白から秘密の糸を手繰り寄せ、ついで、三本目の鉄の棒は名古屋の熱田神宮に隠されてゐるといふところまで解説してみせた。

しかも、咲姫は、その鉄の棒には、出雲にまつわる様々な歴史が関係してゐることまで証明してみせたではないか。

そして、今は、咲姫によると、咲姫が富司をしてゐる八頭神社とハ岐大蛇、弁慶と天狗、鳥、猿の関係、これらの中には何らかの関係があると言つてゐるのだ。

居酒屋「おとみ」で咲姫とキャシーに会つた翌朝も、神田は、富島の東の尾根、博打尾の尾根筋を弥山に向かつて登つた。

早朝の太陽はまだ低く、海面に反射して、江田島に濃い陰影を与えてゐる。

ここを登るたびに、あの大男のことを思い出す。猛烈な風と雨の中での男に対峙した時、神田は何十年ぶりかで鬪争心が蘇つた。

しかし、一方では、神田にはあの時、あの男に勝つ自信はなかつた。それを見透かしたかのようにあの男は唇の端を上げて嗤つた。

それが神田には許せなかつた。その男がでなく、自分自身が許せなかつた。

出来ることなら、もう一度あの男に会つて闘つてみたい。神田の中にメラメラと武道家の炎が燃え上がつてきた。その日のために、あれ以来、こうして博打尾尾根を登つているのだ。

獅子岩から弥山に向かうならかな登山道を走つた。若い僧が、弥山本堂の境内を掃き清めていた。

神田は本堂の中に何気なく田をやり、そして、

「あつ」と小さく声を上げ、すーと、と、汗がひくのを感じた。

「どうかされましたか？」境内を清めていた若い僧が不思議そうな顔をして神田を見た。

「いや、なんでもありません」そう言いながら、昨日の晩、「清盛うじん」で咲姫と交わした会話を思い出した。

「富島は学問上、貴重な島だと思つよ。ペトログラフの古代信仰からヒンズー教、山岳信仰、仏教、神道。神社の配置からも明らかに北斗信仰、妙見信仰も取り入れられていることが分かるしね。弥山頂上と巖島神社の大鳥居をつなぐ線は南北方向なんだよ」という神田の意見に咲姫は、「弥山本堂には毘沙門天が祀られていたわね」と応えた。

それに対して、「ああ、毘沙門天は北の守り神だからね」と、その時は、簡単に応じたのだ。

しかし、今、神田は、弥山の本堂に毘沙門天が祀られているのにはさりに深い意味があることに気が付いた。

神田は、弥山<sup>みせん</sup>頂上から吹き降ろす朝の冷たい風に、体をすくい上げられた感覚に捉わえた。

自宅に帰つて、シャワーを浴びながら、神田は、宮島の長い歴史に思いを巡らせた。

そして、改めて、ここ宮島は、天孫降臨以前から人々の崇拜<sup>すうはい</sup>と畏敬<sup>けい</sup>の念を集めた聖なる島であることを実感した。

神田は思つた。

須弥山<sup>しゆみせん</sup>に喩えられ、ヒマラヤの北方を守護する毘沙門天<sup>びしゃもんてん</sup>が宮島に祀<sup>ささ</sup>られているのはどういう意味があるのであらうか？

咲姫<sup>さき</sup>は「私たちはネパールへ行かなければならぬ」と言った。

そのネパールこそは、天空に聳<sup>そび</sup>えるヒマラヤ山脈を擁する王国ではないか。そのヒマラヤの北を守護する毘沙門天は、何から守護をしようとしているのか。ヒマラヤの北といえばチベットを自治区としている中国だ。中国？・・・あの謎の中国人たちは何のために鉄の棒を入れようとしているのか？

神田は、迷い込んで深い闇の中に入り込んで行く気がしてきた。

神田<sup>かみた</sup>は、頭から熱いシャワーを浴びながら、足元の排水口へ流れ去る湯の流れを見つめていた。その先の暗い闇の中に体<sup>じ</sup>と吸い込まれるような錯覚にとらわれ背中が冷たくなるのを感じた。

シャワーを浴び終えて、高島觀光推進協会の事務所へ行く途中、高見刑事から電話があつた。

「おはようございます。高見さん、早いですね」

「ええ、木野花<sup>ひのはな</sup>さんたちは今頃は広島の平和資料館だと思いますよ・・・はい、祈念館<sup>きねんかん</sup>は木野花<sup>ひのはな</sup>さんも見学したことがないって言つていましたから、そちらも見学して、午後から静岡に帰る予定みたいですね」

「はい? お昼前ですか? いますよ。ちょうど良かつた。私も高見さんに報告しなきゃいけないことがあるんですよ・・・それは、・・・ちょっとややこしい話なので、これからでもう少くとも・・・で、何とか?・・・はい。じゃあ、お待ちしています」

高見刑事の声は何だか沈んでいた。どうしたんだろ?。

11時を過ぎた頃、高見刑事が事務所に姿を現した。

白髪頭に手をやりながら、

「いや、いや、参りましたよ」そつ言つて、ソファーのいつもの場所に腰掛けた。

「なんですか?」神田は事務椅子に腰掛けたままクルッと向きを変えた。

高見刑事は

「いやあ、警察庁から今回の件は手を出すなって、お達しですよ

と、頭を2、3度搔いた。

「へー、いつたいどうして?」

「ああ。もつともこの一件は例の中国大使館が口を出してからは私たちの手からは離れているんですがね」高見刑事はそう言いながら上着のボタンを外した。

「まあ、そうですが、警察庁から、再度聞つてきたってことは何がありますね、これは」神田は回転椅子を、ギイ、ギイと左右に回しながら言った。

「だから、神田さん。神田さんも、もうこの件からは手を引いてください。お願いしますね」高見刑事は背を起<sup>おこ</sup>し、神田の顔を覗<sup>のぞ</sup>き込むように言った。

神田は一コリと笑つて、

「分かっていますよ。私も別に犯人探しをしているわけじゃありませんからね」と、椅子を揺らしながら言った。そして、

「ただ、三本の鉄の棒の隠し場所が分かつたんですけど、どうしましょう?」と、高見刑事の反応を窺うように言った。

高見刑事は、

「え? 分かつた?」そう言って、目を見開いた。

「どこですか、それは?」高見刑事は身を乗り出した。

「<sup>あつたじんぐう</sup>熱田神宮に隠されている可能性が非常に高いんです」神田も体

を前へ倒し、両肘を両膝の上に乗せて前かがみになった。

高見刑事は、背広のポケットから手帳とボールペンを取り出し、「熱田神宮って、あの名古屋の?」と確認した。

「ええ、どうやら、鉄の棒そのものの意味は、源頼朝の日本支配を確立するためだったようなんです」ここまで言って、

「高見さん、もうメモの必要はないでしょ?」と言つと、

「いやいや、これは習慣でしてね」と、ボールペンの芯を、カチ

「、と引つ込め、苦笑いを浮かべた。

高見刑事は、

「なんだかよく分かりませんが……」と怪訝けげんそうな表情を浮かべ、

「で、どうして三本の鉄の棒が熱田神宮にあると?」

「頼朝は、日本を支配するためには、山、海、そして里、これらを支配下に治めることが必要になると考かんえたわけです」神田は咲姫さきひの推理であることをことわってから説明を始めた。

「なるほど」

「で、富士山と南島に鉄の棒を封印し、もつ一か所、最も頼朝に関わりのあるのが熱田神宮なんです。なにしろ、頼朝の母親は熱田神宮の神官の娘ですから」

「へー」

「それに、日本三大富司は富士山本宮浅間大社の富司と厳島神社の富司、そして熱田神宮の富司なんですよ」

「へー」

「そして、日本の支配者の証である三種の神器の……」ここま

で言つと、高見は顔を上げ、

「鏡かがみ・・・勾玉まがたま・・・草薙の剣くさなぎのつるぎですね」とゆつくつと言つ

た。

「そう。良くご存知ですね」

「これくらいはね」高見は右手のボールペンで白髪頭を搔いた。

「鏡は海の支配、勾玉は山の支配、そして草薙の剣は里の支配を象徴するものだ、と言うのが木野花さんこのはなの推理です」

「そして、草薙の剣は現在、熱田神宮の祭神になつてゐるんです」

「うーん。なるほどねえ」

「さらに、この二つの神社の神使は・・・」

「高見はその言葉を継いで、

「たしか富島の神使は鳥でしたね」と言うと、神田は、

「そうです。そして、富士山本宮浅間大社の神使は猿、熱田神宮の神使は鷺。これらは皆、水先案内人の役目を果たす動物なんですよ」と言いながら、改めて咲姫の推理に感心した。

「こいつは驚いたな」高見刑事は腕組みをして目を閉じた。

「高見さん、驚くのはまだ早いですよ」神田はにこりと笑った。

「え？ まだ何かあるんですか？」高見刑事は腕組みをほどいて神田を見た。

「三本の鉄の棒の中には矢尻が封印されていたでしょ？」

「ええ」

「あれは、毛利元就の三本の矢の教えの元になつた矢なんですよ」「まさか」高見は、信じられないと言つ表情を浮かべ、小さな声でつぶやいた。

「源頼朝の腹心に大江広元おおえひろもと」と言う人物がいて、この人がそもそもこの三本の矢を鉄の棒に封じ込めて富島、富士山、熱田神宮に祀ることを進言した張本人なんです」神田は回転椅子の背もたれに背中を預けた。

「へー、それが三本の矢の教えと何か関わりが？」高見刑事は、さらに不思議そうな顔をした。

「彼は毛利元就の祖先になる人物です。そのことが形を変え毛利家代々へ伝わったものだと思われます」

「へー」高見刑事は語尾を長く伸ばし、

「しかし、一体何のためにそんなことを？ その矢つていうのに何か因縁いんねんでも？」と、尋ねた。

「その矢は、弁慶の体を射た矢なんです」神田は、高見刑事の反

応を楽しむかのように一コリと笑いながら言った。

「あの弁慶の立ち往生の・・・時の？」

「そうです。義経の首と、弁慶の命を奪った矢の2点セットを頼朝に見せる予定だったのですが、義経の首は腐敗が激しくて、頼朝が首実検をする前に処分されてしまつて・・・」神田はそう言いながら立ち上がり、

「コーエー？」と聞いた。高見刑事は軽く頭を下げ、

「あーあ、それは聞いたことがありますよ」と応えた。

「それで、まだ義経が生きているんじゃないかと不安におののき政に専念できない頼朝を見て心配した大江広元が、義経に常に付き添い、分身ともいえる弁慶の命を奪つた矢を封じ込めることによつて義経と弁慶の怨靈を閉じ込めようとした、というのが、あの三本の鉄の棒に込められた秘密ではないかと・・・」サーバーのところで振り返つて高見刑事を見た。

「うーん・・・」高見刑事は目を閉じて両手を頭の後で組んだ。神田は、

「で、その弁慶は義経のいわば水先案内人だつた訳でしょ？」と念を押し、さらに続けた。

「つまり、弁慶は、天孫降臨の時の猿田彦命さるたひこのみことと同じ役目を果たしているんですよ」こう言つて、サーバーからポツトを引き出してコーヒーをカップに注いだ。

「ここ富島には猿田彦命さるたひこのみことを祀りしている神社が多くて、さらに、水先案内人の役目を担つた神様を祀つた神社も多いんです」こう言ひながら、カップを高見刑事の前のテーブルに置いた。

「今朝、弥山の本堂で気がついたんですが、像はないものの、弥山の本堂に祀られている毘沙門天びしゃもんてんこそは猿田彦命じゃないかつてね」

「毘沙門天が猿田彦と同一だつてことですか？」と、高見刑事はいくぶん声を低め、確認するように言った。

神田は自信を込めた声で、

「そうです。もともと毘沙門天は北からの侵入者を防ぐという役割があるんですが、そこから北斗七星や北極星との関わりも深いんです」

「ほう」

「北斗七星や北極星を大事にしている人達の代表的な職業の人達は誰かというと・・・」

「船乗りかな」高見刑事は神田の言葉を遮りさえぎるて言った。

「そうです。大海原おおうなはで唯一目標となるのは北斗七星や北極星なわけで、水先案内人すいせんあんじんにんにとつての神様は毘沙門天じゃないかと思いついたんです」

「なるほどねえ」

神田は、コーヒーを一口飲み、

「上杉謙信は自分を毘沙門天の生まれ変わりだと言つていたし いけど、まさかそこまでは思わなかつたでしょうね」と、言い、さらには、

「イラクに派遣されている自衛隊の装甲車の車体に毘沙門天の、毘、の字が書いてあるのは北を守る北海道の部隊だとか、謙信のように戦いくさの神様だからという理由でしょうけど、その毘沙門天が深いところで、アイヌ民族のよくな先住日本人の代表である猿田彦に繋がっている、というのは北海道の部隊の装甲車だけに面白いですね。」と続けた。

「つまり、ここ富島は、猿田彦だらけつてことになるわけか」高見刑事は、ボールペンで白髪頭を、ポリポリと搔いた。

「そういうことになりますね」

神田は、今こうして高見刑事に話しながら、先人の深い情念にあ

る種の感動を覚えた。

「ま、富島つていえば鹿と猿だからね」と高見刑事は冗談めかして言つて、思い出したように、

「だけど、富島の猿は小豆島から連れてきたつて聞きましたけど？」と、付け加えた。

「そうです。よくご存知ですね。明治の頃は野生の猿がいたらしいですけど、それは楊枝屋さんのペットだったようです。でも、もつと昔には野生の猿がいてもおかしくはないでしょうけど」神田は、以前、富島町史を編集する時に調べたことを思い出した。

「それに、日本には猿信仰というのがありますね、猿は神様だとして信仰されて……」とここまで言つて神田は、

「そうかー」と、あることを思い出して、椅子の背もたれに体を預けた。

「どうしました？」高見刑事はびっくりして神田の顔を見た。

「猿が水先案内人つだつてことは、魏志倭人伝にも書いてあったことを思い出したんです」と、神田は目を見開き、声高に言つた

「魏志倭人伝に？」高見刑事は、また、難しい話になつてきただという表情を浮かべた。

「ええ。中国に船で行く時に縁起をかついで、髪はボサボサ、体は垢あがだらけ、肉も食べない、そんな人間をひとりだけ連れて行つたようなんです」

「へー、何のために？」

「海が荒れないように」とつづいて、その男を祀つたようです。持衰じさいというんですがね」

「へー。そりや、まるで猿だな」

「でしょ！私も、その表現から猿を想像しましたよ」

「猿は海の神様でもあつたんじゃないかなあ」と神田は腕組みを

した。この考えを咲姫ならびに思つだらうか、と、ふと思つた。

高見刑事は、

「そうすると、確かに話がスムースに繋がりますね」と、今までの話を頭の中で思い浮かべ、

「富島には猿が居て、猿田彦が居て、天狗が居て、鳥が居て、それらは全てが水先案内人だということになる」と、自分自身に言い聞かせるようにつぶやいた。

「それらは、弁慶に繋がつてくる。つまり、富島には弥生人以前の先住日本人の痕跡が色濃く残つているわけですよ」神田も、咲姫の考えが正しいことを改めて感じた。

「うーん」と高見刑事は、唸り、

「で、それと、例の鉄の棒はどういう関係が?」と、神田に尋ねた。

「弁慶は、その先住民族の末裔まつえいだったんでしょう。その弁慶が無念のうちにこの世を去つたわけですから、頼朝が恐れていた弁慶の魂を封じ込めるには、弁慶の先祖まつが祀まつられている富島が相応ふさわしい、と大江広元は考えたんでしょうね」神田は、咲姫さきが言った、出雲大社や宇佐神宮の四拍手（しほくしゅ、よほくしゅ）の件を思い出した。

「木野花このはなさんの考えだと、お墓や、神社は、亡くなつた人に、あなたは亡くなつたんですよ、だからもうこの世に出ないでくださいね、とその魂を閉じ込めるという意味がある、ということです」そう言って、マーheeカップに口をつけた。

「なーるほど。それには同感しますね。確かに、祟りなんていうのは、だいたいのところ、お墓参りをしたり、神社にお参りすると、解決しますからね」高見刑事は意外に眞面目な表情でそう応えた。

「へー、高見さんから、祟り、なんていう言葉が出てくるとは思いませんでしたよ」

神田がそう言つと、高見刑事はいくぶん照れながら、

「いや、いや、私はこいつ見えて、結構信心深いんですよ。ほほほ」と笑つた。

「ところで、その後、中国大使館の動きはどうなんですか？ 何か情報は？」神田は声を低めて聞いた。

「いや、例の、ここにも来た、例の三人組は富士山頂から下りて、すぐに中国へ帰つたようですが、そこまでは警察庁から聞きましたが、その後の動きは何も聞いていません」高見刑事はさう言つとおりしそうにコーヒーを一口飲んだ。

神田は、

「と言つことは、連中、三本田の鉄の棒はあきらめたのか、それとも必要なのか」と言つと、ふと思いついたように、

「あるいは、三本田は、もう日本ではなく、そのことを知つていいので、さつやと引き上げたのか」と、ひょっとすると、そういうのもしれないな、とこつ気がした。

「しかし、木野花さんの推理では、三本田の鉄の棒は熱田神宮にあるんでしょ？・・・」と、高見刑事は言つと、

「おーっと、ダメですよ、神田さん。さつやも言つたばかりですよ。この一件にはもう手を出さないで下さい」と、手帳を背広のうちポケットに納めながら、左手の人差し指を神田に向けた。

神田は苦笑いしながら、

「わかつています。ただ、この件には、なんだか、個人的にも関わりが出てきたようなので」と、天井を見上げた。

「個人的な関わり? 何ですか、それは?」眉を寄せて高見刑事は聞いた。

「いや、まだはつきりとは分からんですが、木野花さん（このはな）が言うには、この鉄の棒の一件と、私の学生時代の先輩が何らかの形で関わっているんじゃないかと言つんですよ」やつ言いながら頭の後で両手を組んだ。

「まさか、そんなことは……」ないでしょ、といつ言葉を、高見刑事は、飲み込んだ。

「とは思うんですがね。なにしろ、彼女の言つることは……」と神田が言い終わらないうちに、高見刑事は、

「結構当たつてますからね」そつ言つと、真剣な顔になった。

そして、2005年も終わりかけた頃、咲姫から驚くべき報せがもたらされた

12月に入つて、年末、年始の行事の打ち合わせの会議などで忙しく過ごしていたある日、咲姫からメールが届いた。

宮島觀光推進協会 神田様

木野花咲姫です。

「ご無沙汰をしています。今年もあとわずかとなりましたが、お元気ですか？」

神田君も觀光地の觀光協会に勤務しておられる、これからがお忙しい時期になると思いますが、お体ご自愛下さい。

私も、八頭神社の宮司として、これからは忙しい時期に入ります。

ところで、熱田神宮に「鉄の棒」の三本目が隠されているのではないかという、私たちの推理を確認するために、私のルートを手繩つて調べました。

「鉄の棒」の存在は、「ごく限られた人達しか知らず、その存在の確認に時間がかかるつてしましましたが、結論から言つて、「あつた」という過去形でご報告しなければなりません。

その存在は國家機密で、草薙の剣と同等の取り扱いを受け、禁足地に祀られていたようです。

でも、明治に入つて、ある国と友好条約を締結するにあたつて、その鉄の棒は国外へ持ち出されたようです。時の内閣総理大臣の山

がたありとも

やま

縣有朋の奏上<sup>そうじょう</sup>によつて、明治天皇様も、この持ち出しをお許しになられたということです。

「今はもうない、ということは、三本あつた鉄の棒は、全てなくなつてしまつたということになるのか」

「ある国とはどこなんだ?」

明治20年(1887年)に、小松富彰仁親王様がその国を訪問され、大変な厚遇<sup>じゅくぐ</sup>をお受けになられ、明治天皇様は、それに対し、礼状<sup>じき</sup>、漆器<sup>しっき</sup>、勲章<sup>くんしょう</sup>を贈呈されました。

これに対し、その国も明治天皇様に親書と勲章を贈呈されたために日本に使節団を派遣し、明治天皇様に謁見を求められました。

最終的には条約の締結には時間の猶予が必要だつたのですが、この時の両国の相互訪問が、お互いの信頼関係の樹立に大きく役立つたようです。

その、信頼関係の樹立を確固たるものにしたのが、「鉄の棒」だつたのです。

「その国」とは当時のオスマン・トルコ、今のトルコ共和国です。

「トルコ?」

どうして、トルコが、という神田君の顔が思い浮かびます。

「ふふ、凶星だな」神田は苦笑いした。

その理由を説明する前に、私がご奉仕をせて頂いている八頭神社についてお話しておきます。

「八頭神社が何の関係があるんだろう」と神田は思つた。

しかし、この数分後には、神田は、八頭神社こそは鉄の棒とトルコを結びつける重要な神社であることを知り、そして、今までの、全ての謎を解く手掛かりは、この八頭神社にあることに歴史の因縁を感じ、体が震えることになる。

この前、廿日市駅前の「おとみ」でいろいろと推理をした中で、このことを言いかけたまになつていきました。確信が持てなかつたのです。でも、今は、確信を持ってお話できます。

私は、八頭神社の起源は、その字から、八つの頭、つまり、八岐の大蛇にあるのではないかと考えていました。つまり、「八頭蛇」ではないかと。

神田は、高見刑事と八頭神社を捜している時、地元の人は「はつとうじやさん」と呼んでいたことを思い出した。

実は、逆だったのです。

まず最初に「はつとうじや」があつて、それが「八頭蛇」になり、やがて「八岐大蛇」伝説が生まれたのです。

「はつとうじや」と「八岐大蛇」の間に共通するものに気が付いた時、私は、真空の暗闇に吸い込まれていくような、そんな感覚に捉われました。

八頭神社を親しみを込めて「はつとうじや」と呼んだのではなく、

最初から「はつとうじや」だったのです。

神田は、

「“じうごう”の意味だね」と思つた。

熱田神宮に祀ひまつられていた鉄の棒が、明治になつて、オスマン・トルコに贈られることになつた経緯いきさつには数千年の歴史の因縁があつたのです。

私は、トルコと聞いて、喉につかえていたものがスッキリと取れました。

「はつとうじや」は「ハツトウシャ」だつたのです。「ハツトウシャ」は古代ヒッタイト帝国の首都の名前です。

「ご存知でしようか？ヒッタイト帝国は人類で最初に鉄を作り出した国です。

「鉄！！」

現代の日本人の祖先がこの日本列島にやつて来る以前に、縄文人と言われる集団を筆頭に、何度も分けて民族の集団がやってきましたが、それらの中に、製鉄技術を持った民族の一団がいました。私は、その集団こそは、何千年もかけてこの日本にやつて来たヒッタイト人の末裔まつえいだと思います。こんなことを言つと、神田君は、御伽噺おとぎばなしのように思うかもしませんね。

でも、その証拠は中国にも朝鮮半島にも、そしてこの日本にもあります。詳しいことは、今度お会いした時にお話しますが、今日は簡単にそのことをお話します。

日本の歴史を陰で支えてきた渡来人の一団に秦氏はたがいます。今では、秦はた、羽田はだ、畠はた、波田はた、八田はた、服部はつとりなどという名前に変わっています。

ますが、この人達のご先祖様は秦氏の末裔だといえます。

元首相の羽田孜さんや、筆策の奏者の東儀秀樹さんも秦氏の子孫です。服部半蔵率いる伊賀の忍者集団もそうです。

羽田さんは、日本徐福会の名誉会長でもあります。ご存知かどうか、私の住んでいる地域は、昔、徐福さんが数千人を引き連れて中国からやってきて居を構えた所もあるんですよ。

神田は、富士山本宮浅間大社の宮司が言つていた富士文献のこと

を思い出した。

徐福さんことは、中国の『史記』にも書かれています。1982年、中国の江蘇省連雲港市で徐福村が発見され、徐福が実在の人物として学術研究会で発表されるようになりました。徐福村には祠も再建され、その内部には東方を向いた、りりしい徐福の座像がまつられているそうです。

私は、秦氏一族と徐福さん一族は同じ一族だと考えています。その違いは、日本へ渡つてきた経路によるものではないかと思つてゐるのです。秦氏一族は朝鮮半島経由で、徐福さん一族は船で中国から直接この日本へ渡つてきたのだろうと思います。

秦氏と徐福さんが連れてきた集団は、先端技術を持つハイテク集団でした。

その先端技術の中のひとつが、製鉄技術や、製糸技術です。機織りのハタから秦氏と呼ばれるようになつたとも言われるくらいです。ちなみに、富士山頂の富士山本宮浅間大社奥宮の御祭神の木花之佐久夜毘賣命は火の神、水の神であると共に、機織の神でもあります。

ところで、神田君に「はた」親戚はたくさんいらっしゃいますか？

神田は、

「また、何を言い出すんだろ？」と思つた。

叔父さんや、叔母さんから電話がかかってきて、その電話を取り次ぐのに、「神田から電話」とは言わないでしよう。それだと、どの叔父さんか、どの叔母さんか分からぬですからね。

おそらく、その叔父さんが住んでいらっしゃる地名を言つのぢやないかしら。例えば「神戸から電話」と言えば、それだけでどの叔父かわかるでしよう。それは昔からそうです。

ここに、秦を秦と読ませる秘密が隠されているのです。

神田君は「存知だと想ひますが、中国の歴史書の中で日本について書かれたものが、魏志倭人伝と呼ばれている書物で、それと同じように、古代朝鮮について書かれたものが、魏志韓伝です。

その韓伝の中に、朝鮮の古老の話として、秦国から多くの秦人が戦乱を逃れて朝鮮半島に流れ込んで来た、ということが書かれています。

やがて彼らは、朝鮮半島に国を作りますが、彼らの一部はそのまま朝鮮半島に残り、そして、一部は玄界灘を渡つて、この日本にやつてきました。

もともと彼らを秦人と呼んでいたのは漢民族です。秦人と呼ばれていた彼らは、自らを秦人とは呼んでいませんでした。

では、何と読んでいたのでしょうか？

彼らは、自らを「ハタ」と呼んでいました。自らの出自に誇りを持つて、遠い先祖の出身の地の名前を彼ら自身の呼び名としていた

のです。

もう、お分かりでしょ。3000年近く前に衰亡し始めた古代のヒッタイト帝国の首都ハットウシャが彼らの出身地です。彼らは、何千もの間にわたって移動を続け、ある時は何百年もある地域に留まり、そしてまた移動し、最終的には、この日本にやつてきたのです。

話が混乱するのは、中国人、つまり、漢人は、朝鮮半島へ逃げ込んだ人達は、自分たちと同じ秦國の人間ではないと知っていた事。それにもかかわらず、朝鮮半島では、秦國から逃れてきた秦人だと認識され、そのルーツまでは認識されていなかつたこと。

そして、逃げ込んだ人達自身は、自らの出自は秦ではなくハットウシャ、ハタだと分かつていたこと。

これらのことが、今現在も様々な混乱を招いているのだと思います。

そして、朝鮮半島から、最先端の技術を携えてこの日本に渡つてきた彼らは、中国から直接海を渡つてやつて来た徐福さんの一団と自らを判別し、独自性を保つために秦と書いて秦と呼ぶようになつたのだろうと思います。

中国でローマ帝国を表す文字は「大秦」です。つまり、中国では異民族のことを秦人と呼んでいたのです。当時、中国人つまり漢人は、中国以外の地域、長城の外からやつて来た人達のことを秦人と呼んでいたのです。

漢字のないハットウシャから何千年もかけて移動してきたヒッタイトの人達は、自らを漢字文明圏に入ってきた時、秦と呼ばれるのを知り、その漢字に彼らの呼び名、ハットウシャをあて、それはやがて、ハットウ、ハット、ハタ、と変遷したのです。

彼らは、この日本にやって来る途中、ある地域に何百年もどじどまり、その地に都市や国を築きました。

彼らの移動してきた経路にはそうした痕跡が地名に色濃く残っています。朝鮮半島の慶尚北道にはかつて波旦<sup>はたん</sup>と呼ばれた地域がありました。今の蔚珍郡<sup>うるちんぐん</sup>です。さらに遡ると、現在の中国、新疆ウイグル自治区<sup>しんきょうウイグルじゆつごく</sup>にはホータンといつ地域があります。

「めんなさい。話がどんどん逸れていつていよいよです。

先ほども言ったように、オスマン・トルコは親書と勲章を明治天皇様にお贈ぐりするために日本に使節団を派遣したのですが、使節団にはもうひとつ、大きな使命があつたのです。

当時、鉄の棒の存在場所は熱田神宮のものしか確認されていませんでした。後の一本の鉄の棒の封印場所の特定は出来ていなかつたのです。

大きな使命とは、その存在の分かつている鉄の棒入手することだつたのです。

すでに、内々にはその鉄の棒はオスマン・トルコに贈呈<sup>まつてい</sup>されることがなつていましたので、親書と勲章の贈呈は、そのお礼と考えてもいいと思います。

それは、もうじき来る、オスマン・トルコ建国600年を盛大に迎えるために、また、民族の更なる統一と諸外国との友好を図るために最も必要なものでした。

なぜなら、オスマン・トルコの偉大なる最後の末裔<sup>まつえい</sup>、弁慶の命が

封印されていいる鉄の矢だからです。

「弁慶がヒツタイト人の末裔だつてことかー？」

先日もお話したように、弁慶の祖先は、今の日本人の原型である弥生人がやつて来る前に、既に日本で鉄を製造する技術を持つ一団として生活圏を築いていたのです。

彼らは後に「正史」の中では、猿田彦命さるたひこのみことと呼ばれ、やがて、毘沙門天びしゃもんてんとしても祀まつられるようになり、伝説の中では、鳥や天狗として、今に伝えられているのです。

「咲姫ちゃんは、やはり毘沙門天びしゃもんてんのこと気にがついていたのか」

神田は、今、富島に鳥や天狗にまつわる話が多く伝えられ、そして毘沙門天が弥山頂上に祀まつられている理由が分かつた。

トルコは、ヒツタイト時代から格闘技の盛んなところです。そして、格闘技に強い男こそが尊敬され、男として認められるといつても過言ではないでしょ。現代でもトルコで伝統的なスポーツといえば、体中にオリーブオイルを塗つて闘うオイルレスリングです。

「オイルレスリング！！」

神田はその文字を見て、瞬間的に、あの嵐の日の大男の体の、ヌルツ、とした感触を思い出した。

「あの大男はトルコ人だつたのか！！」神田は思わず口に出した。

神田は、去年のアテネオリンピックを前に、浜口京子や吉田沙保里の女子選手が来日中のオイルレスリングの競技を観戦した、とい

う新聞記事を読んだことを思い出した。

「しかし、あんな竊盜を働く必要は全くないじゃないか。中国人のようには、それこそ外交ルートを通じて話を持つてくれば済むことだし、日本政府としても、おそらく、鉄の棒にさしたる重要性は感じていないだろう。ひょっとすると、残り一本の存在さえ知らないかも知れない。なのに、何故・・・」

神田は、モニターの画面をスクロールさせて、咲姫の文章を追つた。

どうして忍び込んでまでしてその鉄の棒を手に入れようとしたのか。それは、日本とは外交ルートのない組織だからです。

「すると、奴は、あの大男はトルコ人ではないということか！ いつたいどこの？」

1889年（明治22年）7月、使節団を乗せた軍艦エルトゥールル号はイスタンブールを出航しました。乗組員は600名を越していました。

スエズ、ボンベイ、シンガポール、香港を経由して、およそ11ヶ月の大航海でした。木造の古い軍艦のため、途中トラブルもあつたようです。そのため日数がかかつてしまつたのです。

このことは、やがてエルトゥールル号に襲いかかる悲劇を暗示していたのかもしれません。

神田は、

「ああ、あのエルトゥールル号か」と今、分かつた。

無事に任務を果たした使節団は、台風時期に無理を押して帰路に着き、途中和歌山県串本沖で岩礁に衝突、特使を含む518名が死亡という大惨事となりました。

しかし、その時の地元民の救護活動で69名は死を免れ、手厚い看護の後、明治天皇様の命でトルコに送られたのです。

皮肉なことに、この惨事が、その後の日本とトルコの友好関係をますます固いものにしたのです。

神田は、1985年の湾岸戦争のとき、イランのテヘラン空港で、国外脱出のために救援機を待つ日本人215名を迎えてきたのは、日本の飛行機ではなく、2機のトルコ航空の飛行機だったと言う話を聞いたことがある。それは、エルトゥールル号の事故に際しての日本人の献身的な救助活動への「恩返し」として当然のことだと、トルコ大使が語っていたのを思い出した。そして、トルコでは、小學生でもこの悲劇的な事故のことは知っていると聞いたことがある。

咲姫のメールはさらに続いた。

しかしこの時、大きな問題が起きました。明治天皇様が、前言を翻され、鉄の棒は日本に留め置きたいと仰せになられたのです。

「この日本の安泰が何百年もの間保たれてきたのは、鉄の棒を封印していたからこそである。鉄の棒は再び熱田神宮にお祀りせよ」と、勅命が下されたのです。

「この嵐は、天照大御神様の御心の表れである」と。

しかし、オスマン・トルコの皇帝アブドゥルハミド2世は、再び親書を天皇様にお贈りになり、何度かの交渉の結果、妥協案が生まれされたのです。ここまでには、皇室の儀式、しきたりの一切

を取り仕切る、八咫鳥（やたがらす、やたのからす）と呼ばれる一族のとりなしがあったのですが、今日は、これには触れません。

「妥協案？」神田は、さらに前に目を移した。

その妥協案とは、ヒッタイト民族と日本民族の分水嶺ぶんすいれいでもあり、また、日本民族、日本文化の源流と言われる、ヒマラヤを中心にして地にその鉄の棒をお祀りすることだったのです。

「ヒマラヤ！」

そして、ヒルトウールル号の悲劇を免れた乗組員をオスマントルコへ送り届けるために、当時の日本の主力軍艦の「比叡」と「金剛」を派遣することが閣議決定されました。

その戦艦「比叡」に、総理大臣、山縣有朋の密命により、ひとりの人物が乗船しました。彼は、イスタンブールへ向かう途中、インドのボンベイで下船し、ヒマラヤを目指したのです。オスマントルコから派遣され、辛くも悲劇から免れた軍人の一人も一緒でした。

彼らの任務とは、ヒマラヤ山地奥深くの寺院に「鉄の棒」をお祀まつりすることにあつたのです。

まず、彼らが目指したのは、ネパール王国のパタンです。パタンは、今でも、金属製品製造の盛んな街です。

「パタン！ネパールにもパタンが・・・」

## パタン

2005年（平成17年）12月 ネパール王国・パタン

パタンの中心部から少し外れた路地裏には、畳を少しまわった頃だ  
といふのに、喧騒も聞こえてこない。

時折り、子供達が走り回り、「キャー、キャー」という声が聞こ  
えてくるくらいだ。

よく踏み固められた道は、リキシャ一台がよつやく通れる幅しか  
ない。その道の両側は、3階建ての、今にも崩れそうな赤レンガ造  
りの建物が長い壁のように並び、青い空がカーペットのように見え  
る。

そのレンガ壁には、青いペンキが塗られた分厚い木の扉が一定間  
隔で並んでいる。

両手に黒いビニール袋を提げた、ひとりの男が、その中のひとつ  
の扉を、器用に肩と足を使って、ゴトゴトッ、と開け、さりげなく  
あたりを見回して中に入り、再び、ゴトン、と扉を閉めた。

狭く、急な木の階段を、ギシギシと鳴らし、4度ほど折り返して  
3階の部屋の前まで来ると、ビニール袋を持ったままの右手で、木  
の扉を暗号のようなリズムでノックした。

しばらくして、中から、ガチャ、と、鍵を開ける音がして、扉が  
外向きに開いた。

中から肩幅の広い男が白熱灯の逆光の中から顔を出した。

両手にビニール袋を持った男は、

「ナマステー！！多良さん」と、薄暗い階段の踊り場で、白い歯を浮かべた。

多良月男は、部屋から顔だけ覗かせ、

「おお、ジテン、久しぶりじゃの。元気かあ？」小さな声でそう言つと、男の肩に右手を回して、部屋の中へ招き入れた。

「ナマステ、多良さん」ジテンと呼ばれた男は部屋に入ると、ビニール袋を床に下ろし、顔の前で合掌をした。

多良も、改めて、

「ナマステ」と合掌をし、すぐに男の手を両手で握つた。ふたりの男達は、握り合つた拳を何度も揺すつた。

「大丈夫じゃつたか？」多良は、窓のほうへ歩み、窓枠の錆びた釘に引っ掛けられたカーテンを少し開いて外を覗いた。

「大丈夫だよ。途中、見かけないチベッタンが付いて來たから、ゴーレンテンテンブルの中を抜けてきたよ」ジテンと呼ばれた男も、多良の側に行き、薄汚れたガラス越しに通りを見下ろした。

「そうか」

「あいつら、チャイニーズか、メイビ、マオイストかもしれないね」

「私、ゴム草履だから、テンブルの中、スツ、と、抜けたよ。あいつら、革靴履いてたからね。入り口で靴を脱ぐよつに言われて、脱いでいる間に裏口から出て、巻いて來たよ」

ふたりは、そう会話しながら、窓から離れ、部屋の反対側にある、テーブルの横に置いてある座面のビニールが破れたパイプ椅子に座つた。

「そうか。しかし、警察の密偵かもしれんのぉ・・・」多良は眉間に皺を寄せた。

「多良さん、それ・・・」ジテーンは、言ひこくそつこそつ言ひつと、多良の頭を指差したまま、口を開け放して言葉を止めた。

「ん? 何?」多良は、怪訝な表情を浮かべてジテーンの顔を見た。

「多良さん、それ・・・」ジテーンは再び多良の頭を指差した右手をさらに突き出した。

「ああ、これか」多良はそつ言ひと自分の頭に手をやつし、

「これはな。朝、目を覚ましたら、毛が生えてたんだ」そつ言ひて、両手で髪の毛をかき混ぜた。

ジテーンは、ポカン、と口を開けたまま固まつた。

「ははは。冗談、冗談」多良はそつ言ひと、

「ほり」と言つて、髪の毛を剥がした。

その途端、ジテーンは、

「オー、ノー!」と、目を剥いて、のけぞつた。

「ははは、そんなに、ビックリするなよ!」かつりじや、かつりじや、多良

は愉快そつに笑つた。

「オー、多良さん、ビックリしました。一体、どうしたのですか?」ジテーンはそつ言ひと感る感る多良の持つているかつりじ手を伸ばした。

「はは、これから寒くなるからな。それに、これは変装じやあ」かつりそつ言ひと、薄くなつた頭を、クルクルッ、と手で撫でた。

そして、

「ほり、じこつけ髪もあるだ」そつ言ひと、木の机の引出しを、カタカタッ、と鳴らして長い口ひげを出した。

「ビックリしました。でも、それ、いい考えだね。チャイニーーズの皿をくらま出すには、ジテーンはそつ言ひと、多良から受け取つたかつら髪

と付け髪をしげしげと眺めた。

「で、手筈は?」多良は、真面目な顔になつて、体を前に倒し、ジテンの顔を覗き込んだ。

ジテンは、笑顔で、

「OKだよ、多良さん。10日後には迎えの車が来ることになつてるよ」と言つた。

「そうか。ありがとう。いつも世話をかけるな」多良は、ホツ、とした表情を浮かべた。

ジテンは両手を前に出し左右に何度も振つて、

「何を言いますか。私のほうこそ感謝します。ダンニヤバー」と、両手を顔の前で合わせ、頭を下げた。

「多良さんがいなかつたら、私は今でもハッパを観光客に売りつける商売してるよ。こうして、子供達を救う仕事を手伝つことが出来て、私、幸せね」と、手を合わせたまま言つた。

「うひうひそ、ありがと。しかし、最近、マオイストの行動は過激になつてゐるからな。国軍との衝突もしおちゅう起つてゐるし、俺たちの仕事にも支障が出てきたな」多良は再び、暗い影を額に浮かべ、髪<sup>かつら</sup>を手に取つた。

ジテンは、瞼を半ば閉じ、

「そうですね。いつになつたらネパー<sup>ル</sup>は日本のよつて平和な国になるのでしょうか? 多良さん」と言つと口を一文字に結んだ。

「そりやあ、俺にも分からんよ。国王は、ネパー<sup>ル</sup>共産党毛沢東主義派が続けてゐる武装闘争が治安の乱れの原因だといつし、毛沢東派は毛沢東派で、国王の独裁体制が原因だ、と、言つとるしな」多良はそう言いながら髪<sup>かつら</sup>を頭にかぶり、鏡を見ながら右に、左に動かして調整した。

「困るのはいつも貧乏人ね。だから、私は、多良さんに私たちの

仲間になつてもらいたいのです」ジテンは、多良が鏡の前に立つているのを後ろから眺めながら言った。

「またその話かい？だめだよ。俺は、そんな新しい国とかいうコートペアは信用せんのんじや」多良は鏡の中に入つたジテンを見て言つた。

「多良さん。頑固ね。ハハハ」汚れた鏡の中でジテンの白い歯が見えた。

多良は振り返ると、

「ジテン。お前、気をつけるよ。お前は国王からも、マオイストからも狙われているんだからな」と、声をひそめて言つた。

「大丈夫だよ。多良さん。多良さん」多良は、チヤイーネズには気をつけてくださいよ」

ジテンのやの言葉を聞くと、多良は思いついたよう、

「そうだ、お前、その髪の毛を刈つて、キキヤーと回りよつて坊主にしたらどうじゃー」と言つた。

「ノーーー」ジテンは即座に否定した。

「ところで、そのキキヤーは？」多良は、本気になつて嫌がるジテンに笑いながら尋ねた。

「はい。何とか無事に手に入れたようです。そろそろ帰つてくると思いますが、まだ連絡はありません」ジテンはそう言いながら、ビニール袋から新聞紙の包みを大事そうに取り出した。

「そうか。それは良かつた」多良はその包みを両手で受け取つた。温かさが、湿つた新聞紙を通じて伝わってきた。

多良は新聞紙の包みをゆっくりと開いた。

ジテンは、

「あの寺院にお供そなえしてある物と同じものが日本にあるらしい」とは聞いていたよ。でも多良さんが偶然、あの、ミヤ、ミヤ・・・・

と詰つと、多良は、  
「廻島。ああ、これせつまそつなモモだな」と、田を新聞紙の上のモモに注いだ。

新聞紙の包みの中には、まだ湯気の立つてゐるチベット餃子のモモが20個くらい山になつていて。

「そう、その富島で、多良さんが偶然見なかつたら、三本が揃うことば、今後、何千年もなかつたと思うよ」

多良はひとつまむと口に放り込み、窓のほうへ歩み、木枠の窓を、ガタツ、と少し開け、「ピュイッ！」と短く口笛を鳴らした。

通りの向こうの廻屋<sup>はいわや</sup>から10歳くらいの少年が顔を出した。多良は、少年に向かつて2本の指を立てるべ、少年は、頷いて再び廻屋の暗闇の中に入つていった。

「そうだな。日本に帰つて、たまたま足慣らしに弥山<sup>みせん</sup>に登つたついでに宝物館<sup>ぱうもつかん</sup>を見学して、そこで同じものを見た時は驚いたよ」

多良はギシギシと床を鳴らしながら蟹股<sup>かにまた</sup>で戻つてきてパイプ椅子に再び座り、またひとつモモを口に放り込んだ。

「モグモグ、しかし、あんなに強引<sup>じょういん</sup>にしなくとも・・・モグモグ」  
多良は新聞紙の端で指先を拭つた。

ジテンも口を動かしながら、

「だめだよ。まさか、二マがチャイナのスパイだとは思わなかつたからね」と強い口調で言い、さらに、

「そのことを聞いてから姿を消したんだから、チャイナもあれを手に入れるために動き始めるのは分かつていていたから。チャイナには政治力があるけど、私たちにはそんな力はないからね」と、早口で言つた。

「今回の仕事が出来るのは、多良さんから日本語を教わつて、日本語が使えて、しかも腕が立つキキヤーしかいなかつたからね」ジ

ジテンは指を口に持つていき、指にくつついたモモの皮を下の歯ではがし、指をなめた。

「確かに、あいつは、」うちへ来て育つた村で伝統武道も身につけ、それに、あの体、まるでガルーダだからな」多良は厳つい肩をさらに広げ、自分の胸を張つた。

「ははは、ガルーダね。そう、力もあるし、走るのも速いし、まさに、ガルーダだね」ジテンは、多良の格好を見て愉快そうに笑つた。

「だろ? 日本で言えば、さしづめ、天狗、ってことだ」

「キキヤーも多良さんに背負われてヒマラヤを越えた子の一人だよね」ジテンは、またひとつモモをつまんで多良を見た。

「そうだなー。もう20年以上、いや、30年近く前になるのよ」多良は、ちょっと、遠くを見るように手を細めた。

「あの時も大きい子じやつたが、あんなに大きな男になるとはな」と、いかにも感慨深そうにつぶやいた。

そして、

「しかし、俺は、キキヤーがお前たちの仕事を手伝うのは、あんまり感心せんのんじや」と、ジテンの手を見た。

「どうですか?」ジテンは、多良の咎めるような手を見つめ返した。

「せつかく助かった命を何でまた危険にさらすのか」多良はやや口を尖らせて言った。

ジテンは、

「多良さん。多良さんは何故平和な日本から来てわざわざあんな仕事を?」と、柔らかい光を湛えた目で多良を見つめて言った。

「わからん。わからんが、植村さんのサポート隊の一員としてこつちに来た時に見た光景が忘れられなくてな」多良は、モモをつまんだまま窓のほうを向き、

「俺たちは、ごつい登山靴、暖かいダウンジャケット、酸素ボンベ、暖かい食べ物をわんさと持つてゐるのに、国境を越えてきた子供達は破れた靴を履き、一枚の毛布を纏まどい、そして、髪の毛は凍つていた」と、まぶたを閉じた。

「その時の多良さんと今のキキヤーは同じ気持ちだよ」ジテンは優しく言った。

「ふふん、ふーん」という鼻歌が階段のほうから聞こえてきた。そして、「トン、トン、トン」とノックの音がした。

多良はギシギシと床を鳴らしながら、ドアのところへ行き、鉄の門を、カツチャツ、と、音を鳴らしてはだし、ドアを開けた。

ネパールミルクティーがみなみと注がれたガラスコップを2個のせたコップホルダーを持つた少年が、開かれたドアを避けて立つていた。

鼻歌は、少年が、「ティーを持ってきたよ」という合図なのだ。

少年は、「ふふん、ふーん」と鼻歌を歌いながらテーブルの上にガラスコップを置こうとしたが、手を止めた。

多良は、

「おっと、ごめん」と言いながら、引き出しから2枚のコースターを取り出し、テーブルの上に置いた。

少年は無表情のままコースターの上に、ゆっくりとコップを置いた。多良は10ルピーコインを3枚渡すと、少年は再び鼻歌を歌いながら、足音を立てずに帰つて行つた。裸足であった。

ジテンは、右手の親指と人差し指で、チア（ネパールミルクティー）がなみなみと注がれたガラスコップの縁をつまみ、口元に持つてゆくと、「フー」と、一息かけて、「チュツ」と一口飲み、突然、

「んー！」と言つと、

「オー、大切な物を忘れるといひました」とチヤのコップをコースターの上に置いた。

「なんだ？大切な」と、ゆうのは？」多良もガラスコップをつまみ上げて、「チコツ」と一口だけ啜り込み、テーブルの上に、コンツ、とコップを置いた。

それを見たジテンは、多良のコップをコースターの上に移した。テーブルの上にはコップの底の丸い焦げ跡がどこかどろに残つてゐる。

「ああ、『めん』多良はそう言つて、両手で鬚の両端を持つてググツ、と左右に動かした。

「で、なんだい？その大切な物ゆうのは？」多良は再び聞いた。

「これです。これです」ジテンはそう言つて、テーブルの上の二つのコップを脇に寄せ、持つて来たもうひとつ黒いビニール袋をテーブルの上に置いた。

そして、

「多良さんに頼みがあるんですよ」と、ビニール袋の固く括られた結び目を解いた。

ジテンは、ビニール袋の中から新聞紙の包みを取り出し、テーブルの上に置き、包みを広げた。

新聞に包まれていたものは、ビニールの小袋に入った木の根っこや乾燥した葉であつた。

「薬草か？」

「そうです。特に、この根っこは滅多に手に入れることが出来ないんですよ」と、赤茶けた木の根の入つたビニール袋を多良に手渡した。

「へー、どこで手に入れたんじや？」多良はジテンから受け取り、ビニール袋の中の根っこをしげしげと見た。

それは、素人目にもかなりの年月を生き抜いてきた木の根であることが分かつた。

ジテンは、多良からその袋を受け取りながら、

「それは、多良さんにも言えないですよ。ファミリーの財産ですからね」と言つと、再び、大事そうに新聞紙に包んだ。

「ははは、まあ、いいさ。で、これをどうしたらいいんだ?」そう言いながら、ビニール袋に小分けされた他の葉や木のチップを興味深げにひとつずつ手にとつて眺めた。

「多良さんは、明日タメールに行くんですね?」ジテンは、確認するよつて身を乗り出した。

「ああ、頼んでいた登山靴の修理がそろそろ出来上がっている頃だからな」多良はそう言つと、

「それに、久し振りに風呂にも入りたいし」と、首筋を手で撫でた。

ジテンは、笑いながら、

「蕎麦もね」と言つた。

「そうだ。よく分かるの。ははは」多良はチヤのコシップを手にとつて、

「で、それをどうしたら?」と、テーブルの上のビニール袋を見た。

「これを、ホテル・スオーラガに泊まっている人に渡してもらいたいんですよ」

「いいよ。誰に?」そう言つと、チア(ネパールティー)のコシップを口元に持つていった。

「アメリカ人の・・・」

それを聞いて、

「アメリカ人?俺は英語は苦手だな」と、コシップを口から離し

た。

「大丈夫ですよ。日本語ペラペラですから」

ジテンは笑いながら言った。

「ペラペラ？」多良は不思議そうな顔をしてジテンを見た。

ジテンは、

「そうです。アメリカ人と日本人、半分、半分、ハーフですね」と、楽しそうに言った。

「へー、なんでまた、そんな野郎に？」そう言いながら、チアをグビツ、と一口飲んだ。

ジテンは、笑顔で、

「野郎じゃないです。女人ですよ」と、多良の様子を窺うよう<sup>うかが</sup>に言った。

「女？名前は？」多良はそっけなく聞いた。

ジテンは少し拍子抜けしたように、

「キャシー・ハセガワといいます」と言つと、モモをひとつ摘んで口に放り込んだ。

多良もモモをひとつ摘むと、

「誰なんだ、そのキャシー長谷川いつのは？」と、聞いた。

「ドクターです」

「ドクター？」多良は顔を少し傾けた。

「そうです。10年前にも私の村に半年滞在して、私の村の人はもちろん、私の村から、近くの村へ出かけて病人や、けが人の治療をしてくれたことがあります。たくさんの村人の命を救ってくれた人です」ジテンの言葉には力が込められている。

「へー、それで、彼女はこの薬草をどうしようと？」と言つと、テーブルの上に置かれた黒いビニール袋の中を覗き込んだ。

ジテンは、真剣な顔をして、

「村人にも手に入れられる植物や木を使って治療する方法を広め

てこるのである」と呟つた。

「なるほど。薬品を手に入れるのは難しいからなあ」多良は、2、3度頷きながら、壁に背中をすがらせた。

そして、壁から背を離すと、

「よし、まかせておけ。彼女にわたしてやるから」と、ビニール袋を手前に引き寄せ、袋の口を結び始めた。

ジテンは、喜びを顔に浮かべ、多良の手から袋を取り、自ら、袋の口を固く結び、

「ありがとうございます。私は今夜にせいいじを出版しないこと明日になるとバンダで動きが取れなくなりますからね」と呟つと、左腕を動かし、ジャンパーの袖口をずらして時計を見た。

「ああ、また、外出禁止令が出るらしいなー」多良は、つるぎりだ、と言ひ顔をして窓の外を向いた。

## クーデター

2001年6月1日、ネパールの首都カトマンズの中心にある王宮でロシア革命以来とも言われる大惨事が起きた。

当曰は、月に1度の、王族が集まるパーティーの日であった。この日集まつた王族のうち、当時の国王を含む王妃、皇女などの王族一門が全員射殺され死亡した。

惨劇から数日後、犯人は、ことあろうに、国王の息子である皇太子である、と発表された。

泥酔した皇太子が銃を乱射、父親の国王や母親の王妃、妹の王女ら9人を殺戮し、その後、自らも命を絶つた、という発表であった。今の国王はその場にいらず、また、その場に同席していた、今の王妃、皇太子は無事であった。すなわち、当時の国王一家全員が死亡し、現国王一家は無傷で生き残つたのだ。

ここから、いろいろな憶測が飛び交つた。

ネパールの情勢は、さらに混迷の度合いを深め始めた。ネパール共産党から分裂していた、武装闘争を掲げる毛沢東派は地方で武装蜂起し、ことあるごとにバンダと呼ばれる「活動禁止令」を発令し、国民に労働放棄を呼びかけ、逆らう者の射殺さえ躊躇わず、営業する店舗には火を放ち、客を乗せたタクシーには爆弾を仕掛けた。

国軍、警察の手の届かない地方は、毛沢東主義者、マオイストの勢力下に治められ、再教育と称して、学校、村単位で100人規模の誘拐、監禁事件が各地で頻発していた。

マオイスト達は、市民の中に入り込み民衆の動静を監視し、一般民衆達は疑心暗鬼に陥っていた。

2005年2月、現国王は、その混乱を鎮めるために強権を発動し、国王によるクーデターともいえる、国家非常事態宣言を発令した。

これにより、政党活動は禁止され、空港の一時閉鎖、電話、通信の禁止、民権の制限、等が実施された。

しかし、このことがさらに学生を中心とした民衆の、反国王運動の頻発を招き、マオイストの活動に免罪符を与えた格好になつた。

混乱に乘じた強盗事件や、マオイストの名を騙る恐喝事件も頻発し、国内の状況はさらに混迷を深めつつあった。

翌朝、多良はパタンの宿泊先からカトマンズの中心部に向かって出発した。普段は、テンプレーと呼ばれる乗り合いの小型オート三輪で移動するのだが、この日は、マオイストの活動禁止令が発令されているため、移動の手段は徒歩しかない。

いつもなら、早朝からタクシーやバス、テンプレー、オートバイ、自転車で大混亂している道路も今朝は数えるほどの歩行者しか歩いていない。

その誰からも話しそうは聞こえず、皆、肩をすぼめるように歩いていている。

時たま、今が稼ぎ時とばかりに走っているタクシーも、身元が分からぬようにナンバープレートを外している。

もつとも、マオイストからの報復のとばっちりを恐れて、そんなタクシーに乗り込む客もいない。

パタンから、カトマンズの中心部、タメール地域までは、多良の足で1時間少しかかる。

カトマンズ市街は、王宮を中心に、環状に走っている道路に囲まれている。その道路はリングロードと呼ばれ、何事かがあると、「リングロード外への移動禁止」、「リングロード内の活動禁止」などというように、地理上の目安として使われている。

多良が、そのリングロードへ近づくにつれ、ゴムの焼ける臭いが強くなってきた。

多良は、

「こりゃあ、いつもより規模が大きいな・・・」と、感じ始めた。

やがて、黒煙が立ち上っているのが見え始めた。この辺りまで来ると、歩いている人の数が増えだした。その多くは若い男達だ。彼らがマオイストなのか、マオイストの支援者なのか、あるいは、時間もてあまし、何かが起きるのを待っている男達なのかは分からぬ。

「どうやら、活動禁止令とストの同時開催のようだな」多良は、いつもと違つ雰囲気を感じた。

道路の真ん中に置かれた古タイヤがブチブチと燃え上り、黒煙はもうもうと天に上っている。4~500mくらい離れた場所からも、やうにその4~500m先でも黒煙が上っているのが見える。

多良の後から、ギッシ、ギッシと古くなつたスプリングをきしませる音と共に、古タイヤを満載した大型トラックがやって来た。古タイヤの上には若い男達が10人くらい座り込んでいる。その後からは何百人の集団が、赤い旗をなびかせながら徒歩でやってくるのが見える。

トラックは、砂埃<sup>すなほいり</sup>を巻き上げながら、道路の端に避けた多良の側をゆっくりと通り過ぎると、燃え上がる古タイヤの横で、ギーৎ、と大きな音を出して止まつた。燃え盛る古タイヤの周りを囲んでいた男達は一齊に歓声を上げた。

リングロードの内側から、重厚なエンジン音が響いてきた。男達は一齊に音のする方向を見た。

迷彩色の制服に身を固めた警官達を満載したトラックが、停止している信号機の角から姿を現した。引き続いて1台、さらに1台と、溝の深いタイヤを履いたカーキ色のトラックが合計5台、1列縦隊でやってきた。

古タイヤを囲んでいる男達の顔に緊張が走つた。単なる好奇心でその場にいた男達は後退<sup>あとずさ</sup>りを始めた。

「まよい。衝突が起きる」多良は足を速めた。

多良が、リングロードを横断しようとすると、その様子を遠くから見ていた三人の男達が大声で何やら叫び、駆け寄ってきた。

近づいてくる男達は、瘦せぎすではあるが、骨太で精悍な顔つきをしている。見るからにマオイストの顔だ。

多良は立ち止まると、ニコリと笑い、

「ジャパニ、ジャパニ」と言いながら、ポケットから日本語の名刺を出して男達に見せた。日本に帰つたときにエアーチケットを手配した旅行会社の担当者の名刺だ。

三人の男達は、その名刺を覗き込んで、

「オー、ジャパニ。OK。OK」と言いながら、多良の肩を、ポンポン、と軽くたたいた。

多良は、

「サンキュー、サンキュー。バイバイ」と手を振りながら、早足で道路を横断した。男達の賑やかな笑い声が後から聞こえた。

「やれやれ」多良は、ほっとして、歩みを緩めた。

すぐに1台田の警察のトラックとすれ違った。

横目で、トラックの荷台に乗っている警官達を見ると、彼らの顔は緊張で眼がつりあがり、警棒を固く握り締めているのが離れて歩く多良からもハッキリと見て取れた。

突然、「ワーッ」という喚声が聞こえ、足元にレンガが飛んできた。

足元に転がった赤レンガは数個に割れて飛び散ったが、砕けたレンガが歩道を転がる音は、「ガツ、ガガガツー」という、警官達がトラックから飛び降りた編み上げ靴の音にかき消された。警官達は、トラックから飛び降りると、警棒を振り上げてデモ隊に向かつて突進を始めた。

リングロードより内側の建物の前で遠巻きに事態を見守っていた若い野次馬達は、一斉に建物の陰に隠れたり、さらに遠くへ走り去り、投石の届かない距離を保つて立ち止まり、様子を窺つている。多良は、鬘をかぶった頭を両手で覆いながら、市の中心へ向かつて走り出した。石や、こぶし大に砕かれた赤レンガがその頭を飛び越し、行く先の道路で跳ね返っている。背中に背負ったザックが上下に揺れた。

ようやく、建物の陰に入り込み、振り返つて見ると、既に警官隊とデモ隊の衝突が始まっていた。

多良は、

「巻き添えでも喰つたら元も子もない」と、建物の陰から、陰へと移動しながらだんだんとその場を離れた。

500mも離れて、市街地の中心に近付くと、道路の真ん中を、まるで散歩を楽しむかのようにゆっくりと歩いている市民の姿が見え始めた。

いつもなら車やバイク、リキシャで洪水のようになつていてる道路がバンダの日は歩行者天国のようになるのだ。

辺りを見廻すと、ビルの屋根越しに黒い煙が立ち上つていて、街の周囲を走つてゐるリングロードの要所要所で古タイヤが燃されているのだ。

カトマンズの青い空に幾本もの黒煙が立ち上つていて、その黒煙は、清流に墨を流したかのようにコラコラと広がり、もうじき空一面を多いそうな勢いであった。

先ほどとは違う方向から、時折、喚声が聞こえてくる。ビツヤラ、同時多発的に衝突が始まつていてるらしい。

カトマンズを取り囲む2000m級の山並みはすでに雪を被り白くなつてゐるが、黒煙はその姿を隠し始めていた。

やがて、「パーン、パーン」という音が聞こえ始めた。

「撃ち始めたか」

催涙弾の発射音である。

多良はさりに歩足を早めた。

王宮正門に繋がる道路には装甲車が配備されていた。

正門手前の交差点の両側には土嚢が1m50cm程の高さに積み上げられ、国軍の兵士達が土嚢の内側に身を潜め、自動小銃を構えている。

市民達は、その銃口の前を悠然と歩いている。

道路端には、年老いたリキシャーマンが所在なげに座り込み、通

り過ぎる家族連れや、たまに通りかかる観光客から声がかかるのを待っている。

いつもなら必死の思いで横断する道路も、今日は悠々と渡ることが出来た。出歩いている市民達も自分たちの行きたい方向に向かって道路を横断している。

彼等には目的地があるわけなく、ただ、こうして道路の真ん中を歩いてみたいだけなのであらう。商店や会社はどこも営業していないのだから行き先などあるはずはないのだ。

多良は、王宮正門へ続く表通りを通り過ぎ、細い脇道に入つてタメールへ向かつた。タメールは観光客向けの土産物屋やホテル、安宿、ネットカフェなどが狭い通りの両側を埋め尽くす繁華街だ。いつもなら観光客と密引きで狭い通りが満員電車なみに混み合うが、今日は若い白人観光客が、あてもなく歩いているのが見えるだけだ。

どこの店もマオイストの報復を恐れて営業していないのだ。土産物屋はもちろん、カフェや食堂もシャッターを下ろしている。

観光客達はホテルへ缶詰状態になつてているのだ。

気晴らしにホテルから出ても、ただ、歩く以外に時間を潰す方法はない。

商店はシャッターを下ろし、店の主は入り口の階段に腰掛けている。

主は、留守狙いの泥棒を恐れての店番と、店を開けて営業できるタイミングを探っているのだ。

多良は、

「今日は、営業は無理だろうな」と、さつき遭遇した状況から推測した。

「さてと、今日は、やつてるかな」多良は、タメールへ出ると利用している日本食レストランを田指した。

登山靴の修理が出来上がつたら、その食堂へ預けるように頼んであるのだ。

その日本食レストランのある雑居ビルが見えてきた。  
しかし、遠くから見ると、そのビルの出入口の蛇腹式のシャッターが閉じられている様に見える。

「あれ？ 閉まってる」と思いながら近づくと、シャッターは、人がようやくは入れるくらいの隙間が開いていた。その奥に、この雑居ビルのオーナーがパイプ椅子に座っている。

「ナマステー」と声をかけるが、「ブスツ」とした表情で返事もしない。

「どうしたんだろう？」と思いながら、二階を指差し、「オープソ？」と聞いたが、黙りこくつたままだ。

「どうしたんだ？ 休みかな」と思いながら、外から二階の窓を見上げると、「おやじの味」と、統一性のない形の日本語で書かれた突き出し看板の取付金具に多良の登山靴がぶら下がっていた。

「おー、やつてるんだな」そう思い、ガシャ、ガシャと蛇腹式のシャッターを少し広げて、中に入った。

日本食レストラン「おやじの味」は、この雑居ビルの二階にある。日本人はもとより、カレーに飽きた白人旅行者もよく利用している。安くて旨いという評判は口コミで広がり、結構繁盛している。多良は、人目につきたくはないが、その料金と味の魅力に負けて、もう30年近くの常連だ。何よりも、店主の人柄が気に入っているのだ。

ビルのオーナーの前を通り、

「ナマステー」と、再び声をかけたが、オーナーは、ジロリと横目で睨んだきり何も言わない。

多良は、階段を、ノッシ、ノッシ、と上がった。踊り場まで來ると、いい臭いがしてきた。

「ナマステー」と言いながら、「おやじの味」と染め抜かれた暖の簾をくぐり、ガラガラツ、と、縦格子の日本式の引き違い戸を開けた。

「おー、多良さん。久し振りだね。元気だったか?」店の主のビクシンがレジの前に座っていた。

「ああ、なんとかね。店、結構、はやつてるじゃないか」と、店の中を見渡した。

奥のテーブル席には、旅行客らしい白人の女性が1人と、男性が5人ほど食事の出来上がるのを待つて、地図を見ながら、なにやら談笑している。

さすがに、この時期、日本人観光客はいない。

「ボチボチだよ。こうして、開けていないと、旅行者は困るからね」ビクシンは椅子から立ち上がって右手を差し出した。

多良も右手を差し出し、再び、

「元気だった?」と、握手した。

「日本人観光客が減つて、ビッグプロブレムだよ」ビクシンは、口をへの字にゆがめ、両手を広げて首をすくめた。

「そりだらうな

国王への権限集中は反対運動の激化を招き、観光客の数は激減していた。特に、お得意さんである日本人観光客の数が大幅に減り、観光産業は、大打撃を蒙っている。

「ところで、ビルのオーナー、機嫌悪そうじゃないか?」と、顎で階下を指した。

「ああ、オーナーは、ここが営業してるの、気に入らないんだよ。マオイストの標的になつて、火でもつけられたら大変だつてね」ビクシンはへへッ、と笑つて椅子に腰掛けた。

「それで、あそこで見張つてるのか。『苦労なことじや』多良はそう言いながら、近くのテーブル席に着き、

「しかし、ビクシン、今日の衝突は、結構大きいぞ。警官隊のバリケードを破つて、二つちまで流れてこなきやいいんだが……」と、ビクシンの顔を見た。

「そんなにか？」ビクシンの顔に緊張が走つた。

若い男性従業員がふたり、

「お待たせいたしましたー」そう言いながら、奥の白人客へ料理を運んで行くために多良の横を通つた。

多良は、それを眺めながら、

「俺も、カツどんと天ぷら蕎麦を」と、ビクシンに向かつて言った。

ビクシンは、申し訳なさそうに、

「多良さん。ごめんなさい。蕎麦、売り切れたよ」と太い首を縮めた。

多良は、それを聞くと、

「ハーッーー、楽しみにしてきたのにのおー」と、思わず大きな声を出し、

「ガツカリじやのー」と、テーブルに顔を伏せた。

「ソーリー、ソーリー、多良さん。材料が入つてこないんだよ」と、ビクシンは申し訳なさそうに頭を下げた。

多良は、

「ま、しょうがないか。こんなに交通機関が寸断されてちや、入るものも入らんからな」と、自分自身に言い聞かせるようにつぶやいた。

その時、奥に座つていた金髪の女性が、

「あの、よろしかつたら、これ、どうぞ」と、テーブルの上の天  
ぷら蕎麦を指さした。  
日本語であった。

女性の申し出に、

「え？ しかし・・・」 多良は躊躇<sup>たら</sup>した。

女性は、すぐに、

「いいです。このカツдинのボリュームを見たら、私には天ぷら蕎麦<sup>そば</sup>は、ちょっと無理だと思います」と、ニコリと白い歯を見せて笑つた。

多良は、

「本当にいいんですか？」と腰を浮かせた。

「どうぞ、どうぞ」女性は、天ぷら蕎麦の器を動かした。

「いやー、じゃあ、お言葉に甘えて」多良は席を立ち、彼女達の隣のテーブルに席を替えた。

先ほどから、話を聞いていたビクシンが、女性から天ぷら蕎麦の器を受け取り、多良のテーブルの上に置き、

「多良さん、ラッキーね」と、右手の親指を立て、片目をつぶつた。

女性も、それを見て、再び、ニコニコと笑つた。

「しかし、日本語がお上手ですね」

「ええ。私の父は日本人ですから」女性は多良のほうを向いて言った。

多良は、割り箸を割る手を止めて、

「え！ じゃあ、ひょっとすると、あなたが、キャシー長谷川さん？」と聞いた。

女性も、割り箸を割る手を止め、

「そうです。あ、じゃあ、あなたはジテンのお友達ですか？」と、

体の向きも変えた。

「そうです。多良<sup>たら</sup>といいます。ああ良かつた。ここで会えて、ふたりは軽く握手をした。

連れの男達も、カツどんを食べながら、ふたりの顔を見ている。多良は、

「でも、どうしてここへ？」と聞きながら、パチン、と箸を割つた。

キャシーも、箸を割り、

「10年前にもこの食堂へはよく通っていましたから」と、そばに立つて、ビクシンの顔を見た。

「そうなんですか」多良はそう言いながら、ズルズルッ、と音をたてて、蕎麦を啜<sup>すす</sup>り込み、

「いやー、ビクシン、やっぱ<sup>うまい</sup>よ、この天ぷら蕎麦は」とビクシンを見た。

そして、

「皆さん、お友達ですか？」と、聞いた。

「いえ、ホテルが一緒で、皆さん、開いてる食堂もないし、お腹を空かせていたものですから。じゃあ、一緒に、とこりとこになつたのです」

キャシーは、左手を男達のほうへ向け、

「この方は、オーストラリアのテレビクルーの皆さんです」と言つた。

男達は、

「ハーハー」という感じで、手を振つた。

多良はそれに応えながら、

「テレビの？じゃあ、やつぱり、ネパールの政治状況の報道のために？」

「いえ。それが、違うんです」

「違う？」多良は、丼から顔を上げた。

「この方達は、イエティのドキュメント番組制作のためにネパールに来られたのです」

「イエティ？ って、雪男？」

「しかし、雪男なんて・・・なあ」と、振り返つて、テーブルから去つてゆくビクシンの背中に声をかけた。

ビクシンは、両手を広げて、肩をすぼめた。その肩は、震えていた。笑いを堪えていいるのだ。

「あら、雪男はいるのですよ」キャシーは、真面目な顔になつて言った。

多良は、

「いや～、それは・・・と、蕎麦の丼に顔を向けて、エビの天ぷらを箸でつまんだ。

キャシーは、

「私もハツキリとの丼で見ました」と、声を大きくした。

男達は、「イエティ」という言葉に、雪男のことを話しているのを察して、食事の手を止め、ふたりの顔を見てくる。

「見た？」多良はキャシーの顔を見ずに、

「いつ？」と聞きながら、エビの天ぷらを頭から半分ほど食べた。

「10年前です。医療ボランティアで、ナムチエから奥に入った村で見ました」

「それは、ヤクとか熊の見間違いでは・・・と、小さな声でつぶやいた。

「ノーノー！間違いありません。一本足歩行していました」キャシーは、さうに大きな声を出した。

「いや～、しかし……と、せらひ、多良が言いかけると、「お待たせしました」と、ビクシンが、カツ丼を多良のテーブルの上に、コソシ、と音を立てて置き、多良の足を踏んだ。

「痛ッ」多良は、ビクシンの顔を見ると、ビクシンは、片目をつぶつていた。

「あ、ああ……ビクシン、お茶を……」多良は「分かったよ」と田代合図した。

ビクシンは、

「あ、お茶ね」と、調理場へ戻つて行つた。

キャシーは、多良との会話を、男達に通訳している。

男達のひとりが、キャシーに何か言つている。

多良は、勢い良く、蕎麦を啜<sup>すす</sup>り込んだ。

キャシーは、

「写真を撮るつと、ザックからカメラを出している間に見失いました」と、さも残念そうに、首を大きく左右に振つた。

そして、多良を見て、

「でも、・・・村人達は驚かないのです」と、やや不思議そうな表情をして言つた。そして、

「何度も見ていろから、珍しくないのだと思<sup>こなす</sup>と付け加えた。

「だるうな」多良は、小ちくつぶやいた。

「え？」

「いや、なるほど」と言<sup>こながひ</sup>、ザックの中から黒いビニール袋を取り出し、

「忘れてはいけないので、これを先にお渡しておきまゆ」と、キャシーの隣の椅子の上に置いた。

「ありがとうございました。これで、何の人々の人達が助かります」  
キャシーは、袋の口の結び目を解き、中を覗いた。

「その薬草類で薬を？」多良は天ぷら蕎麦の空になつた器を脇に寄せ、カツどんを手前に置いた。

キャシーは、袋の口を結びなおしながら、

「そうです。10年前、こちらに来た時に勉強しました」と言い、大事そうにその袋を、ザックの中に納めた。

「へー。独学で？」

「ドクガク？」キャシーは、首をかしげた。

多良は、

「あ、おひとりで勉強されたのですか？」と、言葉を替えた。

「いえ、私の父のお友達からテキストをもらつて」

「お父様のお友達？」

「はい、その方はタイのチュンマイに住んでいます」

「へー」

「その方の知り合いがテキストをここまで届けてくれたのです」と、胸で揺れる銀のロケットを左手で握りしめた。

当時チュンマイに住んでいた江下寛一から、薬草の調合方法を書きとめたノートを預かり、キャシーに届けたのが、修道館大学の日本拳法部部長だった山口であつたことなど、このときの多良には知る由もなかつた。

そして、今、田の前にいるキャシーの友人が、剣道部の木野花咲姫さきであり、さらには、神田かみたとも知己ちきとなつたことなどは想像出来るはずもなかつた。

しかし、やがて、彼らは、運命に操あやつられるよつこ、この神々の座す国、ネパールで再会することになる。

その再会は、彼らが、燃え滾つっていた70年代にぶつけていた怒りが、どこからともなく吹いた風に流されたのと同じように、敵うことの出来ない歴史の流れに再び巻き込まれてゆく序章になる。

深く、暗い、時代の闇がそこまで迫っていた。

## 暴動！－カトマンズ

「あ、ビクシン、俺の登山靴をもひつて行くよ。<sup>たら</sup>多良はお茶を飲み干して、窓の方へ移動した。

ビクシンは、

「はい。あそこにぶら下げるけば、<sup>たら</sup>多良さん、気がつくと思つてね」と、笑いながら言つた。

「ははは、確かにな」多良は、そう言いながら、外から営業していることが分からぬよう閉めてあつたカーテンを少しだけ開き、ガラス越しに外の様子を見た。

そして、木枠の窓を、ギシギシ、と、横に滑らせて開け、手を伸ばして、看板の取り付け金具に結び付けられている登山靴を取り入れた。

その時、通りの向こうから、「ワーッ」という喚声が聞こえてきた。

警官隊との小競り合いから抜け出た<sup>いた</sup>デモ隊がタメール地区になだれ込んで来たのだ。

多良は、すぐに窓を閉め、カーテンを引いた。

「ビクシン、デモ隊だ」多良は振り返つて、レジのところにいるビクシンに言つた。

「えつ」ビクシンは、窓際にやつてきて、カーテンの隙間から外を覗いた。

その時、ガシャン、と、ビルの入り口の蛇腹シャッターが閉じられる音がして、オーナーが、逃げて行くのが見えた。

キャシーや、オーストラリアのテレビクルー達は、不安そうな顔をしてお互ひの顔を見つめている。

ビクシンは、彼らの不安を消すよう、

「大丈夫ですよ。もうじき、彼ら、通り過ぎると思つよ」そう言いながら、レジのところへ戻つて、調理場にいた従業員に電気を消すように言った。

従業員達は、ときぱきと動いて店内の全ての電気を消したが、彼らの顔には不安と緊張が浮かんでいた。

数台のオートバイに乗つたマオイスト達が赤旗を振りながらデモ隊の先導をしている。

その後から、毛沢東主義のシンパや学生達が続き、やがてその後からは、野次馬が続いている。

仕事もなく、収入の道のない男達は、日頃の鬱憤を、マオイストの騒ぎに乗じて晴らそうと、何かが起きることを願いつつこのデモに加わっているのだ。

彼らの中には、マオイストから何ルピーかもりつて、参加している者たちもいる。

それぞれの店舗の前で、開店の機会を窺いながら座つていた店主達は、シャッターに握り拳こぶしほどもあるの大きさの南京錠を掛け、一目散に去つていった。

通りを、歩いていた観光客もデモ隊とは反対方向に駆け足で去つていった。マオイストやデモ参加者が観光客に危害を加えることはない。

しかし、運が悪いと、マオイストから寄付金を求められることがある。

「ワーッ」という叫び声が上がり、シャッターを閉めるのが間に合わなかつた雑貨屋ヘデモ隊が乱入し、「ガシャン、ガシャン、バ

ーン、商品を通りに投げ出し始めた。

カーテンの隙間から覗くと、同じ建物の一階の雑貨屋にデモ隊の一部が乱入し始めたようだ。彼らはもはや暴徒と化していた。

オーストラリアのテレビクルーはビデオカメラをザックから取り出し、窓のカーテンを開いて、ガラス窓を開いた。  
「ノーッ！！」、ストップ！？」多良は叫んだが、その時にはもう遅かつた。暴徒のひとりが、それに気付き、指をさして大声で叫び始めた。

暴徒となつた群衆は、食堂の窓に向かつて石を投げ始めた。

「ガツシャン！」、暴徒の投げた石はガラス窓を破り、床にガラスの破片が飛び散つた。幸いにも、カーテンに遮られ、ガラスの破片の大部分は多良達に届く前にカーテンと窓の間に落ちた。

しかし、次から次へと飛んでくる石やレンガは次第にカーテンを引き裂き始め、奥のほうまで飛んでくるよになつた。

多良達は、奥のテーブルの下に身を伏せていたが、身の危険を感じ始めていた。

その時、向かいのテーブルの下に潜つていたキャシーが、「あれは？」と、入り口の引き違ひ戸の方を指差した。  
戸の隙間から黒い煙が入り込んでいた。

ビクシンが、

「ファイヤー！多良さん、火事だよ！？」と、叫んだ。  
一階の雑貨屋に放たれた火が燃え広がつているのだ。

「ガツシャーン！ガツシャーン！」窓ガラスを破つて石が飛んでくる。カーテンは引き裂かれて、カーテンレールと共にぶら下

がっている。

若い従業員が、身を伏せながら、出入り口の引き戸を開いた。火は見えない。黒煙が、鼻に突き刺されるような臭いと共に店内に入ってきた。

オーストラリア人のテレビクルー達は、カメラをザックを抱え込んで飛び出す機会をうかがっている。

「多良さん、逃げるよー！」ビクシンはそう叫ぶと、キヤシーやテレビクルー達へ右腕を振つて合図した。従業員達が引き戸を全開にして階段の下に向かつて下り始めた。階下から熱を帯びた黒煙が勢いよく店内に流れ込んできた。

全員、手で、鼻と口を覆つて従業員の後に続いた。多良は、キヤシー やオーストラリア人が出たのを確認して最後尾についた。

一階と二階の踊り場まで来ると、チラチラとオレンジ色のほのうが見えてきた。従業員達が最初に突っ走つて、出口に向かつた。

しかし、その直後、「ガシャ、ガシャ」という音と共に、従業員のひとりが大声で叫ぶのが聞こえた。

「何だ!?」多良が叫んだ。

「ダメだ、多良さん！あの馬鹿オーナーがシャッターに鍵をかけてる！」ビクシンが悲痛な声で叫んだ。

「屋上だー！」多良が叫ぶのと、向かいのドアが爆発で勢いよく開くのと同時であった。

「バーンッ！…」

「キャーッ……」キャシーが叫び声を上げた。

火が何かに引火したのだ。

多良はキャシーの手をとつて階段を駆け上がった。

全員が多良の後に続いた。

炎が渦を巻きながら、蝶番一つでぶら下がっているドアを乗り越えて、追いかけてきた。

「ゴホッ、ゴホッ」

全員が黒煙に咽びながら身を低くして階段を駆け上がった。

屋上へとつながる出入口の、青く塗られた鉄パイプの扉が見えた。

その扉のカансヌキには南京錠がかけられていた。

オーストラリアのテレビクルーの一人が、その南京錠をつかみ、「ガチャ、ガチャ」と揺らし、

「シットツッ！」と、吐き捨てるように言った。

若い従業員が、中庭を見下ろす位置にある窓を、そばにあつた丸椅子を投げつけて壊した。その腰ほどの高さにある窓から覗くと隣の建物の屋上が見える。

黒煙が熱風と共に勢いよく上がつてくる。炎はまだ見えないが、凄まじい熱気が上がつてくる。

従業員のひとりが、窓枠に足をかけ隣の屋上めがけて飛び降りた。飛び降りた従業員は、屋上にあつた植木鉢を「ガチヤン、ガチヤン」と蹴飛ばし、続く者たちが飛び降りやすいように足場を広げた。その広がつた場所めがけて、残りの従業員達も次々と飛び降りた。

オーストラリアのテレビクルー達も、ザックを背中に背負いなお

し、飛び降り始めた。ビクシンはカメラマンから預かってたビデオカメラを先に降りたカメラマンに放つて、自分も体に似合わない身軽さで飛び降りた。

「ああ、キャシーさん……」多良は、キャシーの煤で黒くなつた顔を見た。

「ノー、出来ません」キャシーは弱々しくかいつと、窓から離れて壁に背をつけた。

「何を言つているんですかッ！…あ、はやく」やつぱいつと、多良は、キャシーを窓際まで引っ張つて行き、

「サア！」そう言つと、ザックを背中からおひじして腹ばいになりました、

「私のうえに乗つて、早くッ！」と叫んだ。

隣の建物の屋上からはオーストラリア人達が、

「カモン、キャシー、ハリーアップ！」と叫んでいる。

「ああ、早く」多良は大声で叫んだ。

キャシーはようやく多良の背中に足をのせ、片足を窓枠にかけて下を覗き込み、

「ノー、出来ません」と半泣き状態になつた。

多良は、

「ええいッ」と叫ぶと、背中に乗つた左足を掴み上げ、キャシーの尻に両手を添えると、

「ヒクスキユーズミー」と言しながら、尻をポンと押した。

キャシーは、

「キャーッ！」と叫びながら飛び降り、隣の建物の屋上で待ち構えていたオーストラリアのテレビクルー達に受け止められた。

多良もすぐにその隣に飛び降り、クルー達に向かつて、

「ゴー、ホテル！」と叫んだ。

屋上から飛び降りた従業員達が、どこからか、木の梯子を持つて

はしご

きて、立掛けた。

ビクシンやオーストラリアのテレビクルー達はその梯子を伝つて建物の裏側に降り立つた。

多良は、先に梯子段に足をかけ、キャシーの体をサポートしながらゆっくりと下り始めた。見上げると、先ほど飛び降りた窓からはもくもくと黒煙が舞い上がっている。

表通りから、「パン、パン」という催涙弾を発射する音と共に、悲鳴が聞こえてきた。

ビクシンが、

「多良さん、ホテルで会おう……」と、梯子の中段に立つ多良を見上げて言つた。

「ジス ウエイー！」と叫んで、裏口へテレビクルー達を誘導した。

梯子の中段から塀越しに、群集が警官隊に追われて「ワーッ」と叫びながら、逃げまどひ姿が見えた。

多良が、

「ゆつくりでございますから、もう少しです」と、キャシーに声をかけた。

キャシーは、

「わつき飛び降りたとき、足首を痛めたみたいですね」と言つた途端、

「キャーッ……」ダダダダン……

キャシーが足を踏み外し、多良の上に覆い被さつたまま、一人とも地面に叩きつけられるように落とした。

多良もキャシーを支えきれなかつた。

たら

キャシーは、座り込んだまま、

「オー、アイムソーリー、多良さん」と、言い、多良の顔を見て、驚いた。

多良の黒々とした頭の毛がなくなっているのだ。そして、キャシーの右手には、その黒々とした物が握られていた。

多良は、

「痛タタツ」と腰に手をやりながら、キャシーが、皿を丸くして自分を見ているのに気がつき、サツ、と頭に手をやり同時にキャシーを見た。その時には、キャシーは、多良の頭と、右手に握っている髪の毛を交互に見やり、起きた事態を理解しようとしていた。

キャシーの白い肌は、や一つ、と紅潮し、

「アイムソーリー、多良さん、アイムソーリー」と言しながら、多良の頭に髪かつらを被せて、ギュギュツ、と押さえつけた。

「痛い、痛いよ、キャシーさん。逆だツ、逆」

キャシーは、髪かつらを前後ろ逆につけようとしていた。

「アイムソーリー、多良さん。」のことは誰にも言いません。約束します

キャシーは、顔を赤らめたまま、髪かつらの向きを、懸命に直そうとしていた。

「あ、ああ。・・・そうしてくれよ・・・」やつまにながら、口をグツ、と結んで、笑いをこらえた。

「ところで、キャシーさん」

「はい。何ですか?」

「俺の腹の上から退いてくれるかな」と、多良は言つた。

「パー、パー」という催涙弾を発射する音とともに、ガスが流れ込んできた。

多良とキャシーは鼻と口を手で覆つたが、たちまち目を刺すような痛みが襲つてきた。

「ゴホッ、ゴホッ」という咽び声と共に6人の男達が裏戸から飛び込んできた。男達は、手に手にパソコンやテレビ、衣類や食料品などを抱えていた。混乱に乘じて店舗から品物を盗む火事場泥棒だ。

彼らは、多良とキャシーを見ると、一様に驚き、足を止めた。催涙ガスが、男達の足元で渦を巻いた。

多良は、キャシーの手を取り、立ち上がりさせて、彼らと3mほどの距離を保つたまま、円を描くようにゆっくりと裏戸側へ移動した。

彼らは、多良達に危害を加える気持ちはないことは、多良には分かった。彼らの顔は、皆、怯えた猫のように警戒心を露にしているのだ。

その時、ドカドカツ、とレンガ貼りの路地を踏みつける音と共に、10人ほどの警官達が入り込んできた。

男達は、警官の姿を見ると、羊の群れがひとつのかたまり肩を寄せ合つた。

それを見た警官達は、目を血走らせ、警棒を振りかざし、頬を引きつらせながら、男達ににじり寄つた。

「正義」と「邪心」。警官達の屈折した心理は、暴力となつて現れる。そのことを、男達も知つていた。権力に庇護された暴力ほど激しく、そして恐ろしいものはないのだ。男達は肌で何度も経験し

ていた。

警官達は、一斉に男達に殴りかかった。男達は、略奪した商品を抱えた腕でおのれの身を守るために、それらの商品を投げ捨てた。

男達は、抵抗すればするだけ打ち据えられる回数と、その力が増すことを知っていた。

「バシッ、バシッ」、肉の避けるよつた音と、男たちの悲鳴が裏庭に響き渡った。

「ストップ！－ストップ・イット」キヤシーは叫びながら男達と警官たちの間に入り込もうとした。しかし、多良の手はキヤシーの手を握り締め、引きとめた。

キヤシーは、顔を赤らめ、必死に、彼らの間に入り込もうとしている。

多良にもキヤシーの気持ちはよく理解できる。しかし、この場はどうしようもないのだ。キヤシーの手は催涙ガスのせいだけでなく、赤く充血していた。

男たちの退路を絶ちながら、警官達は絶え間なく警棒を振り下ろした。男達の悲鳴はやがて泣き声に変わった。

男達が、顔を防ぐよつにかざした腕に向かって数本の警棒が振り下ろされた。

男達は、打たれる前に、腕の骨の折れる音を聞くかのよつた悲鳴を上げた。

その時、風と共に、振り上げられた警棒の先、50cmの部分が催涙ガスと黒煙の漂う宙に舞い、警官達の頭の上に「パラパラ」と落ちてきた。

警官達は、警棒に込めた力の行く先を失つてバランスを崩し、地

面に落ちた切り離された警棒の先を、何が起ったのか理解できない表情を浮かべたまま見つめた。

警官達の背後に、髪を肩まで垂らした長身の男が立っていた。

キャシーは、一瞬にして、30数年前、バンコクで遭遇した出来事を思い出した。あの時も、暴漢が振り上げた木の椅子を、一瞬にして切り、男の手には振り上げた椅子の足しか握られていなかつた。暴漢達に連れ去られようとしていたキャシーを救ってくれた男。「今、ここに立っている男はあの時の日本人ではないか！！」キャシーの記憶の一片は、催涙ガスの滲むフィルターを拭い去り、鮮やかな色を伴つて蘇つた。

「GOD！」

確かにあの時、「GOD」と名乗った。

キャシーが、屋台を切り盛りしていたタイ人の幼い姉弟の肩を抱きながら、まだ拙かつた日本語で男の名前を聞いた時、男は確かに、「GOD」と名乗った。

日本人の父親を持ちながらも、家庭内の会話では日本語を使うことのなかったキャシーは、当時は片言の日本語しか使えなかつた。自らを、GOD（神）と名乗つた男を、その時のキャシーは、「なんと不遜な日本人なんだ！」と、強く思つた。

「郷戸！」多良は、鼻と口を被つた右手の下で叫んだ。

確かに、あの時、多良が修道館大学の学生だつた時、学校に乗り込んできた暴力団の指揮を取つていた男だ。30数年を経ても、あの時の凄みのある姿に変わりはなかつた。「男の名前は郷戸だ」と、日本拳法部主将の山口から聞いた。

あの時、抗争が学生たちの勝利に終わり、最後に暴力団員達に引き上げの号令をかけ、夕陽の中で、ダンプカーの屋根に木刀を握つて立つていた姿は、多良の脳裏に強く焼きついている。

「「ゴウド？」」キャシーは小さく声に出し、多良の顔を見た。

「GODではなく、あの時、彼は、「ゴウドと名乗つたのか」キャシーは、30数年を経て、何故か胸のつかえが取れた気がした。

その男が今、着古したグレーの上着の上から白いコートを羽織り、刀を右手に持つて立つていた。

警官達は振り返つて男の顔を見るなり、凍て付いた表情を浮かべ、おどおどと裏口へ向かつた。

長髪の男は、警官達が裏口から出てゆくを見届けると、「日本刀」を腰に挿した鞘に収めた。そして、略奪品を抱え始めている男のひとりに、

「タワーのところにラックが停めてある」と、抑揚のない声で言つた。言われた男は、パソコンを抱え、

「フカシタ」と片言の日本語で応え、他の男達に伝えた。

多良は、

「あんた、郷戸じゃないか?」とキャシーの手を離し、去つてゆこうとする男の背中に声をかけた。

男は、一瞬足を止めたが、そのまま裏口から去つていった。

すぐ近くで、「パン、パン」と催涙弾の発射される音が、キャシーを現実に戻した。

「彼は・・・」

多良はキャシーの言葉を遮つて、

「キャシーさん、その件は後だ」と言つて、再びキャシーの手をとつて裏口へ向かい、外の様子を窺つた。

催涙ガスの充満する狭い通りを、郷戸が白いコートを翻し、悠然と歩いて行くのが見えた。警官達も、郷戸の前を空けた。

「強盗団のボスは日本人だという噂は聞いたことがある。しかし、そいつが、あの郷戸だとは・・・」

キャシーも、バンコクで、危険から救つてくれた男とカトマンズでこんななかたちで会おうとは夢にも思つていなかつた。

「ゴッドと名乗つたと思っていた男が、強盗団のボスとは・・・彼の身には何が起こつたのだろうか?」

郷戸、多良、咲姫、神田、そして・・・山口。

「」の時のキャシーは、彼らが、お互に引き合つかのよ「」、「」のネパールに集まつてくることなど、夢にも思わなかつた。

「キャシーさん、足は大丈夫？」多良はキャシーの手を取り、足首を見ながら尋ねた。

「少し痛みますが、大丈夫です。ホテルまではOKです」

「そうですか。じゃあ、ゆっくり行きましょ」そう言つと、多良は左手でキャシーの手を握り、右手にキャシーのバッグをつかんで裏通りへ出た。

キャシーは、建物のレンガ壁に手を沿わせながら、ゆっくりと歩いた。大通りからは、警官隊のブーツの固い靴音が踏み固められた通りを走る音と、警棒が何かを叩く乾いた音が聞こえている。

数人の若い男達が大通りから多良のいる方に向かつて逃げてきた。彼らは、多良達には目もくれず反対方向に向かつて走つていつた。

大通りに出ると、警官隊とデモ隊の衝突はますます激しくなつていた。

「このままで行くと警官隊は実弾を使うかも知れんのオ」と口の中でつぶやいた。

「え？ 何か言つましたか？」キャシーは、立ち止まつて多良の顔を覗き込んだ。

「いや、何も」と、多良は応えながら、「暴動鎮圧には、催涙弾より実弾の方が安いから、場合によつては実弾を使うよ」と指示が出ているんだ」と、ジテンが言つていたことを思い出した。

「单なる噂だとは思つが・・・」多良は、キャシーをかばいながら、飛んでくるブロック片や石に注意しながら建物の壁沿いにホテルへ向かつた。

ホテルスオニガの前で、日本料理屋の主人のビクシンや、オース

トラリアのテレビ局のクルー達が心配そうな顔をして立っていた。

通りの角から、多良<sup>たら</sup>とキャシーの姿が見えると、全員がふたりに走り寄り、足を痛めているキャシーに手を貸し、多良の手からバッグを受け取った。

「多良さん、心配したよ。どうしたのかと思つて」ビクシンが多良の方に手を置いて言った。

「いや、ごめん、ごめん。キャシーさんがちょっと足をくじいたみたいで」

「さあ、中へ」ビクシンはそう言つと、ホテルの入り口の格子のシャッターを、人が通れるほど横に引いた。

細い通路の左手にカウンターがあり、ネパール人のホテルスタッフも、ほつとした表情を浮かべてふたりを迎えてくれた。通路の先には長いすが置かれ、数人の白人観光客達がそれに腰掛け、小さな声で会話している。

ロビーには照明が点けられ、外部とは別の世界のようだ。観光客の笑い声も聞こえる。

「や、じいへ」ビクシンは、座り心地のよさそうなソファーを奥から滑らせながら持つてきて、キャシーに手を貸しているオーストラリア人に言つた。

「サンキュー、ありがとうございます」キャシーはそう言つと、体を投げ出すようにそのソファーに腰掛けた。

「ビクシン、ちょっと」多良は、そう言つと、多良の座つた隣の席を、ポン、ポンとたたいて、座るように促した。

「なんですか?」ビクシンは怪訝そうな顔をして隣に座つた。

多良は、やや、声を潜めて、

「わいせ、強盗団が、一階の雑貨屋から商品を盗み出しているのを見たんだが、そいつらのボスについてだが、何か知らないか？」

ビクシンは、口元をゆがめて、

「ああ、多良さん、見たんだね」と、訳ありげな言い方をした。

多良は、

「噂どおり、日本人だったよ」と、こつそつ声を潜め、

「そいつのこと何か知ってるかい？」と聞いた。

「私は見たことないね。ただ、最近、よく噂は聞くね」と、ビクシンは辺りを見回しながら言った。

「一体何者なんだ？あいは？」ふたりは前かがみに体を低くして顔を合わせた。

「警察も軍も、手出しえきない男だよ」ビクシンは、即座に答えた。

「え？ どい？ ことじだ？」

「それだけじゃなによ。マオイストさえ手を出さないんだ」ビクシンは、田だけを多良に向けて、囁くような声で言った。

多良は、

「へー、よく分からんなー」と、息を吐き出しながら言った。

「噂では、マオイストのビッグボス、プラチヤンダもあの男を捜しているらしいよ」ビクシンは、体を倒したまま、田を左右に動かしながら言った。

「捜す？」

「そうだよ。自分たちの仲間に引き込みたいらしいんだよ

「どうして？」

「たぶん、例の一件を利用しようとしているんだと思つよ

「例の一件？」

「たぶん、ビクシンは、人差し指を口の前に立てた。

「ああ、あの王宮内の・・・」

「シッ！」ビクシンは、立てた指はそのまま、短く息を吐いた。

「あの件とあの男とどういう関係が？」

「あの男は、前の国王の親衛隊の先生だつたんだよ」

「先生？」

「そう。カタナのね」と、口の前に立てた指を立てて振り下ろした。

多良は、「武術教官だつたといふことか。それで、警官達は手出ししなかつたのか」と、警官達の引きつった顔を思い浮かべた。

ビクシンは、

「たぶんあの男は何か重大なことを知つていいんだ」

「重大なこと？」

「そう。あの現場にいたとか・・・」

「あいつは、金持ちの家や、アク、アク・・・」と、顔を上に向けて、目をつぶり言葉を思い出そうとしている。

「アク？」<sup>たら</sup>多良には何のことだか分からなかつたが、

「悪い商売人の店からしか盗んだりしないんだ。それも、最低限だけね」とビクシンが言つと、

「ああ、悪徳商人？」と、聞いた。

ビクシンは、右の人差し指で多良の顔を指し、

「そう、悪徳商人から盗むのさ。あの一階の雑貨屋のオーナーは、あちこちに店を持つてゐるけど、オーナーからお金を借りて返せなくなつた親から子供達を連れてきてタダで使つてゐるんだよ」そう言つと、

「まあ、マオイストにも、ゴッドにも狙われて当然だ」と、言つて、ソファーの背もたれに体を預けた。

「ゴッド？」多良は驚いた。

ビクシンは、

「ああ、皆、あいつのことは『ゴッド』って呼んでるよ」と、当たり

前のように言つた。

キャシーは、足首に自分で調合した湿布薬を塗りこみ、サポーターをはめながら、「ゴウド、ゴウド」と頭の中で繰り返していた。  
最近、どこかで聞いた名前なのだ。

「具合はどうですか?」多良がキャシーの足元で片膝をついて尋ねた。

「ありがとうございます。大丈夫です。この薬はよく効きますから」と、言しながら、トレッキングパンツの裾を下ろした。

「せつきの人、ゴウドというのですか?」

多良は、キャシーの問いかけに、

「え? つーん、・・・だと思います」と、少し驚き、

「なにか?」と、聞き返した。

キャシーから、

「私、あの人にお会いことがあります」と、思いがけない返事が返ってきた。

「へー、それはまた・・・」多良は田を見開いて、キャシーの隣に腰掛け、

「どちらで?」と、尋ねた。

キャシーは、優しい声で、

「バンコクです」と言つた。

「バンコク?」

「はい。もう、ずーっと昔のことです。30年以上前のことです。キャシーは、顔を上げ、遠くを見るような目で、田の前の少し陰になつて、壁を見つめた。

「よく分かりましたね。人違いでは?」と、聞きながら、「30

年以上前?俺が修道館大学での抗争の時見た頃だな」と、多良は思つた。

「いえ、あの刀の使い方は、あの時と一緒にです」

「刀の使い方?」

「はい。私が暴漢に絡からまれているといふを、彼が助けてくれたのです」

キャシーは、膝の上で両手を重ねながら、

「その時、名前を尋ねたら、『ロッシュだと聞こました』と続けた。『ゴッド・・・・』ビクシンもそう言つた。

キャシーは、多良の顔を見て、

「『ロウドなのですね』確認するかのように聞いた。

「そう・・・だと思います」多良は、キャシーのいくぶん強い言葉に気圧けおされながら答えた。

キャシーは、さりとて、

「どんな字を書くのですか?」と聞いてきた。

多良は、キャシーに見えるように左の手のひらを広げて、右の人差し指で、ゆっくりと、

「故郷の郷きょうにドアの戸戸です」と言いながら、書いた。

キャシーには難しくてよく分からなかつたが、

「故郷の郷きょうに、ドアの戸戸・・・」と、口の中で繰り返し、そして、ふるわとのドア、ですね」と、再び、確認するかのように、多良の顔を見た。

「そうです」と、多良は返事しながら、さりとて、ふるわとのドア、・・・か」とつぶやいた。

「アー・コ・オーライ?」そう言いながら、テレビ局のクルーのひとりが多良達に近付いてきた。

「サンキュー、アイム・オーライ」キャシーは、その男に微笑みながら言った。

「多良さん、こちらはジョンさんです」

「ハロー、ジョンさん。マイ・ネーム・イズ・タラ」多良は右手を差し出した。

「ハロー、マイト」男も右手を差し出し多良の手を握った。いかにもオージーらしい気さくな感じの、体も手も大きい男だった。

「多良さん、ちょっと失礼します。」の方たちは、イエティの取材に行かれるのですが、私が、イエティを見たことを話したら、非常に関心を持たれて、話を聞きたいといふことなので……と、立ち上がった。

「ああ、そうなんですか」多良もキャシーを支えようと手を手を出した。

キャシーは、

「それで、わざわざ、食堂で地図を見ながら話をしていたのです」と言しながら、多良の左手に右手を乗せ、「ありがとうございます」と言った。

「しかし、雪男は、実際におるのかのぉ」と、左側でキャシーを支えているジョンを見た。

キャシーは、立ち止まり、

「います。私はこの田で見ました」と、多良を見た。

多良は、

「いたとしても、雪男だつて移動するじゃねえ、同じ場所にはおらんのじゃあ・・・」と、言つと、キャシーは、

「村人は、イエティのことを話したがらないのですが、どうも、同じ場所に現れるみたいですね」と、歩き、オーストラリアのテレビクルー達の集まっているソファへ腰掛けた。

「しかし・・・」と、多良が言おうとするが、キャシーは、

「多良さんは、イエティの存在を否定されていますが、どうしてそんなに?」と、眉を寄せて多良の顔を見上げた。

多良は、<sup>かつり</sup>髪のゆがみを直しながら、

「うーん、見たことないし・・・」と、言つて、

「ところで」と、ジョンのほうを見ながら、

「なんだか、メンバーが少なくなっているようだが、他の人はどうしたんじやろ?」とキャシーに聞いた。

キャシーが、ジョンに尋ねる前に、ジョンは

「フタリハ、スト、シユザイ、イキマシタ」と日本語で答えた。

「えー!?, ジョンさん、日本語話せるんですか?」多良はびっくりして、ジョンを見上げた。

「スコシ。ハイスクールで、ベンキョウシマシタ。イマナモ、スコシ、ベンキョウシテイマス」

「へー、なんだかありがたいの一」多良は、ニコニコと笑うキャシーの顔を見て言った。

テーブルには、ネパールの大きな地図が広げられていた。そのテーブルを囲むようにして椅子が置かれ、キャシーとジョンも他のスタッフの間に入つて座つた。

多良は、

「じゃあ、キャシーさん、私はこれで」と、軽く手を上げて、出口へ向かおうとした。

「オウ、どこへいくのですか?」キャシーは驚いて多良に聞いた。

多良は、

「いや、ちょっと、風呂へ入りたいので・・・」と、胸の辺りのシャツを摘まんでにおいを嗅ぐ仕草をした。

それを見たジョンは、立ち上がりて、

「ミスター・タラ、ワタシノヘヤノ、バスルームヲ、ツカツテクダサイ」と、ジーンズの尻ポケットに差し込んだルームキーを取り出した。

「いや、しかし、それは・・・」と、手を振る多良に、ジョンは、「ダイジョウブデス。ノー・ワリーズ」そう言つと、多良の肩に手を回して階段の方へ向かつた。

多良も、

「いやあ、悪いですねえ。じゃあ、お言葉に甘えて」と言いながら、ジョンの後に続いて階段を上がった。

ジョンは、何度もガチャガチャと鍵を鳴らして、ギーク、と音の鳴る木のドアを開き、「ドウゾ、ドウゾ」と、部屋に入った。

多良は、「しまった」と思つた。「風呂はないな」と、部屋の様子を見て思つた。

しかし、ジョンは、二口二口と多良の顔を見て、

「ドウゾ、ドウゾ」と親切にバスルームの戸を開いた。

広いバスルームではあったが、やはりバスタブはなく、シャワーだけだ。固定式のシャワー・ヘッドが高い位置に取り付けられている。

「ジョンさん、ありがとうございます。これでさっぱり出来ます」と、多良は喜びを顔に表わした。

「ヨカッタデス、ヨカッタデス。ワタシ、シターラキマス」とうれしそうに出て行った。

「あ～、まあ、いいか」と、多良は、溜息をついて鬱を取った。

「俺はどうもこの便器とシャワーと一緒にるのは苦手なんじや」と独り言を言いながら、鬱の裏に隠した米ドルとパスポートを確認して、便器のフタの上に置いた。

シャワーとはいえ、久し振りだったので、たっぷり時間をかけた。そして、辺りに飛び散った水しぶきをきれいに拭き取り、部屋から出ると、「オー、マイガツ」「ワオー」と、賑やかな声が階下から聞こえてきた。

ドアに鍵をかけ、

「何事じやろうか?」と思いながら、階段を下りて、

「ジョンさん、サンキュー」と、テレビに見入っているジョンの肩をたたいた。

ジョンは振り向いて、

「ド、イタシマシテ」と、微笑を浮かべながら鍵を受け取った。

「何の番組ですか?」多良が尋ねると、

「ビデオです」キャシーが、多良を見上げて言い、すぐにまた田舎画面に移した。

画面を見ると、どうやらネパールの暴動のビデオらしい。国際郵便局の前の通りだ。

「これは?」

「わつき、街で取材していたクルーが戻ってきたのです」と、キャシーがテレビの下に座り込んで、テレビにつないだビデオカメラを操作している男の方を向いた。

「あー、じゃあ、今日の暴動ですか?」

「やうです」キャシーは、画面を見ながら答えた。多良にはせして珍しくもなく、関心もなかつた。

多良は、

「ジーハンさん、ありがとひーじーました。キャシーさん、私はこれで」と、右手を上げた。

キャシーは立ち上がりつて、

「ありがとひーじーました。ジーハンにもよろしく書ひてください」と右手を差し出した。

多良は、その手を軽く握つて、

「じやあ」と言つたまま、動きを止めた。

キャシーは、

「多良さん？・・・多良さん。痛いです。手が」と、右手を振つて、多良の手を振りほじりついたが、多良の皿せトレビに向ひられたままだ。

「多良さん？」キャシーは、多良の顔を下から覗き込むように見上げた。

「多良さん、どうしましたか？」キャシーは、左手で多良の右腕をつかんで揺すつた。

「あ、失礼しました。ほら、郷戸です」と、画面を指差した。

「え！？」キャシーはやう言つて、振り返つて、

「本当です。」口づです「やう言つて、多良から手を振り解いてテレビの前に向かつた。

黒煙と催涙ガスの混じり合つ大通りの中を、ゆつくりと緑色のトラックが走つている。トラックの屋根に、赤いタオルで鉢巻をして、足を広げて立つ男が見える。

「郷戸・・・」

郷戸の着た白いコートが風を受け翼のよつと広がつてゐる。

多良には、その姿が30数年前に見た郷戸の姿とダブつた。あの

時も、暴力団員と荒くれ男共の指揮を取つて、トラックの屋根に立つていた。

画面は、郷戸の姿から、警官隊とデモ隊の衝突画面に移つた。デモ隊と警官隊が激しくぶつかり合つてゐる。中に、「PRESS」という腕章をつけ、ヘルメットをかぶつた人間も混じつてゐる。警官の警棒が、はずみでその男のヘルメットをはじき飛ばした。「PRESS」という腕章をつけたその男が、かがんで、そのヘルメットを拾おうとした時、どこからともなく飛んできたブロック片が男の眉間に当たつた。

男の眉間からは、おびただ夥しい血が流れ始めた。男は、それでもビデオカメラを回し続けようとしているが、血が目に入つたのだろう、ヨロヨロとふらつき、その場に前ががみに倒れ込んでしまつた。

ここで、画面が大きく揺れた。この光景を撮つていたオーストラリア人カメラマンが助けに行こうとしたのだろう。しかし、その時、再びカメラは固定され、倒れた男の姿をとらえている画面の端に白いコードが入り込んできた。

多良は、

「郷戸だ」と、声に出した。

倒れた男は、気配を感じて顔を上げたが、流れ込んだ血で目を開けることが出来ないようだ。ビデオカメラが男の顔をアップでとらえようとした時、その男の顔に赤いタオルが投げかけられた。

「バーン、バーン！」すぐ近くで催涙弾を発射する音が入り込んだ。

カメラは、向きを変え、その音のした方角に向けられた。

その一瞬前に、倒れた男の口から何か言葉が発せられたようだが、催涙弾の発射音に書き消されて、何を言ったのかは分からなかつた。

カメラは、再び郷戸がトラックの屋根に飛び乗るところをとらえ、そして、倒れた男のほうへ向けられた。ビデオカメラは男の顔をアップで映しだした。

「アッ！！ 神代！？」 多良は叫んだ。

「神代だ！！」

「え！？」 キャシーは、多良の大きな声にびっくりして振り返り、多良を見た。

「神代だ！！」 多良は再び叫ぶと、テレビに向かつて足を進めた。

「多良さん、この人知っている人ですか？」 キャシーは、多良の背中に向かつて声をかけた。

「間違いない。この額の傷はあいつのものだ」 多良は思い出した。あの時も暴力団の投げた石で額を割つて血を流したことを。修道館大学の誰もが神代の額の傷を尊敬の眼差しで見つめたものだ。彼はいつも学生運動の最前線にいた。そして、デモに参加するたびに額に傷をつけて帰ってきた。

間違いない。修道館大学新聞部部長だった神代だ。

「大学時代の友人です」 多良は画面を食い入るように見つめながら答えた。そして、振り返つて、猛然と出口へ向かつた。

「どこへー？」 キャシーは大声で多良の背中に向かつて声をかけた。

「彼を助けなきやー！」 多良は振り返りもせずにドアのノブに手をかけた。

ジョンが、大声で、

「ミスター・タラー！！ カレハ、ココニイマスー！」 と、多良の背中に向けて叫んだ。

## 黒石楠花（くろいりはな）

「なんだつて！？」多良は、ドアノブを握ったまま、振り返った。

「多良さん、彼はここにいるんです」キャシーも、多良の方へ、3歩、歩み寄り、嬉しそうに叫んだ。

「え、え？」多良は、やや震えながらも強い口調で言いながら、ドカドカと登山靴を鳴らしながらキャシーのこもとこもへ戻つて來た。

キャシーは、多良の左腕に手を当てながら、

「2階の部屋です。多良さんがシャワーを浴びている間に、テレビクルーが怪我をしている彼を連れ帰つて、彼は今、部屋で横になつています」と言い、そして、

「さつき、薬を塗つて、安定剤を飲んでもらいましたから、今は眠つていてると思つます」と続けた。

「そりですか・・・良かつた・・・」多良は、全身の筋肉の緊張が一瞬にして解きほどかれ、肩の力が床にぱらぱらと落ちていく感触を味わつた。再び、

「よかつた」と、ソファーに座り込んだ。

キャシーもジョンも、他のクルー達も嬉しそうにその姿を眺めている。

ビクシンが外から帰つてきた。両手にはチャ（ミルク紅茶）のコップホルダーを持ち、

「さあ、ティータイムだよ」とそのコップホルダーを掲げた。オーストラリアのテレビクルー達は、それぞれ、

「サンキュー」と言しながら、ビクシンに近づき、チアのコップ

を受け取った。

「どうしたんだね。多良さん。疲れているようだね」と、多良の前のテーブルにチヤのコップを置いた。

「いやー、疲れたよ。ははは」と、ビクシンとキャシーの顔を見て、多良は嬉しそうに笑った。

多良はビクシンに向かって、

「それより、こんなにこりにこりにいいのか?店の方は?」と、聞いた。

ビクシンは、

「今見てきたところだよ。もう火は消えるよ。雑貨屋の悪徳オーナーも頭を抱えていたよ」と、やや疲れた表情を見せた。しかし、気を取り直して、

「火が移らなかつたのは、ラッキーだつたよ。後片付けは、騒ぎが収まつてからにするよ」と、多良の隣に座つた。

「そうか。手伝つよ」多良は、ビクシンの肩に手を回した。

ビクシンは、

「ありがとう、多良さん。でも大丈夫だよ」と、多良の膝を「ポン」と、一回叩いた。

多良は、田の前に置かれたチアのコップの縁を、右手の親指と人差し指で挟んで口元まで持つていき、「フーッ」とため息と共に息を吹きかけた。

そして、

「会えるかな?」と、キャシーに尋ねた。

キャシーは、フリースの左袖をめくり、時計を見た。

「もう少し眠らせてあげてください」と、優しく首を振つた。

「分かりました。まあ、とにかく無事でよかつた」多良はそう言うと、チアを一口飲んで、コップをテーブルに置いた。そして、両手を頭の後に組んで、目を閉じた。口いっぱいに残つたチアの甘さ

を満喫した。

ビクシンが、

「多良さん」と、再び多良の膝に手を置き言った。

「ん？」目を開けて、体を起こしチヤのコップを持った。

ビクシンが、声を落として、

「表にカロ・ラリグラス（黒いシャクナゲ）の男達が来てるよ」と、チヤを持ったコップを出入口のほうに向けた。

「カロ・ラリグラスが？」多良は、頭の後ろで組んでいた手を解いて、

「誰が田当てなんじゃ？」と小むかへ言つた。

ビクシンは、

「ああ、ここのてる誰かだね」と、田だけでホテルのロビーを見廻した。

多良は、

「一番候補は、俺つてとこかな」と言つて、再びチヤを一口飲み、「一番は、ビクシン、お前だな」と、ビクシンをいたずらっぽく見た。

ビクシンは、慌てた様子で、

「やめてくれよ。私は何も悪いことしていなによ」と、左手を大きく振つた。

それを見た多良は、笑いながら、

「俺だつて悪いことはしてないよ。しかし、まあ、ブラックリストに載せられてるつてのは、ありがたいことじやが」と言つた。

キヤシーが、

「カロ・ラリグラスって何ですか？」と、多良とビクシンを交互に見た。

多良は、

「秘密警察ですよ」と、チラシ、とキャシーを見て囁つた。

キャシーは、

「ヒミツケイサツ?」と、多良の言葉を繰り返した。

「そり。どこの国にある組織ですよ」多良はそつと、背もたれに背中をあずけた。そして、

「市民の中に紛れ込んで情報を収集して、政府の方針に反対する組織や人間を見張つたり、捕らえたり、時には葬つたり……ね」と、天井を見上げながらゆづくりと言つた。

ビクシンは、多良の

「公式にはそんな組織は存在しないことになりますが、皆、知つてゐることです」と囁つのに続けて、

「マオイストの中にも紛れ込んでるよ」と、小さな声で囁つた。

ビクシンが「マオイスト」という言葉を使う時は、自然と声が小さくなるようだ。

多良は、

「当面の敵はマオイストだからな」と、紛れ込むのは当然だ、と  
いうよくな口調で囁つた。

キャシーは、首を傾げながら、

「そんな人達がどうしてこのホテルを?」と、再び、多良とビクシンの顔を交互に見た。

「ああ……」多良は、頭の後に両手を回し、「どうしてだらう」と頭の中で呟いた。

「もし……」多良は目を閉じて考えた。「俺を見張つているんだつたら、まずいな……、中国から見張られるのなら分かるが、この国では公然の秘密だったはずだが……、方針を変えたか……、それとも、マオイストとの交渉の札の一枚にするつもりか……」

キャシーが、

「多良さん、何を考えているのですか？」

「え？いや」そう言ひつゝ、バツ、と、立ち上がり、かいつら手をやり、かたちを整えた。

「ちよつと出かけてくる」ビクシンそつと、さつと、ドカドカ、と、早足で出入り口に向かつた。

「多良さん、どこへ行くのですか？」キャシーが多良の背中に声をかけると、

多良は、振り返らずに、

「すぐ帰ります」と、ドアを開けて出て行つた。

多良は、「俺が目的なら、奴らは俺について来る筈だ」と、考えた。

多良は、「バーン」とドアを勢いよく開き、一度、ドアの前で立ち止まつて、空を見上げ、右へ向かつて歩き始めた。

男は三人いた。さりげなく車座くるまざになつてしまがみ込んでいる姿は、

その辺にいる暇な男達の姿にしか見えない。

催涙ガスとゴムの焼ける臭いが、まだ、辺りに立ち込め、道にはブロツクのかけらや、石が散乱している。

通りに面した土産物屋や雑貨店のオーナーがぼちぼち片付けに帰つてきているようだ。通路が交差するところまで来て右へ曲がる時、チラツ、と後を確認した。男がひとり、ポケットに手を突つ込んで、トピー帽をかぶつた頭を下げ、顔が見えないよつとして付いてくるのが見えた。さつきの三人の中のひとりだ。

「ひとりだけ？」多良は、不審に思つた。

「とりあえず、付いて来たゆつ感じじやのぉ」

多良は、そのままゆつくりと歩き、ちよつど、シャツターを上げて、いた雑貨屋でトイレットペーパーを一巻買い、それを持ってホテルへ引き返した。

トピー帽の男は、顔を伏せたまま、多良とすれ違ひ王宮方向へ歩いて行つた。

「俺が目的でないとすると、誰なんじや？」

ホテルの前にしゃがみこんでいたふたりの男は、多良が意外に早く帰つてきたので、一瞬、驚いた様子を見せたが、そのまましゃがみこんだまま何やらボソボソ会話しているふりをしてくる。

「おや、早かつたね」ビクシンは、多良が入つて来ると椅子から立ち上がつた。

「で、どうだつたね？」ビクシンは、いくぶん声を落として聞いた。

「うーん。分からんね。一人は付いて來たけどね。俺がメインじゃないな」と、多良は皆の集まつているホールの中央に向かつた。ビクシンは、不安げな表情を浮かべて、「じゃあ、誰を?」と、自分自身に問いかえるように呟いた。多良も、

「わー・・・」と、自分に返事をした。

「トシ、と音がして階段の踊り場に神代が姿を現した。

「神代!!」多良は、階段を駆け上がつた。

神代陽平は、カーキ色のベストを着て、壁に右手をつき、左手で頭の包帯に手をやつて、佇んでいた。

「ん!?」神代は、顔を上げ、微笑む多良の顔を見た。

多良は、

「フシジヤ……<sup>たら</sup>多良じやあ……」と、神代の両肩に手を置いた。

神代も、

「おー、多良ア……」と、多良の両肩を掴んだ。そして、「何してんだ、お前、こんなところで」と、不思議そうな顔をして多良の顔をまじまじと見つめた。

「お前こそ何しとるんじや……？」多良は、神代の肩に置いた手を軽く揺すつた。

「いやあ、暴動のビデオを撮つてたら、また、石が二三と二へと、額に手をやつた。

多良は、心配そうな表情で、包帯を見た。

「もう、大丈夫か？」

神代は、

「いや、まだ、ちょっとズキズキする」と、再び、左手を包帯の上に乗せた。

キャシーが、

「まだ、静かにしていてください」と言いながら、階段を上がつてきた。

多良は、

「あ、神代、こちらはキャシーさん。手当をしてくれた人だ」と、キャシーを紹介した。

神代は、

「あ、ありがとう」やこます。あなたが私を?」と、尋ねた。

キャシーは、階段下を見て、

「いえ、あそこから連れ帰ったのは」と、ホールでビデオ機材をケースに収めている男達のほうを向いた。

その中のひとりが、

「ハロー、マイト。アーノーOK?」と、明るく手を上げた。

「たまたま、現場に居合わせたオーストラリアのテレビクルーの

皆さんがお前を連れ帰ってくれたんじゃ」「

多良は、神代の体を支えながら、階段を下りた。

「しかし、久し振りじゃのぉ」多良はすっかり学生時代の言葉遣いになつていた。

「おお、何年ぶりかなあ」神代は、そう言いながら、オーストラリアのテレビ局のクルー達が集まつてているテーブルのところに行き、

「サンキュー・ベリーマッチ。アイ・アブリシエイトウ・ユー。ユー・セイブドウ・マイライフ。ありがとうございました。お陰さまで命拾いしました」と、頭を下げた。

ジョンが、

「オナジ、ジャーナリスト、オタガイサマデス」と、男達に代わつて言った。男達も、神代の元気な姿を見て、うれしそうに笑つてゐる。

キャシーは、

「塗り薬を調合してきます」と、ふたりに言つて、階段を上がつていつた。

神代は、立ち上がつて、

「ありがとうございます。あの、あなたは?」と、問いかけた。

キャシーは、階段の途中で振り返り、

「後からお話します。まず、多良さんとお話して貰ひた」と、にこりと笑つてウインクした。

神代は、

「ありがとうございます」と、深くお辞儀をした。

キャシーは、

「じゃあ、後で、薬を替えましょうね」と、少し、右足を引きずりながら階段を上がつていつた。

神代は、振り返つて、

「あの人は？」と、多良に尋ねた。

「キャシー長谷川さんといって、医療ボランティアとして、これから田舎の村へ行くそうだ」多良は、神代が近くの椅子に腰掛ける時、神代の腕に手を添えた。

「村？どこの？」

「さー、それは聞いてないが」多良はそう言ひと、神代が、テープルの上に広げられた地図に目をやるのを見て、

「そして、この人達は、オーストラリアのテレビ局の人達で、雪男の番組制作のためにネバールに来とられるんじや」と言つた。

神代は、

「へー、雪男。面白そうだな」と、地図を覗き込んだ。

「それより、卒業以来じやが、相変わらずじやのぉ」多良は神代の肩に手を回した。

そして、

「一体こんなところで何をしとるんじや？」と、神代に聞いた。

「俺か？俺は、ある事件を追つかけてるんだ」神代は、声を潜めた。

「事件？」多良は、すぐに、2001年に王宮内で起きた血なまぐさい事件を思い出した。

「ああ、例の王宮の事件や」

この時多良は、カロ・ラリグラスが見張つている人物は神代だと確信した。

神代は、

「あの事件の真相が知りたいんだ」と、昔のままの眼をして多良を見つめた。

多良は、眼を落として、

「知つてどうするつもつじゅー？」と、溜息と共に言葉を吐き出

した。

「場合によっては独裁体制をひっくり返せるだろ」神代は、そう言つと、口を一文字に結んだ。

多良は、

「それは、マオイストに手を貸すようなもんじゃ」と、神代の顔を見た。

「そうかも知れない。しかし、それもひとつ的过程だ」多良は断定的に言つた。

「そうかのあ」と、多良が言つたのが聞こえなかつたかのよつて、神代は続けた。

「どうやら、あの事件を目撃した人物がいるらしい。その人物にインタビューをしたいんだ」

「あいつに?」多良は眉を動かして再び神代の顔を見た。

神代は、

「ん? 知つているのか?」と、多良の膝に手を置いた。

「ああ」多良は、躊躇しながら答えた。

神代は、それを聞いて、パツ、と顔を赤らめた。

「紹介してくれ。彼女を」

「彼女? 誰のことじゃ?」多良は、首をひねつて神代を見た。

神代も、

「誰つて、・・・王宮内で働いていた召使の女のこと・・・じゃないのか?」と、途切れ途切れに言つた。

多良は、顔の前で大きく手を振り、

「違う、違う」と言つた。

「じゃあ、誰なんだ?」神代は空振りしたバッターが肩を落とすように右肘を右膝の上に落とした。

「神代、お前、さつき会つたじゃないか」多良は、神代は気が付かなかつたのかと思つた。

「会つた? 僕が?」神代には、多良が誰のことを言つてゐるのか

分からなかつた。

「誰のことを言つてゐるんだ」

「郷戸の」とじや」

「「ウード・・・」神代は口の中で呟いた。そして、

「アッ、思い出した。そうか、あいつだつたのか。あいつ、さつき俺の顔にタオルを投げつけて、お前か、つて言つたんだ」と、右膝を叩いた。

「郷戸はお前にこと覚えてたのか」多良は驚いた。

神代は、右の掌を広げて、親指、人差し指、中指、と順番に折つた。

「3回目だぜ。あいつに会つたのは、1回目は新宿の時。2回目は、あの修道館での抗争の時。そして、今日だ」そつと右手を握つた。

神代は多良の顔を見た。

「あいつ、なんだつてこんなとこひいてるんだ?」

多良は右手で髪の毛をなで、

「ああ、ワシにもわからんが」と言つて、その手を神代の顔の前にやり、親指を立て、

「今じゃ盜賊の親玉らしき」と、言つた。

神代は、眉間にシワを寄せながら、

「しかし、郷戸がなぜあの時の田撃者だと・・・と、首をひねつた。

それを見た多良は、

「郷戸は、国王の親衛隊の武術教官だつたらしいんじや」と、ビクシンからの情報を伝えた。

「何でまた武術教官なんかに」神代は首をひねつた。

「そこまではワシにも分からん。どこから流れてきたのか

それは、多良も知りたかつた。

「あの剣の天才といわれ、三島に誘われて楯の会に入つたあの男がな」

神代は眼を閉じて腕組みをした。

「東部方面総監部突入に参加できなかつたことが堪え、暴力団の用心棒に身を落とし……」そのことは修道館での抗争後、学生たちの間で、しばらくの間話題になつていた。そして、感慨深そうな口調で、

「そしてまた再び、今日、強盗団のボスとして俺の前に現れたつてことか」と、誰に言つてもなく呟いた。

「噂では、政府は郷戸には手出しあないらしい。毛沢東派は逆に抱き込もうとしているらしいが」多良がそう言つと、神代は、

「おもしろいな」と、閉じていた眼を開いた。

「国王派にとつては邪魔な男つてことだらう?」神代は椅子の背に体を預けたまま多良を見た。

多良も、

「ああ、そして、同時に反国王派にとつての隠弾かくじだまもある」と、

同じように体を背もたれに預けた。

神代は、

「なるほど。ここつは、召使の女より郷戸いりどに接触した方がおもしろいな」やう言つと、両手を頭の後で組んだ。

## 老人

神代がそう言つのを聞くと、多良は、  
「神代、お前、他人の身を案じるより自分のことを考える」と、  
体を起こして言つた。

神代は、

「どういうことだ?」と、腕を下ろして多良の顔を見た。  
「表に力口・ラリグラスの男達が張つとる。あいつらはお前をみ  
見張つとるんじや」多良は顔を神代に近づけて言つた。

「俺を?」

「そうじや。こそぞ聞き廻つとるんで田をつけられたんじや」と、  
神代の行動を見ていたかのように言つと、  
「危ないぞ」と、付け加えた。それを聞いた神代は、いくぶん顔  
を強張らせ、

「ほんとかよ」と額の包帯に手を当てた。

多良は真剣な顔をして神代を見た。

「慎重に行動せえよ

神代も、顔を引き締めた。

「分かつた。ありがとう

「ところで多良。お前はこんなところで何してるんだ?」

「見りやわかるじやろ」多良は、右足を上げて登山靴を見せた。

「山登りじや」そう言つと、左足も上げて、両足首から先をクル  
クルと回して履いている傷だらけの登山靴を見せた。

それを見た神代は、

「相変わらずだな、お前も。ハハハツ」と笑い声を上げた。

「ところで、誰かに会つか?」多良は学生時代の友人達の消息を  
聞いた。

「ああ、いつだつたかな、もうずいぶん前だ。咲姫ちゃんに会つたよ」神代は、広島の平和公園で咲姫に会つたことを思い出した。

「なんでも、学生時代に下宿していた叔父さんの葬儀があつたとかで広島に行つてたんだ」神代は、傷がまだ痛むのか、再び右手を包帯の巻かれた額に当てた。

「へー。で、お前はそこで何を？」

多良の問いかけに、

「俺は、平和公園の慰靈碑にカストロが献花するつて言つんで、待つてたんだ」と、多良を見た。そして、微笑を浮かべて、

「ゲバラの写真を持つてな」と続けた。

多良は不思議そうな顔をした。

「ゲバラの写真を持つて？」

「そうさ。俺は、カストロはゲバラと一緒に献花したいだうと思つてな」

多良は、興味深そく、

「へー、で？」と、話の続きを促した。

神代は愉快そうに、

「ひつ捕まつちまつた」と、笑つた。

「ははは。お前らしいのよ」多良も、神代の笑い声にあわせて声を出して笑つた。

「しかし、カストロは、実際、ゲバラと一緒に献花したかったんじゃないかな。俺がゲバラの写真を掲げて声をかけたら、こっちに向かつて来ようとしたからな」

「ほー」

神代は、背中を伸ばして、

「しかし、カストロは元気だな。こつ、背筋がピンと伸びて。あれなら、もう十年くらいはキュー・バは安泰だな」と言つた。

「資本家どもと共に私は地獄に落ち、マルクスやエンゲルス、レーニンに相まみえるだろう。地獄の熱さなど、実現することのない

理想を持ち続けた苦痛に較べれば何でもない」神代は、眼を閉じたまま一気に言った。

「何じゃ、そりや?」多良は熱があるのか、神代の赤い顔を見た。「いや、熱のせいではないかもしない。この男は、俺たちがどこに置いてきたものを、今も持っているのかもしない」多良はそう思つた。

「カストロの言葉だ。詩人だよな彼は。革命家は詩人であるべきだと俺は思うよ。詩心のない革命家は単なる独裁者だよな」神代はそう言つと多良の目を見つめた。その眼は充血して赤くなつっていた。

「何のお話ですか」キャシーが階段を下りてきた。

「いやあ、昔話ですよ」神代はそう言つて一ノ口と笑つた。

キャシーは、テーブルの上に樹脂製のコップと救急セットを置いた。コップの中には、緑色のペースト状のものが入つている。

「ああ、薬を塗り替えましょう」キャシーはそう言つと、神代の包帯をほどき始めた。

キャシーは、神代の傷口に薬を塗りながら、

「私は、来週から、彼らとナムチエに行きます」と、多良に話しかけた。

多良は、

「彼らと?」と、地図を前に打ち合わせをしているオーストラリアのテレビクルー達のほうを見た。

「はい。10年前にイエティを見た現場を案内して欲しいつて頼まれたのです」と、多良を見てニコリと微笑んだ。

多良は、<sup>かつて</sup>髪に手をやって、眼を伏せた。

そして、キャシーは、

「ちょうど私も、ナムチエの近くの村に行く予定でしたから」と

新しい包帯を巻きながら言った。

多良は、かついの頭を搔きながら、

「実は、・・・私もそっち方面に行きます」と、言った。

「オウ、いつですか?」キャシーは包帯を巻く手を止めて多良を見た。

多良は、

「えーと」と、一呼吸置いて、

「来週はパタンで用事があるので、それを片付けてから向かいます」と言った。

「じゃあ、ナムチで会えますね」やう言つキャシーの声は本当に嬉しそうだつた。

多良は、

「その村にはいつ頃まで?」と、キャシーが鮮やかな手つきで包帯を巻く手を見ながら聞いた。

キャシーは、

「クリスマスには一度、いこいに帰ります。一ヶ月ほどカトマンズの病院でネパール人医師の研修をする予定です。それに、来年には、友達が日本からやってくるのです」と、嬉しそうに言った。

かつた。

そのキャシーの友人が修道館大学時代の友人であった木野花咲姫と神田龍一であることなど、多良も神代も、この時、思いもよらなかつた。

神代は、ふたりの会話を聞きながら、眼を閉じて、「どうしたら、いのはなすべひら

郷戸に会えるだろうか」と考えていた。

「ああ、これで大丈夫です」キャシーは神代の肩に手を置いて優しく言った。

神代は、両手を両膝の上で揃え、

「ありがと「ザ」いました」と、頭を下げた。

キャシーは、

「包帯はしばらく取らないでください。それと、しばらへは激しい運動は控えてください」と念を押すように言つた。

「分かりました。ありがと「ザ」いました」神代はそのままいつなずいた。

そして、キャシーは、多良は、

「多良さん、ゴッズはどうに住んでいられるのでしょうか?」と、言つながら、テーブルを挟んだ多良達の前の椅子に座つた。

「わー、分かりませんね」多良は首をひねつた。そして、カウンターの中で受付のネパール人と会話しているビクシンを手招きして呼んだ。

「なんだね多良さん」ビクシンは多良の左横に座つた。

「わつきの郷戸、いや、ゴッズはどうに住んでいるんだ?」

ビクシンは、

「私も知らないよ。ただ、・・・」と、一呼吸置いた。

「ただ?」多良は先を促した。

「今田みたいな日に現れるから、カトマンズ盆地の中のどこかにいるのは確かだね」

多良は、

「あんな田立つ奴の居場所が分からないうつてのも妙だな」と腕を組んだ。

それを聞いたビクシンは、笑みを浮かべながら、

「ふふ、誰もしゃべつたりしないよ」と言つた。

「なぜ?」神代は、身を乗り出して多良の左に座つてゐるビクシンに尋ねた。

「「ザ」だからね」ビクシンの言つ方は自慢げだった。

「やでと」多良はやつとひと、立ち上がり、

「ワシはちよつと片付けなきやいけない用があるんじや」 そう言つてテーブルの横に置いていたザックを手に取つた。

神代も立ち上がり、

「そうか」と、残念そうな表情を浮かべた。

多良は、

「お前の宿はどこなんじや?」と、神代に尋ねた。

「カトマンズゲストハウスだが、今日から引っ越し越すよ」神代は上の階を指差した。

「じゃあ、当分?」

「ああ、そのつもりだ」神代はそう答えると、

「お前は?」と聞いた。

「ワシはバタンの・・・知り合いのところである。連絡は取れんから、こっちから連絡を入れる」多良はそう言つて右手を差し出し、

「じゃあ、またな」と、学生時代と同じように手と、神代はその手を握り、

「じゃあ、気をつけて」と応えた。

ふたりの会話を聞いて、キャシーとジョンが近づいてきた。

キャシーは、

「ありがとうございました。ナムチョで会えるどこですね」と、名残惜しそうな顔をした。

多良も、

「そうですね」と言いながら、ふたりと握手を交わした。

キャシーは、小さな声で、

「あの件は誰にも言いませんから」と、真面目な顔で言つと、サ

「ラツ、と、自分の髪を指で梳いた。

多良は、苦笑いしながら、

「お願いします」と、小さな声で言つた。

キャシーと神代は、多良と一緒にドアに向かつた。彼らの後から、ジョンとビクシンも続いた。

多良がドアを開くと、ちょうど外から誰かが、ドアハンドルに手をかけようとしているところだった。

そこには、白髪の老人が杖を手に立つて立っていた。老人は、80を過ぎていてるだろうか。

「ワオウ、おじ様！！」キャシーは大きな声を出し、杖を持つた老人の手に自分の両手を重ねた。

「おお、キャシー。お出かけかね？」年のわりには、大きな、しつかりとした口調であつた。

多良は、その深い年輪を刻んだ顔に惹き付けられた。

キャシーは、

「いえ、こちらの方のお見送りです」 そう多良を見て言つた。

白髪の老人は、

「日本の方ですか？」と、多良の顔を見て聞いた。

多良は、

「はい」短く答えた。

キャシーが、

「こちらは多良さんです。ジテンから薬草を預かつて、届けて下さったのです」と言うのを聞くと、老人は、嬉しそうに、

「おお、ジテンから。それはそれは、ありがとうございました」と、頭を下げた。

キャシーが、

「多良さん、じゅりゅうさん……と、紹介しようとする前に、老人は、自ら、

「江下です。江下寛」と申します」と名乗った。

「私の父の友人です」キャシーは付け加えた。

「お会いしてすぐに失礼ですが、私はこれから行くところがありますので、これで失礼させていただきます」多良は、江下に軽く頭を下げた。

江下も、持っている杖の頭に両手を被せて、

「ああ、これはお引止めしました。ではお気をつけて」と、頭を下げた。

多良は、振り返って、神代に、

「じゃあ、ここで」と手を上げた。

神代も、

「気をつけてな」と手を上げた。

キャシーは、

「シー・ゴー多良さん」と、再び手を差し出し握手を求めた。

ジョンも、オーストラリア訛りの英語で、

「セ、ヤ、マイト(SEE YOU MATE)」と言しながら

手を差し出した。

ビクシンは、名残惜しそうに、

「ナマステ、多良さん。また、食べに来てよ」と言つた。

多良は、ザックを背中で一回揺すつて整え、まだ、ゴムの焼ける匂いの漂う道を早足で歩き始めた。「ザック、ザック」と、いつもより荒い砂利を踏む音が登山靴の下から聞こえてくる。

行く先を見上げると、赤レンガの建物と建物の間から見える空には黒煙が漂つっていた。

この年（2005年）の2月、ギャネンドラ国王は、王室ネパール軍（国軍）、ネパール警察、武装警察隊などの武力機構を掌握し、全国に「国家非常事態宣言」を発令した。

インターネットを含む通信回線は切断され、同時に主要政党のリーダー達は国軍の監視下におかれた。発言、集会、移動の自由は停止され、国王はネパール全土を監獄にした。

多良と神代、そしてキャシーがカトマンズの安宿で出会ったこの頃には、各政党のリーダーとマオイストのリーダー、プラチャンダはインドのニューデリーで秘密会合を開いた。そして、その会合で、彼らは、国王から政権奪取することで合意した。

国王の強権支配は、国王の田論見に反して、議会政党と共产党毛沢東派の接近を促し、王制崩壊へと進むきっかけとなつたのだ。

今日の、国王側と一般民衆を含むマオイストとそのシンパ（同調者）の大規模な衝突は久しぶりのものだつた。多良には政治活動に関わりあう気持ちは無かつたが、時代の大きなうねりは山津波のようにすぐそこまで迫つていた。

いつもなら多くのネパール人でこつた返すアサンの市場も今日は閑散としている。商店の立ち並ぶ通りでは、店主達が店の状況を確認に来て、淡々と開店の準備をしている。庶民の生活は太陽の動きと同じように止まることはない。

その通りを抜けて旧王宮広場へ出た。その一角にはガルーダ神の石像がある。ガルーダは顔はカラスで体は人間。その背中には大きな翼がある。ヒンズーの3大神様のひとつ、ヴィシュヌ神の乗り物だ。多良はその巨大な石像を見るとキキヤを思い出す。

「そういえばキキヤの帰りがおそいな」多良は目の端でガルーダの石造を見ながら狭い商店街に入った。道の両側にギッシリと詰まつた建物に挟まれた上空の黒煙は風になびいている。鼻をつくゴムの焼けた臭いは先ほどよりも弱くなつていたが、やや下り坂の道を30分も歩くと今度はドブ川の臭いが多良の鼻をついてきた。バグマティ川だ。

ヒンズー教徒の聖なる河、ガンジス河の支流だ。そのバグマティ川は、濁よどみながら、1000年先にも大地に還らぬ人間社会の残滓せんしを浮かべながら流れている。上空に浮かぶ黒煙もまた、バグマティ川の影であるかのようにゆっくりと流れている。

バグマティ川に架かる橋を渡りきつた時、後方からトラックのエンジン音と共にいつもの合図と同じリズムでクラクションがなつた。多良が振り向くと、トラックの荷台の四方を囲つた蔽おおいから頭ひとつ覗のぞかした男が多良を見て微笑ほほえんだ。

「キキヤー！」

トラックは「ギッ、ギーッ」という大きな音と白い砂塵を舞い上げて多良のそばで停まつた。同時に、トラックの男は荷台を囲んだ蔽いに上半身を乗せて多良に向かつて手を差し伸べた。多良がその手を掴むとトラックは発車し、同時に多良の体も舞い上がり覆いの内側に引き込まれ、荷台の中で白いシャツを着た巨大な男が多良

を抱きとめた。

「おーっと。キキヤ、久し振りじやのう。元氣か？」

そう言つと大男の体を点検するかのように上から下まで見た。

「ナマスカール。おとうさん。ただいま帰りました」  
大男は多良の前に<sup>ひざまます</sup>跪き合掌して頭を下げた。

「そうか。そうか。元氣でよかつた。遅いので心配しどつたんじ  
や」

多良は大男の盛り上がつた左肩に手を置いて2、3度、軽く叩いた。

「申し訳ありません、おとうさん」

大男は優しい表情を浮かべて多良の顔を見上げた。

「お父さんは止め、キキヤ。多良でいいといつも言つたんじや  
るつが」

「そうでした。おとう・・・、多良さん」

キキヤと呼ばれたその大男は、につこりと笑いながら、大きな右手を、そり上げた頭に置いた。

「で、どうだつた？大変じやつたるつ？」

多良も「どつこいしょ」と声に出し荷台に座り込み<sup>あぐら</sup>胡坐をかき、  
キキヤの顔を見た。

「はい、少し苦労しました」

キキヤも多良の前で胡坐をかいだ。

多良は、腕組みをして、頷きながら

「じゃろうのう。その連絡は来てはいたが」と、キキヤの苦労の大ささが分かるだけに、自分にも言い聞かせるようにつぶやいた。

キキヤは、

「畠島ではチャイナの連中とホーモツカン（宝物館）で鉢合わせしました」と、笑みを浮かべながら言った。

多良は驚いた表情を浮かべ、

「おお、そうじやつたか。またに危機一髪じやのう」と、さりげなく頷き、すぐに、

「宝物館からは邪魔も入らずすんなりと手に入れることができたのか？」と続けた。

「はい。ポリスの邪魔はありましたが」キキヤは落ち着いた声色で答えた。

多良は眉を寄せながら、

「まさか、その警官を……」と、やけにまで言葉を切った。

キキヤは、

「大丈夫です。誰も傷つけてはいません」と、多良の心配を見越したように優しく言った。そして、その時のことを思い出し、「ポリスともうひとり武術家がいました」と付け加えた。

「武術家？」多良は小首をかしげた。

「ちゅうじ、おとうさん……多良さんくらいの年の人でしたが、あいつは、若い時は強かつたと思います」キキヤは顔を上げ、上空の青い空のむこうを見るような目をした。

「へへえ」

多良には、その男が、修道館大学で暴力団と闘つた神田<sup>かみた</sup>だとは思いもしなかった。

キキヤはすぐに顔を多良の方に向け、

「でも、台風にまぎれて逃げることが出来ました」と言った。

多良は、

「そうか、そうか」と、この大男、キキヤがこの仕事にふさわし

い男であつたことを、改めて思った。

「それで、富島からは？」

多良は予定通りに事態が進んだのか気になつた。

キキヤは、順を追つて説明を始めた。

「予定通りエタジマ（江田島）沖で柏木さん<sup>かじまき</sup>が船を出してくれていました」

多良はそれを聞くと安心したように、

「そうか。彼女の船は速いからな。ありがたいことじや。それに彼女は村上水軍の末裔だし、彼女のネットワークにのれば海の道はノンストップだからな」と、ここでも彼女に全ての状況を話した自分の判断が正しかつたと思つた。

キキヤはさらり、

「で、その後も、キキイッパツ（危機一髪）でマウント・フジから2本目を手に入れることができました。その時も彼女が私を駿河湾で拾つてくれました」と続けた。

多良は、

「そうか。彼女にも感謝せんといけんな」

そう言つと、

「しかし、鉄の棒の一本は富士山の頂上にあることは分かつておつたが、台風で姿を現すとはほのう・・・これも神様のお蔭じやろうの「づ」<sup>（づ）</sup>と感慨深げに続けた。

「そう思います。マウント・フジの頂上でもキキイッパツ（危機一髪）でした。もつ少し遅ければ、チャイナの連中に先を越されるところでした」

キキヤはそう言つながら、腰に巻いた布を解き始めた。

多良は、キキヤの手元を見ながら、

「ははは、危機一髪という言葉を覚えたの「づ」と笑つた。

キキヤは、

「はい」と返事しながら、大きな両手の上の布に乗せたままの2本の鉄の棒を多良の方へ差し出した。

多良は、

「うーん。これが」と言いながら、両手でそれぞれの鉄の棒を持ち、目の前で向きを変えながら繁々と眺めた。

そして、

「これが多くの人間の力を集結させる力を持つていいところのは本当だらうか?」と心の中で思い、

「分からんな」と、口に出した。

キキヤは、

「え?」と不思議そうな顔をしたが、多良はそれには答えず、「様々な民族の力をひとつにまとめるには共通の何かが必要なのは確かだが・・・しかし逆に、民族の集結が都合の悪い奴等がいる」とも事実だしな」と再び心の中で思つた。

そして、

「キキヤ。これはお前が大事に持つておけよ」と、その2本の鉄の棒をキキヤの両手の上に広げられた布の上に戻した。

キキヤは、その2本の鉄の棒を布で大事そうにくるみながら、

「はい。命に代えて守ります」と、その多良の言葉にはつきりとした口調で応えた。

多良は、話題を変えるように、

「しかし、このトラックへはどうして?」とやや大きい声で尋ねた。

「ちょうど国境を抜けたところで彼に」と、キキヤはそう言つと運転席のほうを見た。

多良もキキヤの視線の先の薄汚れたガラスの向こうの運転手に視線をやつた。

そして、再びキキヤの方へ向き直り、

「やうか。それはちゅうひ良かったの！」といひて笑つた。

キキヤも、

「はー。」Jのトライアも予定より早く国境を抜けることができた  
よつです」と多良の笑顔に応えた。

「そりぢやらひ。ワシも、もつ一週間はかかると思ひつた。ま、  
これも危機一髪じやつたのね」  
多良はそう言つとキキヤの大きなひざに手を置いて「ははは」と  
声に出して笑つた。

トライアは、ギヤをガッシンと鳴らしてシフトダウンし、ブオン  
！と一塊の黒煙を吐き出して、唸りながらパタンの街に入つてい  
つた。

## メール

12月の半ばを過ぎた頃、神田は木野花咲姫から再びメールを受け取った。

富島観光推進協会 神田様

大晦日や初詣の準備は順調に進んでいますか？ 富島は、わたしにお仕えしている八頭神社様と違つて、多くの観光客をお迎えになるのでいろいろとご苦労もありだと思います。でも、秋の台風以来の疲れもたまっていると思いますので、あまり無理はされませんように。

「確かに最近ちょっと疲れ気味かな」神田は頭をグリ、グリと左右に傾けた。

富島の大晦日には鎮火祭という大きなイベントがあるようですが、富士吉田にも「吉田の火祭り」と呼ばれる鎮火祭があります。八頭神社様近くの北口本宮富士浅間神社様の秋祭りです。お祭りでは街中が炎で被い尽されるほど松明が焚かれます。

ところで、ネパールのキヤシーからメールがきました。驚かないで下さい。キヤシーは、郷戸さんと会ったようです。

「ハツ！郷戸！」神田は「郷戸」という文字が目に飛び込んで瞬間、顔をモニターに近づけた。

キヤシーは、若い頃、バンコクでトラブルに巻き込まれ、その時、郷戸さんに助けられたことがあるのだそうです。郷戸さんは「ゴウ

「ド」と名乗ったようですが、その頃のキャシーは日本語がまだ十分理解出来ず、「ゴッド」と聞き間違え、自らを「神」と名乗る不遜な日本人として強く印象に残ったようです。そして、ネパールでも再び郷戸さんに救われたというのです。

「救われた？　どういうことだらう？　何故、郷戸がネパールに？」

これで分かりました。キャシーが剣道や拳法、空手に関心を持つ理由が、郷戸や山口さんの影響です。

そして、まだあるのです。その時、キャシーと一緒にいた人が、日本人で、ミスター・タラという人だそうです。ミスター・タラ、どう思いますか？

「タラ？　タラ！　まさか修道館大学山岳部の？」

「ミスター・タラ」ってひょっとしてあの時の多良さんではないでしょうか。そんな気がします。

「多良さんは確かにヒマラヤに縁のある人だが・・・拳法部の山口さんもネパールにいた。どうして彼らがネパールで次々と・・・」  
神田は「出会うのだろう」という言葉を飲み込んだ。

この時、神田も咲姫れききも、新聞部部長だった神代じのじまでがネパールについて、キャシーや多良と知己になつてていることなど想像だにしなかつた。

わたしは来年にはネパールへ行くつもりです。行かなければならないと強く感じるのです。木野花きのはな咲姫さきとしてでなく、木野花きのはな咲姫さきとしてして。

神田君も「一緒に出来たら、と思います。山口さんもきっと喜ばれると思います。」

咲姫のこの言葉を聞くと、神田は右手でみぞおちあたりのシャツを掴んだ。「山口さん、ネパールのどこに眠っているのか・・・。それに、何故ネパールで？ 宝物館に保管されていた「鉄の棒」を、大男が盗み出して以来、俺の周囲には次々とおかしなことが起きる」

以前お話をしたように、熱田神宮様にお祀りされていた「鉄の棒」は明治天皇様の勅命を受けた、時の内閣総理大臣、山県有朋の蜜命により、エルトゥールル号の乗組員をオスマントルコへ送り返す途中、寄港地のインドからネパールへと持ち込まれました。

私は、残りの2本の鉄の棒は、神田君が出会った大男によって、すでにネパール国内に持ち込まれているものと思います。

でも、これまでの経緯から推測しても、中国は3本の鉄の棒が揃うことを見込んでいよいよです。

「確かに、彼らは日本にある鉄の棒を力ずくで奪おうとした。明らかに中国という国家が絡んでいるとしか思えない。どうして？」

富島には、観光客で賑わう表参道の1本内側に「町屋通り」と呼ばれる通りがある。土産物屋が建ち並ぶ「表参道」と違つて、「町屋通り」は、昔ながらの風情が残る旧家が並び、今は富島の下町散策コースとして人気がある。今でこそ、観光客の姿も見かけられるようになつたが、以前は、食料品店や衣料品店などが並ぶ富島島民の生活通りであった。

神田の家は、その通りの中ほどにある。通りに面した1階は、以前は父親の作業場になっていた。父親は宮島細工の職人であったが、数年前に亡くなり、今では作業場の半分は普段使わない日用品を保管する納戸になっている。隅のシートの下には父親の使っていた木を削る「ろくろ」と年季の入った木製の道具箱が3箱積み上げられている。その道具箱の中には何十種類ものカンナやノミが入っている。

父親は生真面目な性格で、1日の終りには必ずその日使った道具の刃を研いでいた。

神田は幼い頃、父親の仕事が「刃研ぎ」で終わることが分かるようになると、父親のそばに行き座り込んでその作業をじっと見ていた。

「この刃はの一、出雲の鋼じゃ。出雲の鉄は日本一じやけえの一」と、神田が父親の近くに座る度に自慢げに言っていたことを今日はふと思い出した。

作業場を通り抜けると奥にある台所に声をかけて一階に上がった。そして、書斎の机の上のパソコンのスイッチを入れ、そのまま窓に向かい、窓越しにライトアップされた朱の大鳥居を見、窓を10cmほど開けて冷たい風を部屋に入れた。ジャージの上下に着替え、綿入りの半纏を羽織るとパソコンの前のチェアに座った。

神田は事務所から転送したメールを開き、窓からの風で顔を冷やしながら、咲姫からのメールを読み返した。

「一体どういうことなんだろう?」神田の顔の火照りは大野灘の潮氣を含んだ冷たい風でも治まらなかつた。

「大男や中國、彼らは何の目的で鉄の棒を手に入れようとしている

るのだらう?」

咲姫のメールの最後はこう結んであった。

「神田君、このままで行くと、ネパールで大変なことが起きる気がします」

神田は、これまでの咲姫の予感は全て当たっていることを思った。顔の火照りは一気に引いた。

## 隠家（あじと）

カトマンズ盆地の北の外れの畑の中を龍が這うように伸びる道の先に十数戸のレンガ造りの家が固まつて建つてある。どの家も廢屋のように見えるが、屋上には洗濯物が干してあるのでからうじて人が住んでいるのが分かる。

郷戸一星の隠家は、その肩を寄せ合つようにして建ち並ぶレンガ造りの家と家の狭い路地を鍵型に何度も曲がり、さらに鉄の門扉で囲まれた家の庭先を通り抜けた先にある。

3階建てのそのレンガ造りの建物の屋上には小さな小屋が建ち、その小屋の中で3人の若い男達が暮らしている。彼らの仕事は、日がな一日周囲に田を配ることだけだ。

その建物を取り囲むようにして建つてある家には郷戸の部下達の家族や親戚が住んでいる。30年前、郷戸がタイのチョンマイに暮らした時もそうだった。玉木は「血のつながつたもんしか信用出来まへんで、郷戸はん」と、メコンウイスキーを飲みながら何度も口にしていた。

郷戸はソファーに腰をかけ、テーブルの上に置いてあるエベレストウイスキーの瓶を右手で持ち上げ、左手に持ったコップに半分ほど注ぎ、グビッ、と一気に喉に注ぎ込んだ。郷戸の前では、5人の男達が薄汚れたカーペットに座り込んでダルバート（カレー）を手でつまんでは口に運んでいたが、その様子を見て、お互に顔を見合させた。男達は最近の郷戸は何かおかしいと感じていた。

「俺はあの時のままなのか。メコンウイスキーがエベレストウイ

スキーに変わつただけか」そう思うとなんだか可笑しくなり、「フツ」と、熱い息と一緒に小さな笑いがこぼれた。

「「ゴッド、どうしかしたのですか?」男達の一人が右手の指先についている米粒を舐めるのをやめて聞いた。

「いや、なんでもない」郷戸はそう言つと、再びコップにヒマラヤウイスキーを注ぎ、ソファーから立ち上がった。そのまま、男達の間を通り抜け、屋上へ向かつた。郷戸の後姿を見送ると男達は再び顔を見合わせた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3641d/>

---

蒼き神々の行方

2011年6月6日20時59分発行